能楽の友のご創刊を祝す

熱田神宮能楽殿
運営委員会
委員長　長谷晴男
委　員　植村真太郎

能樂の友

題字は熱田神宮　鎌田宮司　筆

発行所　能楽の友社　名古屋市中区栄2丁目16-10
購読料　1年　200円・郵送の場合　1年　380円

能楽の友のご創刊を祝す

名古屋能楽会
会　長　伊藤次郎左衛門
副会長　植村真太郎
同　岡谷康治

期待あつめて創刊号誕生

能楽の大衆化へ　前進

各界から激励のことば

「能楽の友」紙の発刊にあたって、能楽界はじめ各界から多くのご祝詞や激励のことばが寄せられており、中部文化の高揚と発展を目ざし伝統美を誇る能楽の愛好家の期待にこたえて紙面の充実をはかるとともに、ご支援、ご愛読をお願いしてここに創刊号をおくります。

六百年の伝統をもち、日本国劇の頂点にある能楽は、世界の芸術史のうえから、つとに注目を集め、海外との芸術交流において、近時相ついで能楽界の各師が諸外国で公演され、その反響は非常に大きなものがある。まさに能楽のもつ幽玄の世界が、逐次再認識されてきたことを示している。国内での演能も能楽師はじめ広汎な能楽愛好者によって研究されており、本年は芸術の花ひらく希望に輝いている。とくに今年は、明治百年を記念する諸行事が各界で行なわれるなかで、能楽界にとっても、意義ある年となろう。

この百年の歳月は、能楽をはじめ近代芸術の新しい展開の礎を築き、今日の開花をもたらした。

能楽界が、この記念すべき年に多彩な催しで飾ることが期待されている。熱田神宮能楽殿における催能も新春から多彩な番組にみちあふれ、そのほか各地における演能も期待されている。

最近では、若い世代の方々の能楽愛好の意欲が高まっており、この胎動を基礎に斯界の熱意と相まってことしの能楽界の希望は限りなく大きいものがある。

各界のご支援を得て、ここに創刊された「能楽の友」はこの輝かしい年頭に当たって能楽の新たな興隆のために読者とともに躍動する姿をとらえてすすんでいきます。編集同人は、二月号に発表する予定でおります。

芸術愛好の気風に寄せて

名古屋市長　杉戸清

このたび能楽愛好家の専門的な新聞として「能楽の友」が創刊されるに当たり、衷心よりお祝いの言葉を申し上げます。

申すまでもなく、芸術は一国の文化、経済の結晶であり世界各国の芸術はその国民が経験した年輪のようなものであります。能楽は歌舞伎、人形浄瑠璃と共に三大国劇として伝承されてきたものですがとくに能楽がわが国の劇文芸に及ぼした影響はきわめて大きく、総合芸術の極致といって過言ではないのであります。

能楽を愛好する方々が近時いちじるしく増えていることは、歴史的に文化の土地柄をもつ名古屋にとってまことに喜ばしいことであり、「能楽の友」の発刊が市民一般の広い層にわたって能楽認識のしおりとして、かつ斯界の発展の機会となることを心からご期待申し上げる次第です。

貴紙の創刊により芸術、文化を愛好する気風が育まれていくならば、名古屋市のため本当に喜ばしいことと存じます。

創刊のごあいさつ

編集同人一同

「能楽の友」紙の発刊に当たり、名古屋市長、県会議長市会議長、熱田神宮宮司、能楽協会名古屋支部長はじめ其の他能楽界の各位からのお祝いのことばをいただき、編集同人一同非常に感激しております。

「能楽の友」は愛好者と共に生き、能楽並びに能狂言をあらゆる角度から分析して、能楽並びに能狂言のもつ良さを皆さんに紹介し、また能楽並びに能狂言が現代日本の芸能界のリーダーとして進むことを確信しております。

能楽の演出法は色々ありますが、日本の本当の芸能を知る為には、能楽並びに能狂言を学ばねばならないといわれます。芸能を志す方々は、能楽のもつ芸術性を学び、研究していただく事を心から念願して止みません。

謡曲の文句を静かに読んでいただければ、そこには文学的なものを非常に含んでおり形容詞をはじめ様々の修飾はありますが、いささかもエロ的な要素は含んでいないのであります。

しかし往々にしてこれを無理に時代に合わせた場合でもすぐ消え去っていくのでありここに能楽・能狂言のむつかしいということがきかれますが、それは間違いであり、非常なる簡素化の中に優美さを持っております。これを本当に理解していただける人は、本当に少人数しかありませんが、少し深く突込んでいくと能楽の良さが理解出来ることを信じて疑いません。

人間は常に緊張ばかりしておられませんから、そこに狂言とか、間狂言で観客の緊張感をやわらげているのが、本当の姿でないでしょうか……。

能楽・能狂言の発展は能楽師の使命でありますが、時代の移り変りと共に、文楽、歌舞伎などに取り入れられており、能楽のみが何故六百年の歴史をもっているかは、能楽史を研究した人のみ言えることであります。

今回本紙を発行した最大の目的は、能楽は退屈なものであり、解らないものであるという方々に能楽を理解していただくことが第一であり、今後能楽界に新風を吹き込み、時代と共に進み、能楽界の在り方を愛好者と手を組んで、能楽並びに能狂言を大いに啓蒙したいという同人一同の念願であります。

しかし原則を踏み出さず、原則を守り、上手とか下手とかは問題にせず、能楽界の発展を期します。

また東京の国立劇場には能舞台はないと聞いております。国立劇場に日本の最大演劇である能舞台のないことは誠になげかわしいことでありまた一方では文化都市名古屋市にも、もう一つ位の能舞台があっても良いのではないかとの意見がささやかれているのであります。

今後こういう問題などを取り上げて、能楽界の発展のために、愛好者の声を率直に聞き、読者と共に進み、能楽の大衆化と文化の向上に進むことを誓い、創刊のごあいさつに致します。

演能案内

熱田神宮殿能楽

一月三日（火）　午後二時始
能楽協会名古屋支部謡初会

若手能（邦謡会）

能　高砂　間　浦部好弘　浅井宏承　西村立石　和泉澄雄　佐藤秀雄　山本孝　久田舜一郎　野口助川　浩和竜夫

狂　羽衣　和合之舞　鷲尾周三　粉河幹夫　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　笠三男

一月八日（日）　第一部　十時始　第二部　一時三十分始

番　安宅　勧進帳　今井棕一　福井啓次郎　笠鉱一　笠三男
子方　白波瀬薫則　ツレ　安井嘉一郎　橘安久　深野新次郎　牧野和男　ツレ　塚本和雄　橋本道雄　小野寺義和

能　船弁慶　前後之舞　近藤宏　梅田邦久　谷和泉昭太郎　立石崇二郎　澄雄　中村喜彦　荒木照雄　三島元太郎　光田洋一　茂山正義

一月十五日（祭）　午前十時始
名古屋清韻会能

番組　神歌　長屋潤　千才　長谷川実

能　邯鄲　子方　中原　赤間　鑑雄　高安　立石　高安　勝久　西村　滋郎　澄雄　欽也　間　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　佐藤秀雄

能　班女　川村鉄雄　西村欽也　立石澄雄　間　田鍋惣一郎　笠鉱一　佐藤卯三郎　藤田六郎兵衛

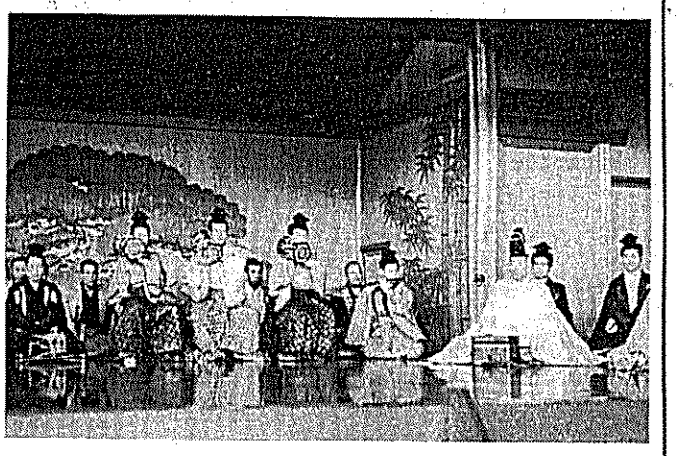
狂言　筑紫與　法師　坂崎勝彦　内侍　福間昌作　局　神戸鉄次　井上祐一　佐藤友彦　井上松次郎

番組　大原御幸　稲生芳雄　下山鋼一　里井順次郎　冨士道周明　々　西村弘敬　笠鉱一　田鍋洋一　助川竜夫　小島鉄次郎

能　猩々　外に舞囃子・仕舞・一調等数番あり。

お願い

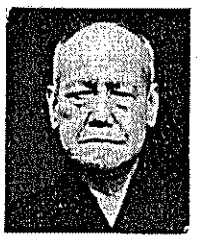
編集の都合上できるだけ早く催能の番組を当社あてお知らせ願います。



写真説明　能　翁

創刊を祝して

能楽協会名古屋支部長　田鍋惣太郎



今年の夏には名古屋市並びに能楽協会名古屋支部の共同主催で、名古屋市の総鎮守である若宮八幡社の境内にて「第一回市民納涼の夕べ」として、薪能が行なわれて約千五百人の人々が古典芸術に見とれてからは、能楽界の動きは非常なる活気を呈していることは、誠に喜ばしいことと思っております。

次いで「能楽の友」が予告第一号、第二号が発刊せられこのたびは新春を期して遂に創刊号が発刊されたことは、実に昭和四十二年の芸能界の一大トピックスとして、とりあげても過言でないと信じております。

今後には幾多の困難もありましょう。それを踏みこえていかれる編集同人のご苦労もあると存じますが、「能楽の大衆化」にご尽力をお願いすると同時に、芸どころ中部文化に貢献されるように能楽師、一般愛好者とともに進まれ、能楽の発展に活躍されることを重ねてお願い致します。

最後にあたって在名能楽師はもちろん東西の能楽師、その他の関係者のご声援により、完成された芸術「能楽」のご援助とご理解を心から念願するとともに、過去は過去、現在は現在、そして未来のために若い人々の意見を尊重して、次の時代を築きあげる人々の養成に心がけていただくことを切望して「能楽の友」創刊にあたりお祝いのことばといたします。

芸能界の発展を祈る

愛知県議会議長　橋本繁蔵

昭和四十二年の新春にあたり「能楽の友」創刊号に謹んでご祝辞を申し上げます。

文化国家、文化都市の建設は、その内容において芸術文化の向上と不即不離の関係にあります。わが国の伝統芸術として誇るべき能楽が、毎年隆盛をたどっているということは、能楽のもつ洗練された芸術性の力と言い得ると存じます。しかしながら芸術文化は、これを演ずる人と観客との調和によってさらに発展することは、あらためて申し上げるまでもありません。

当地は芸どころとして文化的には恵まれた土地柄でありまた県下はじめ中部各地にはそれぞれ伝統をもつ舞楽、民族劇などがあります。能楽の発展は、とりもなおさずこれら文化財の振興と保護を官民一体で進めていくようにお願いします。

意義ある発刊を祝う

名古屋市議会議長　中村清蔵

「能楽の友」創刊号にあたり謹んでご祝辞を申し上げます。

今日に伝わる能楽は、中世に確立されたものでありますが、すでに中世という時間の束縛を脱し、さらに演劇という様式を離れて日本文化の本質を示す存在ともいわれます。そして能楽は現在世界各国の先進国、後進国といわず研究されていることは、厳然たる事実であります。

「芸術に国境なし」といわれるように能楽が日本民族のもつ文化財として誇るべきものであることを再認識していただくことを心から念願して止みません。

しかしながら、能楽を本当に理解し、深く鑑賞するためには、素養が必要であり、この素養なくして正しい鑑賞はあり得ないと考えられます。このたび、能楽鑑賞、入門、研究の手引きとして、「能楽の友」が発刊されこの先達の役割を担われることになったのはまことに意義あることと存じ心からお祝いを申し上げます。

どうかわが国が誇る能楽の発展のために、また市民文化の向上のためによき専門的な指導紙としてご活躍されるよう期待いたします。

芸術は、それを生み出した国または民族の文化のバロメーターであるともいわれます。総合芸術の粋とされる能楽の伝統を守り育てるために愛好の方々が信頼できる新聞が誕生するのは当然であり、むしろ遅きにすぎているといえます。

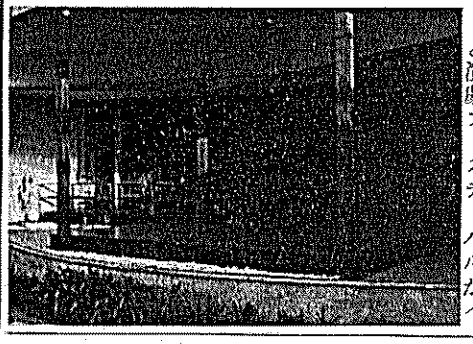
どうか号を重ねられて、中部地方の誇りとする芸能文化の機関紙として成長されることを切にお祈り致し、お祝いの言葉とします。

× ×

インドで狂言を

東西演劇セミナーに出席して

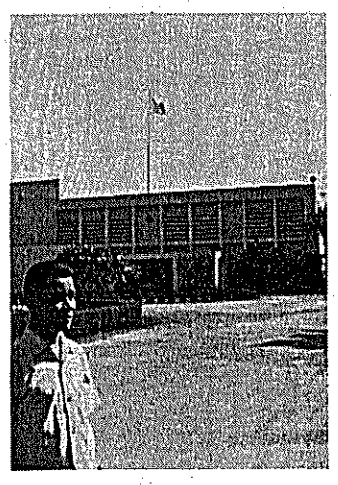
和泉流　野村又三郎



一九六六年東西演劇セミナーと演劇フェスティバルがインドにて開催され、インド政府の招きで東を代表して日本の古典狂言が参加。野村万作、悟郎、そして小生が公演のため渡航したのは十月二十一日一時、快適な空の旅を続けて目的地ニューデリーへは夜半近く、ホテル・ジャンパスに宿泊する。

公演は二十五日より三日間。舞台稽古もあり、舞台下見を兼ねて、一行は、会場であるトレヴィニー・ガーデン・シアターへ行く。到着したときは、まだまだ組み立て中であったが、私たちを驚かせたのは、仮設舞台とはいえ、松羽目もあり、切戸、橋懸りも備えてあるのに感激した。見所は三百人収容程度の野外劇場で、きれいに刈り取られた芝生に日本人と同様、安座して鑑賞するのである。その芝生は老人と少年が刈込んでいた。舞台の方は四本の柱を立てている。いつか我々も舞台係としてあれこれと注文をしたが、こちらの指図通り運ばれるのにうれしい悲鳴をあげた。それ以上に驚いたのは、五、六人の人夫が袋に玉砂利を入れ、頭に乗せて運んでいたことである。白洲用のためなのだ。舞台をここまで完全に作り、狂言を深く知ろうとする主催者側の厚意に、演ずる者として感謝せ

（3面へ）



ニューデリー日本大使館前の筆者

インドで狂言を

（2面より続く）

ずにはいられない気持であった。完成した舞台で三番ほど果たし得たことを最上の悦びとする。

いずれにもせよインド公演では、いろいろなことを経験

一月二十二日（日）　午後一時始

名古屋宝生会定式能

倉本　雅

草紙洗
玉造　葛原正枝
寺西智恵子
立花　近藤千代子
立須賀　須賀久
立古田智恵子　村瀬　慶子

岩船　衣斐　正宜

三輪　キリ　辰巳　孝

鞍馬天狗　馬綱富四夫

内藤　泰二

東北　能　寛鉱一　西村　欽也　田鍋惣太郎　井上礼之助　藤田六郎兵衛

間

昆布売　狂言　佐藤　友彦　佐藤　秀雄

藤栄　能　宝生九郎　高安　滋郎　西村　欽也　河村総一郎　田鍋惣一郎　野崎　寛太郎　三男

間

子　戸田　真静
立足立　商松　須賀
立田　田井　明
立　広六

秀雄　学

佐藤卯三郎
井上松次郎

（有料）

一月二十九日（日）　午前十時始

鼓雲会第五回大会

内藤　泰二

翁　能　三番叟　井上祐一　千歳　吉田俊彦　河村総一郎　田鍋惣一郎　田鍋惣太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛

後見　衣斐　正宜　辰巳　孝

地謡　宝生九郎

隅田川　狂　近藤　久　高安　滋郎

地謡　宝生九郎

小袖曽我　能　鬼頭　竹腰　嘉男　勝一　稲山　小沢　寿喜一　須賀　鈴木　松太郎　明

後見　吉田　俊彦　辰巳　孝

寛鉱一　福井啓次郎　藤田　昭彦

地謡　宝生九郎

他素謡・舞囃子・仕舞・連吟・独吟・独謡等六十番

番外仕舞

国栖　戸田　秀雄　葛城　クセ　倉本　雅

草子洗　村瀬　慶子　野守　辰巳　孝

小歌　衣斐　正宜　難波　宝生九郎

二月五日（日）　午前十一時始

梅猶会

1月の催能のしおり

熱田神宮能楽殿

三日（火）午後二時始
能楽協会名古屋支部謡初会

七日（土）午前九時半始
第十一回「学生能と狂言の会」
能　宝生流　藤
名古屋市立女子短期大学
監吹　和泉流　三人片輪
南山大学
能　金剛流　泰山府君
椙山大学
その他　舞囃子・連吟・仕舞
参加校　愛知教育大学　宝生流
愛知県立女子大学　宝生流
愛知大学　金春流
岐阜女子短期大学　金剛流
岐阜大学　宝生流
金城学院大学短期大学部　宝生流
椙山女学園大学　金剛流
名古屋市立女子短期大学　宝生流
名古屋大学　観世流
名古屋大学　宝生流
南山大学　宝生流

八日（日）
若手能（邦謡会）
第一部　午前十時始
第二部　午後一時半始

十五日（日・祭）
午前十時始
名古屋清韻会

能楽愛好者の指針

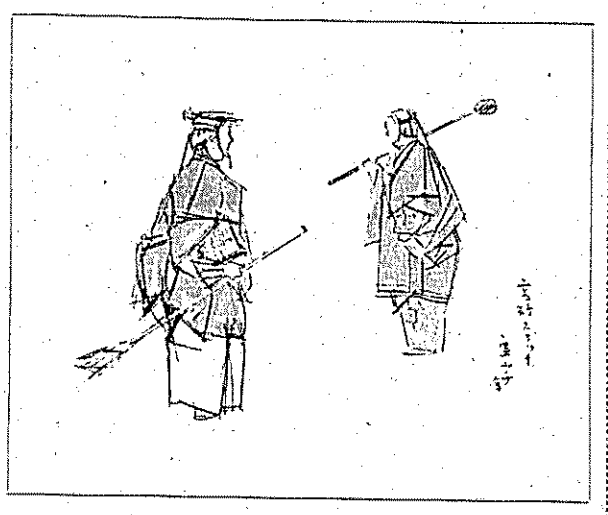
名古屋能楽クラブ会長
熱田神宮能楽殿運営委員会委員
名古屋能楽会副会長
植村真太郎

能楽の友ご発刊を心よりお喜び申し上げます。

当地における能楽同好の士は最近頓に増加いたし、殊に大学、高等学校等の男女学生諸君の間に、能楽教室的な運動が展開していることはまことに慶賀に堪えざるところとかく能楽が旧時代の愛玩物のごとき感ありたる憾みを一瞬にして吹き飛ばす思いです。

この時にあたり「能楽の友」発刊は誠に時宜を得たる次第にて、ただ単に催能のニュースとか人事異動等の報告に止まらず、是非能楽に関する知識啓発に精進せらるることを希望するもので、例えば能楽の起源発達、能面の種類、作者、所演との機微、この地方における能楽関係の名所紹介等、老若男女を問わず能楽愛好者の指針たるの見識をもって、編纂あることを所期して祝詞の一端といたします。

神歌　長屋調
千歳　長谷川実
囃子　高砂　長谷川実
中頭　赤間鎮雄
能　邯鄲　西村欽也　高安滋郎　立石澄雄　高安勝久
狂言　筑紫奥　井上祐一　佐藤友彦　井上松次郎
囃子　東北　天野登茂子
囃子　船弁慶　大辻君子
能　班女　川村鉄雄　西村欽也　立石澄雄　佐藤卯三郎
囃子　藤戸　伊勢信雄
囃子　実盛　長屋調
番外一調　杜若　殿島修二　助川竜夫
能　猩々　稲生芳雄　西村弘敬
囃子　東北　佐藤秀雄
囃子　大原御幸　坂崎勝彦　福間昌作　神戸鉄次　下山欽一　里井順次郎　富士道周明
番外仕舞　籠遊行柳　大槻文蔵　大槻秀夫



スケッチ　高砂　画　仙田雷山子

二十二日（日）　午後一時始
名古屋宝生会定式能
囃子　草子洗　倉本雅　葛原正枝　寺西智恵　近藤久　須賀千代子　古田智恵子
ワキ　村瀬澄子
仕舞　岩船　衣斐正宜
三輪　辰巳孝
鞍馬天狗　馬糞富四夫
内藤泰二
能　東北　西村欽也　井上礼之助
間　佐藤友彦　佐藤秀雄
監吹　昆布売
能　藤栄　須賀明　松井瀞　高田真学　足立広　戸田秀雄　宝生九郎　高安滋郎　西村欽也　佐藤卯三郎　井上松次郎

インドで狂言を

（2面より続く）

ずにはいられない気持であった。完成した舞台で三番ほど申し合わせをしたこの気分はご想像を乞う。

そして開演は夜。三日間の公演は大好評で切符も買えない人もあったときく。観客も熱心に狂言を理解しようと努力しているようであった。曲目もバラエティーに富んでいて、宗教国で泉山伏、禁酒国で棒縛りと相反する諷刺が大きな効果を示したようだ。今回の文化使節としての大任を果たし得たことを最上の悦びとする。

いずれにもせよインド公演では、いろいろなことを経験した。十日間の滞印中には面白い話しも、また失敗談も沢山ありました。それはまた次回のときにペンをとるとして……。

因みに公演番組を紹介すると、三番叟、泉山伏、蝸牛、棒縛。

なおセミナーのプロデューサーとして作家飯沢匡氏が同行されたことを記します。

× ×

二十九日（日）　午前十時始
鼓雲会第五回大会
内藤泰二
能　翁　三番叟　井上祐一　井上松次郎　吉田俊彦　宝生九郎
囃子　隅田川　近藤久　高安滋郎　鈴木松太郎　須賀明　小沢喜一　稲川寿一　竹腰勝一　鬼頭嘉男
能　小袖曽我　地頭　宝生九郎
他、素謡・舞囃子・仕舞・連吟（東海囃託会・朝日文化センター・中日文化センター・金城大学・愛知教育大学・岐阜大学を含む）・独吟・独謡等六十番
番外仕舞　国栖　戸田秀雄
草子洗　村瀬澄子
小歌　衣斐正宜
葛城　倉本雅
野守　辰巳孝
難波　宝生九郎

会員消息

▽…杉村竹翠氏のご母堂が旧ろう老衰のため古知野の自宅でなくなられました。

謡曲・仕舞教室案内

〔毎日婦人文化センター〕
毎日名古屋会館二階
電話五六一～二二五一

〔朝日文化センター教室〕
中村区柳橋角ガーデンビル六階
電話五六一～四〇一八・四〇六八・四八四一・四〇七八

〔中日文化センター〕
中区新栄町一～六　中日ビル四階（地下鉄、市バス、市電・栄下車）
電話大代表二六一～一一一一

〔名鉄文化教室〕
名鉄百貨店　六階
電話五七一～一一一一（代）

なお詳細は電話もしくは各文化センターの事務所でご相談下さい。　＝順不同＝

厳かに支部謡初会　新年恒例の行事

能楽協会名古屋支部謡初会は、新春一月三日午後二時から熱田神宮能楽殿で行なわれる。この行事は、毎年正月三日に催されているもので当日は協会支部員一同が会して厳粛に催され続いて懇親の意味で新年会をおこなう。

二月五日（日）　午前十一時始
梅猫会
囃子　東北　梅若善高　佐藤太俊
能　隅田川　梅若猶義　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
囃子　熊坂　梅若修一　筧鉱一　後藤孝一郎　助川竜夫　小島鉄次郎
囃子　天鼓　梅若盛義　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　藤田昭彦
能　小鍛冶　岡田朗詠　西村欽也　筧鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　筧三男
狂言・仕舞　数番
（有料）

二月十二日（日）　正午始
青陽会
囃子　花月　石谷初蔵　竹内六郎
能　俊寛　柴田収武　高安滋郎　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭季信
能　羽衣　塚本秀雄　西村欽也　筧鉱一　田鍋惣一郎　池田茂　藤田六郎兵衛
能　鞍馬天狗　観世元昭　西村弘敬　河村総一郎　福井啓次郎　助川竜夫　筧三男
（有料）

二月十九日（日）　午前十一時始
観世会定式能
能　屋島　観世武雄　観世喜之　西村欽也　河村総一郎　福井啓次郎　小島鉄次郎　佐藤友彦
能　花匡　河村観世太元正　高安滋郎　谷口喜代三　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
狂言　節分　井上松次郎　井上祐一
囃子　巻絹　武田太加志　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
能　野守　片山博太郎　高安滋郎　谷口喜代三　田鍋惣一郎　鬼頭三男　筧八郎
（有料）

創刊号

第一号、第二号が発刊せられ、このたびは新春を期して遂に創刊号が発刊されたことは、実に昭和四十二年の芸能界の

養成に心がけていただくことを切望して「能楽の友」創刊にあたりお祝いのことばといたします。

問。舞台稽古もあり、舞台下見を兼ねて、一行は、会場であるトレヴィニー・ガーデン

↗写真＝ニューデリー・トレヴィニーガーデン・シアターの能舞台

る。いつか我々も舞台係としてあれこれと注文をした

ニューデリー日

番外仕舞　国栖　戸田秀雄
草子洗　村瀬澄子
小歌　衣斐正宜
葛城　倉本雅
野守　辰巳孝
難波　宝生九郎

創刊を祝う

名古屋観世会　観世元正
名古屋九皐会　観世喜之　観世武雄
名古屋梅若会　梅若六郎
梅猶会　梅若猶義
猶諷会　梅若猶義
橘諷会　梅若盛義
修諷会　梅若修一
幽諷会　片山博太郎
幽花会　片山慶次郎
清韻会　大槻秀夫　大槻文蔵
中部金剛会　金剛巌
豊島豊星会　豊島弥左ヱ門　豊島三千春
喜多会　喜多実
和調会　和島富太郎
京都高安会　岡治郎右衛門
東京豊嶋会　豊嶋十郎
九州高安会　飯富祥堂
白水会　和泉太郎
鳳鳴会　武田太加志
壺泉会　泉嘉夫
上田観正会　上田照也
観衛会　山本博之　山本勝一
金春会　金春信高　金春欣三
名古屋宝生会　宝生九郎　事務所　高橋鉛三郎方
名古屋巽会　辰己孝　事務所　戸田秀雄方
和泉会　和泉保之
能楽協会名古屋支部　名古屋能楽鑑賞会　田鍋惣太郎
名古屋能楽クラブ　植村真太郎
観瀬会　芥川秀子
龍神会　竹内六郎
鶴声会　丹下三義
秀芳会　塚本秀雄
風韻会　殿島修二
潤水会　林甲子夫
犬飼末吉
芳韻会　稲生芳雄
澄声会　尾関健太郎
岡田光絃
正楽会　加藤丈太郎
加藤総兵衛
藤門会　名古屋女流師範連合会　加藤良久
一謡会　河村鉦二
淡交会　鬼頭五朗
蛍雪会　後藤契雪
松謡会　佐藤太俊
掬水会　柴田初太郎
青陽会　柴田収武
竹韻会　杉村竹翠
此水会　高野瀬透
知水会　服部紗枝
観正会　久田秀雄
福謡会　福井道子
春敲会　真柄米次
曲水会　増田一雄
艸諷会　増田十草
真交会　六車真三
邦謡会　梅田邦久
熊沢恵美子
名古屋金春会　後藤正男　林鉄郎
ことぶき会　稲川寿一
嘉宝会　鬼頭嘉男
宝韻会　鈴木義久
交雲会　竹腰勝一
昭雲会　戸田秀雄
瑞雲会　内藤宗一
鼓雲会　内藤秦二
中部金春会　前田昌広　前田茂穂　米本平一
富宝会　畑智洋
菱宝会　吉田俊彦
衣斐正宣
村瀬澄子
吟風会　伊藤鉄之進
清風社　大塚一二
松風社　片野東四郎
春鶯会　山田仁三郎
保道会　岡村保通
喜楽会　中尾栄一
喜栄会　二井栄逸
長袖会　長田驍
高安会　高安滋郎　西村弘敬　西村欽也
龍唫会　藤田六郎兵衛　大森英三郎　鬼頭季信　小島鉄次郎
龍友会　筧三男
霞会　田鍋惣太郎　青木恒治　田鍋洋一
桂会　後藤孝一郎
たなびき会　田鍋惣一郎
幸友会　福井啓次郎
石井会　吉田定男　河村総一郎
祥雲会　筧鉱一
長生会　鬼頭八郎　山口義郎　鬼頭喜太郎　助川竜夫
狂言共同社　河村丘造　佐藤卯三郎　井上松次郎　井上礼之助　佐藤秀雄　井上祐一　佐藤友彦
やるまい会　野村又三郎
能画家　伊勢関水
能画家　仙田雪山子

〔注〕順序不同の点もありますが何分にも、編集同人の意を汲まれご承認をいただくとともに、能楽並びに能狂言の大衆化と文化向上に全力をつくされることをお願いして、「能楽の友」の発刊にあたり、皆様方のご協力とご賛同を得てどんどんとご意見を拝聴し紙面に掲載し、ご叱声をいただいて逐次良い方に向かわせていくようご指導をお願いします。（編集部）

二月二十六日（日）　午後一時始

たなびき会別会

囃子　養老　柴田初太郎　吉田洋一　田鍋定男　池田小島鉄次郎　茂
囃子　胡蝶　山田仁三郎　河村総一郎　青木恒治　助川竜夫　大森英三郎
能　求塚　泉康強　泉嘉夫　大槻秀夫　西村欽也　谷口喜代三　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
狂言　泉山伏　井上松次郎　井上祐一　井上義次
一謡　歌占　林喜右衛門　田鍋惣太郎
囃子　安宅　内藤泰二　吉田明宏　田鍋定男　鬼頭季信
囃子　東方朔　大槻文蔵　橋岡久共　河村総一郎　福井啓次郎　野崎太郎　藤田昭彦
能　安達原　林喜右衛門　黒頭　急迫之出　高安滋郎　西村欽也　野村又三郎　筧鉱一　後藤孝一郎　鬼頭八郎　筧三男

主催　たなびき会　田鍋惣一郎

（指定席　千三百円・自由席　九百円）

宝楽焼
関西料理
料亭　ハ十八
名古屋市中区錦三丁目　TEL 代表 961-0881

能楽レコードの店
納屋橋
日本楽器レコード売場
電話（201）5141（代）
能楽名盤会レコード、各種レコード
豊富な在庫　静かな雰囲気

能楽の友の創刊をよろこんで

熱田神宮宮司　篠田康雄

熱田神宮の能楽殿を中心とした、名古屋能楽界の最近の動きは、実にめざましいものがある。催能に、練習に、なお日のたらざるを嘲たれる関係者のご精進とご努力とにはつねづね深い敬意を表するものである。ところが今回さらに月刊能楽の友を発刊されることになり、これによって同好の士の結集をはかり、かねて研究その他の目的達成を期し、斯道の興隆に大きく寄与せしめようと積極的な熱意を示されるにいたったことは、まことに慶祝のいたりにたえない。

しかし定期出版物の刊行ということは非常な苦心を要することで、こんご関係各位の一段のご奮闘を願わねばならないであろう。

どうか大和一致、せっかくの企画をみごと成功にみちびかれるよう祈って、創刊をよろこぶ私の言葉といたします。

能楽散歩

「能楽の友」が発刊されます。まことにおめでとうございます。今年から、既刊の「狂言」とならび、名古屋で二つの能・狂言だよりがでるわけです。多彩な紙面の登場に大いなる期待をよせましょう。

年の移りかわりは何かと物を考えさせます。年末はあわただしいなかにもゆったりした気持ちを求め、新年はしずかなうちに、心の若々しい動きを追います。十二月の晴れたある日、でたばかりの婦人画報（新年号）の頁をめくる。正月の楽しさが次から次へと目に入ってくる。京の正月料理をはじめ、書初めの若い女性の晴着に観世水と松皮菱の模様の和服があざやか。「明治村」も一役買っている。能と狂言の話（丸岡大二）も楽しみ。本田光洋・道成寺、野村万蔵・楽焼などの写真がのる。四十二年は「羊」の年。これは、その頃みた映画「天地創造」の画面にたっぷり登場する。「午（うま）」の年から「羊」の年にうつるのであるが、この主人公は、能の女中何にのるか、おなじ日、こたつに入って、それとなく謡曲集の頁をパラパラめくる。年賀状にも用いたらとおもいながら、年来果たさないままにきているけれど「こぞ・ことし」の分をあわせてみる。馬の方はもちろん修羅物にある。「蟬丸」にも、カケリのあと、「柳の髪をも／風はけずるに／風に解かれず／手にも分けられず／かなぐり捨つるみての袂／抜頭（ばとう）の舞かあさましや」をみつける。抜頭は舞楽名、頭髪を乱す美女のカタチを形容したようだが、この曲は馬に因んだ曲のようにきいてみる。

四海波

野村広二

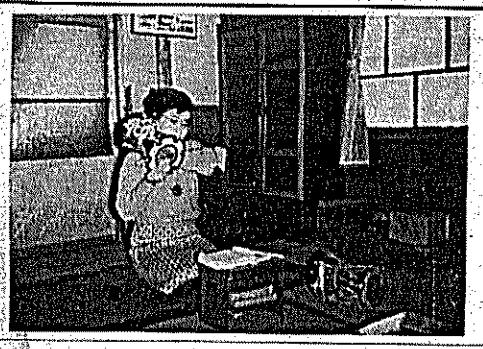
「高砂」の章にもどる。写真の相生の松のめでたさはやはりすがすがしい。「高砂」というは上代の／万葉集の古の義／住吉と申すはいまこの御代に住み給う延喜の御事」から「春ものどかに」までをよみあげる。すぐそのあとが「四海波」の、正月にぴったりの謡を迎えることになる。たち上がりようやくくれる空に三日月をみつけ、しずかな一日をおわる。

新年おめでとうございます。

カットは伊勢関水氏のスケッチ

稽古場のぞ記　第一回

田鍋惣太郎師宅



稽古場のぞ記は、芸事の上達は稽古あるのみとのことから、企画された。いかなる天才といえども、稽古なくしては上達はあり得ないことは、いうに及ばない。今回は能楽協会名古屋支部長田鍋惣太郎師のお宅を訪問し、丁度愛弟子の内藤純子さんのおけいこを拝見した。

田鍋師は名古屋能楽界の長老として、多忙ななかに後進の指導に打ちこんでいられる斯界の重鎮。

内藤さんは、市電大久手車庫南隣の、河内屋眼鏡店の若夫人で、学生時代から田鍋師につかれ、謡歴十五年、小鼓歴十余年の人。お宅では、ご両親のお店のお手伝いで、検眼などのお仕事もてきぱきとされ、なかなかお忙しい。

小鼓の方は現在名古屋能楽師養成会の一員として、隔月の養成会には必ず出席し、稽古に精励しておられる。丁度高砂のお稽古中で、師の厳格なお稽古に真剣に取り組んでおられる姿は、ご立派である。またあそこはこう、ここはこうと、きびしく注意される師の目の内には、愛弟子に対する慈愛に満ちたものが見受けられ、打ち鳴らす鼓の冴えた音のなかに、師弟の情の深さを感じさせられた。（T生）

次号は観世流柴田初太郎師の稽古場を予定しております。

☆内案購読

「能楽の友」は毎月一日定期刊。
大きさタブロイド版四頁建。
編集は、能楽の友社同人。
講読料
一年　二百円。（郵送の場合は一年三百八十円）
一部二十円の予定であります。

本紙のご購読希望は、能楽師または熱田神宮能楽殿へお申し込み下さい。

◎一月のテレビ・ラジオ案内

NHK全国放送

▽一日（日）
〔ラジオ第二〕
午前十一時～正午
寿五流謡曲　(1)
翁（観世元正）竹生島（金剛巌）草紙洗小町（金春信高）
午後五時～六時
同（再放送）
〔総合テレビ〕
午前九時～十時
新春能
羽衣（後藤得三）石橋（観世元昭）
▽二日（月）
〔ラジオ第二〕
午前十一時～正午
寿五流謡曲　(2)
谷行（宝生九郎）氷室（喜多実）
午後五時～六時
同（再放送）
〔総合テレビ〕
午前九時～十時
新春狂言
末広（三宅藤九郎）棒しばり（茂山千五郎＝大阪）
▽三日（火）
〔ラジオ第二〕
午前十一時～正午
東西狂言くらべ
歌争（野村万蔵）未定（茂山千作＝大阪）
午後五時～六時
同（再放送）
▽八日（日）
ラジオ第二　午前八時～九時
謡曲　宝生流「草子洗小町」（仙台）
▽十五日（日）
ラジオ第二　午前八時～九時
謡曲　観世流「百万」（東京）
▽二十二日（日）
ラジオ第二　午前八時～九時
謡曲　宝生流「西行桜」（東京）
▽二十九日（日）
ラジオ第二　午前八時～九時
謡曲　観世流「屋島」（大江又三郎）
狂言　曲目未定（茂山千作）

お知らせ

演能案内の会員券のお問い合わせは、熱田神宮能楽殿に（電話六七一―二九一二番）おねがい致します。

観世流・金剛流
宗家本発行元
会資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2-1　電話(291)2488―9　振替東京3552
京都市中京区二条通麩屋町東入　電話(23)1990　振替京都113

宝生流宗家本
わんや書店
東京都千代田区神田神保町3―9
電話(263)6771代表
小売部　東京都中央区銀座8―4(金春ビル)
電話(571)0514
振替東京4163

演能写真
ウシマド・リウジ
電話京都(45)1341

能楽殿御用達
八百彦支店
名古屋市東区相生町2の18
電話(941)4707番

能楽殿御用達
割烹料理仕出し
西みやか
名古屋市西区浅間町
電話(531)5507・6666

名古屋の能楽今昔談（その一）

西村弘敬

旧藩時代

当名古屋の町は名古屋城が築造された時に同時にできた町で、その当時に旧清洲の城下町から当地へ移住してきた町人によって町が追々とできあがったものである。現在の松坂屋の伊藤家を始めとして岡谷家、その他沢山の清洲越（きよすごし）と呼ばれた人々がある。尾張藩の城内には立派な能舞台があり、面装束一切も揃い、能役者も沢山に抱えられていて、時々に能の催しがあった由で、即ちいろいろの祝慶事の折とか藩主やご家族のお慰み見物とか、或いは他よりのご来客の接待のためなどに催され、その他年に一回はご検分の能とて役者の技倆・技能の試験のためにご用人の宅において演能を行なった由である。しかしながら上記の能には一般庶民には見ることはできず、高嶺の花のようなものであった。旧藩時代にはお抱えの楽師も沢山あったが、明治維新以後ちりぢりになって現今残っているのは、笛方の藤田家、小鼓方の福井家（故福井五郎氏の家）脇方の拙宅西村の三軒のみとなった。

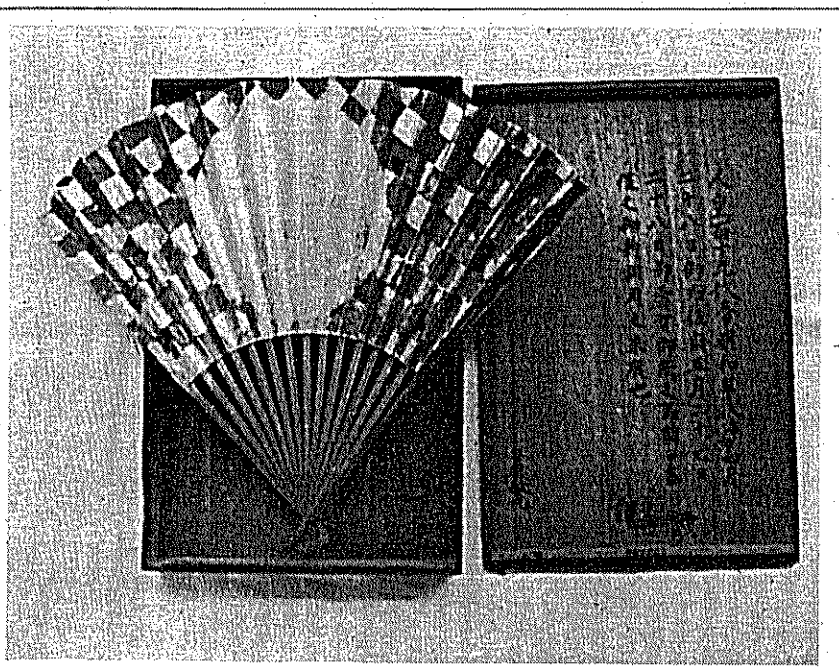
旧藩時代には藩主始め家来の内でも沢山の人々が謡や能の稽古をしておられたらしく拙者の所蔵の古文書の中に少々珍らしい逸話があるのでこれを左にご披露する。

「瑞龍院様御仕舞御手首折れ申候を、浄元毎々申上候へども御直し遊ばされず、一時不覚して御手首を扇子にて打ち御直し申上、仰天して退り（しさり）平伏罷り在り、御前にも御平座遊ばされ、天下にオレが手を打つ者はない見苦しきを直し度存念にて真実より出でたる義神妙なりとの御意にて、御褒美御座ありし由」とある。右の内瑞龍院とは尾張藩二代目光友卿のことで、また浄元とあるは金春家第四十七代金春七郎氏勝の弟にて金春八左ェ門元照浄元と申した人で尾張藩のお抱えになった由。

旧藩時代は能や謡は多く武士階級や上流社会人の間に嗜好せられる傾向で、一般庶民には幾分縁遠い状態で、従って能の鑑賞などは今日のように簡単にはできぬ有様であった。時たま神社や寺への奉納の能があったくらいで、その他には極く一部の人が稽古能を見せてもらう程度であったらしい。稀には勧進能という興行的な催しもあったらしく当市中区古渡町の稲荷神社（現在通称山王神社）境内で勧進能が行なわれたこともあった由なれど、その日時や番組などの記録は空襲の火災のため焼失して今は判らない。また城内での能の番組の記録など一切焼失したので遺憾ながら不明の点が多い。

（次項は明治維新以後）

‖筆者はワキ方高安流‖



〔写真〕「日月末広」　西村家蔵
人皇百十九代帝（後桃園天皇）明和八年（一七七二年）辛卯四月二十八日御即位同五月二十七日　御寿賀御能之節開口参役之砌新調月之末広也　菅原敬元
（注　菅原敬元は西村家三代目、西村庄兵衛敬元）

一月の催し

（編集部到着分）

一月二日（月）
田鍋惣太郎師宅
打初め式
囃子
（観）翁　（和）三番叟
（高）高砂　（観）田村
（宝）羽衣　（宝）胡蝶
（宝）鶴亀　（宝）猩々

一月五日（木）
熱田神宮能楽殿
藤田流吹初め式

一月五日（木）　河村舞台
長生会けい古初め会

一月八日（日）
田鍋惣一郎師宅
打初め式

一月二十一日（土）
河村舞台

故西尾孫太郎師追善囃子会
一月二十九日（日）
河村舞台

金剛流豊島豊星会
囃子会

各地だより

金沢能楽会
定例研究発表会
一月五日（木）午後五時始
金沢能楽堂

出演
狂言　竹生島　相谷哲弘　荒木勝　浅野勝美
能　鶴亀　島村明宏　金丸英三　宝生九郎　殿田保輔　泉喜八　亀原理
狂言　文相撲　辺容之助　宮野五朗　殿村与作
能　巻絹　泉喜八

解説

翁

古来能楽界では神曲として、別格に取扱う。

翁・千才・三番叟の歌舞より成り、天下泰平、国土安穏五穀豊穣を祀る儀式的祝言曲であり、その詞章は神歌（しんか）といわれる。

とうとうたらり
たらりら
たらりあがり
ららりどう

と、笛の声歌に似た不可解なる詞章で「翁」が始まり、演技というより、むしろ祭式に近いもので、非常なる神聖なものであるところから〝翁は能にして、能にあらず〟の言葉がいわれるのである。

要するに古来から神曲として尊ばれる曲として、京都今熊野で、観阿弥、世阿弥父子によって舞われた文献があるが、古狂楽時代から存在していて、実に芸術性をもち、長い伝統を今日まで持続しているのであります。

高砂

初番曲で脇能であり、作者は世阿弥の作であって、神能の第一番に上げられることは皆様もご承知の通りであり、旧名は「相生」または「相生松」といわれますが、松のめでたさ、和歌の徳をたたえ、人の和、夫婦和合、国家安全をお祝いする、神舞物の代表作として知られ謡い方もツヨ吟で終始一貫しております。

《読者の声にこたえて》

小書について

能楽（または狂言）における特殊演出法であり、いずれにしても各流儀によって変わり、新様式をあみ出し、それによって能狂言を効果あらしめようとしたところに進歩を示そうとする意欲があったものであり、何はともあれ、そういう演出をする場合には、その曲目は番組の左下方に小記することによって、面・装束・囃子・小道具・作物等の変化があるのである。

その新演出法を「小書能」「小書附能」として、取り扱われており、このことは非常に多く今回は簡単にして、そのつど質問せられれば、そのことに関しお答えするように本紙を通じて致します。

（編集部）

人事往来

▽…大村新局長が着任

NHK名古屋中央放送局

NHK名古屋中央放送局局長木村正勝氏は、十二月一日付人事異動で東京NHKへ栄転された。

氏は三十九年十二月着任以来満二年にわたり邦楽界の発展のため尽力されその功績は大きい。

後任新局長には、大村三郎氏（NHK東京）が着任。氏は芸能界の理解あつく期待されている。

▽…ワキ方高安滋郎師は京都観世会初会（一月十五日）に出勤される。曲目「望月」

能楽短信

◇…観世流梅若六郎師はこのほど日本芸術院の新会員に選ばれた。

◇…去る九月下旬からアメリカ各地の大学を巡演した宝生流の「米国大学巡回能楽団」（団長宝生英雄師）がこのほど帰国した。延べ三十六公演で非常に好評であった。

謹賀新年
あなたに心をこめておおくりする…
冨士道の婚礼家具
家具の冨士道
本社　名古屋市中区矢場町2の15
ショールーム　TEL(241)3367・1453
工場　愛知県西加茂郡三好町
TEL　三好178

名物
きよめ餅

御料理
蓬莱軒
本店　熱田区神戸町35　電話(671)8686～8688
神宮東門店　熱田区新宮坂町1　電話(671)5596～5598

2月1日
発行＝
友社
二丁目16-10

各界に高まる期待の声

支部のニュース、催能案内を随時報道いたします。

◉「能楽郷土史」
伝統をもつ能楽界の風土記

第一回の「けいこ場のぞ記」には、能楽協会名古屋支部長・田鍋惣太郎師のけいこ場を予定しております。

演能案内

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司　筆

発行所　能楽の友社
編集発行人　花木徳三郎
名古屋市中区栄2丁目16－10（花木ビル内）
電話 211-1019・1974　231-6727・2891

購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　田鍋惣一郎
大塚一二　殿島修二
鬼頭五朗　野村又三郎
杉村竹翠　内藤泰二
高安滋郎　二井栄逸

編集同人は逐次発表致します。
なお相談役・顧問については今後ご依頼する予定です。

力強い各界の激励
国際的芸術交流を推進
日本研究に注目される能楽

日本の国劇の頂点にある能楽は、既報のように、海外との芸術交流において大きな役割を果たしてきている。本紙創刊号が伝えるインドにおける東西演劇ゼミナールの内容は日本の能楽のもつ深遠さとその芸術性を余すところなく発揮したものとして、その意義はきわめて大きい。事実、近時における諸外国での日本研究は〝フジ・ゲイシャ・カブキ〟といわれてきたが、これに新たに「能」が加わってきていると知日外国人は語っているほどである。

こうした例として、きたる四月には、名古屋で大規模な医学会が開催され、名古屋の各界はその受け入れ態勢に万端の準備をしており、海外外国から来日する医学界の権威者は多数にのぼるといわれるが、そこで「能」の上演が期待され、行なわれることをもってしても、「能楽」が国際的な芸術として新しい評価をあびていることを示しているものであろう。

二月から三月にかけての中部能楽界はまた多彩な演能が注目され、また中日五流能も十二回目を迎え盛大に行なわれることになっており、「能楽の友」紙は、各流のご後援と能楽愛好者の強い支持によって、花開く中部能楽界のニュースをお伝えしていきます。

創刊号が発刊されて、購読申し込みはじめ、有益なご助言やご希望が本紙によせられており、この熱意にこたえて一層の努力を同人は誓っている。

◇　◇

邯鄲のスケッチ　仙田雪山子　画

発刊祝賀会

能楽の友発刊を記念して、旧ろう二十六日、名古屋市中区錦三丁目「八十八」で編集同人ならびに能楽関係者、報道関係者の懇親をかね、新しい年への希望にもえて小宴が開かれた。

当日は、午後六時三十分高いさつがあり、熱田神宮篠田宮司の乾杯で能楽協会田鍋支部長、名古屋邦楽協会高木理事長、その他政界、報道陣と和やかに懇談、発刊を祝して午後八時ごろ閉会した。

〔しゃしんは発刊祝賀懇親会〕

間（ま）と拍子

名古屋邦楽協会理事長　高木栄一郎

音と音とのあいだを、昔から間と呼んでいる。間が悪かったら、どんな美音でもよい唄にはならない。間が延びたら、いかにおもしろい内容の話しでもあきられてしまう。

外国語ならば、読むときも物語るときも、話すときも、呼びかけるときも、唄うときも一様に発音しさえすれば、リズムも生じ、メロディーも起り、表情もそのまま付け添えられるのだが、日本の言葉に限って、そうはいかない。読む、物語る、話す、呼びかける、唄う、以上五つの場合五通りに声柄をかえなければならない。声柄をかえるだけでなく、一句一句に間をとって、発音を活かしたり、使いわけたりしなければならない。

また、発音ばかりでなく、日本人のあらゆる風俗習慣、技芸職能は、すべて間のよさわるさに成り立っている。音楽、舞、踊り、芝居はいうまでもなく、剣術、柔術、弓、相撲、鍛冶屋の金槌、大工の手斧、鋸、農人の鋤、鍬、日常のあいさつに至るまで、ことごとく間によって支配されている。とにもかくにも、一切万事、間の力で生命を吹き込まれているのが日本の国なのだ。

ところで、間をよくするために、拍子というものが用いられる。それには手拍子、扇拍子、足拍子、素拍子の四つがある。手をたたいて間の規準をとるのを手拍子といい、扇を膝または手のひらへ打ちつけて間を示すのが扇拍子で右足をトンと踏みおろして間を区切るのを足拍子といい、手または扇を用いる代わりに顔でうなづいて見せるか、片手を動かして見せるかの仕方を素拍子という。

このほかに、もう一つ白拍子というのがある。これは自分の持ちものでなく、地方の楽器なり、扇拍子なりで、舞いまたは踊る風情である。ちょうど鎌倉八幡宮の舞台で、畠山重忠・工藤祐経らの笛・鼓で、静が扇舞をしたように。こうしたやり方は静一人ではない。静の母である磯の禅師、その前の常盤御前、もっと前の仏御前、さらに以前の祇王祇女というふうに、女人でありながら男装をしつつ白拍子で舞い慣れることが百年も続いたので、いつとなく女舞のことを、白拍子と呼ぶようになったのだ。

×　×

謡曲・仕舞教室案内

〔毎日婦人文化センター〕
毎日名古屋会館二階
電話五六一～二二五一

〔朝日文化センター教室〕
中村区柳橋角ガーデンビル六階
電話五六一～四〇一八・四〇六八・四八四一・四〇七八

〔中日文化センター〕
中区新栄町一～六　中日ビル四階（地下鉄、市バス、市電・栄下車）
電話大代表二六一～一一一一

〔名鉄文化教室〕
名鉄百貨店　六階
電話五七一～一一一一（代）
〔順不同〕

演能案内

宮殿神田楽熱能

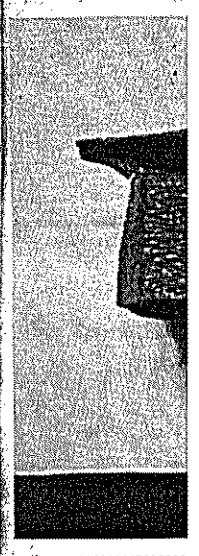
三月五日（日）　午前十時始
名古屋観世九皐会

番外舞囃子　小島芳雄
吉野天人　観世武雄　河村総一郎　助川竜夫
天人舞　五木田武計　田鍋洋一　鬼頭季信
日本　河村大　唐　加藤正光
吉田隆　遠藤六郎
能　唐船　植村真太郎　西村弘敬　山本敬一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　藤田昭彦
間　佐藤秀雄
能　卒都婆小町　伊藤睦子　森茂好　山本敬一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　宝生彰彦
一調　葛城　塚田常子　観世元信
狂言　太刀奪　佐藤卯三郎　井上祐一　大野弘之
能　道成寺　吉田妙　高安滋郎　筧後藤孝一郎　観世元信　筧三男　西村欽也　高安守彦
間　井上松次郎　井上礼之助
（その他　仕舞　舞囃子数番あり）

三月十二日（日）　午前十時始
山本博之師来名　三十周年記念大会能組

子　山本章博　鈴木きく子
能　隅田川　高安滋郎　河村総一郎　立石澄雄　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
巻絹　山崎栄治　吉田福井啓次郎　定男　鬼頭筧　喜太郎三男
舞囃子　善知鳥　村田京子　河村田鍋総一郎　鬼頭季信
野守　村瀬つね　筧田鍋惣一郎　鬼頭筧　喜太郎三男
囃子　井筒　伊藤昌一　川瀬保
子　山本佑子　大村恵美子
能　船弁慶　西村欽也　筧田鍋惣一郎　鬼頭筧　喜太郎三男
前後二番　高安勝久　佐藤卯三郎
間
狂言　成り上り　井上佑一　井上松次郎　井上義次
番外仕舞　西王母　山本順之　舎利　山本真義　木曽　山本勝一　難波　山本博之
（その他　仕舞　舞囃子等数番あり）

〔第3号〕



〔写真説明〕

能　道成寺　岡治郎右エ門　高安滋郎　谷田宗二朗
間　茂山千之丞　佐々木千吉
（ほか仕舞、独吟など数番）

狂言　膏薬煉　野村万之丞
能　半蔀　宝生九郎　殿田保蔵
次第　飯島佐六
小鼓　住駒陽介
笛　片岡吉雄

お願い
編集の都合上できるだけ早く、催能の番組を当社あてお知らせ願います。

於　金沢能楽堂

あなた　富

演能余談

清韻会能に寄せて

殿島　修二

名古屋清韻会能が戦後いちはやく松坂屋のホールの仮設能舞台（当時他に会場がなかった）で第一回の発表会（素人能）を一月十五日に催してから毎年欠かさず続けてきて本年で既に二十年になる。

毎年二番か三番立ての能を二十年間も続いたことは、いささか誇りをもてることと自負しているが、同時にまた容易ならざることでもあったとしみじみ思うのである。

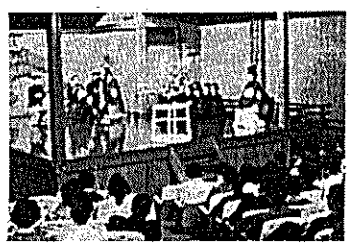
会員の熱意もさることながら今は亡き大槻十三先生のよきご指導と秀夫先生のあくなきご努力の賜と深く感銘している。

毎年この日のたびごとに思い起すことは十三師が前日の十四日に京都の観世会で、能「田村」を演能中倒れられ、そのまま不帰の客となられた一事である。翌十五日が当地における清韻会の能の日で先生をはじめ七、八名の先生方がこられるはずになっていたのが、それどころではない事態になってしまった。このときぐらい戸惑ったことはない。代わりの人を頼むやら一人で三人分ほどの役を引き受けるなどしてなんとかその日は無事に済ますことができたが、今考えてみても身のちぢむ思いがするのである。その記憶がまだ去らぬ本年の一月十四日、奇しくも故先生の命日に御後室兎代刀自が月も日も同じうして忽然として逝かれた。もちろんご高令のためで突然のことであったが、そのため秀夫先生をはじめ二、三人きていただけなくなった。前回同様大いに動揺はしたが、それでも能はとどこおりなく盛会裡にすんでホッとした。まことに因縁というか奇蹟というか感無量である。

考えてみれば八十余才の長寿を全うせられ、同じ月、同じ日に故先生のおあとを追われたということは何とおしあわせなことであろうかとつくづく思ったことで悲しい出来事といえぬ何かがしきりに去来するのを覚えた。来年の一月十五日の清韻会能は先生の七回忌に相当するので毎年の素人能を後廻わしにして、この日を追善の玄人能にあてることになった。

第11回学生能と狂言の会をみて

金剛流　伊藤鉄之進



私は名古屋学生能楽連盟の発足以来、今回の第十一回まで一回もかかさず見てまいりました。発足時は金剛流大塚一二師のご子息国夫君の会長でした。当時は大学生だけでなく高校生の参加も相当数あったように思います。私の娘嘉余子も当時椙山高校生として第一回より大学卒業まで出演させていただき、現在椙山大学の能楽指導者として本連盟に関係しておりますので、格別学生能楽連盟には関心が深いのかも知れませんが……。ただそれだけではないような気がいたします。私は元来素人の催しが非常に好きであり、各流の素人の催しには努めて見に行きます。玄人と違った別な味があり、命がけの演出で涙の出るほど感銘を受ける場合がときどきあります。何か掘り出し物を発見したような喜びである。

発足当時は独吟、連吟等見本であり、仕舞も囃子も地頭は全部先生が受け持っていました。

学生みずから地頭になる等考えられない時代でしたが、今回は独吟、連吟とも無本、また仕舞・囃子の地頭とも全部学生であり発足当時とは隔世の感がある。

市立短大「能」藤の主要部分である序の舞は格別むづかしいものであり、元来序の舞は素人では舞えないとさえいわれている大曲を二年の短大であれだけの演能は驚きの外はない。

南山大学毎年の演しもの「三人片輪」も数年前とは見違えるほどの進歩である。また囃子「七騎落」仕舞「二人静」も大変嬉しい一つであり、素人ではないが藤田流ご子息昭彦君の笛、藤田流万歳と声高く叫びたい気持ちになった。

椙山大学「能」泰山府君は前後の各シテ、ツレ、ワキとも力強い演出であった。能は地謡が悪ければ効果は半減するものであるが、立派に使命を果していたと思う。

切能として各演者が充分の技術が発揮できて大会最後の雰囲気を盛り上げるにふさわしい演し物であったと思う。

学生能楽連盟の出身者が将来の能楽界に果す役割は大きなものであると信ずる。

辰巳先生の「学生能」能楽社会と学生の立ち場、学生の第四回シンポジウム・テーマ「能楽社会と学生の立ち場」の二つともおもしろく読ませてもらった。

全国の学生能を指導していられる辰巳先生の所感、何事も本質的に掘り下げてみたいと思う学生諸君の態度、いずれも能楽界の進歩に無関係でないと思う。

近いうちに「能楽の友社」主催でいろんなテーマを持ちよって、能楽関係者と学生諸君との座談会を催してみたいと思っております。

（写真は「能」泰山府君）

会員消息

▽…観世流（大阪）大槻秀夫師のご母堂は一月十四日老衰のため逝去された。享年八十三。告別式は十六日に営なまれた。謹んで弔意を表します。

2月の催能のしおり

熱田神宮能楽殿

五日（日） 午前十一時始
梅猫会
東北
梅若　善高　佐藤　太俊
隅田川　梅若猶義　高安　滋郎
熊坂　梅若　修一
天鼓　梅若　盛義
小鍛冶　岡田　朗詠　西村　欽也
狂言・仕舞　数番あり
（有料）

十一日（祭） 午後二時始
名古屋金春会
邯鄲　本田　光洋
葵上　金春信高　高安　滋郎
（有料）

十二日（日） 正午始
青陽会
花月　石谷　初蔵　竹内　六郎
俊寛　柴田　収武　高安　滋郎
羽衣　塚本　秀雄　西村　欽也
鞍馬天狗　観世　元昭　西村　弘敬
（有料）

十九日（日） 午前十一時始
観世会定式能
屋島　観世　武雄　観世　喜之　西村　欽也　囃　佐藤　友彦
花筐　河村　太　藤井　徳三　観世　元正　高安　滋郎
節分　井上松次郎　井上　祐一
巻絹　武田太加志
野守　片山博太郎　高安　滋郎
（有料）

二十六日（日） 午前九時始
たなびき会別会　囃子組
羽衣　桂会
高砂　冨士道　周明　笛　小島　陞　鉦　助川　竜夫　笛　三　男
田村　神戸　鉄次　吉田　定男　角野　志げ子　藤田　昭彦
杜若　福間　昌作　笛　村瀬　鉦恒史　冨士道　助川　周明　竜夫
雲雀山　木全　正江　吉田　敏雄　高井　笛　三　男
鶴亀　岡田　頼允　河村　総一郎　内藤　純子　鬼頭　喜太郎　藤田六郎兵衛
紅葉狩　増田　保雄　藤田　総一郎　正蔵　笛　三　男

三月十九日（日） 午後一時始
名匠鑑賞能
忠度　後シテ野口　緑久　前シテ辰巳　孝　囃　西村　欽也　笛　福井　鉦一　啓次郎　鬼頭　季信　井上　祐一
景清　トモ内藤　泰二　ヒメ宝生　九郎　高安　滋郎　飯島　佐六　田鍋　惣太郎　藤田六郎兵衛
素袍落　狂言　井上　礼之助　佐藤　卯三郎　井上　松次郎
黒塚　宝生　英雄　高安　滋郎　飯島　佐六　白頭　高安　守彦　田鍋　惣二郎　鬼頭　八郎　笛　三男　佐藤　秀雄
附祝言
（有料）

三月二十一日（祭） 午前九時始
金森師追善会
翁　久田　秀雄　千才　松井　省吾　面箱　井上　祐一　笛　福井　鉦一　三番叟　佐藤　友彦　福井　良久　中川　啓次郎　六之郎　後藤　義一
半能　鶴亀　海田　山根　千代子　河村　トシ子　西村　立石　鉦二　高安　弘　澄雄　勝久　河村　総一郎　田鍋　洋一　鬼頭　八郎　後藤　卓朗
半能　乱　伊藤　嘉奈子　西村　欽也　山本　敬一郎　田鍋　惣太郎　助川　竜夫　戸田　和子
半能　天鼓　赤間　鎮雄　西村　欽也　笛　後藤　孝一郎　鉦一　伊藤　長八　岩田　幸子
半能　融　殿島　修二　高安　滋郎　山本　敬一郎　田鍋　惣二郎　鬼頭　喜太郎　桜井　光夫
半能　石橋　佐藤　太俊　高安　滋郎　吉田　定男　田鍋　惣二郎　池田　茂　坂野　登
その他　舞囃子　数番
龍吟会

《読者の声にこたえて》
間（あい）狂言について
能のうち狂言師の演ずる役かしいものとなっている。（編集部）

創刊を祝う

お知らせ
演能案内の会員券のお問い合わせは、熱田神宮能楽殿こ

散歩
「弱法師（よろぼし）」の曲はお好きでしょう
「遊行柳」の表紙も梅の画のようでした。そのとき先代金剛巌さんの「能」の本の表紙も梅だったと思い出した。嵯の雪は花に落つ／あら面白の花の匂やな／げにこの花を袖に受くれば／花もさながら施行ぞとよ」と進んでいく。

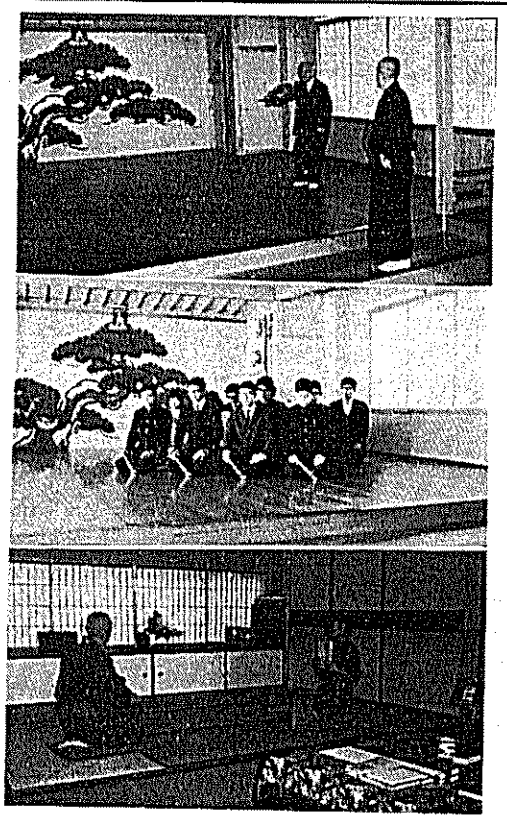
重要無形文化財
中日五流能

稽古場のぞ記　第二回

観世流　柴田初太郎師宅

今回は観世流元老の柴田師の、新装なった敷舞台のあるお稽古場をお伺いしました。ちょうど名大観世会の学生さんたちが、学生能前のお稽古にきておられ、会員は三十名のうち女性が四名で、とても熱心に謡吟に、仕舞に、舞囃子にと懸命にお稽古に励んでおられる姿に、思わず目を見はった。柴田師も短時日によくここまできたものだと、先生が驚いておられた。若さがさせる技でしょうか？。その中へ掬水会の名付け親たる矢留文雄さんが、ひょっこり顔を出された。矢留さんは謡歴四十年の古強者。仕舞と舞囃子は戦後始められたそうだがなかなかの上達ぶりちょっと実盛をさらえて下さいと、早速舞台へ上がられた。真赤に紅潮したお顔で何度も何度も繰り返し、息を切らしてのお稽古の元気さに、こちらが圧倒されてしまった。次には松岡田鶴子さんが、お稽古にこられた。松岡さんは四国の片田舎のご出身とかで、現在、東市民病院の看護婦さんだがお忙しいお仕事の間隙をぬって謡のお稽古にこられる由、まだ始められて間のないとのことですが、どうしてどうしてなかなか立派な調子と、きれいなお声にびっくりした。和裁の方もお得意とのこと、今どきの女性にめずらしいと師もいっておられた。

（T・S生）



《読者の声にこたえて》

間（あい）狂言について

能のうち狂言師の演ずる役で二種類あって一つは中入りの間に出て物語りなどするもの。一つはシテ、ワキの間に入りて演ずるものとあって、それを間狂言、通常略して間（あい）という。またそれを分類すると「語間」（居語）「立語」「末社間」「早打間」「口開間」「アシライ間」「替間」とあるが、「替間」は役の位の上で重いものとなっているのが多いが「屋島」における「那須の語」のごとく一人の狂言方による居語であるが、そのしぐさが入ってむづかしいものとなっている。

（編集部）

創刊を祝う

禄雲会　野口禄久

梗雲会　倉本雅

〔訂正〕一月号四頁掲載「創刊を祝う」会名のうち、誤りがありましたので、お詫びとともに謹んで次のように訂正いたします。

龍吟会　藤田六郎兵衛

潤水会　林甲子夫

お知らせ

演能案内の会員券のお問い合わせは、熱田神宮能楽殿に（電話六七一―二九一二番）おねがい致します。

☆内　案　購　読☆

「能楽の友」は毎月一日定期刊。大きさタブロイド版四頁建。

編集は、能楽の友社同人。

購読料

一年　二百円。（郵送の場合は一年三百八十円）

一部二十円であります。

本紙のご購読希望は、能楽師または熱田神宮能楽殿へお申し込み下さい。

能楽散歩

弱法師

野村広二

「弱法師（よろぼし）」の曲はお好きでしょうか。この曲の場所は高安の里と大阪四天王寺季節は梅の花咲く頃で、文字どおり絢爛（けんらん）な落日を目前に極楽浄土を拝するという設定にしても、のどかできびしい夕景のなかには、どこかえり元をなおす冷めたさが残っているときだとておもいます。この曲には、梅の木がなくては進行していかないようです。故下村観山の弱法師と梅の名画はそれを実証しています。

この頃、梅の画を芸術新潮・週刊新潮・週刊朝日などでみました。前田青邨・横山操両氏に光琳のです。去年の秋徳川美術館の琳派展覧会のときです。宗達の「扇面貼交屏風」（御物）の一番右の、上の扇面が梅でした。これをみつけて、ああいいなあとつくづくながめたことでした。同展の「嵯峨本」謡曲本のうちそれにまた「楊貴妃」の能の場所ともいえる熱田神宮にも「みのらずの梅」とよぶ梅の木がある。五月の舞楽神事には、かならず目にするのが例年のこと。

「や／花の香の聞え候／いかさま木の花散り方になり候な／おおこれなる籬の梅の花が／弱法師が袖に散りかかるぞとよ／愛たてやな難波津の春ならば／唯木の花とこそ仰せあるべきに／今は春辺もなかばぞかし／梅花を折って頭に挿しはさまざれども／二月の雪は花に落つ／あら面白の花の日やな／げにこの花を袖に受くれば／花もさながら施行ぞとよ」と進んでいく。

そしてこの曲には「あまさ」がある。このあまさがすきです。この「あまさ」は「清経」「千手」「蝉丸」「松風」「班女」とはちがった「あまさ」のようだ。それに着けて登場する厚板（あついた）か縫箔（ぬいはく）の柄が目に楽しみです。「石の鳥居ここなりや」で、シテがもった杖をどんな風に扱うか、これにはかり注意のいくときもあった。もう十五年以上も前、水道橋で六平太翁がもちたる杖をビシリとシテ柱にあてられたのは、いまだに忘れられません。

梅にちなんだ曲や梅の字を曲名にもつ曲は、数曲あるようです。この「弱法師」のほかに「老松」「難波」「服」「東北」「梅」「梅枝」「鉢木」など。これとちがい、親子の再会と別れが主題の「景清」は季不定のようですが、これにもその風景に梅の木を添えてみたくてたまりません。

会員消息

▽…観世流（大阪）大槻秀夫師のご母堂は一月十四日老衰のため逝去された。享年八十三。告別式は十六日に営なまれた。謹んで弔意を表します。

◎二月のテレビ・ラジオ案内

NHK全国放送

▽二日（木）

〔総合テレビ〕

午後四時十分～五時（後半）

芸能百選（再放送カラー）

「猩々」　宝生九郎　ほか

午前九時～十時

▽五日（日）

〔ラジオ第二〕

午前八時～九時

謡曲　宝生流「安宅・勧進帳」（宝生英雄）

▽十一日（祭）

〔教育テレビ〕

午前十一時～十二時

邦楽特選

舞囃子　観世元正　ほか

▽十二日（日）

〔ラジオ第二〕

午前八時～九時

謡曲　観世流「雲林院」（観世銕之丞）

▽十九日（日）

〔ラジオ第二〕

午前八時～九時

謡曲　喜多流「花月」（喜多節世）狂言　和泉流「節分」（野村万之丞ほか）

▽二十六日（日）

〔ラジオ第二〕

午前八時～九時

謡曲　「三井寺」（梅若猶義ほか）

清純な　青雅流いけばな　茶道裏　教室案内

家元講師　二井泉樹・内田春月　指導

◆池下教室　千種区桐林町2の8　電751-9361（稽古日　水・日曜）

◆小牧教室　小牧市大字小木字十三塚3822の1　長尾芳弘様方　（稽古日・木曜）

◆家元教場　中区正木町5の39　泰雲寺　電761-2791　（稽古日・土曜）

☆お申込み・お問合せはすべて家元教場へ☆

宝生流宗家本

わんや書店

東京都千代田区神田神保町3―9
電話（263）6771代表
小売部　東京都中央区銀座8―4（金春ビル）
電話（571）0514
振替東京4163

株式会社　トモエ硝子製造所

代表取締役　片岡良平

名古屋市千種区松軒町三の四
電話721―6531（代）

謡曲・仕舞教授

一、月三回（十時より八時まで）
一、指導　梅若修一
一、東照宮斎館　名古屋市中区丸の内二―三―三七　電話（231）4010番
一、申込先　名古屋市中川区上脇町二の八六　吉川すゞ方　電話（361）5962番

重要無形文化財

中日五流能

◆とき　昭和42年3月26日（日）
◆ところ　名古屋・栄東　中日劇場
（有料）

うふぎ　釜まぶし

うふぎ　大友

ナゴヤ納屋橋畔（231）2709
6818
名鉄百貨店七階のれん茶屋店

名古屋の能楽今昔談

（その二）

西村弘敬

明治維新以後

明治維新はわが国の事物万般に大改革が行なわれ、あらゆる旧慣は打破されて西洋流文化の摂取流行となり、いわゆる文明開花の激浪に押し流されたため、能や謡などは地を払ったように打ち捨てられしたがって能の催しなどは殆んど行なわれなかったようであった。旧城内は軍隊の兵営が設けられ、旧藩時代の建物類、もちろん能舞台など一切が取り払われて跡かたもなくなった。

その後、明治十年前後から謡などもおいおいと復活の気運を生じ、能もときどきは行なわれるようになった。その頃には上園町に古春舞台があって、ここでしばしば能が催された由である。そのほかには西区井桁町に大野舞台、比米町に藤田舞台、早川舞台、また東区徳川町の徳川邸前の徳川三位靈社社務所などに舞台があったが、前記古春舞台は本格的な舞台で、他はいずれも敷舞台であったので、古春舞台のほかは大きな能はできなかったようである。

その頃の楽師としては観世流木下・松浦氏、宝生流には大野・林氏、金剛流には寺田氏、脇方では拙者先代西村大蔵一家、狂言師には山脇・早川氏などがあって、演能に出勤したり、門弟の稽古にあたっておられたようであった。

上園町の古春舞台はその後木下氏の所有となり、明治二十年頃まで演能が行なわれていたが、他へ売却せられて遂に姿を消すに至った。

その後は東照宮境内の西隅にあった神楽堂を、仮の舞台として能を演じていた。ここは橋掛りがないので社務所との間に仮橋を設けて橋掛りにと代用していたが、社務所の中窓の高さの橋掛りで、窓の鴨居が低くて演者の出入りが困難なので、走り込みや走り出しの能には不向きであった。私が能を知るようになったのは、明治二十八、九年の頃で、この舞台で春栄の脇ツレの早打ちを勤めたのが初舞台で、その後に遅々の能で初能抜きをした。小鼓の田鍋氏も多分その頃に初舞台を勤められた由である。

その頃のできごとに少々変わったことがあった。年月などは記憶にないが、その頃の旧藩士のなれの果てかとも思うが、瓢箪加藤という奇人があって、この人垢じみた着物に、よれよれの袴を一着におよび、顔には鍾馗様のひげを蓄え、腰に大きな瓢箪をぶらさげて、大道闊歩して歩きまわっていたので、人呼んで瓢箪加藤といっていた。あるとき、この神楽堂の舞台で能のあったときにやってきて、拙者に能を舞わせよと申し込んできたのだが、何分にもうるさ型の人なので、相談して舞わせることにした。加藤の能で御幣を打ち振り打ち振り、どんどん拍子ばかり踏みならし、ほとんどでたらめの能を舞ったことがあった。何分にもまだ士族気質（しぞくかたぎ）の抜けきらぬ時代で武士の横柄（おうへい）の名残りのように思えた。（つづく）

＝次回は明治中期時代〔写真は筆者の近影〕

各地だより

金沢能楽会 定例研究発表会
二月五日（日）午後一時始
於金沢能楽堂
演目　俊寛
シテ　上野安子
康本　村まつ子
成中　島美重子
ワキ　北野英雪
ツレ　石坂宇兵衛
後シテ　田宮義男
前シテ　田川雅章
ワキ　北村善三
能　八島

大鼓　飯島佐六
小鼓　森靖久佐
笛　麦谷清一郎
後見　渡辺容之助
石坂宇兵衛

仕舞　難波　佐野　崩
狂言　千鳥　能村祐丞

ツレ　玉川博
シテ　佐野正治
ワキ　殿田保輔
能　葵上

大鼓　飯島俊二
大鼓　石黒忠
小鼓　住駒介
笛　片岡陽吉
後見　山田太佐久
島村巌

レキ　泉喜八
ツレ

竣工記念に「石橋」
文化の殿堂・岐阜市民会館

岐阜市民会館は岐阜市民の文化の殿堂として、二月一日竣工、これを記念して一日政財界、市民代表を招き、午前十時から竣工記念能として次の能が上演され、多大の感銘を与えた。

能　石橋
大鼓子　高安滋郎
笛　鬼頭喜太郎
笛　三勇
笛　鉱一
後藤孝一郎
片山慶次郎
片山博太郎

二月の催し

宝生流東海嘱託会総会
二月五日　十時始
於　名駅前　はせ川

竹韻会新春素謡会
二月十二日（日）
午前九時半始
主税クラブ

お願い
編集の都合上できるだけ早く催能の番組を当社あてお知らせ願います。

説解

邯鄲（かんたん）

能の四番目であり五流とも行なわれる。作者は世阿弥の作。シテは盧生（ろせい）という哲学青年で、ワキは夢の中に出てくる勅使、ワキツレは同じく大臣、子方は舞人、間狂言方は宿の主人であって所は唐の蜀の国である。

盧生は人生とは何ぞやの大問題に悩みつづけて、楚の羊飛山の知識人のもとへたずね邯鄲の里に至り旅宿にとまりそこで邯鄲の枕で、しばらく仮寝の夢をしているうちにその夢の中に勅使が現われ、楚の国の帝王となり、玉のこしに乗り、たちまち金殿玉楼の雲の上の人となり、飾りものも一畳台の上で「楽」を舞います。

台は一畳の大きさなのに、広々とした大宮殿となり、少しも窮屈を感じなく舞い、片足を台よりスーと落して、とっさに引きあげて見渡す型、これは見落すことのできない一番中の見どころです。

やがて大臣より奏聞あり。みくらいについて、五十年を過したとて、さらに一千年のご寿命を延びるという仙酒をすすめられ、心持ちよく「いつまでぞ栄華の春も常磐（ときわ）にて、めぐる盃の数々に舞人の舞などあり、夜ひるとなく栄華の夢を見たが、ふとさめれば、ただただ一村雨で、粟飯の一炊の夢であって人間五十年の栄華もこれは一炊の夢に過ぎず」とはじめて悟りを開くという筋書きであります。

長唄の曲の中には「一泰今邯鄲」または「今様邯鄲」といわれています。（妹背山眺千本）のうちで狂乱新作事に用いており、また「正治郎邯鄲」として九世団十郎が「大蔵郷」の曲舞（くせまい）を舞うときに三世杵屋正治郎が作曲した文献が残っている。

邯鄲は中国の河北省邯鄲県にあり戦国時代の趙国の都であり、漢時代に至るまで当時の大都会の一つであった。

筆者が一九六四年に現代中国の視察団として訪中した際に武漢市（昔の武漢三鎮）から北京へ向う途中に邯鄲駅へしばらく停車したが、昨年の八月の紅衛兵の北京への集中して以来中国文化大革命が初まり、労働者、農民、ついで解放軍までにおよび今後の中国がどうすすむかは、ようやく当時の末端までとびこんでみた筆者が想像していたことが、現代中国に起りつつあります。

毛沢東語録の中に「われわれは、今、前進しつつある。われわれは、今、前人がやったことのないきわめて光栄で偉大な事業をやっている。われわれの目的は、必ず達成しなければならない。われわれの目的は、必ず達成できる」

もう一つ別の言葉を述べるとすれば……

国民の利益のために死ぬのは泰山よりも重いが、国民の利益のために生きるのもまた泰山よりも重い。（H生）

人事往来

▽…二月二十六日（日）サンケイ観世能にワキ方高安滋郎師が出勤される。曲目は「摂待」

▽…和泉流野村又三郎師は一月中旬東京労音の狂言会に出勤された。

あなたに心をこめておおくりする……
富士道の婚礼家具
家具の富士道
本社　名古屋市中区矢場町2の15
ショールーム　TEL(241)3367・1453
工場　愛知県西加茂郡三好町
TEL　三好178

能装束
仕舞袴
佐々木光之助
京都・上京区裏門中立売上
電話京都44-4270番

中日本貸物装飾株式会社
取締役社長　千田麗治
名古屋市西区琵琶里町4の9
TEL（代表）521—9251

一日発行）
刊を祝す
楽会
郎左衛門
真太郎
康治
期待あつめて創刊号誕生
年に多彩な催しで飾ることが期待されている。熱田神宮能楽殿における催能も新春から多彩な番組にみちあふれ、そ
楽界の希望は限りなく大きいものがある。
各界のご支援を得て、ここに創刊された「能楽の友」は
演能案内
熱田神宮能楽殿

能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司　筆

発行所　能楽の友社
編集発行人　花木徳三郎
名古屋市中区栄2丁目16－10（花木ビル内）
電話 211-1019・1974　231-6727・2891

購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　佐藤卯三郎　内藤泰二
井上松次郎　杉村竹翠　野村又三郎
梅田邦久　吉田定男　林甲子夫
大塚一二　高安滋郎　久田秀雄
長田驥　田鍋惣一郎　福井啓次郎
筧三男　戸田秀雄　二井栄逸
鬼頭五朗　殿島修二　増田一雄
鬼頭喜太郎

編集同人は逐次発表致します。

貴紙のご発展を祈る

弥生の三月、中部能楽界は九皐会、観衛会、名匠鑑賞能龍吟会とつづく熱田神宮能楽殿での演能をはじめ、中日劇場では中日五流能が催され多彩な曲目でいろどる。既報のように、名古屋で開かれる医学会総会を記念しての協賛能（四月一日）と観能会（四月二日）は、海外から来日する医学会の権威者多数の来会が予定され、中部能楽界としても大きな意義をもつものである。一方観世流能楽団のヨーロッパ訪問演能の成果も期待されている。

また昨年はじめて行なわれた市民能ともいうべき「新能」は、各界のご声援のもと恒例行事として本年は八月に催されることになり、新らしい構想ですすめられている。

能楽のもつ内容の深遠さ、形式の簡素さは、複雑化し、能率化している現代とは全く対照的に、私どもの心を時ところを越えた感動に包む迫力をもっており、まことに国劇の名にふさわしいといえましょう。

伝統に生きる能楽界の一層の隆昌を目的として刊行された本紙が、逐次内容を高めて斯界に貢献しておられるのはまことに、慶賀にたえません。

この目的をよく紙面に活かされ、能楽愛好の方々のこよなき伴侶として、かつまた文化、芸能に関心を寄せられる人々の良き道しるべとしてご成長、ご発展されることを期待してやみません。

道成寺スケッチ　仙田雪山子画

いろどる春の催能

本紙の購読申込み相つぐ

能は好きだから、なるたけ見る機会をほしいと思っている。二月は梅猶会の「隅田川」を見て大そう感動した。

梅若猶義の狂女が出てきて一声の謡のあと常座にはいり足を踏むのに、足を上へでなくうしろへ上げてトンと踏むのが、石蹴りみたいで、すこしかたちがわるいと思った。しかし見ているうちに気にならなくなった。

狂女が舞台へ出る前に後見が塚のつくりものをヨイショヨイショと運んできて、小鼓と大鼓の座の前に置く。このために舞台がざわつく。塚が舞台装置として必要なのは、これからまだ三、四十分もさきになってからである。都鳥の問答があって、女が舞台にのって、ワキが梅若丸の果てた長話があって、それはわが子にちがいないと舟から降りて塚をたづねる。ここで塚を出すべきではないか。

しかし、これは私の短見であった。能は緊迫したムードを孕んでぐんぐんと一作の核心に突進している。つくりものをもち出すような間隙は寸分もないことが解った。

狂女が「なう〳〵我をも舟に乗せて賜はり候へ」という。いままでの道行のダミ声の謡の調子が一変して、詞の調子となり、哀れさと心弱さがにじんでくる。ワキの長物語の間、シテが静止しているときの面をつけた頸の角度が実に正確である。都鳥の問答のところ、地上歌のクルヒは曲、所作ともテンポがあってこれは見どころだと思った。

塚にむかって「この下にこそ」で、中腰の膝をトーンと落として眼を押さえたかたちで泣くところは、非常につよい印象をうけた。舞踊だとなんといってもうごきの手数が多いから、こういう強烈なアクセントがきっぱりと出せないのである。

「生死長夜の月の影」の長い地謡のところで、シテは塚に合掌し、ワキは檀木を捧げたまま、静止している。厳粛な哀感が伝わってくる。能の魅力はこういうところにあると私は思う。

私を感動させたのは、シテと地謡との、南無阿弥陀仏の掛け合いのところだった。非常にしずかなテンポの謡であるが、このところの緩慢なる名律は、音楽的にも名曲であると思う。地謡座には婦人が一人まじっていて、一オクターブ高い声で和していたのがなんとも効果的であった。

いまの念仏の中に、正しく我子の声が聞えていたとシテがいう。「今一声こそ聞かまほしけれ、南無阿弥陀仏」これに応じてキンキンした子方の声で「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」がきこえてきた。

このシーンにおける母親（シテ）の、狂喜と哀切にあふれた謡に、私は涙があふれて止まらなかった、能であんなに感情をたかぶらせた表現を、私はまだ知らない。

子方が姿を出すものと思っていたら、ついに姿を見せずじまいで二時間近い「隅田川」は終了した。つくりものの塚を後見が運び出すとき、塚の下に小さな白い二本の足が、一しょに行儀よく歩いていった……。（筆者は劇評家）

『隅田川』を見て

人　蒼　島　殿

観世流能楽団
欧州で公演

梅若万三郎師、橋岡久馬師ら一行十八人で組織される観世流の訪欧能楽団は、二月二十四日のコペンハーゲン公演を最初に、オスロ、ストックホルム、ヘルシンキ、パリ、ロンドンなどで演能、四月二十六日帰国の予定。

演目は、北欧とフランスでは、「菊慈童」「葵上」狂言「棒縛」英国では「菊慈童」と「葵上」または「羽衣」と「土蜘蛛」の二部制。狂言は「棒縛」または「蚊相撲」の予定。

観世流能楽
研究発表会番組

四月九日（日）午後一時始
金沢能楽堂

観世流能
夕顔の女　梅若猶義
半蔀　大鼓　吉田太一郎　小鼓　大倉長十郎　笛　森田光治　所の者　茂山千之丞　地謡　観世寿夫　高安滋郎　増田秋男　福富岩勝

能楽の友編集部

演能案内

四月一日（土）午後二時始
日本医学会総会協賛能楽会
主催　愛知県医師会能楽クラブ

番組（観世流）

舞囃子　高砂　杉田合子　筧鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　筧三男
狂言　熊野　中西正雄　杉浦忠夫　山本一
仕舞　笠之段　伊藤実
仕舞　網之段　鈴木慈郎
仕舞　殺生石　佐野正俊
地謡　勧進帳　藤井久雄　田村クセ　片山慶次郎　茂山千之丞　観世寿夫

能楽の友編集部

四月二日（日）午後六時始
日本医学会総会観能会

能　土蜘蛛　シテ　市野健太郎　ツレ　坂堂芙都子　トモ　芳川博　佐藤豊次　高安滋郎　西村欽也　高安勝久　筧鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　筧三男　野村又三郎
（無料）

四月九日（日）
邦謡会
舞囃子数番あり

四月十六日（第三日曜）正午始
名古屋観世会

能　葵　上　梅若修一　梅若猶義　梅之由　空之祈　高安滋郎
狂言　泉山伏　山伏　野村又三郎　兄　井上祐一　弟　佐藤友彦
能　羽衣　梅若猶義　和合之舞　西村欽也
（有料）

能　熊野　六車真三　増田一雄　鬼頭五朗
（三面へつづく）

能面余談

松風村雨の面

二井　栄逸

静かな夜。月がぬぐったように明るい。きさらぎの夜はどこからともなく梅の香りがただよってくるものである。月と言えば……。宗家にいた頃、先輩から聴いた話がよみがえってくる。

江戸末期、喜多家には松風に限って使う二面の小面があったそうだ。名前も役そのままの松風、村雨と称する品であって、誰もがその面をかけることは許されていなかったらしいが、阿波蜂須賀家の能太夫、佐藤某と児玉某とは、このおもてを使うことを許されていたそうである。

さて、松風を舞う直前、シテに当たった方が村雨の面を見ると、それが不思議に自分の熱愛している美人にそのままなのである。オヤッと思って見直せば見直すほど生写しに見えてくる。どうも、その面をムザムザ他の男にかけさせたくない。誠にねたましいが、シテをゆづって自分がツレに廻る気にもなれない。色々考え悩んだ末、内密で面だけ取替えて貰うことに交渉がまとまり、シテはツレの村雨の面をかけて舞台に出ることになった。宗家で松風でも舞おうという人達、共に芸は出来ているし、心得も深かったに相違ない。それだけに出るに出たもの、シテの方は気がとがめ、やりづらくてならない。とうとう我慢が出来ずにどこからだったか自分でツレの文句を謡い出してしまったのだそうだ。松風の面をかけているツレの方では、そうくるだろうと待っていましたといわぬばかりに平気でシテに廻って一番を舞い納めたのである。面に対して敏感であった江戸末期の人々の気持がよくうかがわれる話である。

きさらぎの夜、樹間に降るような月光を浴びている時、しみじみと想い出すのがこの昔物語りである。

能と能面の話

観世宗家　浅井

能というものを大まかに見て一口にいえば、それはイブシ銀のような重味を持った、やわらかい味のある舞謡劇であります。その重味のある静けさや、美しさをもととして幽玄の風情をえがき出すのを根本としております。

しからばいかなる構成で成立っているかと申しますと、技術的には囃子と謡と型とになり、また物質的のものには能面と、能具と能装束であります。

これらのものを使って演出される能楽の曲数は、六百年という古い歴史を持つだけに現在までに八百番程あったようですが段々廃曲となって、今では二百餘番となっております。そしてこれらを五種類に大別して第一は神物です。これは神仏の威力や慈悲を描いたもの。第二は男物で、これは、平家物語りに出てくる景清とか俊寛、または清経といったような曲です。第三は女物で（かつら物）、これは大体、源氏物語や伊勢物語にある女主人公が多く、恋愛をえがいたものです。第四の物狂いものは男性もありますが主として母親が子を思う、親子の情愛をえがいたもの。第五は鬼物でこれは鞍馬天狗とか、土蜘蛛とか、山姥というような、鬼畜を取扱った曲であります。

この五種類の内どれが能の中心になっているかといえば三番目物に当たる女物（かつら物）で、美しくてほのかな恋愛をえがいた曲で、幽玄の感じを現わしたもの、ということになります。

ここでは「能の幽玄と静かさ」続いて「能面の中間表情」というのをテーマとして、お話してゆきたいと思います。

しからばその幽玄とは何かと申しますと、第一に「春の霞の隙間にも色香がほころび」とあります。霞のなかに色と香りがあるというのです。

第二に「秋の虫の音に、千草の匂いが感じられ」と、虫の音にも草の匂いが伝わってくるというのです。

第三に「優美にしてやさしく、物深く、しかもはかない筋を交えていることだ」といわれております。優しいなかに物深いものがあり、そしてはかないものを感じられるというのです。（次号につづく）

（筆者は能楽愛好者）

【お願い】
演能写真を掲載いたします。本紙にお寄せ下さい。

3月の催能のしおり

神宮殿 熱田能楽

五日（日）午前十時始
名古屋観世九皐会
番外舞囃子
吉野天人　観世　小島武雄　五木田武計　笑人掬
日本　河村吉田　大隆　唐　加藤遠藤　正光六郎
植村真太郎
能　唐船　西村　弘敬
間　佐藤　秀雄
伊藤　睦子
能　卒都婆小町　森　茂好
宝生　彰彦
一調　葛城　塚田　常子　観世　元信
狂言　太刀奪　佐藤卯三郎　井上　祐一　大野　弘之
吉田　妙
能　道成寺　高安　滋郎　西村　欽也　高安　守彦
間　井上松次郎　井上礼之助
その他　仕舞　舞囃子数番

十一日（日）午前十時始
山本博之師来名三十周年記念大会能組
能　隅田川　山本　章博　鈴木きくゑ　高安　滋郎　立石　澄雄
巻絹　山崎　栄治
舞囃子　善知鳥　村田　京子　野守　村瀬　つね
案題　井筒　伊藤　昌一　川瀬　保　子　山本　佑子　大村恵美子
能　船弁慶　前後之替　西村　欽也　高安　勝久
間　佐藤卯三郎
狂言　成り上り　井上　佑一　井上松次郎　井上　義次
番外仕舞　西王母　山本　順之　舎利　山本　真義
木曾　山本　勝一　難波　山本　博之
その他　仕舞　舞囃子数番

十九日（日）午後一時始
名匠鑑賞能
能　忠度　後シテ　野口　緑久　前シテ　辰己　孝
間　西村　欽也　井上　祐一
狂言　素袍落　井上礼之助　佐藤卯三郎　井上松次郎
休憩
能　景清　トモ　内藤　泰二　ヒノ　倉本　雅　宝生　九郎
高安　滋郎
能　黒塚　宝生　英雄　高安　滋郎　高安　守彦
白頭
間　佐藤　秀雄
附祝言
（有料）

二十一日（祭）午前九時始
金森師追善会
翁　久田　秀雄　千才　松井　省吾　面箱　井上　祐一　三番叟　佐藤　友彦
山根千代子　海田トシ子　河村　鉦二
半能　鶴亀　西村　立石　澄雄　高安　弘敬　勝久

半能　乱　伊藤嘉奈子　西村　欽也
半能　天鼓　赤間　鎮雄　西村　欽也
半能　融　殿島　修二　高安　滋郎
半能　石橋　クツロギ　佐藤　太俊　高安　滋郎
その他　舞囃子　数番
龍吟会

（催）（能）（写）（真）
一月五日（祭）
清韻会能
「邯鄲」　シテ　赤間鎮雄氏

◎三月のテレビ・ラジオ案内

NHK全国放送

▽五日（日）
〔ラジオ第二〕
午前八時～九時
謡曲　宝生流「熊野」（宝生九郎）

▽十二日（日）
〔ラジオ第二〕
午前八時～九時
謡曲　観世流「桜川」（梅若六郎）

▽十九日（日）
〔ラジオ第二〕
午前八時～九時
謡曲　金春流「昭君」（西川道）　狂言　大蔵流「清水」（山本則寿）

▽二十六日（日）
〔ラジオ第二〕
午前八時～九時
謡曲　金剛流「熊野」（金剛巌）
〔ラジオ第二〕
午後九時～十時
教養特集　「伝統音楽保存の意義「吉川英史ほか」
（番組の変わることがあります。ご了承下さい。）

× ×

昭和四十二年五月三日（祭）午前十時半始
也留舞会　社中発表会
吉野天人　太田　茂　長七　武二

（一面より・名古屋観世会つづき）
仕舞　雲雀山　石谷　初蔵
桜川　竹内　六郎
西行柳　久田　秀雄
嵐山　杉村　竹翠
柴田初太郎
弱法師　西村　弘敬　笠　鉦一　田鍋惣太郎　笠　三男
百日之替
間　佐藤卯三郎
狂言　橋岡　久英
杜若　西村　欽也　瀬尾　乃武　後藤孝一郎　鬼頭　八郎　藤田　昭彦
仕舞　白楽天　観世　静夫
春日龍神　高橋　静夫
奥　善助　観世鉄之丞
恋重荷　高安　滋郎　瀬尾　乃武　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
間　佐藤　秀雄

昭和四十二年四月二十三日（日）午前九時半始
久田観正会春季大会　番組
案題　大脇寿美子　稲垣つね子　吉田　つね
竹生島
小袖曽我　加藤　操　伊藤　正子
清経　今井　錦子　鈴木　金子　木野島定子
舞囃子
屋島　前野　郁子　河村総一郎　久田舞一郎　笠　三男
船弁慶　岩崎　京子　河村総一郎　久田舞一郎　笠　三男
半蔀　山岡　冬味　三宅しづ子
田村　後閑　文雄　笠　鉦一　福井啓次郎　鬼頭　季信
砧　松井ちえの　笠　鉦一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
雨月　柳沢しづ子　山岡みつ子　堀尾　和子
能　紅葉狩　岩崎　京子　近藤　静恵　前野　郁子　星野　路子　西村　欽也　井上　祐一　佐藤　秀雄　河村総一郎　久田舞一郎　鬼頭喜太郎　笠　三男
間
養老　佐藤　博子　吉田　定男　田鍋惣一郎　助川　竜夫　笠　三男
籠　中原　揚夫　吉田　定男　田鍋惣一郎　鬼頭　季信
（三面につづく）

（三面・久田観正会つづき）
天鼓　松井　省吾　笠　鉦一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
砧　吉川宇良子　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　笠　三男
安宅　吉田　定男　鬼頭喜太郎

能楽散歩

道成寺

野村広二

この作者と（初）演者についてしらべたことがあります。結局はわかりませんでした（花、二九・一〇）。名ノリの前に鐘をしづかにつる上懸り（観世・宝生）と名ノリのあとにつる、あのにぎやかな下懸り（金春・金剛と喜多）の仕方はどちらもすきです。壺折の唐織は「鶴菱」の方がこのましい。「月は程なく入りしほの／月は程なく入りしほの／煙みちくるやゴルフのようです。わたくしも雪の日、ラグビー観戦の経験があります。あのきびしさです。しかも柔かさを要求します。日本の美の代表の一つと申せましょう。能でも、この曲は、シテ方の「登竜門」といわれています。わざもとも、輝かしい美しさと異絵のよさを体得する一機縁ということでしょう。

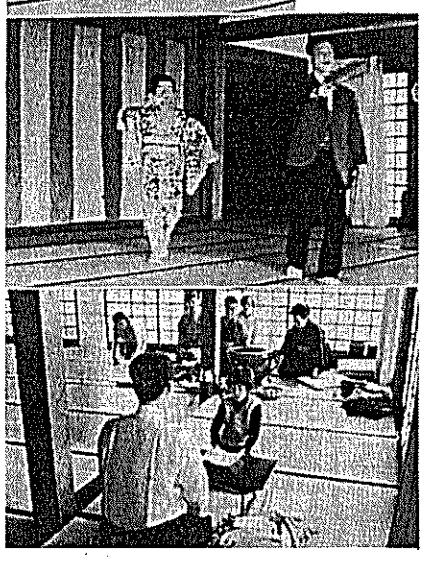
能の世界はいつもけんらん豪華です。季節は桜の花匂う頃、桃の花も盛りだったとおもいますが、紀州のどかな同名の寺のできごとです。しかしむかしはにぎやかな地方だったはづです。小さいときから、江戸邦楽の長唄で、「娘道成寺」の名をおぼえても、能のこの曲をご覧になる方は少ないのではないでしょうか。その長唄にも、「紀州道成寺」の方は能の筋をふんでいます。

これは、何回みても、曲全体がつかめず、そうかといって、目にもあざやかな部分のよさもなかなか心に刻みこめません。けんらんな女の美しさに、あやしい凄さが表裏一体となっています。変化流動とつきない清新さが、実に多数の登場者を一つの曲趣に律しさせて居られます。

稽古場のぞ記　第三回

宝生流　内藤泰二師宅

今度は宝生流の内藤泰二師の池下・三亀神社の稽古場をのぞかせて戴きました。師が指導に当たって居られる鍵雲会の会員は五十余名、中に職分の人が五名、嘱託（中伝物までの教授を許可された人）の方は男女併せて二十余名があり、うち女性では、近藤久さん、須賀千代子さん、古田智恵子さん、村瀬郁子さん、石田サダさん、竹内喜代香さんの六名が嘱託となって居られ、いずれも謡歴十年以上のベテラン女性で、流儀の発展に尽力して居られます。



師は中日文化センター。朝日文化センターの指導にも当たって居られ、両センターとも十五名位の会員がありまず。丁度須賀さんが「楽」のお稽古中で、熱心に師の唱歌に合わせて、拍子を踏むお稽古を拝見しました。須賀さんのご主人も嘱託で、最近は藤栄、小袖曽我のツレなど能への本格的進出を期して居られる日進町の歯科医さんです。

次には先日の鍵雲会で西王母の舞囃子を舞われた福田敬子さんが見えて、型に謡にと懸命なお稽古ぶりを見せて頂きました。引続いて近藤久さんのお孫さん達が見えて、直ちにお姉ちゃんの夏代さん（小学二年生）が、岩船の仕舞をされた。次は妹さんの浩代ちゃん（幼稚園生）が、羽衣の仕舞と、水野初彦君（幼稚園生）が竹生島と次々とお稽古を受けられる可愛いい姿に思わず見とれました。

幼い人達もお稽古の始めと終りにはきちんと正座して〝お願い致します〟〝有難うございました〟と、丁寧に挨拶をされる姿は、能楽十五徳に云われている「不厳喟形美」（厳ならずして形美を喟なむ）の本随だと感じ入りました。

（T生）

▽十九日（日）〔ラジオ第二〕午前八時～九時
謡曲　金春流「昭君」（西川

意義「吉川英史ほか」
（番組の変わることがあります。ご了承下さい。）

× ×

昭和四十二年五月三日（祭）午前十時半始

也留舞会　社中発表会

吉野天人　太田茂　長光武二
弱法師　池田正之　吉田章夫
雲雀山　一色啓恵　木村栄一　大本敏郎　後藤紀一
茶壺　井口鴨留
藤戸　丹羽兵三郎　塚本秀雄
附子　井口きくゑ
鵜飼　伊藤信男　大島登　山中哲男　服部弘志
羽衣　玉之段　一色啓恵　山本紘子
半蔀　水野知子
熊野　吉田章夫
松風　坂勝二
船弁慶　後藤紀一
仏師　後藤光明
殺生石　水野正嘉　後藤紀一
しびり　森己千江
いろは　井上豊弘

昭和四十二年五月三日（祭）午後四時半始

第八回　狂言やるまい会公演

司会　山本紘子

佐渡狐　野村万之亟　野村悟郎　野村万作
川上　野村万蔵　野村又三郎
盤渉楽　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
棒縛　野村万作　野村悟郎　野村又三郎
那須之語　井上礼之助
花筐　殿島修二　田鍋惣一郎
山姥　加藤丈太郎　鬼頭喜太郎
蝸牛　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上松次郎

（会員券八〇〇円）
会員券取扱所
中村区島森村内上二二
野村万やるまい会
（四七一）五〇六七

（三面・久田観正会つづき）

天鼓　松井省吾　後藤孝一郎　筧鉱一　藤田六郎兵衛
砧　吉川宇良子　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　筧三男
鞍馬天狗　伊藤与志子　吉田定男　久田舜一郎　鬼頭喜太郎　鬼頭季信
玄象　馬場今尾　博通　佐伯　正治　将夫　田中茂
竹生島詣　佐藤卯三郎　井上松次郎
石橋　伊藤久田　洋子　秀雄　高安立石　滋郎　澄雄　高安　勝久　筧　鉱一　福井啓次郎　助川　竜夫　藤田六郎兵衛

昭和四十二年四月二十九日（祭）

幸友会　社中舞囃子会

昭和四十二年四月三十日（日）

八世福井初太郎二十三回忌
九世福井五郎十三回忌追善能　能組

第一部（午前十時始）

海人　片野東四郎　吉田定男　後藤孝一郎　助川竜夫　鬼頭季信
経政　辰己孝　西村欽也　河村総一郎　福井良治　藤田昭彦
蝉丸　野口緑久　近藤乾三　森茂好　田鍋惣太郎　谷口勝三　小島鉄次郎　井上松次郎
竹の子　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　井上祐一
鷺　辰己満次郎　宝生九郎　高安滋郎　福井啓次郎　亀井俊雄　観世元信　田中一次

第二部（午後二時半始）

放下僧　藤波重満　観世元正　高安滋郎　井上松次郎　谷口勝三　幸円次郎　田中一次　観世喜之　田鍋惣一郎
花筐　藤井久雄　鬼頭八郎
船弁慶　野村又三郎　佐藤友彦
水汲　武田志房　野村四郎　武田太加志
塚求　森茂好　佐藤秀雄　亀井俊雄　福井啓次郎　観世元信　藤田六郎兵衛
石橋　観世喜之　武雄　西村弘敬　福井良久　筧鉱一　鬼頭喜太郎　筧三男

（有料）

養老　佐藤博子　吉田鍋惣一郎　定男　助川竜夫　筧三男
熊　中原揚夫　吉田鍋惣一郎　定男　鬼頭季信

（三面につづく）

名匠の能楽会話（その三）

西村弘敬

明治中期時代

先に記した通り、明治十年頃から能や謡が復興の気運に向かい、追々と能も催されるようになった。その頃の主だった能楽師ではシテ方には木下敬賢、古春増五郎、林増次郎、内田豊、寺田左門治、脇方には西村大蔵、囃子方では藤田六郎兵衛、藤田清次郎、福井五郎吉、高田栄久、立花一枝、角田銘一、鬼頭為太郎の各氏、また狂言師では井上菊次郎、角渕新太郎、伊勢門水河村鍵三郎の各氏があった。

これ等の諸氏が相談して能を保存し、かつ研鑽（けんさん）するの主旨で、明治十五年秋頃から保能会というのを設立して以後殆んど毎月のように能を催して、自己の芸の研究と同時に一般への普及を計っていた。この会は明治二十年頃に一時中絶するの止むを得ぬこととなった。

その後大正八年頃に保能会という会が出来たが、これは以前の保能会とは全く主旨を異にするもので、素人衆の稽古のための会でいわゆる稽古能であった。この会は殆んど毎月催していたが、昭和十九年末にて、舞台の焼失のため自然消滅した。

明治二十七年頃に中区門前町の東側に愛知博物館が出来て、その境内に能舞台が建てられた。これはその頃の財界の有志から寄附を集めて造られた本格的の立派な舞台であった。しかし見物席の設備が無かったので、雨天の際には順延する等の困難があった。この舞台披きは明治二十七年六月十日、十一日、十三日と都合三日間にわたって行なわれ、故観世清廉氏、喜多六平太氏、故片山九郎三郎等、囃子方にも東西の名手が来演せられ、当地の楽師と共に盛大に行なわれた。

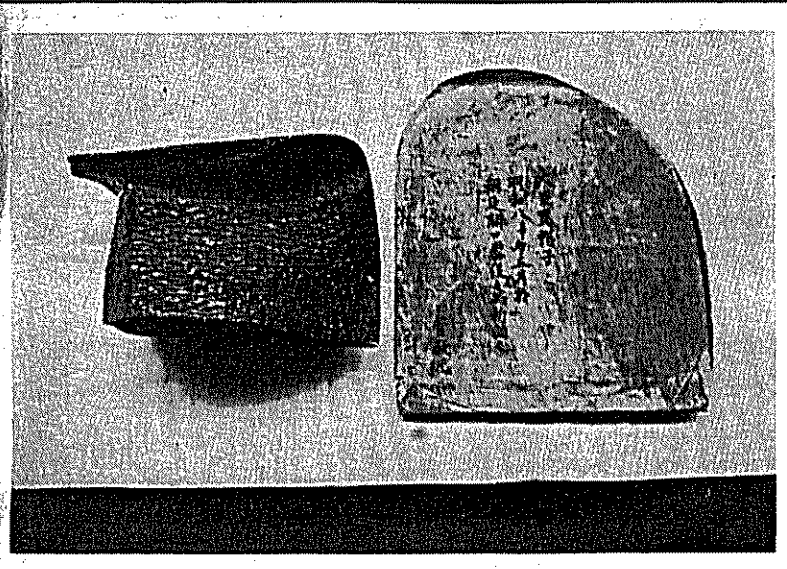
その後は時々稽古能などを行なっていたが、何分にも博物館の構内であるため、出入りにも幾分面倒があり、また見物席も無くて不便の点が多くあったので、利用も余り頻繁ではなかった。

明治三十三年に中区茶屋町（現在丸の内二丁目）那古野神社の境内に氏子有志が主体となって本格的の舞台が建てられた。その舞台披きは明治三十三年四月一日、二日、三日と三日間催され、先々代梅若実氏一統を主として囃子方も東西より来演し、当地の楽師達も協力出演して盛大に行なわれた。

この舞台が竣成したのを機縁として、当地の有力なる同好者と楽師とが協力して愛知能楽会という演能の会ができた。明治三十四年四月に初会を開き、以後殆んど毎月のように演能が行なわれて引続き三十九年末まで演能を行なっていた。この舞台も前記博物館の舞台と同様に、見物席の設備がなく、大きな催能の際には、臨時に桟敷を設け、仮屋根を葺くなどと、主催者には失費が多くて相当難儀の様子であった。その頃の大能としては、明治三十六年五月二十三日、二十四日両日に私の先代西村大蔵一世一代の「勧進能」が催され、「檀風」「張良」などの稀曲が上演せられた。

また明治四十年四月には井上菊次郎氏還暦祝賀能を、また四十一年三月には角渕翁還暦賀能を、同年十月には、尾崎忠景翁二十五年祭追福能が催された。その時に当地としては初めての「摂待」の能が上演せられ、シテは寺田左門治氏で随分長い能であって、子方が余りのながさに耐え切れず、遂に長袴の中へ垂れ流しをやったので、にわかに舞台の雑布掛けをするという珍事が出来ました。（つづく）

＝筆者は高安流



〔写真説明〕　西村家蔵、大臣烏帽子、明和八年辛卯五月、於朝廷開口参役之砌新調之（創刊号掲載の日月末広と同じ時期のもの）

各地だより

幽謡会春季大会
三月十一日（土）午後一時始
京都観世会館

田村（普装束）　片山博太郎
　　岡治郎右エ門
　　木村正雄
生島遼一
道成寺　高安谷　岡治郎右エ門　滋郎　田宗二朗　茂山千之丞　佐々木千吉
間
（ほか仕舞、独吟など数番）

金沢能楽会定例研究発表会
三月五日（日）午後一時始
於　金沢能楽堂

素謡　藤戸　シテ　久住しづ子　ワキ　三木紀子
能　熊坂　シテ　渡辺容之助　ワキ　泉喜八
大鼓　辰巳才一郎　太鼓　石黒俊二
小鼓　森靖久佐　笛　林豊寿
狂言　膏薬煉　野村万之丞
能　半蔀　シテ　宝生九郎　ワキ　毅田保輔
大鼓　飯島佐六　太鼓　片岡吉雄
小鼓　住駒陽介

お願い
編集の都合上できるだけ早く、催能の番組を当社あてお知らせ願います。

予定番組
能　経政・百萬　観世流　骨皮
伊勢一色能
三月十一日（土）
於　一色舞台
金沢学生能
三月十九日（日）
於　金沢能楽堂
次回　四月九日（第二日曜）

読者の声にこたえて

脇（ワキ）について

能、謡の第二人者として、シテに対する役である。

昔は脇の仕（為）手と言われたが、いつか略されて「ワキ」と言われるようになった。その当時の流儀としては春藤、福王、進藤、高安、宝生の五流を数え、各シテ方に座付として属していたが、いづれも江戸時代に座付はなくなり、現在は福王の家元が大阪に、東京においては宝生流があり、名古屋では高安流がある。

能に対するワキの役目はシテが積極的に演出するために大体受身的で、能の「シテ一人主義」の引き立ての役であり、シテの動きをジッと見つめる関係上、シテ方の演技を殆んど知らなければならないだけに、誠にむつかしい役である。

また一方にはワキの全然出演しない「小袖曽我」「橋弁慶」等があり、流儀によって「正尊」「歌占」などは脇の出ない能もある。

「安宅」のようにシテとシテヅレと相対し、シテの集りを唯一人のワキで演出する場面は見る人々の手に汗を握らせるのと、「土蜘蛛」のごとくワキ方の一団とシテ一人で相対して演出するのもあり、「張良」の黄石公と龍神、「柏崎」の住職と小太郎と一人対一人で演出する方法もあります。具体的な説明は、読者からの質問の都度、お答えします。（編集部）

編集後記

予告一、二号、新年号を編集したのがついきのうのようだが、もう桜の季節で三月号。本号には、芸能評論家殿島蒼人氏の寄稿を頂く。新らしい形の能評でもある。

本紙を彩る西村弘敬師の名古屋能楽今昔談、野村広二氏の能楽散歩、仙田雪山子のスケッチともに大へん好評。

筆をとることが専門でない同人ではあるが、足であつめた本紙に物心とものご支援。精進を期している。

二月号ラジオ番組に変更があったことを申し添えます。

観世流・金剛流
宗家本発行元
合資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2-1　電話(291)2488-9　振替東京3552
京都市中京区二条通姉屋町東入　電話(23)1990　振替京都113

あなたに心をこめておおくりする……
冨士道の婚礼家具
家具の冨士道
本社　名古屋市中区矢場町2の15
ショールーム　TEL(241)3367・1453
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL　三好178

能楽レコードの店
納屋橋
日本楽器レコード売場
電話(201)5141(代)
能楽名盤会レコード、各種レコード
豊富な在庫　静かな雰囲気

和風レストラン
とうハ
今池ビル裏（千種区大久手町1の1）
TEL(731)2600

能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司　筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄2丁目16－10（花木ビル内）
電話 211-1019・1974　231-6727・2891

購読料	1年	200円
郵送の場合	1年	380円
一部		20円

能楽の友紙のご購読、催能の有料会員券は熱田神宮能楽殿へお問合せ願います。

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　鬼頭喜太郎　内藤泰二
井上松次郎　佐藤卯三郎　野村又三郎
梅田邦久　杉村竹翠　花木徳三郎
大塚一二　吉田定男　林甲子夫
長田驍　高安滋郎　久田秀雄
加野昭二郎　田鍋惣一郎　福井啓次郎
筧三男　戸田秀雄　二井栄逸
鬼頭五朗　殿島修二　増田一雄

編集同人は逐次発表致します。

〔第5号〕

第一部　舞囃子　素謡　独吟　仕舞　あり

第二部　午後二時始

午前十一時～十二時　観世流「頼政」（観世元昭）
▽十四日（日）　午前八時～九時　謡曲　喜多流「雲雀山」（広島、大島久見）

午前十一時～十二時　日本音楽道しるべ「獅子もの」の系譜」（一～四、横道万里雄ほか）
※「能楽散歩」野村広二氏の寄稿は次号にさせて頂きます

愛好者のよき伴侶

名古屋商工会議所　会頭　鈴木亨市

中部経済圏の躍進は、日本経済の中枢として重要な根幹を占めておりますが、真の発展は、ただ産業面の伸長のみでなく、その背景として文化面の発展が期せられなければならないことは申すまでもありません。

とくに名古屋においては、芸術の極致というべき能楽は、歴史的にも当地と因縁深く、その愛好の気運はつとに育くまれてまいりましたが、このたび「能楽の友」が創刊され、紙号を重ねるごとに充実した内容で斯界の隆昌に寄与しおられることは、まことに喜ばしいことであり、慶賀にたえません。

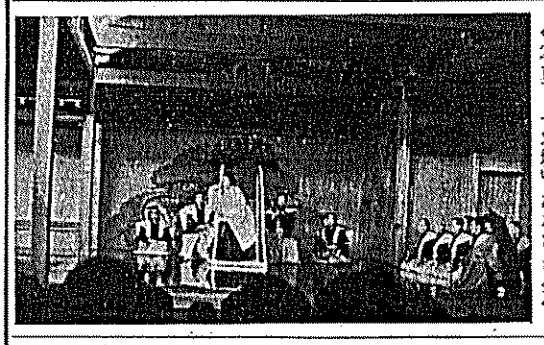
幾百年にわたる伝統美をもつ能楽は日本民族の大きな誇りであります。どうか貴紙が努力を重ねられ、愛好者のよき伴侶としてますます発展されんことを祈念してお祝いの辞と致します。

附祝言　主催　清韻会　筧鉱一　田鍋惣一郎　後見　鬼頭喜太郎　筧三男　杉村竹翠　田村竹男

五月二十八日（日）　壺泉会能　泉嘉夫　隅田川　その他狂言あり

「求塚」の印象

殿島蒼人



◇写真＝「求塚」たなびき会◇

たなびき会の「求塚」をみた。おもしろい能である。とくに前半の、シテツレの若菜摘のくだりが好もしい。一声の囃子でツレ二人の若菜摘の女が、しづしづと現れる。すこしマをおいてシテが幕を出ると、シテとツレは橋懸に向い合って一セイを連吟する。

三人とも白の水衣、銀地の袖、赤地錦唐織腰巻、みるからに清潔感のあふれる処女の装いであるがシテの赤地唐織にも、赤地金泥の腰帯にも、ツレのそれとはいくぶんの渋みが加わっている。面はシテは若女、ツレは小面。おなじ若菜摘の乙女ながら、衣裳にも面にも、シテに位づけがしてあるのは当然のことであるが、私は〝小面〟の、のどかな無表情を愛する。文楽ならツメ人形（片手づかい）の腰元といったところだが、あんな、どうでもいいような粗雑さとわけがちがって、品位があり美しい。

茶摘女の三人の、橋懸において の連吟は、かなり長い。白の綾絹に主導された三体の立像の色彩はじつに美しい。詞章が、早春の野景色をあますところなく謡ってある。「生田の若菜摘まうよ」までの上歌一ぱいで舞台に着くまでの、縹渺たる夢幻の美を、私は愛さずにいられない。

暗灰色の塚と、茶系統の衣裳の旅僧（ワキ）と、それに向いあった三人の白の衣裳との対照は、際だって効果的である。

シテがワキを求塚に案内して、求塚の故事をながながと語るのであるが、これは「道成寺」などでもワキがながながと来歴を語るところを、シテがこれをやって、中入となる。「二人の男は」ですっくと立ち「刺しちがへて」でツと前にかがんで激情を示すあたりが、前半での唯一の〝うごき〟である。

ここへ狂言が出て居語となるが、この詞章が、ほとんどシテ（菟名日乙女）の語りと変りがないのは智恵がないように思う。

「火宅の住家御覧ぜよ」と引廻しがおろされて、清潔な白衣紅服の乙女から痩女の面となって、髪もおどろの浅黄大口の後シテが、床几にかけた姿を現わす。ワキにアシラヒ、両手を出して、二人の男の亡魂に悩まされる苦患をつくりものの中で形をして、キリで立って、つくりものを出る。

鉄鳥となった鴛鴦が、こうべをつつき髄を啖う。火焔は鬼となって女を追う。女が火宅の柱にすがりつけば、地謡の「柱はすなはち火焔となって火の柱を抱くそとよあらあつや」で、シテは両手で肩をおおい、くるしみの表現をする。これから、叫喚大叫喚、炎熱極熱無間の底に、などの舞ぶった詞章にのって、シテが狂いまわるのであるが、大槻秀夫の内攻的なはたらきは鬼気をただよわせて結構であった。

それにしてもこの後シテの苦患は、酸鼻に過ぎる。いったい、ヒロインの菟名日乙女は、なんの罪を犯したというのであろうか。二人の男が、勝手に乙女の美貌に惹かれて、恋を争う。こまった乙女が、鴛鴦の羽に矢をあてた方に嫁くことを提案するが、二人の矢は同時に鴛鴦の羽をつらぬくので、乙女は立場にこまって生田川の流れに投じて自殺したのである。なおも男は追ってきて乙女の塚の前で刺しちがえて死ぬ。

死ぬのは勝手である。乙女はどちらとも約束したわけではない。被害者は、あきらかに菟名日乙女である。早春の野に若菜を摘んでいた、清純清楚な美少女が、自ら求めたおぼえのない災難に遭って自殺するさえ哀れであるのに、死後の塚にまで水鳥と男二人の亡霊が追ってきて、身の毛もよだつ火宅の苦しみに遭って悶えるのである。能の作者は、サディストでなければならないだろうか。

「求塚」の詞章は、名文であると私は思っている。前の若菜摘のくだりがそうであるし、後の水火の苦患のくだりもしかりである。しかし、一篇のロマンとしてぜんたいをみるとき、作者（世阿弥という）のサディズムは、謂れなきもので、いささか酸鼻主義に溺れているかに思われるのだ。

この曲が、人気曲として生命を保持していることについて、私は思うのだが、歌舞伎の世界で〝殺し〟を美化した表現形式が喜ばれていると一般、やはり能の鑑賞者の間にも、サディズムに喝采する傾向があるのではあるまいか。

「求塚」の、あきらかなるサディズム、酸鼻主義にたいして、世阿弥は一つの言いわけを用意している。それはシテの謡の中に「こはそも妄がなせる科かや、恨めしや」の一句があることである。しかし、言いわけは言いわけにすぎない。その一句のあと、作者はいよいよサディズムを募らせ、その火宅の攻め場を盛り上らせるのである。

シテはシオレた地謡の妖気のなかに「草の蔭野の露消えて」と三ノ松へたどり、幕前で「失せにけり」と、トンとトメを踏んだ。はじめ出てきたときの若女のおも〉

熊野のスケッチ　仙田雪山子画

〉かげをすっかりなくした痩女の面をうつむけて、しおしおと、である。

「今は火宅に帰らんと」と、暗黒の中に求塚を求めて、塚に入ったわけである。

僧の回向によって、哀れむべき菟名日乙女の亡魂は成仏したのであろうか。私は、痩女のオモテをいたわしく、気がかりにしてトメをきいたのであるが、成仏しようがせまいが、そんなことは作者にとって、どうでもいいのであろう。

（筆者は劇評家）

演能案内

熱田神宮殿能楽

五月三日（祭）午前十時半始
也留舞会　社中発表会

吉野天人　太田茂　長光武二
弱法師　吉田章夫　後藤紀一　水野正嘉
雲雀山　一色啓恵　木村栄一　大本敏郎　後藤紀一
茶壺　狂言　井口鵜留
藤戸　丹羽兵三郎　塚本秀雄
附子　狂言　井口きく丞
鵜飼　伊藤大島信男　山中服部哲男　登　弘志
羽衣　仕舞　玉之段　一色啓恵　山本紘子
半蔀　水野知子
熊野　謡物　吉田章夫
船弁慶　後藤紀一
仏師　狂言　後藤光明
殺生石　水野正嘉　後藤紀一
しびり　狂言　森己千江
いろは　井上豊弘

五月三日（祭）午後四時半始
第八回　狂言やるまい会公演
司会　山本紘子

佐渡狐　野村万之丞　野村悟郎　野村万作
盤渉楽　素囃子　筧鉱一　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　筧三男
川上　野村万蔵　野村又三郎
棒縛　野村万作　野村悟郎　野村又三郎
花筐　一調　殿島修二　田鍋惣一郎
山姥　一調　加藤丈太郎　鬼頭喜太郎
那須之語　井上礼之助
蝸牛　野村又三郎　佐藤卯三郎　井上松次郎

（会員券八〇〇円）　会員券取扱所　中村区烏森村内上三三　野村万やるまい会　電（四七一）五〇六七

能と能面の話

（その二）

浅井宋観

前述のように幽玄とは色々の含みをもっておりますが、現代の物の考えかたでは、随分わかりにくいことですから単純に言いかえますと「叙情詩的な雰囲気を持った、一つの美の世界を作る」ということです。従って女性を扱った三番目物がそれにあてはまります。

そしてそのなかに、序ノ舞という極めて静かな舞を加えて、ほのかな恋愛をえがき出すというのが、能の本体になっていると思われます。

神の威力や戦さ物語りは、歌舞伎の方が演出しやすいようです。また面白いので、私も時どき見に行きますが、この歌舞伎と能とは演出方法が全く反対で、舞台装置にしましても、歌舞伎は立派な道具類を舞台いっぱいに飾りたてますが、能はご承知のように、正面に老松を描いたハメ板があるのみで、これを背景として二百余番の曲を全部演じます。

またシグサにしましても、歌舞伎は喜怒哀楽を極端に誇張した演出をします。一例をあげると笑いは、ウフフ、アハハという調子ですが、能には笑いは全くありません。ただ面を心もち上向けるのみです。悲しみの表現でも、面を少し伏せるのみであります。

この静かな動きで、どうして長時間観客を引付けるかということの、一例をあげますと、子供玩具のコマですが、これに紐を巻いてピュッと引きますと、始めは少し頭を振りますが、最高調になりますと、全く静かに立ったままに見えます。この動かないときがコマとしては、莫大なエネルギーを燃しているときです。

能の演者が一見静かにジッとしているとき、その静かさで観客を引きつけている時が、息も止まりそうな精魂をこめた努力をしているときです。しかしこの静かさで客を引きつけられるか、退屈させるかは芸の力量にかかっております。それは能役者のだれにでも出来ることではありません。充分な修業を積んだ人でないとつとまりませんし、また囃子と謡いの意気統合で、その曲のフンイキを作り出さねばなりません。

従って前にも申しました、叙情詩的なひとつの美の世界を作る一曲の物語りと、幽玄の味わいをこの静かな、極めて単純な動作で現わすのですから、見る人の心がまえと、勤める人の技量によって結びつける芸能であります。

能の話はこの辺で切上げまして、次に能面について少し申しあげたいと存じます。

さて能面の話しですが、日本ほど多くの種類の仮面を持ち、また技術の勝れた仮面と、世界中で最も古い仮面を現在持ち伝えている国は他にありません。

その仮面としては伎楽面（ギガクメン）が最も古く、今から一千三百年ほど以前の飛鳥朝時代に、中国の南から渡来したものです。この面は聖徳太子によって仏寺の法要に用いられました。

次はそれより半世期ほどおくれて、奈良朝時代に唐から渡来したのが、舞楽面（ブガクメン）でこれは現在宮中で舞楽の舞に用いられております。その次が鎌倉時代に、日本で創作された能面であります。

（次号につづく）

〔筆者は能楽愛好者〕

4月の催能のしおり

神宮殿 田楽熟能

一日（土）午後二時始
日本医学会総会協賛能楽会
能 土蜘蛛 市野健太郎 坂堂美都子 芳川博 佐藤豊久 西村欽也 高安滋郎 高安勝久 野村又三郎

二日（日）午後六時始
日本医学会総会観能会
能 羽衣 梅若猶義 西村欽也 和合之舞
狂言 梟山伏 野村又三郎 井上祐一 佐藤友彦

九日（日）
邦謡会
能・舞囃子・其の他数番あり
能 葵 梅若修一 梅若猶義 上高安滋郎 葵之出 空之祈
（有料）

十六日（日）正午始
名古屋観世会
能 熊野 六車真三 増田一雄 鬼頭五朗
仕舞 雲雀山 石谷初蔵 桜川 竹内六郎 西行柳 久田秀雄 嵐山 杉村竹翠
能 弱法師 柴田初太郎 西村弘敬 百日之舞
間 佐藤卯三郎

〔写真説明〕
隅田川 梅若猶義 高安滋郎
（二月五日梅猶会）
ウシマド・リウジ氏 提供

杜若 橋岡久共 西村欽也
仕舞 白楽天 観世静夫 春日龍神 高橋静夫 奥 観世鉄之丞 善助
能 恋重荷 高安滋郎 佐藤秀雄
（有料）

二十三日（日）午前九時半始
久田観正会春季大会
素謡 竹生島 大脇寿美子 稲垣つね子 吉田つね
素謡 小袖曽我 加藤操 伊藤正子
素謡 清経 今井錦子 鈴木金子 木野島定子
舞囃子 屋島 前野節子 船弁慶 岩崎京子
素謡 半蔀 山岡冬味 三宅しづ子 田村後閑文雄 砧 松井ちえの
素謡 雨月 柳沢しづ子 山岡みつ子 堀尾和子

紅葉狩 岩崎京子 近藤静恵 前野節子 星野節子 西村欽也 立石澄雄 高安勝久 井上祐一 佐藤秀雄
養老 佐藤博子 中原揚夫
籠 中原揚夫
天鼓 松井省吾
砧 吉川宇良子
鞍馬天狗 伊藤与志子
素謡 玄象 馬場博通 今尾正治 佐伯将夫 田中茂
番外 竹生島詣 佐藤卯三郎 井上松次郎
能 石橋 伊藤洋子 久田秀雄 高安滋郎 大獅子

二十九日（祭）
幸友会 社中舞囃子会
三十日（日）
八世福井初太郎二十三回忌・九世福井五郎十三回忌追善能 能組
第一部（午前十時始）
舞囃子 海人 片野東四郎 辰己孝
能 経政 西村欽也
第二部（午後二時半始）
能 蝉丸 野口緑久 近藤乾三 森茂好 井上松次郎
狂言 竹の子 佐藤卯三郎 佐藤秀雄 井上祐一
能 鷺 辰己満次郎 宝生九郎 高安滋郎 河村丘造
第三部（午後二時半始）
能 放下僧 藤波重満 観世元正 高安滋郎 井上松次郎
狂言 水汲 野村又三郎 佐藤友彦 武田志房 野村四郎 武田太加志
一調 花筐 観世喜之 田鍋惣一郎
一調 船弁慶 藤井久雄 鬼頭八郎
能 求塚 観世武雄 観世喜之 森茂好 佐藤秀雄
半能 石橋 観世喜之 西村弘敬 大獅子
（有料）

説解

熊野（ゆや）

各流とも行われる三番目物（かつら物）であるが、流儀によっては「湯谷」と書き、作者は世阿弥。

◎四月のテレビ ラジオ案内

NHK全国放送

◎ラジオ

▽二日（日）（第二〜以下同じ）午前八時〜九時
謡曲 喜多流「大原御幸」（後藤得三）
午前十一時〜十二時
日本音楽みちしるべ「日本音楽の諸問題」（吉川英史ほか）
▽八日（土）午後二時〜三時
邦楽鑑賞会翁三番叟シリーズ(1)謡曲「翁」（宝生九郎）
▽九日（日）午前八時〜九時
謡曲観世流「杜若」（木原康次）
▽十六日（日）午前八時〜九時
謡曲 下懸宝生流「雲雀山」（宝生弥一）
午後十一時〜十二時
日本音楽みちしるべ 日本音楽の歴史(2)「中世」（横道万里雄ほか）
▽二十三日（日）午前八時〜九時
謡曲観世流「養老」（山本博之）
▽三十日（日）午前八時〜九時
謡曲 宝生流「是界」（野口緑久）
狂言 大蔵流「貫習」（高井則安）
（番組内容の変わることがあります。ご了承ください）

◎テレビ

▽十六日（日）
（総合）午後四時三十分〜六時
古典芸能鑑賞狂言大蔵流「栗争」
（茂山千作）能 観世流「二人静」（梅若六郎）

五月五日（祭）
巽会 社中能舞囃子会

五月七日（日）午前十時始
清韻会春季大会

第一部 御来場歓迎
神歌 福間昌作 千歳 佐野正三
素謡 竹生島 松田六郎 宮部保良 伊藤勲美
連吟 桜川 野口大西 清八郎
清経 冨士道周明
仕舞 玉鬘 佐野正三
花筐 福間昌作
天鼓 神戸鉄次
独吟 藤戸 稲生清子
笠之段 増田保雄
仕舞 玉之段 本多逸郎
遊行柳 加藤三奈
独吟 俊寛 小島とみる
舞囃子 養老 長屋潤 河村総一郎 田鍋洋一 助川竜夫 三男
安宅 赤間鎮雄 河村総一郎 田鍋洋一 冨士道周明
胡蝶 角野博久 吉田定男 角野しげ子 鬼頭喜太郎 鬼頭季信
独吟 賀茂 下山鉱一
松風 天野登茂子 吉田定男 田鍋惣一郎 筧三男
紅葉狩 急之舞 伊勢信雄 河村総一郎 田鍋惣一郎 筧三男
杜若 長谷川実 河村総一郎 後藤孝一郎 鬼頭喜太郎 鬼頭季信
唐船 川村鉄雄 吉田定男 後藤孝一郎 助川竜夫 筧三男

第二部 午後二時始（会員券一、〇〇〇円）
独吟 鐘之段 岡田光紘
弓之段 小林二郎
杜若 加藤良久
仕舞 小袖曽我 小林則夫 多久島利之
放下僧 稲生芳雄

（三面につづく）

（清韻会のつづき）
能 百万 中原憲泉 嘉夫 西村欽也 吉田定男 福井啓次郎 鬼頭八郎 藤田六郎兵衛
後見 殿島修二 大槻秀夫

〔写真説明〕　中国の有名な古典小説「水滸伝」の京劇の舞台、ただし現代の中国はこれを近代化している。

能楽散歩

続・道成寺

野村広二

花か、杜若、藤に因んだ曲をとりあげたかったのです。菜の花は、わたくしの大好きな花の一つ。花札の四月が藤、五月しょうぶではありませんが、杜若は、次回にゆずらせていただくとして、今一回「道成寺」の続きを書きとめたいとおもいます。

みなさんはだれのシテでこの曲を、はじめてみられたでしょう。初見の思い出はとおといものです。わたくしは、金春信高氏の家元継承披露能でした。京都の金剛能楽堂です。故桜間弓川（当時金太郎）氏が勿論健康なときで、立派な「石橋」を舞われたことがいつまでも忘れられない。諸事不自由さが残っている頃とて、乱拍子から急ノ舞の前後でしばらく停電。その日は、十二月の繁り勝ちた。

しかし、曲はそのまま何事もなく進み、まもなく明るくなって、立派な鐘入り。「暗夜如法とはこのことでございますね。」と信高氏に話したことをおぼえている。

おなじシテではどうでしょう。金剛巌（古式）、観世喜之両氏の三回がおなじシテで一番多い数です。小鼓は田鍋惣太郎氏の場合が一番でしょう。名古屋では、惣太郎氏は、五十回をはるかにこえ、惣一郎氏も二十回に近い回数の由。ワキの高安滋郎、笛の藤田六郎兵衛氏にも出演の数をうかがってみたいと思います。

解説の本では、故三宅襄氏の「能」（昭二七・一二号）の文章が実に傑作です。「金春に、シテが鐘の下にいき縁に両手をかける云々」と興味深い一文があります。それに沼畑雨氏の演目解説もすばらしい。画は「能謡秘訣」（昭一〇・六・大和田建樹）を飾る故松野奏風氏の道成寺の色彩画とスケッチが美しい。葵上にも一枚見事なスケッチがのっています。奏風氏の女のスケッチは一筋にかいた目がきれいです。写真集のことは割愛します。

さて、「道成寺」に女の業（ごう）をかんずるといってはいかがでしょう。増の女、井筒、六条御息所、砧の女に班女、小町とならべてくると、愛のいろいろのカタチの一つを強く物語ってくれるとおもいます。

豊竹山城少掾氏がまだ古靭大夫のときです。元気で御園座にも来名。その語り口にきく人を魅了しねて、招ぜられるまま、対座させていただいた。話のなかに、日本の音楽（芸能）で一つのフシ（唄い方、語り方）が、どこでどういう風に用いられ、時代を通ってきたか、調べてみることも大事ですがと話した。古靭氏は、例の、手で口元にさわりながら、しばらくは無言。ややたって、むつかしいことだねと一言。しかし、目元はやわらかだった。

今考えると、一青年の研究への野心の一端に後日を期そうといわれていたようにおもう。

能や狂言もからまっての話であるが、そのとき、道成寺は義太夫にもとりいれられていますよ（用明天皇職人鑑）など、話は、短かい間に多方面にわたって、親切に教えていただいた。

最近、週刊朝日（二・二四）の週間美術館に、道成寺の原形といわれる「華厳縁起」（義湘の巻）がのり、「観世」の三月号が道成寺特集をくむ（四二・三・一六）。

〔写真説明〕
隅田川　シテ梅若　猶義
ワキ高安　滋郎
（二月五日梅猶会）
ウシマド・リウジ氏　提供

秀吉と能

戦乱と平和のなかに神男女狂鬼

能楽はいろいろの雑芸を包有していた平安時代の猿楽から、時代の経過とともに展開したのであるが、鎌倉時代の初期には原始的な猿楽の能、ついで田楽の能が発展したらしく、降って同末期から南北朝時代にかけて、かなり進歩した劇的能が演ぜられていたようである。

この頃の猿楽や田楽が、大体同じようなことを演っていたことは、能楽の大成者観阿弥が、田楽の名人一忠の芸に傾倒していたことからも察せられるとおり観阿弥の作能には、なお何程か古猿楽のおもかげが残っていたらしいが、それを洗練してあらゆる面に幽玄化を施し、能楽のために揺がぬ礎を確立したのが観阿弥の子世阿弥元清である。

現在知られている能の数は約三千、その中の二百数十番が現行曲で、その大半が世阿弥の作であるばかりでなく、ほかに二十部余りの著作を遺していることでも彼が稀代の名人であったことを推知することができる。

しかし能楽の歩いた道も決して平坦な道ではなかった。

応仁の乱以降の群雄割拠時代は戦乱がうち続き、能楽人の生活は決して楽ではなかったが、秀吉が天下を平定するに及んで、豊臣家をパトロンにして生活も漸く安定を見るに至ったのは茶道と同じような流れをとっている。

秀吉は茶道と能楽を今日あらしめた大功績者である。現在なれば、さしずめ文化勲章を頂戴するか、芸術院会員というところであるが、秀吉の能に対する執着は異常なほどの熱心さで全く桁はずれであったため、能は一層盛んになった。歴代の為政者の中には、能に趣味をもち、これを後援したものも少なくない。しかし秀吉のような人は後にも前にもなかった。彼は後援というよりもむしろ耽溺であった。

ここにその熱狂ぶりの一例を紹介すると、文禄二年十月五日から三日間にわたって禁中で能を催し、天覧に供した。その時の能組が今に残っているが、秀吉は初日に五番、二日目に三番、三日目に七番、都合十五番の能を舞っている。なお二日目には徳川家康を相手に狂言「耳引」をも演じている。その絶倫な精力に驚嘆するとともに、いかに能の愛好者であり、斯道の発展に寄与したかがうかがわれる。

秀吉の没後、江戸時代になると武家の式楽として幕府より扶持を与えられたので能楽人の生活も安定をみたが、明治維新の変革で苦難のなかから再興し、今日までの伝統を誇り、海外でも堂々と演能が行なわれるようになっている。

茶といい、能といい乱世期を闘い抜いて一は利久により、他は観阿弥、世阿弥によってそれぞれ大成した。

能舞台の簡素さも、一脈茶堂の「さび」「わび」というものに相通じるものを感ずるのは筆者の独り合点であろうか。

秀吉が天覧に供した能組をご参考までにここに掲載してみる。

——初日——
翁　豊臣秀吉
弓八幡　同
芭蕉　同
源氏供養　同
千手　岐阜中納言
野宮　徳川家康
羽衣　丹波少将秀勝
山姥　織田常心
三輪　豊臣秀吉

——二日目——
翁　春松新九郎
老松　豊臣秀吉
定家　同
鵜飼　蒲生氏郷
遊行柳　丹波少将秀勝
大会　豊臣秀吉
楊貴妃　浮田秀家
東岸居士　丹波少将秀勝

——三日目——
翁　金春太夫
呉服　豊臣秀吉
田村　同
松風　同
江口　同
雲林院　同
杜若　同
紅葉狩　織田常心
通小町　岐阜中納言
金札　豊臣秀吉

解説

熊野（ゆや）

各流とも行われる三番目物（かつら物）であるが、流儀によっては「湯谷」と書き、作者は世阿弥。

シテは熊野、ツレは朝顔、ワキは平宗盛、ワキツレは従者。

物語の概要を述べると、平宗盛の愛妾熊野が故郷の老母の病篤しとの便りをたびたび受取って、宗盛に帰国を願ったが「この春ばかりの花見の友、いかでか見捨て給うべき」と花見車をよせさせ、京都の清水（きよみず）の花見につれていく。道行くあたりの清水の花の宴も興はなく、降る村雨も涙の思い。

さすがの宗盛もあわれを感じ、また、にわかの村雨で熊野の舞を宗盛が所望するが、熊野は老母の身を案じて「如何にせん都の春も惜しけれど、なれし東の花や散るらん」と一首の和歌を宗盛に捧げた。その時宗盛もそこであわれを催し、天覧に供した。その時の能組が今に残っているが、秀吉は初日に五番、二日目に三番、三日目に七番、都合十五番の能を舞っている。なお二日目には徳川家康を相手に狂言「耳引」をも演じている。その絶倫な精力に驚嘆するとともに、いかに能の愛好者であり、斯道の発展に寄与したかがうかがわれる。

秀吉の没後、江戸時代になると武家の式楽として幕府より扶持を与えられたので能楽人の生活も安定をみたが、明治維新の変革で苦難のなかから再興し、今日までの伝統を誇り、海外でも堂々と演能が行なわれるようになっている。

茶といい、能といい乱世期を闘い抜いて一は利久により、他は観阿弥、世阿弥によってそれぞれ大成した。

▽九日（日）　午前八時～九時
謡曲観世流「杜若」（木原康次）
▽十六日（日）　午前八時～九時
謡曲　下懸宝生流「雲雀山」（宝生弥一）

▽十六日（日）
（総合）午後四時三十分～六時
古典芸能鑑賞狂言大蔵流「菓争」（茂山千作）　能　観世流「二人静」（梅若六郎）

金沢で盛大に狂言鑑賞会

金沢狂言会主催、北国新聞社など後援による第一回狂言鑑賞の会が去る三月七日午後六時半から金沢能楽堂で催された。

演し物「鈍太郎」「武悪」「三人片輪」の三作で、野村万蔵、野村万之丞、野村万作、殿村与作、福富岩勝、能村祐丞、渡辺容之助、犀川小太郎、佐野正治、宮野伍朔、山田太佐久、渡辺筍之助、田川雅章、島村蔵、能村美丘の諸氏。

帰るという筋書であるが、長唄では歌詞も殆んど変らず、明治二十八年三世杵屋六四郎（稀音家六四郎）の作曲したものである。

能の熊野は「松風」とならんで有名曲であり、舞台は花やかの中に愁いを含んでいるし、気品と情趣を含んでいる。

熊野の出生地は遠州（静岡県）の池田である。（H生）

能　百万　中原憲泉　嘉夫
後見　酉村　欽也　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
狂言　寝音曲　殿島修二　大槻秀夫　井上松次郎　井上祐一
屋島　泉康強
弱法師　大槻文蔵
笠之段　杉村竹翠
女郎花　殿島修二
殺生石　田村勇

能　山姥　水田大槻博　秀夫　高安滋郎　立石澄雄　高安勝久　白鍋長秋　杉村竹翠　田村勇　筧鉱一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　筧三男
後見
附祝言　主催清韻会

名古屋猶謡会春季大会

五月十三日（土）午前九時始

素謡　井筒　他三番あり
舞囃子　清経　野守　班女　三輪
紅葉狩急ノ舞　砧　玄象　海士
仕舞　桜川融　雨月　三輪　熊野　杜若
天鼓　羽衣　紅葉狩　舟弁慶　雲雀山
他三番程あり

五月十四日（日）
霞会舞囃子会

五月二十一日（日）
一謡会舞囃子会
川村鉦二

能　夜討曽我
その他舞囃子数番あり

五月二十八日（日）
壺泉会
泉嘉夫

能　隅田川
その他狂言

狂言　小袖曽我
放下僧

（三面につづく）

の友社
木徳三郎
5-10(花木ビル内)
231-6727・2891
年　200円
年　380円

名古屋の能楽今昔

（その四）

西村弘敬

明治後期以後

明治四十二年に至り松坂屋伊藤家を始め岡谷家、関戸家その他当地の財界有力者達のご尽力によって、先きに門前町の博物館構内に建ててあった能舞台を中区呉服町二丁目に移転された。

この場所は元小学校の跡で、周囲は人家に囲まれて閑静なところであって、見席も出来て広さも相当にあり、従来のように晴雨の心配もなく皆々一同に喜び合っていた。

名前も能楽倶楽部と付けられ舞台披きも明治四十二年十月廿三、廿四両日に、先代の梅若万三郎氏一行を招き盛大に行われた。その後は舞台が出来て自由に使えるので各種の演能会が随時催されていた。

定式の会としては田鍋氏の骨折りで当地の前記財界の有力者を主体とした社団法人名古屋能楽会という演能団体が結成され、現在に至るまで当地能楽界の中心勢力として貢献せられている。

また素人衆の稽古会として保能会というのも出来て、盛んに行なわれ、大正から昭和へかけてますます隆昌となった。

この呉服町舞台の時代に想い起こされるのは、大正十二年四月三、四両日に、能楽協会主催の五流能を催したところ、前日の方は無事終了したのであるが、北白川宮殿下がパリで急に薨去せられた由、発表されたため、翌日の能は俄に取止めとなり一同大混乱にて難儀したことであった。

昭和五年に至り、東区布池町に本格的の能楽堂建設の議が起こり各方面よりの出資を得て、「鉄筋コンクリート」造の家屋内に従来の呉服町にある舞台を再度移築し見席は大部分椅子席とし、照明装置その他すべてを近代的設備としてでかし、東京水道橋の宝生会館の舞台と共に全国的に珍らしがられた。この舞台披きは昭和六年四月廿五、六の両日に観世・宝生・金剛三流で、翁、高砂、羽衣、乱、鶴亀、田村、杜若、安宅、石橋が演ぜられ盛大に催された。

序でながら、舞台の移転の工事中は舞えないので、その空間中に、田鍋氏のご尽力によって当地から十一人の演能団を組織して、中国上海に渡り、全地で演能して珍らしがられ、海外進出の先鞭をつけた次第であった。（つづく）

（写真は現在の上海駅）

＝筆者は高安流

各地だより

金沢能楽会
四月二日（日）正午始　於金沢能楽堂
シテ 河原明清　佐野明宏　殿田保輔
シテ 西王母
シテ 泉山伏　福富岩勝　能村英丘　能村祐亟
シテ 安宅　宝生英雄　森茂好
シテ 隅田川　近藤乾三　森茂好　泉喜八
シテ 太刀奪　佐野正治　大坪十喜雄　殿村与作　増田秋男　福富岩勝
シテ 石橋　辰巳孝　殿田保輔

奉祝伊勢神宮春季神楽祭
第十四回奉納金春流能楽
四月五日（水）午前十一時始　内宮神苑能舞台
シテ 邯鄲　金春欣三　笠田鉱一　田鍋洋一　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
シテ 熊野　シテ 金春信高　シテ 高安滋郎　高安守彦　河村総一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
シテ 二九十八　乾鬼九八　岩本平八郎
シテ 土蜘蛛　大刀持 森崎勲　胡蝶 阿部光　宇仁田吉助　シテ 本田光洋　シテ 高安滋郎　高安勝久
シテ 笠田鉱一　田鍋惣一郎　山口義郎　笠田三男
金春流宗家 金春信高　主催 本田光洋

大槻清韻会
四月七日（金）午前十一時半始　於内宮能舞台
素謡「三輪」「玄象」
舞囃子「花月」「雲雀山」「田村」「邯鄲」「紅葉狩」「二人静」「杜若」「巻絹」「鞍馬天狗」
ほか仕舞・独吟数番

金沢能楽会定例研究発表会番組
四月九日（日）午後一時始　金沢能楽堂
シテ 阿漕　シテ 密田良一　シテ 川西弘晃

八声会
賛助 名古屋金春会
シテ 玉川博政　シテ 殿田保輔
シテ 経
シテ 骨皮　殿村与作
シテ 百万　シテ 中村豊　シテ 渡辺荀之助　シテ 泉喜八

フェスティバル能
一九六七年大阪国際フェスティバル第十回記念公演
四月二十三日（日）午前十一時始
大阪・中之島新朝日ビル　フェスティバルホール
宝生流能
シテ 倉本雅　トモ 馬場冨四夫　長清 宝生九郎
景清　シテ 福王茂十郎
大鼓 山本敬一郎　小鼓 高木敏郎　笛 野口伝之輔
観世流能
夕顔の女 梅若猶義　半蔀 能楽師 高安滋郎　大鼓 吉田太一郎　小鼓 大倉長十郎　笛 森田光治
所の者 茂山千之丞

能楽寸譚

毛利側に信長本能寺での変報が知れたのは、六月四日も七ツ下り（午後四時）であった。（注…この四日には高松城主清水宗治が切腹）

変報を手にして、秀吉に狼かれたとして、ただちに追撃を主張したのは吉川元春であり、その陣所では、すぐに出陣の用意が整えられた。しかし小早川隆景は、元就公への起請文から説きおこしてこれをいましめた。隆景の陣所では酒宴の用意がすすめられていたのである。このような兄弟の別心をこそ、毛利元就公はいましめられたのだというのが隆景の論理であって、いったん交された和平の誓紙を守りぬくべきことを主張した。

本能寺の変報と毛利

隆景は、能役者鵜飼新右衛門を召し、「目出度き所か、また修羅などの様なる所か、うたい申すべし」と命じた。鵜飼はやや　あって小謡一番を「四海波静かにて、国もおさまる時津風」とうたい始めた。こうして隆景は、乱舞をもって毛利の陣中を見事にしずめたといわれている。

（中央公論社「日本の歴史」より）

× × ×

大蔵流狂言
水掛聟　茂山千作　茂山忠三郎　茂山千之丞
観世流能
シテ 長山本博之　地謡 梅若善高　梅若盛義　村上夫　観世銕之丞
玄象　シテ 宝生流 植田隆之亮　シテ 宝生流 久保田亘亮　シテ 宝生流 幸本寿治　大鼓 斎田喜兵衛　小鼓 吉阪修一　笛 前川貞光　大鼓 善雄　小鼓 義次　シテ 下人 茂山千五郎

片山博太郎後援会
第二回公演会
五月三日（祭）午後一時始　於京都観世会館
片山博太郎
江口　片山博太郎　高安滋郎　茂山千之丞　地謡 観世寿夫
勧進帳　藤井久雄
仕舞 田村　片山博太郎　片山慶次郎

梅七宝猶
観鉄仙宝生
朝日新聞
大阪国際フェスティバル協会
（有料）

善知鳥　観世寿夫
縄なひ　茂山千作　茂山忠三郎　茂山千之丞
車僧　片山博太郎　高安滋郎　茂山忠三郎　地謡 藤井久雄

春鶯会
五月二十一日（日）　於駅前松岡旅館
金剛流山田社中
春季舞囃子会
素謡・仕舞・舞囃子数番

演能案内

四月一日（土）午後二時始
熱田神宮能楽殿

宝生流宗家本
わんや書店
東京都千代田区神田神保町3—9
電話（263）6771代表
小売部　東京都中央区銀座8—4(金春ビル)
電話（571）0514
振替東京41663

東北料理
秋田銘酒　両関
秋田
中区栄三丁目8-25　電話(251)1956

御料理　仕出し
鮮魚　粕漬
熱用神宮御用達
中日ダウン惣菜部
合資会社　玉伝本店
名古屋市中区池田町二九　TEL241-3845・9945番

店舗改装
応接間・寝室
食堂・厨房の改造
日本装工K・K
名古屋市中区瓦町停西入百伝南側　電代（251）7311～3

名古屋市北区杉栄町3ノ5（カムカム劇場前）
医療法人仁愛会　奥田歯科診療所
奥田継一
電話（981）4554・7720番

いろどる春の催能
本紙り購読申込み目つぐ

能楽の友紙は、各流のご後援と能楽愛好者のご声援に支えられ、相ついで購読の申込みがあり、能楽界の層の厚さをはっきり示している。本紙が日浅いにもかかわらず多くのご助言やご希望がよせられ同人一同非常に感謝している。

能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司　筆

発行所　能楽の友社

名古屋市中区栄2丁目16-10（花木ビル内）
電話(211)1019・1974　(231)6727・2891

購読料	1年	200円
郵送の場合	1年	380円
一部		20円

能楽の友紙のご購読、催能の有料会員券は熱田神宮能楽殿へお問合せ願います。

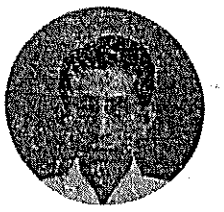
編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　鬼頭喜太郎　内藤泰二
井上松次郎　佐藤卯三郎　野村又三郎
梅田邦久　杉村竹翠　花木徳三郎
大塚一二　吉田定男　林甲子夫
長田驍　高安滋郎　久田秀雄
加野昭二郎　田鍋愈一郎　福井啓次郎
笂三男　戸田秀雄　二井栄逸
鬼頭五朗　殿島修二　増田一雄

編集同人は逐次発表致します。

楊貴妃に因んで

長谷晴男



は多い。傾国、傾城、傾情などという語もあるように、美人の魅力は、一国を傾けるに足るとされ、その上、薄命というのであるから、一層効果があがる。

洋の東西を通じ、傾国とされたものに、楊貴妃とクレオパトラとがいた。古代から近代まで、幾多の詩人・作家の好んだテーマとして何度もとりあげられ、それぞれ話題をまいてきたが、こと楊貴妃については、やはり白楽天の長恨歌であろう…。

漢皇色を重んじ傾国を思ふ御宇多年求むれど得ず。

に始まる長詩は、圧巻であり、名詩とされているが、日本でも金春禅竹が、この詩をとり入れて、謡曲「楊貴妃」を作った。シテは楊貴妃の霊、ワキは方士、アイは里人として、現今、五流共に行なわれている。

さて、熱田神宮と楊貴妃とのつながりは、いつ頃から生じたものか。それは中国思想、ことに神仙思想の広まった、平安朝末期から鎌倉時代と見るのが妥当であろう。

後白河法皇の御撰「梁塵秘抄」に、

万劫としふる亀山の、下の泉の深ければ、苔ふす岩屋に松おひて、こずゑに鶴こそ遊ぶなれ。

とあり、この亀山は蓬萊山の異名といわれる。梁塵秘抄は、平安時代における一種の流行歌謡であるから、歌と共に、神仙思想がひろまっていることも立証される。

熱田神宮は、鎮座一八五〇年にも及び、記紀はもとより、『尾張国風土記』などにも見えていて、かなり昔からの流伝であることがわかる。

三方海に臨み、信仰の地、景勝の地、緑につつまれた丘上に鎮座まします荘厳な神宮は、世の人々が、此処こそ蓬萊の宮としたのは当然であろう。

かくて、楊貴妃は、死後蓬莱に豊かな伝説にも富み、この楊貴妃の話や、始皇帝が、不老不死の薬を求めて、徐福を遣わした話や、春殿門と称する東門などの由来なども、この中に含まれているのである。

というのは、熱田神宮の鎮座地が、古くから蓬莱といわれているからである。例えば「仙伝拾遺」に東海上蓬莱是熱田を指すとか、「瓊華集」に、秦徐福蓬莱を求む。即ち尾州熱田神宮神祠是なり。とか、貞応二年（一二二三年）の「海道記」などにも見えていて、かなり昔からの流伝であることがわかる。

三方海に臨み、信仰の地、景勝の地、緑につつまれた丘上に鎮座まします荘厳な神宮は、世の人々が、此処こそ蓬莱の宮としたのは当然であろう。

かくて、楊貴妃は、死後蓬玄宗皇帝が、使者を日本に派して、楊貴妃の亡き魂の蓬莱島をもとめ、それがこの熱田の地であって、熱田の大神こそ、楊貴妃であったという説までも生ずるに至ったのである。

何はともあれ、中国思想の盛んな時代においても、熱田神宮が、一名蓬莱宮であると信じられたことは、ここに鎮まり坐す大神が、偉大な尊い神として、人々に如何に意識され、信仰され、親しまれて来たかを物語るものであると思う。

なお尾張名所図会（明治十貴妃の古事として挿画があります。また、楊貴妃の石塔のあとの文中に、むかし清水社のほとりに石塔がありしが、元禄時代貞享三年（一六八六年）、熱田神宮修理の際に廃絶して今日に至っており、なお当時に、唐の玄宗が日本を侵さんとして、楊貴妃を神として知多郡内海町に上陸した文献がある。

また熱田を蓬島（よもぎ島）といい、現在の名古屋は昔は御宮といい、正に時代の移り変りを物語っている。

（筆者は熱田神宮権宮司・皇学館大学教授）

楊貴妃のスケッチ

仙田雪山子画

日本医学会総会観能会

盛大に梅若猶義師独演能

ノーベル賞学者　テオレル博士（瑞）
麻酔学の権威　ロバート卿（英）

らが礼讃

四月の始め当名古屋市で開催された第十七回日本医学会総会では、芸術を愛好された故勝沼精蔵会頭をしのび、招待外国学者への日本芸術の紹介と会員のリクリエーションのために、四月二日午後六時より観能会が催された。

この日ノーベル賞生理医学者テオレル博士、英国の麻酔学の権威オックスフォード大学教授ロバート・R・マッキントッシュ卿、米国の神経学精神医学病理学教授哲学博士B・ボッシュ教授など内外著名学者及びその御家族約一〇〇名、アメリカ領事館アイビー氏夫妻、アメリカ文化センター館長クロッカー氏夫妻など在名有名外人約三十名、その他医学会会員など約四〇〇名が観能された。

この日神宮庁のご好意により、熱田神宮境内にはカガリ火がたかれ、折から桜は満開であり、能楽殿ロビーには、はなやかな上にも上品な雰囲気が溢れていた。演能の前には短い英文説明がやわらかい女性の声で流れ、それに重なって荘重な囃子方のお調べが始まると、既に場内は静寂と緊張がみなぎり、囃子方、地方の登場、ワキ、シテ方の出と一瞬のゆるみもなく聴衆を能独特の幽玄の世界にさそいこんでいった。

師の独演能であり、猶義師は「羽衣」和合之舞の小書であくまでも見事な華麗さを表現され、「葵上」梓之出、空之祈の小書。前シテでは能の本質の深さと詩的な美しさを、後シテでは能の表現のはげしさと豊かさの一面を示され、さすが毎年大阪国際フェスティバル能も主宰されている斯道の第一人者ならではの演技であった。狂言梟山伏はその前に英文説明はあったものの、日本語の理解出来る筈のない外人の爆笑をさそい、野村又三郎師の熱演と共に、そのまま世界各国に通じうる技量を示された。英文アナウンスの外国婦人が梟山伏を梟を姓、山伏を名と感違いして、外国流にヤマブシ・フクロと表現したのは愛嬌であった。終演まで二時間半その間に僅か五分間の休憩をはさみ、荘重の中にも美しさとたのしさのみなぎる会であった。

ある外人学者は「能は舞台に出る人―舞う人―謡う人、オーケストラすべての人々の総合芸術であり、その一つをもゆるがせにすることの出来ないものだ。そして人間の心と心が通じ合う芸術だ」との感想をもらされたのはさすが学会総会では猶義師の熱演に対し、感謝状と記念品贈呈という最高の礼を尽し、テオレル博士も自ら写真の如く讃辞と謝意のサインを猶義師に贈られた。次に二名の外人学者の能をみての感想をつたえる。

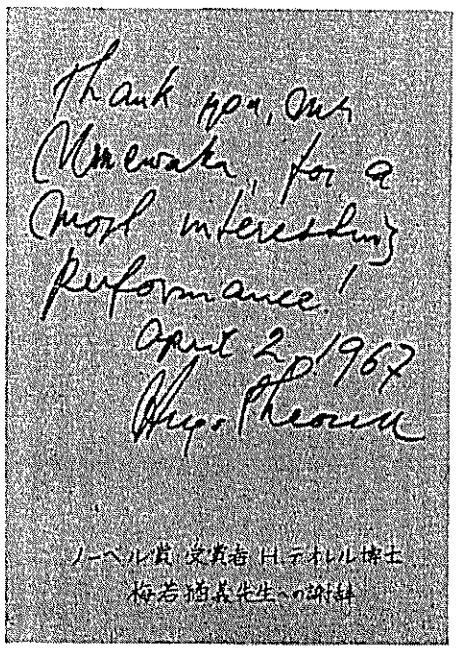
ロバート卿（イギリス）

「一言で云えば厳粛な感動であった。最近英国では教会での宗教的寓話の劇化が行なわれようとしているが正しく能はこれに見事に成功している。私にとれほど深い感動を与えた梅若師及び日本の芸術に深く敬服する」

ボッシュ教授（アメリカ）

「見事なものだ。面、衣裳とも芸術品だ。動きのない筈の面が喜び悲しみ、憤りの表情さえも示すように見えるのは梅若師の芸の力であろう。梟山伏では我々にも必要な精神療法が既に日本では古くから行なわれていたことを示し興味があった。しかしその一種の催眠術療法が失敗して、治療する側の山伏が逆に催眠術にかかったとは、まことに滑稽であった。」

（熊沢敦記）



中日五流能所感

北岸佑吉

ことしの中日五流能（三月二十六日）では、第二部の「熊野」の間は一階客席の最後列に立って見た。また階上席にも上ってみた。すると白木の舞台が闇の中から浮き上っているように見えた。まるで舞台上の人物や作り物がミニアチュアのように美しい。「熊野」は現在能だが、「井筒」や「松風」などだったなら、その夢幻性がさながらに感じられるだろうと思った。

一流だけでなく、五流の能が一日に楽しめるのが何より有難いのだが、ことしの中日能では、観世銕之丞（楊貴妃）西川道雄（景清）梅若六郎（熊野）らの長老のほかは金剛巌（田村）宝生英雄（綾鼓）喜多長世（大江山）ら、もう若手ではないだろうけれど、長老らに比して開きを感じさせず、総体に平均して六番の能が楽しめた。

去年から新開場の中日劇場に移されて、それまでの愛知文化講堂で試みて来た簡素な舞台装置の方式もほぼ完成されたものと思える見事な出来栄えだが、舞台の背面も平面も濃紺の厚布で敷き詰められているのが、素木の舞台、鏡板とのコントラストがどぎつい。おまけに本舞台がステージの上手半分に偏しているので、下手の客席からは絶えず首をねじて見なければならぬのがつらい。もとより橋掛りをなるべく長くとろうとするからのことだろうが、能の誇るべき橋掛りでの演出は能では重要ではあっても、その僅かの時間のために、大部分の本舞台での演能を見づらくされるのも、ちょっと引合わぬ気がするのだ。

いま渡欧中の観世流海外演能団が北欧で演じた舞台写真を見ると、なかなか立派な能舞台が準備されている。ロンドンのロイヤル・シェイクスピア・コンパニイのオールド・ウィッチ劇場ではどんなだったろうか。一昨年の渡欧能楽団が訪れた西ドイツのウルム劇場の図面を最近入手したのを見ると、ステージの前端に橋掛りをつけ、本舞台は客席へ張り出している。客席八百程度の劇場だが、そのため相当数の客席を犠牲にしている。脇正に当る部分は百たらずの椅子の向きを変えているから、大きさからいってもそっくり日本の能楽堂と同じなのだ。海外演能はもとより、内地で能楽堂以外での催能を眺めわたして、これほどよくできたものは知らない。

今は取こわされた大阪朝日会館の能舞台が大体その方法だった。あの朝日会館能舞台が本格組立舞台の先駆として現れ、各地のホールや劇場でその方式を真似るようになったのだが、戦後はホールも大きくなり、いろんな機構が進んで来た現今は、もう組立能舞台の時代でなくなった。

中日能が愛知文化講堂時代に、あの豪壮な組立舞台を思い切ったのは大賛成であった。大阪のフェスティバル能は中日能よりも前に大ステージそのままを生かす野外能形式に踏み切っているのだが、あの模倣はどこでもやれることではないだろう。

こうしたホールでの演能は能楽堂そのままにこだわるべきではないと思っているが、まだまだその方式は模索時代である。中日五流能の様式が、立派に完成されて行くのを望まずにはいられない。

（能評家）

中日五流能が中日劇場にあった同じ日に、私は愛知文化講堂で西川里喜代の〝にしき会〟をみる約束があった。それで〝にしき会〟の昼の部をみて、五流能は夜の部を見る予定をたてた。

五流能を、夜の部を見ることにしたのは、「熊野」が目標だったからである。というのは、その翌日御園座の赤堀流家元の〝赤堀会〟で、家元のこさえた新作舞踊「熊野」が出るから、両方くらべてみることのたのしみのためである。とはいっても、もとより能の方が原典であるから、舞踊の方が原典にどんなふうに即離するかを、ながめてみたいことにはかならない。

私が、どうしてこんなことをチョウチョウと書きだしたかというと、じつは面目ない失敗をやらかしてしまったことを、白状に及ばなくてはならないからだ。能をみるときは酒を呑むまいと、日頃自戒していたのにかかわらず、まことによんどころないことがあって、いまいましくも二、三の連れと、世界有数のまずいミカド食堂で、一献一献、また一献と、かたむけてしまったのであった。

中日劇場の夜の部の時間にはマにあったものの、金春のした方が、童子のありかたが権威づけられていいと思うのだ。（私は子方を従えた酒呑童子の写真をみている）

喜多長世の酒呑童子には、若さと限りがあっていいと思

（わが銀能」二面よりのつづき）

の面、黒がしらである。しかし私が気になったのは、かしらの前を剪りそろえないで、弱法師みたいに長く垂れさせていることだった。その方が

わが観能　その三

『大江山』の印象

殿島蒼人

「景清」はフハリフハリとうつらに見たばかり。仕舞数番は昏睡状態。観世の「熊野」を、ここぞと目をクワッとひらいてみたが、ヤアこの宗盛は土百性の爺ちゃんで平家の公達らしくないなア、てなことにばかり頭が走り、演じられている幽玄のおもむきとはうらはらに、なぜこのヂヂイは、シオレて涙のなかに舞っている熊野のこころを汲んはゴツゴツして、女らしい美しさも可憐さもないことである。芝居でなし、踊りでもないから能狂言はこれでいいのだといふ理屈が、あるのであるが、ここんところは、私が思うには、近世的なアクションであって、室町時代のハタラキの型そのままではないのでは

助平めが、と、そんな心ばかりがはたらくのである。

いったい私は「熊野」は好きな能である。仕舞の「熊野」を半歳ならって、どうにもサマにならず、師匠から匙をなげられたカクカクたる不名誉な武勲を保持している私であるが、それでもなんでも「熊野」の幽玄を愛する。この日、小書の読継の伝、村雨留、墨継の伝、膝行もこの目で見た。花見車の道中も見た。正先で観世音に祈誓をこめる可憐さも見た。帰国を許されて、まず観世音に合掌し、これまでと別人のようにいそいそと明るくなって、三の松でトメを踏んだのも、たしかに見た。

見ることは見ても、ただ、見ただけである。なんにもうけとめていないのだ。能を見ることは、うけとめることではあるまいか。私は梅若六郎ほどの人に、わるいことをした気がする。たわむれに能は見まじ、である。

切能「大江山」で、やっと私の〝うけとめ態勢〟がととのった。酒がさめたわけである。

この「大江山」の前シテの酒呑童子は、世にも愛すべき粗大、磊落な好人物である。道に迷ったといって、餘人の来るはずのない丹波の山奥の山岩にやってきた頼光、保昌たち七十余人の山伏、すなわち童子討手の人数を、なんの疑念もなくもてなし、立って身の上語りを舞って、客僧たちに酒を振舞い、自分も大杯を傾けるのである。

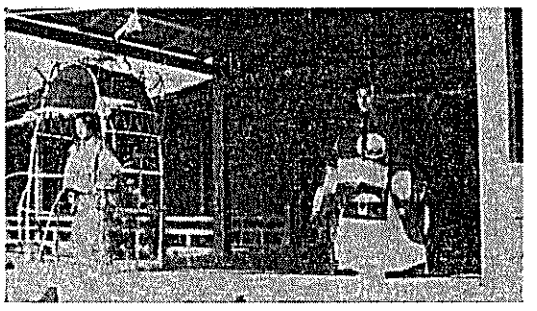
この山をばいつの頃よりの御居住ぞ、などと身の上をきいたり、御心やすく思し召せ、などと油断させ、童子に酒をついでいる頼光たちは、ケチな立身出世慾、褒美の恩賞ほしさの亡者でしかない。

そこへゆくと酒呑童子は、酒々落々として大杯をあおりグッと呑んでまたつがせ、またグッと呑むなどの型があり、することが大まかで、長者のふうがある。このシテの、こだわりのない大まかな性格を象徴するのが、大童子の能芸術価値があるように思われる。（筆者は劇評家）

（三面へつづく）

その長所をもう少し説明しますと、能面は皆上半と下半と表情が別れております。女面は上半に愁いが含まれて、下半には微笑が持たせてあり

前にも申しました、伎楽や舞楽の面



写真説明

四月五日　伊勢神宮内苑舞台
伊勢神宮神楽祭金春流奉納能
「熊野」シテ　金春　信高
ワキ　高安　滋郎
ツレ　高安　守彦
「土蜘」シテ　本田　光洋
頼光　宇仁田吉助
ツレ　篠崎　勲
（撮影　高安勝久）

各地だより

金沢能楽会定例研究発表会
五月七日（日）金沢能楽堂
能　吉野静
シテ　石坂宇兵衛　ワキ　殿田保輔
能　山姥
シテ　角　嘉一　ワキ　泉　喜八

故西徹師追善能楽大会
五月十四日（日）
武生市中央公民館

演能案内

六月三日（土）
梅若六郎師
芸術院会員受賞記念
名古屋梅若会囃子会

六月四日（日）　午前十時始
名古屋能楽倶楽部囃子会
舞囃子
阿漕　植村真太郎
ほかに仕舞数番

六月五日（月）
熱田神宮大祭奉納能
第一部（午前十一時始）
囃子（角）　高砂　伊藤鉄之進　吉田定男　助川竜夫　田鍋惣一郎　小島鉄次郎
仕舞（番）　桜川前田昌広
仕舞　附子　井上祐一　佐藤友彦　井上松次郎
能（鬘）　鉢木　高安滋郎　河村総一郎　後藤孝一郎　筧三男
間　塚本秀雄　柴田初太郎
二番笛　野村又三郎　西村欽也
早打　大野弘之
後見　殿島修二　河村鉦二

第二部（午後二時始）
囃子（笛）　山姥　長田驍　吉田定男　野崎太郎　青木恒治　鬼頭季信
仕舞（鬘）　菊慈童　柴田収武
前ツレ　浜村園子
次女　戸田和子
前シテ　村瀬澄子
後シテ　衣斐正宣
能（金）　加茂　西村欽也　筧鉦一　高安勝久　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　佐藤卯三郎　藤田昭彦
間　葛原正枝
後見　倉本雅
仕舞　芥川　井上礼之助　佐藤秀雄
囃子（金）　猩々　河村総一郎　鬼頭八郎　田鍋洋一　藤田六郎兵衛
（終了四時三十分）

六月十日（土）　午前十一時始
和調会
舞囃子
高砂　和島富太郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　筧三男
湯谷　西川梅代　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
雲雀山　西川司女　筧鉦一　後藤孝一郎　筧三男
草紙洗小町　西川里喜寿　河村総一郎　後藤孝一郎　筧三男
大刀持　西川司女
胡蝶　西川梅代
頼光　西川長寿
西川司車

宮殿神楽
熱田能

能の方が原典であるから、舞踊の方が原典にどんなふうに即離するかを、ながめてみたいことにほかならない。

（私が観能「二面よりのつづき」）

の面、黒がしらである。しかし私が気になったのは、かしらの前を剪りそろえないで、弱法師みたいに長く垂れさせていることだった。その方が童子の顔がよく見えないで、多少の妖気をただよわせる効果があるかもしれない。しかしかんじんの童子の稚気と大まかさを稀薄にしてしまう。

洗濯女（狂言方）に呼ばれて、前シテ（童子）が登場する。そのとき囃子を用いない。これは、いかにも気軽に、ヨイショと出てきたようで、童子の性格表現として、よく考えたものだと思う。私はここで、左右に二人の侍女（直面の子方）を出す演出をまづいミカド食堂で、一献一献、また一献と、かたむけてしまったのであった。

中日劇場の夜の部の時間にはまだあったものの、金春の権威づけられていいと思うのだ。（私は子方を従えた酒呑童子の写真をみている）

喜多長世の酒呑童子には、若さと張りがあっていいと思ったが、声質に威力が乏しいように感じた。酒に酔って奇妙なよろめき方をして臥床に入る中入のかたちはおもしろい。

この曲における狂言方は、チャンとした役になっていて、劇の進行をよく扶けている。茂山千之丞の強力、茂山正義の洗濯女、どちらもわるくないが、千之丞の声がキンキンと高すぎて、他との調和を破ること。正義の女が背が高く、色が黒く、からだの線れている幽玄のおもむきとはうらはらに、なぜこのヂヂイは、シオレて涙のなかに舞っている熊野のこころを汲んで、帰国をゆるさないんだ、女らしい美しさも可憐さもないことである。芝居でなし、踊りでもないから能狂言はこれでいいのだといふ理屈が、あるのであろうか。やはり能も総合芸術にはちがいないのだから、常識的なアンサンブルだけは、心して構造すべきだと、私は思うのだが。

後段の鬼退治は、バタバタしてあわただしい。「頼光保昌綱金時貞光秀武独武者」といった面々が、勲章の一つにもありつこうと、ご馳走をしてくれたお人好しの酒呑童子めがけて、「あますな洩すな攻めよや攻めよ」と襲いかかり、酒呑童子が打合ひの舞バタラキ、ワキ頼光との一騎討見車の道中も見た。正先で観世音に祈誓をこめる可憐さも見た。帰国を許されて、まず観世音に合掌し、これまでと別人のようにいそいそと明るさがある。

ここんところは、私が思うには、近世的なアクションであって、室町時代のハタラキの型そのままではないのではないか。しかし、所詮は歌舞伎以前の所産に相違ないから、歌舞伎の殺陣美には追っつけず、バタバタしたところで、詩情も幽玄も吹っとんでしまうばかりである。私がこころよくうけとめたのは、壮絶雄渾なる四拍子の〝はたらき振り〟だけだ。能のハタラキでなくて、四拍子のハタラキが、私をたのしませてくれた。

この後段では、「稲妻震動おびただし」で引廻しが外され、伏している後シテ鬼神が「情なしとよ客僧たち。偽りあらじと云ひつるに。鬼神に横道なきものを」と、敵の不意討にたいして恨みの泣きごとを謡ひだすところが、なんともおもしろい。

結局は、やはり、後シテのことを仰々しくいわれるが、道成寺でも黒塚でもおなじことで、前シテのくだりに格段粗大、磊落な好人物である。道に迷ったといって、餘人の来るはずのない丹波の山奥の山砦にやってきた頼光、保昌たち七十余人の山伏、すなわの能芸微伝者がおるよう思はれる。

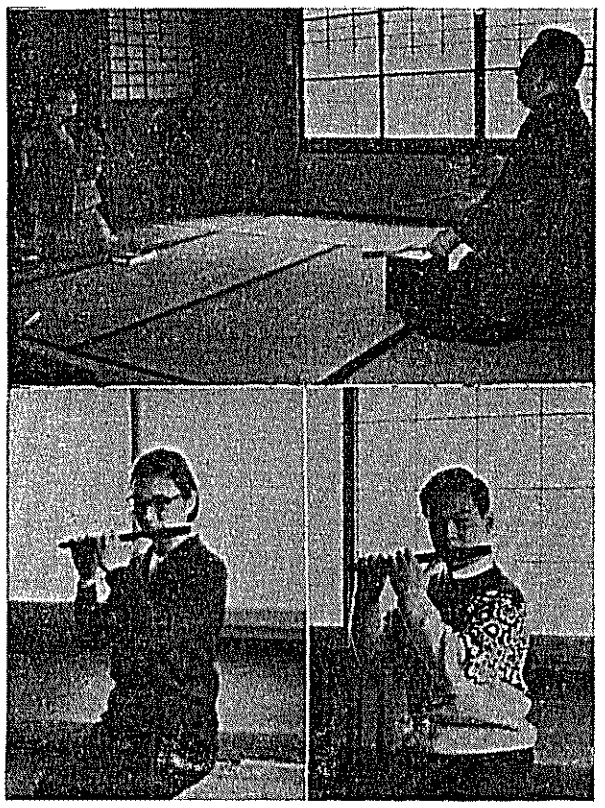
（筆者は劇評家）

稽古場のぞ記 第四回

藤田流　藤田六郎兵衛師宅

笛方の家元たる藤田師宅にお稽古を拝見しました。師の指導に当っておられる、竜吟会は古い歴史があり、多数の会員を擁しておられる。職分の人々は別として、お素人の方々にも随分年功を積んでおられる方が多く、戸田和子さんなど古い方の代表ではないでしょうか。奥田敏子さんも古い方で五年余とか、初めは笛の事は不案内の為に、今はお嫁に行かれたお嬢さん同道でお稽古に通われたそうです。写真の鹿取さん親子もお嬢さんの清子さんは、笛の音色に何んとも云えない愛着を感じ、玄人になる可く始めて三年余、内弟子として毎日通いの稽古についておられ、舞台での師の後見は必ず勤めるという熱心さで、最近は只ぼんやりと後見していてもとい うので師の能の役の曲を稽古して戴いて後見させて貰っていますとのこと、お母さんの鹿取文子さんも先年半蔀のお能を舞われたときやはり笛が充分でないとどうも自信を持って舞えないからとて一年余のお稽古ですが仲々に立派なもので、丁度太鼓なしの「楽」のお稽古中でした。師のお孫さん昭彦さんは師の後継者として幼少よりお稽古を始められ、今中学二年生だが、大したもの、やはり師の血の出るようなはげしいお稽古によく耐えて行かれる努力はなみなみのことではないその熱情に感動させられた。既に初能に驚、乱などの大曲をつとめ、将来への足固め充分で、藤田家もいよいよ万々歳と同慶の至りで気づよく感じ、お稽古場を辞去しました。

（S・T生）



能と能面の話

（その三）

浅井宋観

前にも申しました、伎楽や舞楽の面は、いづれも笑いとか怒りとかの感情の最もはげしい頂点の、その瞬間の表情か、又は仏像のように全く静止した表情をとらえたものであります。ところが能楽はご承知のように長い演技で一時間も二時間も一つの木彫りの面で、喜悲哀楽を表現せねばなりませんから、この感情の頂点をとらえた、いわゆる行止りになっている極端な表情の面では使いものになりません。その一つ手前でふみとどまった、中間的の表情の面がほしいのです。それを生み出したのが、鎌倉時代から室町時代の能面作家。赤鶴（シャクヅル）・越智（オッチ）・竜右衛門（リウウエモン）・小牛（コウシ）・夜叉（ヤシャ）・文蔵（ブンゾウ）・その他の能面作家で、代表的な人は十六人あります。

然らばその中間表情とは何かといいますと、前にも申しました、笑いでもなく、悲しみでもない、その双方の一歩手前で踏みとどまった面であります。よくご婦人で少し固い表情の美人を能面のような顔だといいますが、それはこの踏止まった点の表情で固く見えるのであります。この能面をいかに活用するかが演者の力でありましてその技量によって、この一つの面を悲しみとも見せ、又喜びとも見せられるように工夫されたのがこの能面の一大長所なのであります。

その長所をもう少し説明しますと、能面は皆上半と下半と表情が別れております。女面は上半に愁いが含まれて、下半には微笑が持たせてあります。演者が愁いを強調したい場合には面をうつむけつつ、下半をうしろへ引いて微笑している部分の存在を弱め、そして上半の愁いの部分を前へ出して、悲しみの表情を強調します。又その反対に喜びを表現したい場合には、面を心持仰向けて、微笑している下半を前へ出して、喜びと明朗さを表現するように作られてあります。

こうした中間表情の構成は、いづれの面にも共通しておりまして、男面には上半に動きがあれば、下半に静があり、又強い面ですと、上半に怒りがあれば、下半には薄トボケたようなところがあってその曲それぞれの複雑な変化を表現しうるように工夫されてあります。そして、なお陰影をうまく活用出来るようにしてあることも見のがせません。面の目、鼻、口のあたりの陰、又は眉筋の溝、頬のあたりの窩み、等が作ってありまして、面をうつむけたときには、それに陰影が宿ってその窩みが一層深く見えて憂愁の感を深くします。また仰向けたときは、その窩みに光が宿って浅く見えて、朗らかさを想わせる表現が出来ることになっております。

然しこの光りの表現は、能楽堂でないと充分な効果は現われません。

優れたる演者の芸の力によって面が躍動し、木彫りの面に血が通って、その真価を表わすのであります。ではこの辺で終りとします。（終）

（筆者は能楽愛好者）

（三面へつづく）

り、することが大まかで、長者のふうがある。このシテの、こだわりのない大まかな性格を象徴するのが、大童子

和調会
高砂　和島富太郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　笠三男
湯谷　西川梅代　笠後藤孝一郎　鉱一藤田六郎兵衛

雲雀山　西川司女　後藤孝一郎　笠三男
草紙洗小町　西川里喜寿　河村総一郎　後藤孝一郎　笠三男

六月十一日（日）午前十一時始
青陽会
土蜘蛛　高安滋郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
他に仕舞数番あり

六月十八日（日）正午始
観世会
清経　西村欽也　笠福井啓次郎　鉱一鬼頭季信
小塩　西村弘敬　吉田定男　田鍋惣太郎　鬼頭八郎　小島鉄次郎
磁石　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山正義
小鍛治　高安滋郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
（有料）

六月廿五日（日）正午始
宝生会
杜若　西村弘敬　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
井礒　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
鞍馬天狗　高安滋郎　笠鉱一　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（有料）

六月十一日（日）午前十一時始
青陽会
草紙洗小町　西川司女　後藤孝一郎　笠三男
土蜘蛛　高安滋郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
他に仕舞数番あり

六月十八日（日）正午始
観世会
清経　西村欽也　笠福井啓次郎　鉱一鬼頭季信
小塩　西村弘敬　吉田定男　田鍋惣太郎　鬼頭八郎　小島鉄次郎
磁石　茂山千五郎　茂山千之丞　茂山正義
小鍛治　高安滋郎　河村総一郎　鬼頭喜太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
（有料）

六月廿五日（日）正午始
宝生会
杜若　西村弘敬　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
井礒　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
鞍馬天狗　高安滋郎　笠鉱一　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
（有料）

名古屋能楽大観

（その五）

西村弘敬

前号の中に大正十二年四月能楽協会主催の五流能が皇族のご不幸の為、翌日の能を中止した事について現今の人々では定めし不思議の感を抱かれる事と思われるが、その当時は世間一般には皇室至上主義の思想で、殊に陸海軍人などはいやしくも皇室の事を口にする場合は一々不動の姿勢を執るという位であった。この時の能楽協会の会長は松平頼寿伯爵で、この能の為に名古屋へ来て居られ俄に此の大変の報を聞かれ其の立場上から皇室へ対する遺慮の為翌日の能を中止せよと命ぜられ、誠に止むを得ず中止した次第であった。

さて昭和六年に布池町に能楽堂が竣成以来、此の舞台は凡ての点に申分なく一般にも好評で各種の演能会が続々発生して盛に利用されて居たところ大東亜戦争の為昭和二十年三月十八日の空襲にて遂に全焼し一切皆無となった。

其後世間も追々復興の気運に向い能楽も順次復活せんとするも何分にも舞台焼失の為適当の場所が無く或は学校の講堂やら商工館ホール、劇場御園座とか松坂屋のホールなどと転々十カ年程の間は苦労に苦労を重ねて仮舞台の能を致してきた。

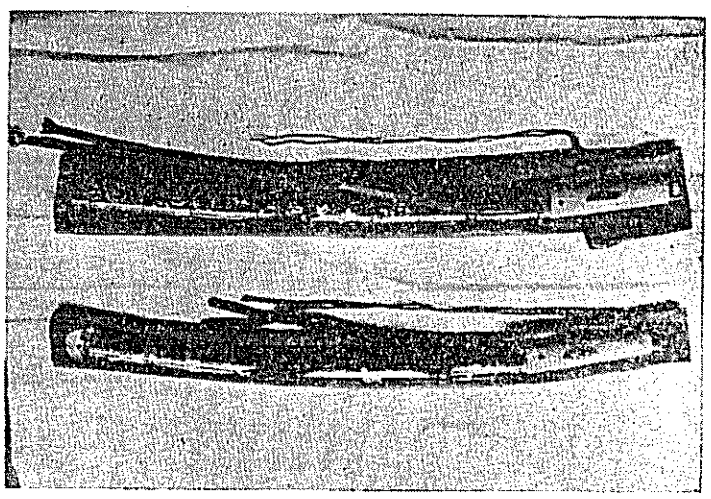
昭和三十年に現在の能楽殿が出来上った。これは社団法人名古屋能楽会を中心として広く能楽愛好者に呼び掛け資金の募金を得て建設せられ、以前の布池町にあったものよりも設備万端に一層充実せられ殆ど申し分のない舞台となった。舞台抜きは昭和三十年十一月十七、十八両日、観世宝生、其他各家元を始め、東西楽師を集めて、立派に行なわれた。以来益々各派各会にて盛に利用せられて居る。

次に面装束について少々沿革を述べる。旧藩時代は無論のこと城内備付けの品を用いて居たが、明治になってからは、木下氏其他の諸家に所有するもので間に合せわて居たらしいが、何分にも数も少なく且つ粗末な品ばかりであったので、少し大きな能の際には徳川家へ願い出て拝借して居た。徳川家の品は流石大名家のものとて目の覚めるような立派な品ばかりであったが拝借するのはなかなかむつかしく、装束の出し入れなどには元のお役者である拙者の先代西村大蔵でなければ取扱い得なかった由である。

其後京都の東本願寺の整理に伴い能面装束類一式を、当地の関戸守彦氏が譲渡を受けられたので、以来これを借用して演能に用いて居た。大正時代になってから観世流柴田氏外有志の方々で面装束類の整備を始められ着々と充実せられて今では殆ど間に合う様になった。又脇方の方も順次装束の充実をして今日に至り大体間に合う様になって居る。狂言師の方は前々から共同社で保管して居る装束がありこれで間に合っている。

（おわり）

〔筆者は高安流〕



（写真説明）　西村家蔵小刀（享保十五年頃製）一七二五年頃高安宗家より拝領の品（特に下の小刀の目抜には高安家紋所三ツ巴が入っている）

5月の催能のしおり

宮殿神楽田熱能

五月三日（祭）午前十時半
也留舞会社中発表会
番組　数番
監吉　数番
其他仕舞

五月三日（祭）午後四時半始
第八回　狂言やるまい会
公演
人間国宝野村万蔵師を招き
監吉　数番
外一調等　（有料）

五月五日（祭）
巽会　社中能舞囃子会

五月七日（日）午前十時始
清韻会春季大会
第一部　御来場歓迎
舞囃子
素謡
独吟　あり
仕舞
第二部　午後二時始

（会員券一、〇〇〇円　学生券三〇〇円）
総　百万　中原泉　慈嘉夫　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛　殿島修二　大槻秀夫　西村欽也
監吉　寝音曲　井上松次郎　井上祐一　屋島康強　弱法師　大槻文蔵　笠之段　杉村竹翠　女郎花　殿島修二　殺生石　田村勇
総　山姥　水田大槻博　秀夫　高安勝久　立石滋郎　澄雄
白頭　長吹　笠田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　三男　杉村竹翠　田村勇
後見　附祝言
主催　清韻会

五月十三日（土）午前九時始
名古屋猶諷会春季大会
素謡　清経　井筒　他三番あり
舞囃子　熊野　高砂　野守　班女　三輪　紅葉狩急ノ舞　砧　玄象　海士　野守
仕舞　桜川　融　雨月　三輪　熊野　杜若　天鼓　羽衣　紅葉狩　舟弁慶　雲雀山
他三番程あり

五月十四日（日）
霞会舞囃子会

五月二十一日（日）
一謡会舞囃子会
総　夜討曽我　河村鉦二
その他舞囃子数番あり

五月二十八日（日）
壺泉会能
総　隅田川　泉嘉夫
その他狂言あり

◎五月のテレビ　ラジオ　案内

NHK　全国放送

○テレビ（教育）
▽三日（水）　午前九時～十時　能「土蜘」　午後三時半～四時　記録映画「毛越寺（もおうつじ）の延年」（カラー）
○ラジオ（第二）
▽七日（日）　午前八時～九時　謡曲　観世流「頼政」（観世元昭）
▽十四日（日）　午前八時～九時　謡曲　喜多流「雲雀山」（広島、大島久見）
▽二十一日（日）　宝生流「山姥」（武田光雲）
▽二十八日（日）　午前八時～九時　謡曲　金剛流「籠太鼓」（京都、豊嶋弥左ニ門）
▽七・十四・二十一・二十八日（日）　午前十一時～十二時　日本音楽道しるべ「獅子ものの系譜」（一～四、横道万里雄ほか）
※「能楽散歩」野村広二氏の寄稿は次号にさせて頂きます

催し案内

五月十四日（日）於泰雲寺
春の春栄会　二井社中
素謡十五番

五月十一日（日）　午前九時半始　於松岡旅館
金剛流春期謡曲囃子会
素謡・仕舞・舞囃子

六月十一日（日）　午前九時始　東海銀行主税町クラブ
故大鏡岩三郎氏追福
竹韻会素謡会
鳥越祥香　水野猛　小袖曽我清水克郎　百万安間増田昌子　幸子　三宅志づ　通小町矢田義雄　本多逸郎　野口清　近藤タニ　戸松功克　土蜘蛛佐伯好次郎　近藤勇　永田敏聖　卵丸神野道子　岩崎敏子　班女佐藤つる枝　大西智津子　山下エミ子　三宅志づ　隅田川杉村碧子　石榑悠峰　滝川一司　野口清　頼政大西鐘八郎　戸松六雄　定家加藤三奈　飯田悦子　天鼓小島とみる　松井サダ子　夕顔恒川松彦　松本顕一　羽衣近藤タニ　榊原浅男　杜若角野志げ子　角野博久　朝長戸松利作　内田健児　矢田義雄　融
弱法師鷺坂幽美子　鷺坂信子　雲林院恒川志やう　角南智枝　宮部保良　鷺坂章
総　砧　近藤鉦治　宮部保長
仕舞　鶴亀　宮部保長　網之段　山下エミ子　桜川小島とみる　花月奥田敏子　笠之段増田保雄　玉之段本多逸郎　嵐山滝川一司
後見　花筐　杉村竹翠　田鍋惣一郎

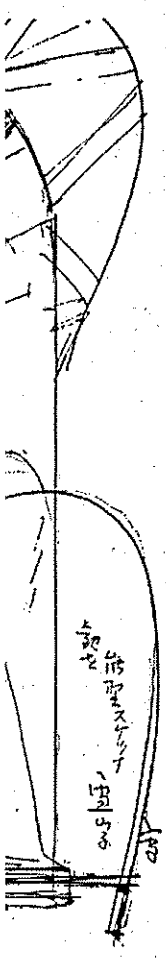
名古屋
亀末漬
中区錦3丁目14—5　962—3831（代）

観世流・金剛流
宗家本発行元
合資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2—1　電話(291)2488—9・振替東京3552
京都市中京区二条通烏丸東入　電話(23)1990・振替京都113

サンヒ
春の味　アメハマ
アメハマ製菓株式会社
名古屋市西区新道町4の11
電話（代）571—1968

能楽レコードの店
納屋橋
日本楽器レコード売場
電話（201）5141（代）
能楽名盤会レコード、各種レコード
豊富な在庫　静かな雰囲気

月一回発行）
の友社
5-10（花木ビル内）
231-6727・2891
年　200円
年　380円
20円
能の有料会員券は
せ願います。
愛好者のよき伴侶
名古屋商工会議所
会頭　鈴木亨市



↘かげをすっかりなくした痩女の面をうつむけて、しおしおと、である。

「今は火宅に帰らんと」と、暗黒の中に求塚を求めて、塚に入った菟名日乙女の亡魂は成仏したのであろうか。私は、痩女のオモテをいたわしく、気がかりにしてトメをきいたのであるが、成仏しようがせまいが、そんなことは作者

能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビル内）
電話（211）1019・1974（231）6727・289
購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円
一部　20円
能楽の友紙のご購読、催能の有料会員券
熱田神宮能楽殿へお問合せ願います。

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　鬼頭喜太郎　内藤泰二
井上松次郎　佐藤卯三郎　野村又三郎
梅田邦久　杉村竹翠　花木徳三郎
大塚一二　吉田定男　林甲子夫
長田驍　高安滋郎　久田秀雄
加野昭二郎　田鍋惣一郎　福井啓次郎
筧三男　戸田秀雄　二井栄逸
鬼頭五朗　殿島修二　増田一雄

編集同人は逐次発表致します。

市民の納涼能楽の夕べ
第二回「薪（たきぎ）能（のう）」迫る
8月5日若宮八幡社で

夏をいろどる「市民の納涼能楽の夕べ」として、大きな関心をあつめる「薪能」（第二回）がきたる八月五日、名古屋市の総鎮守、若宮八幡社境内で催される。

薪能は神事能としてその由緒は古く、最も伝統のあるものとしては、奈良の興福寺の薪能があり、その荘重、幽玄さは能の真髄を十二分にいかしたものである。また京都の平安神宮の薪能、大阪住吉神社の薪能、さらに東京では明治神宮の薪能が、最もよく知られている。

名古屋においては市民納涼能楽の夕べとして、昨年はじめて「薪能」が催され、千五百人を超える愛好者ならびに一般市民が能楽を楽しみ、古典芸能に融けこむ端緒となった。

ことし第二回を迎えた「薪能」は、能楽協会名古屋支部能楽師一同、能楽愛好者、その他関係各方面の有志によって熱意ある準備がすすめられている。

演能番組は、能・宝生流「小袖曽我」観世流「胡蝶」金剛流「土蜘蛛」の三番、舞囃子喜多流「西王母」一調「小督」狂舞・水無月祓、野宮、小鍛冶、鵜、浮舟、班女、善界、玉ノ段、鵜ノ段、狂言には「雷」の上演が予定されている。

とくに薪能の圧巻として、盛夏の夜を彩る火入れ式が盛大に催され、花やかなうちにも荘厳な名古屋市民夏の行事として恒例となった「薪能」への期待は大きく、東西からも注目されている。

なお本紙では「薪能」についての詳報を逐次お知らせする予定である。

薪能について

能楽演出法の一つであり、その起源は「教訓抄」にみえている奈良の興福寺東西両金堂での「薪宴」（たきぎのえん）や「南都坊目遺考」にある同じ金堂での「献薪」などであるといわれているが確実なことははっきりしていない。

この特殊能は、興福寺の南大門の芝の上で、毎年二月に七日間開催された春日神社の神事能で、それには、観世、金春、宝生、金剛と大和申楽四座の太夫が勤め、江戸時代まで続いた。

世阿弥の「申楽談議」に「南都薪の御神事は、昔は時節定まらず、夏などもありしや。されば、合ふ申楽なかりし程に、清次を召されて、糾明あるべき由ありしとき子細を申す。其時、げにも申楽勘忍不便として二月になさる云々……」とあり、再び二月に行なわれたものである。

明治維新以後長らく廃絶していたが、近年有志の人々によって復活し、京都、東京、大阪でそれぞれ奉納されている。

名古屋の薪能も戦後熱田神宮で催されたこともあり、昨年から各界の熱意が実って行なわれるようになった。【しゃしん＝盛大に行なわれた第一回薪能「小督」】

新たに五氏が指定
中部能楽界無形文化財保持者

中部地区能楽界の無形文化財保持者として、五月三十日付で文部省から次の五氏が指定された。

シテ方観世流柴田初太郎師、小鼓方田鍋惣一郎師、太鼓鬼頭八郎師、狂言方和泉流野村又三郎師、井上松次郎師。

なお去る昭和四十年に、中部地区では、小鼓方田鍋惣太郎師、笛方藤田六郎兵衛師、ワキ方高安滋郎師が指定され、今回の五名を加えて八名となった。

「杜若のスケッチ」

仙田雪仙子画

「杜若」は三番目ものの代表的なもので、しばしば演能される曲、一般にも素謡でよく謡われて最も親しまれている。遺跡が愛知県碧海郡知立町大字八橋にある名所で、愛知県ではこれを県の花としている。杜若に関する詳しいことが能の雑誌「観世」四月号に大々的に取り上げられているので、参考とされたい。

なお「杜若」は、かっては愛知県の職員のバッチとしてつかわれた時もあり、愛知県としては想い出のふかい花で、今回のスケッチとして仙田雪山子師がとくにご寄稿をいただいたことは誠に感謝にたえないと編集同人は喜んでおります。

日本能楽界の発展と仙田雪山子師のご健康を心からお祈りいたします。

演能案内

七月二日（日）午後一時始

能楽殿神宮
熱田能

故西尾孫太郎氏
故金森準三氏
故小島鉄次郎氏
追善能

能 海人	足立学 / 辰巳孝
囃子	西村欽也 / 高安勝久
笛	吉田定男 / 福井啓次郎
囃子 竜田	佐藤友彦 / 筧鉱一 / 田鍋洋一
笛	長田・驍
囃子	藤野崎太郎 / 田中昭彦
若囃子 盤渉楽	河村総一郎 / 田鍋惣一郎
囃子	鬼頭喜太郎 / 藤田六郎兵衛
囃子 羽衣	筧鉱一 / 田鍋洋一
笛	山田仁三郎
囃子	山口義郎 / 筧三男
囃子 野守	内藤泰二
笛	吉田定男 / 青木恒治
囃子	助川竜夫 / 大森英三郎
狂言 放下僧	金春信高
狂言 砧	柴田初太郎
一調 橋弁慶	辰巳孝
囃子	谷口喜代三
囃子 紅葉狩 急ノ舞	本田光洋
囃子	筧鉱一 / 田鍋惣太郎
囃子	筧三男
狂言 石神	井上礼之助
囃子	佐藤秀雄
囃子 鵜飼	高安滋郎
笛	立石澄雄
囃子	河村総一郎 / 後藤孝一郎
笛	鬼頭八郎 / 鬼頭季信
囃子	佐藤卯三郎

高橋静夫

会費　指定席　一〇〇〇円
自由席　七〇〇円

主催　調友会

七月八日（火）午後五時始

朝日狂言会

孫聟	佐藤卯三郎
お茶の水	茂山忠三郎
囃子 早舞	河村総一郎 / 田鍋惣一郎
囃子 朝比奈	佐藤秀雄 / 井上礼之助
狂言小舞 蛸 宇治の晒	野村又三郎 / 河村丘造
縄綯	茂山千作
煎物	和泉保之 / 三宅右近
地謡	井上松次郎 / 佐藤友彦 / 井上義次
地謡	大野弘之 / 野村又三郎
地謡	佐藤卯三郎 / 井上松次郎 / 佐藤友彦
地謡	茂山忠三郎 / 茂山正義
地謡	大野弘之 / 野村又三郎
地謡	佐藤友彦 / 井上礼之助
地謡	井上祐一 / 井上松次郎

（有料）

七月十六日（日）

橋岡社中
淡交会錬成会

人間国宝 野村万蔵師

《狂言を語る》

今春狂言方から人間国宝として指定された野村万蔵師が五月三日熱田神宮能楽殿で狂言「川上」を野村又三郎師と演じられた。本紙花木編集同人がお訪ねして約一時間半にわたって「狂言」について語って頂いた。以下その要点である。

〝能楽本来の精神に立ちかえるべきだ〟と語る野村万蔵師　右は花木同人

問　先生のご出身は金沢と承っておりますが、野村家を継がれまして何代目になりますか……。

答　私で六代目です。初舞台は六才のときでした。

問　失礼ですが現在のお年は。

答　明治三十一年七月生れですから、この七月で満六十九才。むかし流にいえば七十才で、古稀というわけです。ですからこの秋に古稀の祝いをやってくれるとのことです。

問　狂言の装束、小道具などは戦争中のときにそ間でもなさいましたか……。

答　そ間はある一部です。とにかく空襲のさかんな時分でも、お能をやっていましたから全部を間出来なかったのです。そんなことではんのいらないものだけをそ間しましたのが神奈川県の下曽我と鎌倉と新潟と三カ所に散らばしておいたのですが、それはみんな助かりましたが宅にあったものだけが全部焼けました。それですから結局はふだん使わないものが残ったわけで、ふだん入用のものはみんな焼けてしまった勘定です。

名古屋の山脇和泉は私の先祖が加賀の前田家に抱えられたのと同じようなわけです。その時代に五代目山脇元宣（和泉守、尾張で百石）の名声がかなりひびいた為に尾張藩がかかえたわけです。

狂言の生立ちは古い

問　先生は面（オモテ）を打たれると聞いておりますが、今でも打たれますか……。

答　ええ、打っております。今日もね、昨日の夕方こちらへ来まして、今日の会に時間がありすぎるというので木を探そうと思ってきてるのですが、今朝から一まわり回ってきましたが、思わしいものがなくて、今回は断念してひきあげるわけですが、ともかくも私は次々と打つわけにはいかないし面を打つ事は下手なんだけれど、古くからやっているので名前が通っているんです。そんなわけですから私の宿望として自分の関係のある神社、仏閣へ奉納し、又親しいお能のお家に一つ位駄作を残そうと野心をもっているのです。そんなわけでやり出したのですが、今はなんといっても狂言がえらく盛んで、打っている時間がなく、そういう一つの悩みがありますが、夏になればひまにもなりますからピッチをあげようと思っております。

問　狂言の成立ちと狂言の語意はどこから出ているでしょうか……。

答　研究書に出ていますので、それをひもとけば出ていますが、正確には誰も言えない。それはお能の出来る前にすでに一つのものがあった。それは一つの劇という

ものに構成されたものでなくて、狂言の前身、一つのユーモアをおりこんでお互いが駄酒落をとばしたり、簡単にいえば冗談をいって人を笑わすといったものであったでしょう。それが世阿弥の時に一つの劇になった。それが今日までずっと続いてきている。したがって、これは誰がつくったという作者がいない。我々がつくっているわけです。昔の役者がこれをこう変えてやろうというようにして、だんだん練った。

お能のように誰それの作ということはない。なかにはいわれているものもあるが、はなはだあやしいものです。そのようにばやけている。狂言の源というものは、ですから、いかなる学者でも狂言の歴史的なことを断言する人はいない。というのは、能より古いことは確かなのです。

狂言の分類について

問　狂言の分類法について、能だと神、男、女、狂、鬼と申しますが、狂言の分類は若干違いがあると思いますが……。

答　むろんありますね。神（シン）ということは神（カミ）ですから、狂言でも神様のものは、脇狂言といっていちばん始めにやるものです。それから神だけでなくて一つの祝言物、おめでたいものをやる。大名に類するもの、百姓に類するもの、そういうものは大体脇狂言といわれているから、能の方の神に位するものです。すなわちお目出度いという意味です。

百姓物は何故おめでたいかというと、今出た「佐渡狐」は脇狂言とはいえないんです。あれはおめでたさというものが全然ない、特殊なものです。その次に太郎冠者、女物、坊主物、山伏物、鬼物などがありまして、鬼は能にもありますが、お能のようにきちんとした組み立てはない。しょっぱなは脇狂言と称するものがありますが、とめは鬼とか、大勢出て賑やかにおわる。つまりはじめがおめでたくはじまって、終りがめでたく終る。

そういう建て前で昔はやっていた。その間には雑狂言が入っていた。雑狂言というのは今の「棒縛」などがそうです。配列からしますと、大名が出たら太郎冠者が出、女が出て最後に鬼がでる。そういう組み合わせをするわけです。

その時々によって、前後は大体決まっているが真中がいろいろに動きます。たとえば神様が初番に出てしまった。そうすると神に関するものは真中にはおけないので、同じものを組合せない融通性が狂言に多い。

お能のようにキチンと修羅物は二番目にやるが、女（かつら）物が三番目とかいうふうには決っていないのです。

能と狂言とのちがい

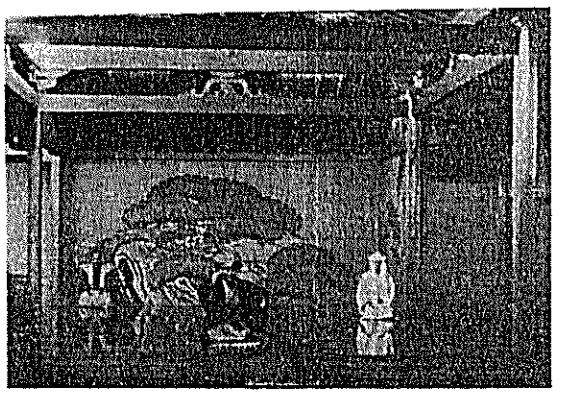
問　狂言のなかに能をもじったものがあると聞いておりますが……。

答　ありますね。曲目は十七番位で「通円」などは代表的なものでしょう。又頼政もそっくりにもじってありますからね。

問　狂言小舞と能の仕舞の違いを聞かせていただけませんか。

答　狂言小舞は外へむけていき、能の仕舞は自己の心の内へとっていくのが本当でしょう。

問　能装束は何んとなくけんらんを感じ、狂言装束は質素な感じ



狂言「川　上」　野村万蔵・野村又三郎両師

をさせますが……。

答　それは当然でしょう。能を引立せるには、狂言の装束は立派ではいけません。

問　狂言と能の発声法は違うように思いますが……。

答　一口に言えば、能の発声法は準備して出す声です。「ア」なら「ア」と言うことばをいわん為に準備をする。「アー」と。

ところが狂言は突然飛出す「アッ」。それがセリフと節との違いです。狂言はセリフ劇ですからそういうことが起ってくる。

たとえば笑う場合にね。準備して「ハーッ、ハーッ」と笑わない。「ハッ、ハッ」とすぐ飛び出す。笑いというものはそうなんです。おかしい場合、こうやって話していても笑いというものは突発的なものです。大部分は発声が違って、突如として出るわけです。

問　間狂言について。

答　シテ方のやりいいようにするのが雛子方、ワキ方なり、又狂言方なりの一つ役目である。シテというものを補佐する。ですから自分の芸が飛び出さないように、自分の芸を内輪にやっておいて、シテを引き立たせるという力でなければ本当でない。ですから中々難しいわけです。

問　曲目は大体狂言だけで何番ぐらいあるのが本当でしょうか……。

答　本当、ウソということとなると中々大変な問題になります。昔は沢山あったのです。で、和泉流は私と弟（注・三宅藤九郎師）が決めたんです、これを止めちゃうとか……。だから時代時代によってそういうことをやっているから、本当かウソかと言うことは言えないんです。

昔は時代時代の権力者が決める。これはつまらないからやめちゃうということが起きています。

現在は二百五十四番です。私どもの流儀は二百五十四番というものは弟と二人で相談して決めた数ですからね、もとは沢山あったのです。追加することはないですよ。減らすことの方が多いです。

大蔵流はもっと少ない。（註・神物六番、果報物五番、百姓物九番、大名物十五番、太郎冠者物四十八番、算物二十番、女物三十九番、鬼物十一番、山伏物九番、出家物三十八番、座頭物七番、雑狂言物四十余番）

問　「野村万蔵聞書」という本は、いつ発行されましたか。

答　それは空では覚えておりませんが、相当前のものですよ。私の弟子に古川久という人があって、これは今、東京女子大学の先生ですが、この人が私の狂言の弟子で、私の芸談を筆記していて、その人が出したのです。又改造という雑誌がありまして、それに出したのを聞き書としてまとめたわけです。

狂言の進むべき道

問　今後狂言の道がどういう風に進むべきが本当であるか、現在の寄席ブームといわれますが、それと比較した場合、どうお考えになりますか。

答　私の場合の「狂言の道」は私がつけた題名でないので、狂言の道というといかにもえらそうな名前ですがね。ある習いごとを、又許しものを秘密にしていたものを少し公開し、それから随筆めいたものをいろいろ加味したものですが、最後に私の父の聞き書があるんです。今度は出版元で父のものを抜いて、それから、私が随筆をあらゆる方面に書いたものをまとめて、入れようという話の最中で、この夏に原稿がまとまって狂言の道の再製版が出来るわけです。又この「狂言の道」という題名は私がつけたものでないし名前が内容にマッチしていないきらいがありますが、唯特色とするところは、習い事のある程度の公開であり、公表ですね。こういう意味があるから、むづかしいだとか、一つの説明的な書物であったということです。

これからの狂言はどうなるか、どういう風にしたいかということは勿論私も考えてはいますが、現在はなるほど能や狂言が盛んである。しかしそのことは手放しで喜べるものでないわけです。

つまりそれは内容が立派であって、かつ盛んである。いわゆる健康的な隆昌は非常にいいことであるけれども、不健康的な隆昌は、手放しに喜ぶべきでない。私どもは今日のような時代になってきたことと、むかしの、それこそ食べるに困っていたことをいろいろ回顧しますと、実際感無量で、私の先代あたりの苦労というものに対し感謝にたえない気持ちをもっているわけなんですが、ところでどうかすると、盛んになってるということをはき違えて、自分たちがえらいからとかというように考えて少しなれている。盛んになれている。ですから結局は自分の芸や力を考えないで、いつでもこんなものであるという風に、平易に、安易に考えるという傾向があるので、それは実になさけないことである。

世阿弥がいった「初心忘るべからず」という格言がありますが、これを今さらにこの機会に銘記して、能楽本来の精神に立ち帰るべきであるというのが私の持論なんです。本来の精神というのは能役者しかない精神があるのです。

【3面七段目に続く】

散歩楽

国一見の僧にて候／われこの程は都に候いて／洛陽の寺社残りなく

川は大阪朝日能、嚴は宝町です。「のうのう旅人／あれ御覧ぜよ／名にも似ず／月こそ出づれ朝日山／月こそ出づれ朝日山／山吹の瀬に影見えて」、前シテの老人と平

能楽散歩

頼政

野村広二

国一見の僧にて候／われこの程は都に候いて／洛陽の寺社残りなく拝み廻りて候／またこれより南都に云々」と、「頼政」のワキ僧は語りはじめます。二番目物、いいかえれば修羅物のワキ僧は、東国、西国、都方、また木曽路の僧もあれば、敵方（敦盛の蓮生法師）もいます。源氏、平家の身内の武士もいるはずです。さてこのワキ僧は法華経をよんだようです。

修羅物は「田村」をのぞけば、あとは平家の公達、源氏の武者がシテで、経政、忠度、清経、実盛、敦盛、朝長、屋島、箙など、「それぞれに」、佳さがあります。巴という女性の曲もあります。みな練りに練った味です。頼政もそうです。故桜間弓川氏や現金剛巌氏の

川は大阪朝日能、巌は室町です。

「のうのう旅人／あれ御覧ぜよ／名にも似ず／月こそ出づれ朝日山／月こそ出づれ朝日山／山吹の瀬に影見えて」、前シテの老人と平等院の扇の芝、「夢の浮世の中宿の」で姿を消す。間狂言。「血は涿鹿の河となって／紅波楯を流し／白刃骨を砕く／世を宇治川の網代の波／あら闇浮恋しや」と後シテの頼政は、法体に甲ちゅう姿でワキに現われる。カヅラ桶に腰をかける。

それからが日本音楽（芸能）の「語り物」。「味方には筒井の浄妙／一来法師」のあたりで、こちらも一息入れる。いや待ってましたときが期待される。「白波に／ざっざっと／打ち入りて／浮く所をば岩ありと知るべし／弱き馬をば下手に立てて／強きに水を／防がせよ／流れん云々」、そうして、戦い利あらず、場面がかわって、敗北と自害と後生を頼む場景で終ります。

頼政には、カケリもなければ、切りの修羅道の斗いもありません、それでいて、特色のある演出をとりあげています。さて、頼政は、歌もよめれば、源氏の名高い武将、ぬえ退治もした勇士。小さいときから、源平合戦記で、あこがれの一つの的でした。

ときどき、世間体にとらわれた武士と描かれて、なる程とおもっても、やはり昔のままの頼政で、それが、能の頼政と二重写しになって、いつも大きな共感をよびま

盛とはちがった、別の叙事詩の世界です。曲もよいが、日本音楽（芸能）や文学の一つの流れ、語り物に、小さいときからなじんだせいもあることはまちがいありません。

「頼政」の作者は世阿弥です。頼政にやられる「鵺」（ぬえ）もそうです。四、五、六月は旅行期です。能のふるさとをたづねるのも一興ではありませんか。

「源太夫」「杜若」「朝長」「阿漕」「絵馬」など。足をのばして「道成寺」。京都から、宇治をへて、奈良、春日、興福寺……。

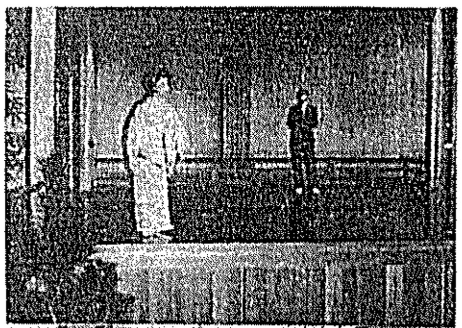
そして大和を歩くのもよい思案かとおもいます。平等院の宇治でありますが、頼政の宇治。もう一度「月こそ出づれ朝日山／山吹の瀬に影見えて」のあたりをよんでみましょう。

お断り。筆者の都合で「杜若」「井筒」はまたの機会にさせていただきます。

稽古場のぞ記（第五回）

宝生流　辰己孝師

辰己孝師のお稽古を、熱田神宮能楽殿におたずねして見ました。名古屋巽師の指導して居られる、名古屋巽会には、古参株に戸田あささん、錦見静子さん、たちに引続き戸田和子さん、寺西智恵さん、浜村園子さん、葛原正枝さん、たちの中堅どころと若手の人達に、玉井弘子さんを初め小川道子さん、安田俊子さん、と続々と名手ぞろいで、全国的に有名な師の熱心な稽古に依つて月毎に目立つて上達されるのには驚かされた。師の稽古の為の東奔西走は全国でも誰しらぬ者のない程有名で、今日名古屋に居られたと思つたら、翌日は博多に又その翌日は金沢に、といつた具合によく走り廻られる。師の精力には何か秘密があるのではないかと或人が話して居た事を聞いた程である。



師の指導の良さと云うか、人扱いのうまさと云うか、尤も師の永年の蓄積された芸の力に依る事は勿論だが、何となく師の指導の中に人間関係的の温かさを、ほのぼのと感じられるのが師の稽古の厳しさにもかゝわらず、お弟子さん達が苦痛に感じられないのが判るような気がする。

丁度玉井弘子さんの羽衣のお稽古中で何度も何度も繰り返してのお稽古、される方も、する方もどうも大変だと感じ入った次第です。日比野貞子さんのお仕舞の稽古、三輪のキリなどやはり幾度も幾度も、直してはのお稽古に見て居るこちらが、どうも余り見ていて悪い様な気持ちになります、然し同門の人達はそのお稽古を熱心に見学して居られる姿に、芸の厳しさを身に泌みて感じ入りました。

（T生）

つくりものについて

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

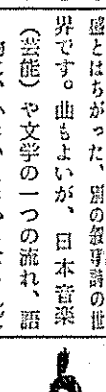
能の作りものを大別すると、掘道具と手道具とになるが、今回は掘道具を主体として書きますことをあらかじめお含み願います。

掘道具は歌舞伎の大道具に当たり、手道具は小道具に当たると思っております。

現在、名古屋の熱田神宮能楽殿の休憩室に能楽道具用作りの模型（二十分の一）寄贈、太田一三、非売品として書いて約百種類以上が並べてあります。

その作り物を黙々として、一人で作つておられる姿を見た時、職人といえば職人には相違ありませんが、この人が倒れた時のことを考えられねばならない……。

能楽界は常に楽師養成に勉められておられますが、作りものを作れる人の養成も大切ではないでせうか……。



如何に千両役者が一人で、舞台を踏んでも、芝居になりません。

作りものに対する苦言はこの程度にして話を本論に戻しますが、この種類を分けますとつぎのようになります。

（一畳台）（しめ張台）（牡丹）（立台）（菊立台）（燈明台）（松木立）（杉木立）（桜木立）（梅木立）（鉢木）（立花）（カッコ台）（鏡台）（機台）（井筒）（吊鐘）（蜘蛛巣塚）（岩）などと曲目によって分類して使われている。

作りものは、能の数日前から製作し、能がすめばすぐこはしてしまうのが原則である。

また流派により形もかなり変化があります。

作りものは、大体を竹でつくりそれに約四センチ巾の長い白布でまき、それに曲目によって、木の枝、花、萩柴、わら、板、紙絹、どんす等で飾るのであるが、釘を

には軽くなければならないとされております。

また作りものの寸法、大きさを完全に知つておられるのは、観世流故大槻十三師、金春流では故本田秀雄師、金剛流は豊島弥左衛門師、宝生流では宝生九郎師、喜多流で誰か知りません、なお脇方では西村弘敬師であります。

作りものは能舞台の陰の仕事であり、能、謡、囃子、狂言の稽古の精神と熱心と研究からくるものと同様であり、なんといっても、作りものは能を構成する一部分であることから、作りものを作る事が、一つの課題と思い書いた次第です。

（H生）

＝カットは「羽衣」伊勢関水氏画＝

◎六月のラジオFM案内　NHK

◎ラジオ（第二放送）

△四日（日）午前八時〜九時
謡曲　観世流「敦盛」（大阪、山本博之）

△十一日（日）午前八時〜九時
謡曲　宝生流「加茂」（田中幾之助）
喜多流「鵺」（友枝喜久夫）

△十八日（日）午前八時〜九時
謡曲　観世流「阿漕」（名古屋、シテ大槻秀夫、ワキ高安滋郎、地謡　泉嘉夫、小林三郎、杉村竹翠、殿島修二、笛　藤田六郎兵衛、小鼓　田鍋惣一郎、大鼓　河村総一郎、太鼓　鬼頭嘉太郎）

△二十五日（日）午前八時〜九時
謡曲　観世流「昭君」（梅若恭之）
狂言　和泉流「船渡聟」（野村万蔵）

△四・十一・十八・二十五日（日）
午後十一時〜十二時
日本音楽道しるべ「狂いものの系譜」（吉川英史ほか）

◎FM

△二十二日（木）午後九時十五分〜十時
ステレオ邦楽観賞　狂言、和泉流「音曲聟」（和泉保之）大蔵流「歌争」（大蔵弥太郎）

× × × ×

（番組の変ることがあります。ご了承ください）

地方だより

金沢能楽会定例研究発表会
昭和四十二年六月十一日
（第二日曜）午後一時始
於　金沢能楽堂

素謡　女郎花　シテ　西川きく　ワキ　糸川きみこ

能　忠度　シテ　島村巌　ワキ　亀原理

狂言　文荷　能村英立　畑中吉紘

能　船弁慶　子方　中村豊　後シテ　山田太佐久　前シテ　村井美智子　ワキ　殿田保輔

それがあったればこそ能というものが尊ばれたと私は思うのです。

急所をえぐる狂言

問　狂言には女物が多くて、非常に女性が強く出ているようですが……。

答　それは狂言はまともじゃ狂言にならない。いわゆる恐妻、カカア天下、そうでなきゃ狂言にならないですよ。柔順とか、しとやかでは……。だから坊主は無学、大名は馬鹿、馬鹿でないけれどおろかである。そういうような仕組みでなきゃ狂言にならない。

それだから狂言が盛んになってきているのでしょう。昔と同じだから今の「佐渡狐」にしても役人はワイロをとる。今だって役人はワイロをとる。三面記事でよくあるでしょう。「佐渡狐」が出来たからあるんですからね。（笑声）とにかく急所をえぐるようなものが狂言なんです。肺腑をえぐるような……、ぞくぞくとするような一つのいたいところをついているのが狂言ですね。

なにしろ狂言という芸は、自分はその道のものだけれども、よく出来ていると思いますよ。外国へいってもこんな芸術的なものありませんよ。だから外国へ行っても、もてるのは当り前ですよ。

自分たちの芸がうまいんでなくてね、狂言の芸質が良いんで、こんな良いものは世界に見当らないです。

問　衣裳は、能関係はきんらんどんすというか、きらびやかさ、狂言は綿類を主体として、質素に感じますが。

答　それはそうなくちゃならんと思いますね、お能を主体に、お能におとらないケンランたるものをつけては、お能をつぶすようなものです。お能を引立てなきゃならない。お能は立派なもので、狂言はなるべく簡素なものにする。能は歌劇でしょう、狂言は喜劇で、狂言は緊張した空気を緩和する役目を持っている。それだから能のはなやかという面をはなれて

しても解るような単純な筋のが狂言です。狂言は人間をついているんです。

問　先生は名古屋へはよくこられますか。

答　名古屋は家元がきているし、又三宅が来てますし、別にこないでも和泉流の人々が沢山いらっしゃるしいいで

今日は洋服できておりますが、海外へ行った場合には着物、袴、羽織をつけて通しました。年をとると足もとに下着がまきつくので洋服を着ているような訳です。

名古屋は芸にかけては、鑑賞眼が大きいというか、鋭いものがあるわけです。名古屋は芸の盛んな所だから芸道の人は名古屋はこわい所です。

問　尾張（州）は徳川ご三家の中で一人も徳川幕府の将軍を出しておりませんから少しひがみ根性がそうさしたのではないかと思っております。

答　私は加賀（金沢）の出身ですが、金沢はもっと排他性の強い所ですよ。

まことにおいそがしいところ、どうも長時間に亘って有難うございました。

おねがい

能楽の友紙は発刊以来半歳を迎え、能楽師各位、読者各位のご理解とご後援によって進んでまいりました。

きたる七月号、八月号には、暑中特集号を発刊いたす予定で準備をすすめておりますので、ご理解あるご支援を賜りたくおねがい申し上げます。

またこの機会に、皆様方のご協力とご賛同を得てどんどんご意見を拝聴し紙面に掲載し、ご叱声をいただいて逐次良い方に向かわせていくようご指導をお願いします。

（編集部）

名古屋に縁故のある謡

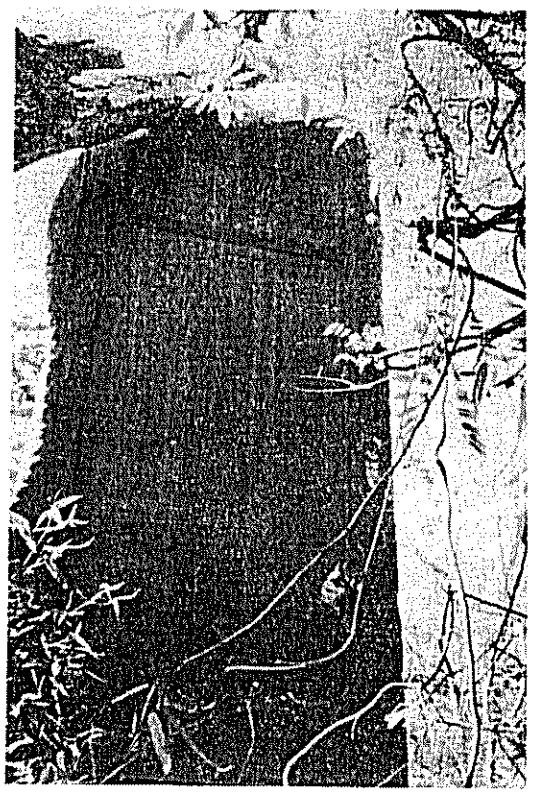
西村弘敬

名古屋の町は徳川家康が其子息義直の為に名古屋城を建てた際に出来た城下町であって、比較的新らしいので室町時代に出来た能や謡には取り入れられて居らぬは当然である、然し同じ市内の一部になる熱田は熱田神宮と共に古くからの土地で謡の中にも其地名は二出て来る。彼の盛久や景清の謡の中にもある。此の熱田に関係ある能で源太夫と云う曲があるが、此の曲は現今では金春流にのみあって、一両年以前に当地で上演せられた事がある。此の曲は脇能の一つで勅使が参詣に来たので源太夫の神が現われて神徳を語り舞楽を奏して勅使を慰めると云う筋である。此の源太夫の神は、その昔神代の時代に素佐之男尊が簸の川上の大蛇を退治に行った時に、脚摩乳（あしなづち）手摩乳（てなづち）老夫婦の娘稲田姫を妃とし父が源太夫と名を替え此の熱田に現われ東海道の旅人を守護して居た。その社殿は熱田神宮南参道の南方町中に有って上知我麻神社（かみちかま）と云って居たが区画整理にて移転せられて今は参道入口の両側になっている。

又これに関聯ある曲で氷上（ひがみ）といふ古曲があるが今は各流とも廃曲となって居る。此の曲も脇能で前の源太夫の曲と同様勅使参詣を取扱ったもので、此の社は市外大高町に有って氷上神社（ひがみ）といい素佐男尊の妃となった奇稲田姫を祀った熱田神宮の摂社である。

此の外に絃上の能に（観世は玄象）ある藤原の師長が流謫せられて居た配所の跡がある。師長卿は保元の乱の際に父頼長の関係にて土佐の国に流され其後許されて太政太臣迄昇進したが平清盛の為に尾張井戸田の里に再度流謫された。此の旧跡は名古屋市瑞穂区にあるが今も昔のまま山林のような森になって居り、入口に碑が有って師長の事跡が記されて居る。名古屋に縁故のある謡や能は外には余り見当らぬ様に思はれる。

【筆者は高安流】



【写真説明】藤原師長の遺跡についての記念碑で瑞穂運動場東口バス沼りの直ぐ北側の森の中に建てられている。

6月の催能のしおり

熱田神宮神楽殿

六月三日（土）
梅若六郎師
芸術院会員受賞記念
名古屋梅若会囃子会

六月四日（日）午前十時始
名古屋能楽倶楽部囃子会
阿漕　舞囃子　植村真太郎
はかに仕舞数番

六月五日（月）
熱田神宮大祭奉納能
第一部（午前十一時始）
囃子（地）高砂　伊藤鉄之進
仕舞（シテ）桜川　前田昌広
狂言　附子　井上祐一　佐藤友彦　井上松次郎
能　塚本　柴田初太郎　秀雄
囃子（地）鉢木　高安滋郎　西村鈴也
仕舞（シテ）野村又三郎　大野弘之　殿島修二　河村鉦二
早打　二番目
後見
第二部（午後二時始）
囃子（地）菊慈童　柴田敬武
仕舞（シテ）山姥　長田暁
能　実生　加茂　西村高安　欽也　勝久
仕舞（シテ）芥川　井上礼之助　佐藤秀雄
囃子（地）猩々　浜村園子　戸田和子　村瀬澄子　衣斐正宜
前ツレ　天女
後シテ
後見　佐藤卯三郎　葛原正枝　倉本雅
狂言　附子
六月十日（土）
午前十一時始
和調会
囃子　高砂　和島富太郎
湯谷　西川梅代
雲雀山　西川司女
草紙洗小町　西川理喜寿
太刀持　西川司女
箙　西川梅代
後見　西川長寿
能　土蜘蛛　高安滋郎
囃子　野村又三郎
六月十一日（日）
午前十一時始
青陽会
加賀敏彦
（ケイコ能）吉野天人　西村欽也
囃子　佐藤卯三郎
狂言　歌争　井上祐一　佐藤友彦
柴田初太郎
鶴亀　西村弘敬
囃子　大野弘之
塚本秀雄
佐藤太俊
千手　高安滋郎
狂言　鈍根草　井上松次郎
河村鉦二
歌占　佐藤秀雄
囃子　佐藤秀雄
六月十八日（日）
正午始
観世会
梅田邦久
観世元昭
清経　西村欽也
囃子　大槻秀夫
小塩　西村弘敬
囃子　井上松次郎
狂言　磁石　茂山千五郎　茂山千之亟　茂山正義
梅若万三郎
小鍛冶　高安滋郎
囃子　佐藤秀雄
（有料）
六月二十五日（日）
正午始
宝生会
辰己孝
杜若　高安滋郎
狂言　井碇　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
宝生英雄
鞍馬天狗　西村弘敬
白頭
囃子
能力　井上祐一
束帯　佐藤友彦
（有料）

声　幕（切幕）に対する一考察

幕は通常、劇場または能舞台の附属品、あるいは装飾として用ひられるのと、演出のために舞台装置につかうのと二つに大別出来るが、本紙の趣旨として、能舞台の幕について申し上げます。

切幕は昔は「揚幕」と言われ、能舞台が舞台建築をもたなかったむかしは、楽屋を張り廻わし、出演者はその一部を開いて出入したために「切幕」の名称がある。

又幕のつぎ目にも切ってあるので「切幕」といはれるが、その間隔が少し長いと言はれる。

能舞台の建築が出来て以来、楽屋と橋掛りとの境（幕口という）に一流し（ひとながし）の幕を垂れてから切幕といわれるようになったのである。

唐草地紋のどんすで、白、青、赤、黄、黒の配色を通常としているが、赤三布と青二布とか、赤三布と黒二布、又は赤三布と白二布などと、変り幕として五布とも赤一色である場合等がある。

幕の上の方を十ばかり縫い、これに真紅の太い綱を通し、その両端には同色の長い房をつける。

㈠　本幕には幕掘の両隅に取りつけてある二本の竹竿をもって、鏡の間の方へ引上げるもので、シテ、ワキ、ツレ、狂言、子方が出入し、出演者がその下を通るわけである。（但し狂言方の居語間は別です）

㈡　片幕の場合は、全然幕をあげずに、奥寄りの側を少し片寄せて開くだけである。（シテ方の後見、囃子方、間など）

㈢　半幕は本幕のごとく幕を一杯に揚げきらず約半分位まくりあげるのをいう。（獅子もの、望月、石橋などがある）

この方法は殆んど行なわれないが、特殊な能にのみ流儀によって違う場合があります。

また幕の取扱いは、出演者にさせず総べて幕あげ役の仕事である。

出演者が幕を出るとき「お幕」と声をかけ、ことに重習のシテの出には「幕離れ」という特殊な小鼓の手を打つほど重さくれ、「石橋」のごとく後向きのまま引込み、ふたたび幕を揚げて出てくるという演出さえ生むに至ったのである。

歌舞伎の揚げ幕もこれを受継いだと思う。

しかし能の古典も逐次近代化されようが、ふるきをたずねて新しきを知る原則を良く考えていただけば幸甚の至りです。

また明治維新当時において、東京で幕が出来ず、風呂敷をつないで臨時に幕を作り演能したこともあると聞いている。（編集部）

編集後記

◉…樹々の緑も色を濃くして、はや六月号をお手許にとどける候となりました。なたね梅雨につづいた異常乾燥。そしてことしの夏は暑れ梅雨とか……。

◉…一面にお知らせしたように、名古屋でも恒例となった「薪能」は、盛夏八月、所も同じ若宮八幡社で催されることになりました。

◉…催能だよりが相ついで本紙に寄せられ、また各号にわたるご寄稿に同人一同感謝しつつ、暑中号の準備をすすめております。向暑の折、読者各位のご健勝をお祈り

【会員消息】

○…観世会　六車真三師は四月二十八日逝去。

○…笛方　小島鉄次郎師は、五月九日逝去、十一日東区葵町奉安殿で告別式が営まれた。

○…観世喜之師夫人徳子さんは、五月二十四日永眠、告別式は九皐会会葬により二十六日午後一時から三時まで東京新宿区矢来能楽堂で執り行なわれた。

株式会社　トモエ硝子製造所
代表取締役　片岡良平
名古屋市千種区松軒町三の四
電話　721－6531（代）

宝生流宗家本
わんや書店
東京都千代田区神田神保町3－9
電話（263）6771　代表
小売部　東京都中央区銀座8－4（金春ビル）
電話（571）0514
振替　東京4163

和風レストラン
とうハ
今池ビル裏（千種区大久手町1の1）
TEL（731）2600

京風料理
晴美
名古屋市千種区内山町（ふみたかビル）
電話741－0064

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　佐藤卯三郎　殿島　修二
井上松次郎　杉村　竹翠　内藤　泰二
梅田　邦久　高安　滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
鬼頭　五朗　戸田　秀雄　二井　栄逸

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビル
電話（211）1019・1974（231）6727・28

購読料	1年	200円
郵送の場合	1年	380円
一部		20円

能楽の友紙のご購読、催能の有料会員
熱田神宮能楽殿へお問合せ願います。

8月5日「薪能

能三番・狂言一番などを上演

老人福祉施設の方を招待

市民納涼能楽の夕べとして大きな期待をあつめる第二回「薪能」

若宮八幡社で催され、昨年より一段と興趣をそえて準備がすすめられている。

演能番組は、別項（下欄）のとおりで、能三番、狂言一番ほか舞囃子、仕舞、一調などが予定されまた途中には、薪能の火入れ式が厳粛に行なわれる。

奈良の興福寺の薪能、京都の平安神宮の薪能も終わり、大阪の薪能は八月に行なわれるが、薪能が逐次全国的にひろがることと推測されます。

直木賞受賞作家の立原正秋作品集の「薪能」と題する小説では、薪能のカガリ火のなかに古典芸術の真ずいがえがかれている。

薪能の行事が夏をいろどる芸術として各地で行なわれるようになったことは、まことに喜ばしいことである。なお本年の第二回薪能は、敬老の意味をもって名古屋市の老人福祉施設におられる方々を招待することになっている。また勤労青少年のために、特別割引をするように準備がすすめられている。

市民納涼能楽によせて

名古屋市長

芸術は一国の文化経済の結晶であり、世界各国の芸術は、その国民が経験した年輪のようなものであります。

能楽は歌舞伎、人形浄瑠璃と共に三大国劇として伝承されてきたものですが、名古屋の総鎮守である若宮八幡社で、第二回市民納涼能楽の夕べとして、薪能が催されますことはまことにご同慶の至りであり、薪能の盛会を心からお祈りすると共に、市民一般の広い層にわたって、またとない能楽認識の好機会となることを心からご期待申し上げる次第であります。

私はこのようにして芸術、文化を愛する気風が育まれてゆくならば、名古屋市のために本当に喜ばしいことと思います。

なお今回の催しについて非常なお骨折りを頂きました関係者のご尽力に深謝いたしますと共に、そのご成功を念願してやみません。

第二回薪能について

能楽協会名古屋支部長　田鍋惣太郎

薪能は、能楽演出法の一つである〃神事能〃であります。

その起源は、奈良の興福寺東西両金堂での〃薪の宴〃とか、〃献薪〃に始まったといわれますが、確実なところは不明といわれています。

現在では奈良の興福寺、春日神社、京都の平安神宮、東京では明治神宮、新宿御苑、大阪では生国魂神社等で行われていますが、名古屋市長を始め、各位のお骨折りで開催する運びとなり、当夜は、野天の下、薪明（タイマツ）の火で演能を行います。

青年都市ならびに芸どころと言われる名古屋市の面目にかけて、他市にまけない立派な第二回薪能を演出すべく、名古屋市の能楽師一同（約百名）が張り切っておりますから、どうぞご期待下さい。

ごあいさつ

名古屋総鎮守
若宮八幡社
宮司　川瀬　進

昨年、初めて第一回市民能楽の夕べとして「薪能」が当社境内において神事能として開催されましたところ、千五百名にのぼる能楽愛好者の方々がおいでになり、まことに盛大でありました。

本年第二回を迎えられることは、名古屋市のためまた市民文化発展にとってまことに意義深いことと存じ、当社として欣びにたえません。

この薪能を中心として愛知県知事、名古屋市長、能楽師一同、能楽愛好者、報道関係の方々のご尽力、ご協力がみのり、名古屋の夜をいろどる夏の年中行事としてゆかりのある「薪能」の成功を念願して止みません。

能の理解についてのお願い

六百年の伝統を誇るわが国独得の古典芸術たる能を正しく理解して頂く為に、薪能（タキギノウ）を、名古屋市の総鎮守の若宮八幡社の神前で開催いたしますが、名古屋市の年中行事として〃第二回市民納涼の夕べ〃といたし、皆様方のおなじみの曲目を選び、演能の運びとなりました。皆様のご協力をお願いいたしますと共に、多数のお知合お誘い合せの上ご観覧下さいますようお願いいたします。

「海士」のスケッチ

仙田雪山子画

解説

「海人」または「海士」といわれ世阿弥の作と伝えられている。

本来は五番目物であるが、略初番目物、または四番目物として上演されることもある。

五流とも行なわれ、子方は房前大臣、ワキは大臣の従者、ワキツレも同じ。シテは海士の霊、後シテは龍女。

藤原房前大臣は、父淡海公が讃州志度浦の海士と契って生れた子なる由を侍臣から聞き、亡き母の十三回忌に家臣を伴って志度浦に至り、追善の回向をすると、海士の姿をした母の霊があらわれて、昔の身の上を語り、海中に入って龍神から宝珠をとりあげた始終を舞ってみせ、やがて龍女となり、孝子の供養をうけて成仏する筋書である。

これより幸若の舞曲及び古浄瑠璃に「大職冠」あり、近松門左衛門の「大職冠」あり、近くは歌舞伎にもとり入れられ、長唄で龍王と海士の所作等がある。曲中に有名な「玉之段」がある。

▽薪能の会員券は若宮八幡社々務所、出演楽師、能楽の友社へ早めにお申込下さい。（会員券三百円・学生並に勤労青少年は一五〇円）

市民納涼の夕

時　八月五日（土）五時開場　五時半開演
所　名古屋総鎮守　若宮八幡社境内

能　組

囃子　西王母　長田　驍
鬼頭　鈴木松太郎　須賀　宵木　笹　鉱一
トモ　吉田　俊彦　山本　才　松　恒治
付　戸田　秀雄　安藤　古賀　充男　登　富田　二井　栄逸　大森英三郎　助川　竜夫　陽二
地謡
五郎　衣斐　正宜
十郎　内藤　奈二

能　小袖曽我
後見　村瀬　澄子　倉本　雅
地謡　吉田　福井　啓　加藤　周次郎　小沢　勝利　平子　稲富　美一　定男　藤田　昭彦　竹腰　辰巳　鬼頭　稲川　嘉男　寿　孝一

仕舞　花筐　有賀　滋子
仕舞　杜若　加藤　良久
地謡　熊沢　恵美子　福井　道子　芥川　秀子　飯田　新子　服部　紗枝　林　昌広　鉄郎　前田　後藤　米本　正男　平一

仕舞　玉之段　前田　茂穂
地謡　殿島　修二　加藤総兵衛

仕舞　屋島　佐藤　太俊
仕舞　通小町　杉村　竹翠
仕舞　斑女　加藤総兵衛
地謡　殿島　修二
仕舞　松虫　河村　鉦二
仕舞　鞍馬天狗　久田　秀雄
地謡　塚本　秀雄
火入れ式　柴田　収武

能　胡蝶　西村　欽也
囃子　佐藤　秀雄
地謡　河村　総一郎　田鍋惣一郎　野崎　太郎　藤田六郎兵衛
後見　杉村　竹翠　梅田　邦久
地謡　後藤　犬飼　石谷　竹内　丹下　真柄　切末　吉雲　高野瀬　五朗　尾関　健太郎　鬼頭　朗　高橋　太郎　柴田　増田　甲子一　初雄　上　透　三六郎　米次　義　契

一調　小督　豊島弥左衛門　田鍋惣太郎
囃子　熊坂　辰巳　孝　吉田　田鍋　定男　洋一　鬼頭　鬼頭　喜太郎　季信
地謡　戸田　倉本　和子　浜村　瀬村　澄子　雅子　園子

狂言　雷　井上礼之助　野村又三郎
地謡　佐藤　卯三郎　井上　松次郎　佐藤　秀雄

能　土蜘蛛
トモ　大羽　隆司
胡蝶　大川　嘉奈子
精光　伊藤　鉄之進　豊島　三千春
千筋之伝　高安　滋郎　高安　勝久　守彦
後見　井上　祐一　笹　後藤　孝一郎　笹　鉱一　鬼頭　八郎　三男
地謡　佐藤　友彦　水野　光男　坪井　潔　徳永　大塚　寛一　井上　義次　山田　仁三郎　小林　水谷　田中　治助　松野　恭徳　近藤　喜太郎　忠三　典
後見　豊島弥左衛門　片野　東四郎
地謡

付祝言

たなびき会夏期錬成囃子会

八月二十日（日）（終了九時頃）

主催　田鍋惣一郎

「雷のスケッチ」　伊勢関水画

薪能解説

狂言と能

八月五日の市民納涼能楽の夕「薪能」では「小袖曽我」「胡蝶」「雷」「土蜘蛛」が上演されますが、その梗概はつぎのとおりです。

小袖曽我（宝生流）

シテ十郎祐成、シテツレ五郎時致、母、トモ、団三郎、鬼王、アヒ侍女春日局。曽我兄弟が富士の裾野に出て、鎌倉殿（頼朝）の富士の狩場で父の敵工藤祐成を打つ為に母に別れに行くのであるが、勘当の身である五郎のために十郎が母を訪れて、五郎の許しを乞う。しかし、母の不興は中々とけず、その為に兄弟が泣く泣く帰ろうとするのを母がそれを引き止めて、五郎の勘当を許すので、兄弟は祝言の盃を交わし、相舞を舞って勇んで狩場に赴くのがその筋である。親子の情愛、兄弟愛がこの曲の中に描かれている。

胡蝶（観世流）

シテ里女、後シテ胡蝶の精、ワキ旅僧、アヒ里人、和歌山三吉野の奥に山居する僧が、そこに山賤ありげなる古宮と梅一輪あり、折から一人の里女に会い、その名を問えば、女は胡蝶の春夏秋を通じて、花にたわむれるに、ひとり春なお寒き頃に咲く梅の花に縁なきをなげき、姿を変えて、僧に頼み、この木陰に宿らせ給えば夢にも再び会おうと姿を消す。やがて衣片敷き木陰に休む僧の枕に胡蝶の精が現われ、妙典の功力にひかれて梅花にたわむれうるを喜び、花に飛び交る胡蝶の舞を舞い、漸く明け行く雲に羽打ちを交はし、かすみに消えていく筋書きです。

雷（狂言）

都にすむやぶ医者があまりはやらないので、東国へでて武蔵野までくると、俄に暗くなり、夕立に逢う。そこへ雷が落ちて腰の骨をうつ。平伏して恐しがっているやぶ医者に療治を命ずるので恐る恐る診察して貰う。そして雷能丹というくすりを与え、針を打つ、なおった雷は天に帰ろうとする為に、やぶ医者にお礼に行くが治療代は別だと請求する。雷は医者の近くへ落ちてお礼をしようというと、やぶ医者が驚いて、薬代はいらぬが、その代りに照り続きもなく五穀成就となり、療治しても薬代が貰えるように頼むと、雷は承知してやぶ医者を典薬頭にと祝って天上する。鬼狂言として取扱われ、雷を天から落とし、人間に治療させるという所にオカシミを感じさせる。

土蜘蛛（金剛流）

シテ土蜘蛛は（前は僧形）、ツレ頼光、トモは刀持、胡蝶、ワキは独武者其他、アヒは早打で、源頼光が病気にて心持すぐれず、典薬の頭から薬を持って胡蝶が見舞っても病が重なるばかり、ところへ深更に至って不思議な僧形が頼光

（3面につづく）

7月の催能のしおり

宮殿神楽　熱田能

七月二日（日）午後一時始
故西尾孫太郎氏
故金森準三氏追善能
故小島鉄次郎氏
能　海人　足立学　辰巳孝　西村欽也　高安勝久　佐藤友彦
素囃子　盤渉楽
一調　橋弁慶　辰巳孝　谷口喜代三
狂言　石神　井上礼之助　佐藤秀雄
能　鵜飼　高橋静夫　高安滋郎　立石泰雄　佐藤卯三郎
（能楽調査研究友の会）

七月八日（土）午後五時始
朝日狂言会
孫聟
お茶の水
素囃子　早舞
朝比奈
狂言小舞　縄綯　宇治の晒
煎物
（有料）

七月十六日（日）
橋岡社中

◎七月のラジオ・テレビ案内

NHK全国放送

◎ラジオ（第二）
▽二日（日）午前八時～九時　謡曲　観世流「井筒」（観世元正）
▽九日（日）午前八時～九時　謡曲　喜多流「蝉丸」（喜多実）
▽十六日（日）午前八時～九時　謡曲　宝生流「綾鼓」（宝生英雄）
▽二十三日（日）午前八時～九時　謡曲　観世流「三井寺」（大阪、井上嘉久）
▽三十日（日）午前八時～九時　謡曲　金春流「黒塚」（金春欣三）　狂言　大蔵流「梟」（大蔵弥太郎）
▽二・九・十六・二十三・三十日　▽日本音楽道しるべ「狐を主題とした邦楽」（一～五、岸辺成雄ほか）
◎テレビ（教育）
▽六日（木）午後三時二十分～三時四十分　芸術鑑賞（学校放送・高等学校）「日本の伝統芸術―狂言（横道万里雄）
△番組の変ることがあります。ご了承ください。
※野村広二氏の「能楽散歩」は同氏の都合により今月は休ませていただきます。

暑中御見舞申上げます

観世元正

名古屋観世九皐会　観世喜之　観世武雄

静交会　高橋静夫　武蔵野市吉祥寺北町三ノ五ノ八

薇泉会　泉嘉夫　電七八一―七一八五

笙月会　中川清　長浜市地福寺町八ノ二九　電話②〇六三〇番

名古屋修諷会　梅若修一

大槻清韻会　大槻秀夫　大槻文蔵　大阪市東区上町二番地

研能会　橘香会　梅若万三郎

芳韻会　正諷会　半田市船入町三一　稲生芳雄　田村勇　電話半田二一―〇八一五

熊沢恵美子

潤水会

名古屋観衛会　山本博之　山本勝一

大西信久　大西智久

松諷会　佐藤太俊

春敲会　真柄真次

掬水会　柴田初太郎　柴田収武

澄声会　尾関健太郎

淡水会　飯田賢

螢雪会　後藤契雪

此水会　高野瀬透

一諷会　河村鉦二

谷水会　石谷初蔵

観瀬会　芹川秀子

株式会社　上田観正会能楽堂

社団法人　観正会　上田照也

竹翠会　若松宏守

翠松会　若松宏充

曲水会　増田一雄

森田光春

亀井俊雄

名古屋菊扇会　京都下鴨宮崎町　廣田泰三

名古屋巽会　名古屋市千種区覚王山通り六ノ五　新弗田ビル　野口禄久

禄雲会　東京都港区西麻布四丁目一八ノ二八　有賀滋子

茲水会

藤門会　加藤良久

（2面よりつづく）

の身辺に近づくので、化生と見るよりは頼光は枕元の膝丸をとって切りふせる。物音に宿直の独武者がかけつけ、剣の威光をたたえ、したたる血の後を追って、化生を退治せん

金剛流の舞の真ずいをかけて、「謡は観世、舞は金剛」といわれるだけに金剛流の重鎮重要無形文化財豊島弥左衛門師のご子息豊島三千春師が演ぜられるだけに誠に楽しいものであり、「何事も百聞

す

（2面よりつづく）

の身辺に近づくので、化生と見るよりは顕光は枕元の膝丸をとって切りふせる。物音に宿直の独武者がかけつけ、剣の威光をたたえ、したたる血の後を追って、化生を退治せんとその古塚に向う。やがて古塚を崩せば、土蜘蛛の精現現れ、千筋の糸を投げかけてくるがそれを一同で退治するという筋書です。

この劇は長唄にもあり、歌舞伎狂言、新古十番の一に取入れられ、五世翁五郎がこの秘伝を金剛家に教えて貰った。金剛流にとっては秘伝中の秘伝とされているものです。第二回名古屋市民能楽の夕べの中で最後の能として、演ぜられ

香里能楽堂の舞台披

東雲生

宝生流辰巳孝師によってこのほど新築落成した香里能楽堂（寝屋川市香里園）の舞台披きが去る六月三、四両日にわたって行なわれた。

初日は招待能であったので筆者も朝から参会した。名神高速道路で京都南インターから国道一号線に入り、枚方バイパスを通り寝屋川市に入ると、すぐ香里自動車学校の前を左折し京阪電車踏切を渡ると左方に能楽堂の青色の屋根が見えた。名古屋から丁度三時間で思ったよりも早く到着した。

舞台は熱田能楽殿に模して作られたもので、鏡板の松も出口虎雄画伯の作の美事なもの、橋掛も三間余あり、見所の廊下も緋色のじゅうたんを敷詰め、補助席を入れると三百にも達する立派な能楽堂である。このような堂々たる舞台を殆んど独力で、しかも短期間に建設された辰巳師に先ず衷心より敬意と祝意を表した次第である。

招待能は一部に翁（辰巳孝）鷺（宝生九郎）小袖曽我（馬場富四夫）、二部に四王母（内藤泰二）田村（宝生英雄）舟弁慶（辰巳孝）という番組であった。

木の香も新らしい檜舞台で初番に翁、キリに舟弁慶を舞われた辰巳師の心中の喜びと得意もさることながら、筆者にとって最も感銘を受けたのは狂言、素袍落（茂山千作）であった。新築の舞台狭しと演ずるこの名人の至芸は狂言の真髄ともいうべくこの一番で名古屋から出てきた甲斐があったと喜んだ次第である。

第二日は素人能でこの日は関東から九州に亘る全国各地から三百人を越える辰巳師の社中（異会連合会―会長市村清氏）の方々が来演された。能も鶴亀、鞍馬天狗、加茂、石橋連獅子という多彩なもので、新らしい舞台は終日同門の方々の舞や謡で賑わった。宝生宗家をはじめ大勢の諸師も大変御多忙に見受けられた。

中にも宝生流の元老、竹腰健造氏が高木敏郎師の小鼓で女郎花の一調を謡われたのは当日の圧巻であった。謡曲もここまで来れば、真に「道」に徹したものと云うべきで最早「人」が謡うのではない。満堂の人々を仙境に遊ばせる感があった。

幸い両日共からっと晴れた初夏の好天に恵まれて、盛況裡に終了したことは、辰巳師はじめ御家族の方々にもこの上ない喜びであったと思う。

この新らしい能楽堂を広く文化向上の為に活用し度いと云う辰巳師の抱負を伺うにつけ、これは単に一流一派の喜びであるばかりでなく、万国博開催も間近い関西の文化センターとして日本の為にも大きな喜びとしてこの香里能楽堂の前途を祝福したいものである。

煎物

（有料）

七月十六日（日）

橋岡社中

金剛流の舞の真髄をお楽しみください。

「謡は観世、舞は金剛」といわれるだけに金剛流の重鎮重要無形文化財豊島弥左衛門師のご子息豊島三千春師が演ぜられるだけに誠に楽しいものであり、「何事も百聞は一見に如かず」で、一見の要があるものと信じております。

又、一調の小鼓方田鍋惣太郎師（能楽協会名古屋支部長）と豊島弥左衛門師の「小督」も絶対に見落せないものであることを皆様にお伝え致します。

○…金沢だより　七月二日午後一時から金沢能楽会定例研究発表会

素謡「敦盛」、能「藤」、狂言「飛越」、能「小鍛冶」

石神　井上礼之助　佐藤　秀雄

鵜飼　高橋浄夫　高安滋郎　立石澄雄　佐藤卯三郎

能楽研究友の会

井上嘉久）

▽三十日（日）午前八時～九時

謡曲　金春流「黒塚」（金春欣三）

狂言　大蔵流「桑」（大蔵弥太郎）

▽二・九・十六・二十三・三十日

△番組の変ることがあります。ご了承ください。

※野村広二氏の「能楽散歩」は同氏の都合により今月は休ませていただきます。

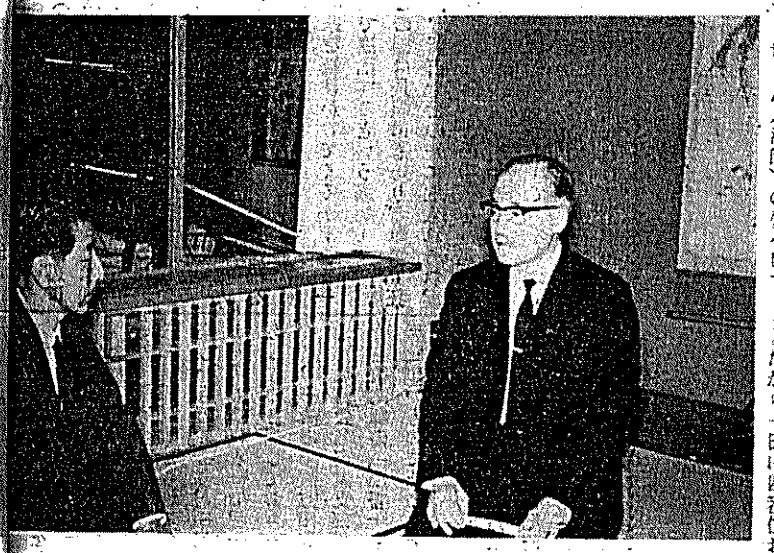
暑中御見舞申し上げます

有賀滋子	茲水会
加藤良久	藤門会
加藤丈太郎	正楽会
梅若猶義 梅若盛義	梅猶会
下田雄三 大阪市東区高麗橋詰町五三	雄謡会
名古屋謡曲仕舞教室 梅田邦久 名古屋市昭和区台町二丁目 一六―五電話（八四）四六三二	邦謡会
竹内竜神会 岡崎市六供町三ツ岩五七	
宝生会 宗家長　宝生九郎	社団法人
大槻秀夫 東京都港区西麻布四丁目一八ノ二八 野口禄久	大槻文蔵
名古屋巽会 名古屋市千種区覚王山通り六ノ五 新仲田ビル 戸田秀雄方	
梗雲会 名古屋市千種区覚王山通り六ノ五 新仲田ビル 戸田和子方	梗風会
倉本・雅 神戸市東灘区住吉町茶屋八八 宮前住宅四一三	
近藤乾三 藤門会 東京都豊島区西巣鴨四ノ二七五	
能楽の友社 同人一同	
豊嶋弥左衛門 豊嶋三千春 京都市東山区智恩院山内林下町四五五	金剛流豊屋会
中部金剛会 金剛流春鶯会 山田仁三郎	
金剛流松風社 片野東四郎	
金剛流華月会 今井幾三郎	
上田照也	大槻秀夫
名古屋菊扇会 京都下鴨宮崎町 廣田泰三	観瀬会
福岡周斉 市川市真間二ノ二ノ七	芥川秀子
寶彰会	
高安流白水会 和泉太郎	
森・茂好	
京都高安会 岡治郎右衛門	
谷田宗二朗	
福王茂十郎 福王輝幸 大阪市東区平野町一ノ一五	
豊嶋十郎	
幸圓次郎 東京都中野区中央四―三五―一四 電話（三八一）九四一三番	
亀井俊雄	一謡会
森田光春 京都・東山・八坂上町三七六	浜村鉦二
桂・会 岐阜市松屋町　後藤方	谷水会
龍吟会 藤田流笛方一同	石谷初蔵
名古屋能楽鑑賞会 かすみ会 田鍋惣太郎 洋一	
寺井政数 東京都世田谷区世田谷四―三―二五 電話（四二〇）六六七六番	
名古屋和泉流 狂言共同社	
高木栄一郎 名古屋市北区敷島町一〇七 電話九九一―四三三七	
武田太加志 鳳鳴会 名古屋市東区葵町二九 吉田義正方	

楽の友社
目16—10（花木ビル内）
974（231）6727・289
年　200円
年　380円
20円
、催能の有料会員券
問合せ願います。

「鶴亀」に始まって「鶴亀」に終わる

日本芸術院会員　梅若六郎師、能を語る



〝一番一番を大切に残したい〟と語る梅若六郎師　左は花木同人

子供能で初装束つける

問　日本芸術院会員を受けられましてお目出度うございます。最初におけいこされたのは、いくつぐらいですか。

答　本当のけいこはいくつ位か判りませんが、初舞台としては、仕舞「理々」を舞いましたのがむかし流にいえば数え年三才です。その後装束をつけて初めて出ましたのが四才のときです。

演し物は「忠信」で、それが非常に人数物でして、シテは義経、トモ、後に義経を攻める武士など七人位です。その時シテをなさったのが、現在活躍されている観世銕之丞さんがなさったような記憶があります。

私の役は忠信を攻めていく役で、坊さん（法師）の姿をして、長刀（なぎなた）をもって、謡などは全然ないし、忠信に矢で射たれて引込んで行く役でしてこれを初役としていつも皆さんに発表しております。

梅若には、非常にたくさんの子供があり、子供能というものが非常に流行していたのです。先代の万三郎家の方に四、五人おり、男の子が沢山いたのでそれで構成して一曲を是非やってくれということを方々から頼まれ余興のやうな形で演じたものです。井伊邸（彦根城のご当主）が、非常にお能がお好きで、東京のお屋敷にも能舞台があり、そこで子供ばかりの能が一番入りましたのがさきほど申し上げた「忠信」です。井伊様はお能が好きだから一日に四番位お舞いになり、お楽しみで昔言葉でいえば、殿様ですからご家来衆に見せられたのです。

問　失礼ですがお年は…。

答　私は明治四十年ですから数え年で六十一才です。

問　還暦ですね。

答　ええ生れは八月二日ですからこの八月で満六十才ですが現在風に言えば五十九才です。

実は今年は還暦になるので、各地のプランを立てておったのですが、今年の初めに芸術院会員になりましたので還暦の祝いは来年にして、今年は各地共に芸術院の祝賀能ということになります。

〝校外教授〟で能を普及

問　能を沢山舞われていられると聞きますが……。

答　確かにそういわれているようですが、学校などに普及することが好きで、北九州といいますか、福岡県からも依頼を受けまして、三年間の契約をして催したこともあるのです。

若い人に能というものを理解して頂く、見ないで嫌いな人もあるのですからまず見せなきゃ判りません。それには子供さんの時代から親しむ機会をということでそういうもよおしを進んでやりましたから、一日に六回、七回と能を舞うこともあるんですよ。

昔の言葉で言えば、校外教授という形で学校外の勉強ですね。これを三年間つづけたこともございます。

問　量と言うことは大変ですね。

答　「能」は理くつでは勉強できない。身をもって、そこへ体当りしてやらないことにはわかりません。頭が良いからといって二三が

ぐらいの能のほうが面白いものが出来るわけです。しかし最初から二三が三という能は舞えるものではありません。やはり一から数わった芸を忠実に守っていって、いつかそれが年によって二二が三になったり二三が六、あるいは七になったりする所に、味といいますか面白さがあるんです。いまになって数多く舞ったということは幸せしていると思っております。

問　昔から能を百番見ればわかるといいますし、又先々代の梅若実師は明治の三名人といわれ、能楽の復興に尽力されたと聞きますが、今日まで続いた梅若の特長といった点は如何でしょうか。

答　今は梅若流と申しませんし、大体は元は観世流であったわけですが明治のご維新になりまして観世流の家元は徳川様について静岡にいかれ、各流の一部も転業せざるを得ない苦しい時代があったのです。その時宅の祖父が転業しないで、こっこっとやっていたのです。もちろんけい古する人もありませんし、催しも出来るわけでありませんが、唯々毎日謡をうたっていた。その当時のことですからいろいろな非難をうけたそうですが、しかし祖父はこれで一生を通すんだという信念でいたのです。もちろん当時のことですから一時は食うに困って、編笠をかぶり、門附けをして謡いをうたって生活をたてたとも聞いております。そうこうしておりますうちに世の中も落ちつきまして、謡も復活して参ったのですが、祖父一人しかないので皆さんもそこへ集ってくる。だんだん盛んになりご承知の通り免状の問題が出て来ます。そこで祖父から家元の方へ、大分復興してきたので、免状をほしがる人も出てきたんだから帰ってきて頂けないかと申出たところ梅若さんの家は、能楽界の功績のために免状の発行権を許すということになったのです。それがのちの観世さんと私どもとの関係のいきさつになったのです。

戦争中統制となり、梅若流が一緒になってくれという話がもち上ったのです。昭和二十九年の大晦日の前日に観世流に復帰しましたがその時、父に今謡印して来ましたと報告すると病床にありながらはげましてくれました。

能の大衆化について

問　能の大衆化についてどうお考えですか。

答　能を大衆化せよということはよくいわれる言葉ですが、能を大衆化するということは大変むつかしいことだと思います。能を下げるということは本当の能ではないのですから…。能の大衆化はまず大衆の方々が、謡に入りやすいようにしなければならない。謡を習うにも、どうして良いかわからない、またどの先生についたらよいかわからない。したがっておっくうにもなる。そのために宅の舞台を「梅若能楽学院」という名にして文部省の許可をとりまして、たやすく謡のけい古が出来るようしたわけです。

能の芸というものは、静中の動というぐらいですから、静かなときに非常にむつかしい。動いているものはさしてむつかしいものでないのです。お能というものは、面一つにしても少し下向けば泣いた感じを出さなければならないし、上を向けば月があるとかという芸で歌舞伎とは全然違うんですから……。

それをみる方によってそれが月になるか、螢になるか、鳥になるか雀になるかということで芸が生きてくる。私自身はこれからもそういうつもりでいこうと思っております。

こういう話があるんです。能の姿、仕舞でもそうですが目はどこについているか。これは乳なのです。（両手で乳をおさえながら）これが目なんです。実際の目で物をみたのではダメなんです。

腹の中に、月光の美しさがあるのであり、腹の中にすべてのものを見がいて自分の目は心眼はこの

ですから、この乳（目）で景色を想像してみれば、面をつけて丁度よくなるんです。ただ面を動かし、それに目をうつしていくだけでは想像にならないんです。しかしそれはなかなかできないことですが……。

そういう芸ですから、一般大衆にアッピールするわけにはいかないと思うんです。

〝ほたる〟を求めて

問　先代の梅若実の聞き書というのは、どんな内容でしょうか。

答　あれは父の経験談を記してあるのです。白洲正子さんという方がいられますが、父にけいこをうけられた方ですか、能がお好きで先生の聞き書として残しておきたいとおっしゃって父の経験談をまとめられたのです。

問　梅若の特長という点は……。

答　簡単にということばは適切ではないですが端的にいえば、非常に節がこまかいのです。あとからできましたから。邦楽関係の人からよく梅若の謡いは清元といっています。節がこまかいのです。きれいに聞えるわけですね。その点で、こまかくなってイヤ味になる場合も、うっかりするとある。ふみはずしますとね。

〝心眼〟のきびしさ

芸談の問題でよくお話しするのが、心眼のことです。忘れもしません。関東の大震災の十七才のときでした。舞台が焼けまして、お弟子さんのところの舞台でやりました。この間に先代から「葵上」のけいこをつけてもらった。「沢辺のほたる…」のところで、何回やっても、そこには〝ほたるは飛んでいない〟というのです。こっちは判らないものですから扇をかざし三十回ぐらい、十一月の寒いときでした。〝どこにも螢がいない〟というだけで結局全く教えてくれないんです。

私も考えました。母がつれていって、十七、八の子供なんだからといって頼んだのですが、「普通のお弟子なら教えてやる。お前は

人に物をおそわってできるようじゃ考えなきゃいかん」というのです。

一体どこに飛んでいるのですかといえば〝腹〟と答えるのです。螢は腹にとんでいるのだ。お前の目は目で螢を探している。腹の中の螢をみれば自然に目は動いていく。腹に螢がいなければ、アゴは動くし、面をつけ装束をつけたらみれたものではない。お能というものはそういうものではないということをそのとき初めて教わった。「心眼」ということですね。「なぜいわないのですか」と母がたずねたら、言ったって分らないのには仕方がない」ということです。若い人を仕込むということは容易なことではありませんが、〝技〟もそうですが、〝心〟が大切だと思います。

けい古と本番

ご存知かも知れませんが、私は非常に相撲が好きでしてね。常陸山の時代からずっと愛好しているんですが、いまの相撲にはあまり感心しないんです。味がないといいますか。双葉山の伝記がでたとき買って読みましたが、あの人はけいこ場のときには本番のつもりで相撲とるんだ。本番のときにはけい古のつもりで相撲をとるといっています。それはなかなかできないことなんです。私なんかもなかなか舞い切れません。

本当の芸は六十から

この間もある人からたのまれて話をしたんですが。結局能は六十からという話をしたんですがね。祖父の書いたのが残っていますが、人間生まれて六十年間荒波にもまれて、還暦になってもとの子供にもどる。それから始まった芸が、本当の芸である。それからが本当の人間である。だから六十過ぎなければ一人前の人間ではない。芸も最初は鶴亀をけい古します。「それ青陽の春になれば云々…」と。それからみんなにたたかれ、けられ、修業して、六十一に

青陽の春になれば」こそが本当の謡である。それからがその人の本当の芸である。いままでの六十年間は本当の芸ではない。相撲でいえば勝ち負けもある。人生にはいろいろなことが六十年の間にはある。しかし六十年たって、こんどは何もしなくても自然ににじみでてくるものがある。

ですからどんなまずい人でも何かがあります。

うしろ姿をみればその人の芸がわかると祖父の覚え書に書いてあります。六十過ぎた人の芸は普通に舞える人ならどこかいいところがある。六十過ぎのよさです。若い人は上手に器用に舞うが後向いたら空っぽということがあるんです。器用と小細工といいますが、みてくれ主義の点があるんです。それも結構ですが、六十を過ぎた芸、そんなに人にみてらわなくてもいいと思っております。あのときの六郎の能はこうだったというように。自分としても後の方のために、息子などのためにも一番一番を残しておきたいと思います。

—どうもお忙しいところ参考になるお話をうけたまわり有難うございました。

＝六月二日熱田神宮能楽殿にて

（見出しは編集部でつけました）

【梅若六郎師略歴】

明治四十年八月二日、二代目梅若実（五十六世梅若六郎）の長男として浅草蔵前に出生、昭和十九年十月、家督を相続、五十五世梅若六郎となる。昭和三十二年日本能楽会会員、昭和四十二年一月日

市民の納涼能楽の夕べ

第二回「薪（たきぎ）能（のう）」迫る

演能案内

七月二日（日）午後一時始

宮殿　神楽　田楽　熱能

文　東京都千代田区

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能　楽　の　友　社
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビル
電話（211）1019・1974（231）6727・2
振替口座　名古屋　36393番

購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円
一部　20円

能楽の友紙のご購読、能能の有料会員
熱田神宮能楽殿　電話（671）2912番
問合せ願います。

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　柴田初太郎　殿島　修二
井上松次郎　杉村　竹翠　内藤　泰二
梅田　邦久　高安　滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田　秀雄　二井　栄逸

秋の催能シーズン近づく

当地初の 日本能楽会能

大衆能にも大きな期待

名古屋市民納涼能楽の夕、第二回「薪能」が夏をおくる催能の最高潮として、九月からいよいよ秋の芸術シーズン。名古屋能楽界は多彩な演能が企画されている。秋の催物のトップは九月三日「名古屋大衆能」で飾られる。

例年当地能楽協会名古屋支部主催、朝日新聞社後援により行なわれているこの大衆能はことしも愛知文化講堂で堂々と開催される。

能は宝生流の「俊寛」、観世流の「井筒」、金春流の「小鍛冶」と東西より応援の諸師に依る舞囃子、仕舞等、多彩な番組により薪能について市民の古典能楽の鑑賞の好機会として、毎年多数の観客を得て好評を博しており、本年もこの有意義な催しに愛好者の期待を得ることと予想される。

さらに、九月十五日、熱田神宮能楽殿で催される重要無形文化財による日本能楽会名古屋公演は、当地で初めての開催として大きな期待がよせられている。

日本能楽会は、昭和四十年重要無形文化財能楽総合指定を受けた時に設立せられ、当時、全国で百三十四名で発足し、同年東京と大阪で第一回の公演を行ない、四十一年度はやはり東京と京都で公演。ことしは九月七日東京で、九月十五日名古屋で公演されることになった。

東京の場合は人員も多いので、一日で五流のすべてを公演できにくいために、二流位ずつが持ち回りで行っている。大阪の場合も大体そのように、一部を持ち回るように演じている。今回名古屋の公演は、能は観世、宝生の二流、舞囃子は金春、金剛の二流に喜多を仕舞として一応五流金部が顔を合わせるように計画されている。

公演に際しては本格的な能舞台で出演者は重要無形文化財総合指定保持者であることは勿論であるが、地謡の一部とかツレの一部だけに限って保持者以外の出演が認められ、能及び狂言の番数の倍数だけの舞囃子、仕舞だけしか認めないほど、公演に際しても種々厳格な制約が加えられている権威あるものである。

重要無形文化財として四十年の指定に続き本年新たに三十七名の追加指定を加えられ、会員も増え、当地も四十年指定の田鍋惣太郎、高安滋郎、藤田六郎兵衛の三師に新らしく柴田初太郎、田鍋惣一郎鬼頭八郎、野村又三郎、井上松次郎の五師を加え計八名となり充実した演能が期待されている。今回の公演番組は別掲の通りであり、見ごたえのある催しといえよう。

「鵺（ぬえ）」のスケッチ（解説）

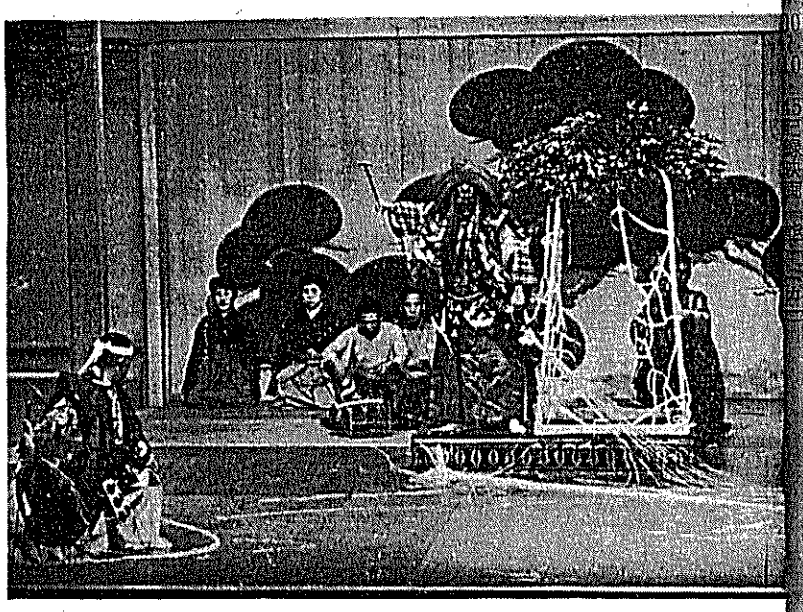
—仙田雪山子画—

五流とも行なわれ、五番目で作者観阿弥とも世阿弥ともいわれている。

前シテは舟人として登場し、後シテは鵺の正体として面は猿、足手は虎、尾は蛇という変化で現われ、夜な夜なと京都の御所を飛んで玉体を悩ました天罰によって、頼政に討たれたことをざんげする筋の曲である。

平家物語巻四「鵺の事」に「仁平のころほい、近衛院御在位の御時、丑上夜な夜なおひえさせ給うことあり。東三条の森の方より黒雲一叢たち来って御殿の上に蔽えば心ずおびえさせ給ひけり。（中略）さんぬる寛治のころほい、堀河の院御在位の御時、主上、しかの如くおびえたまぎらせ給ひけり。（中略）また応保のころほい、二条の院の御在位の御時、鵺という化鳥、禁中に鳴いて、しばしば宸襟を悩ましたてまつることありけり」と鵺のことを物語っている。

ワキは僧であり、アヒは在所の者で場所は津の国（現在の兵庫県）芦屋の里である



昨年愛知文化講堂で行なわれた名古屋大衆能「土蜘蛛」＝朝日新聞社提供

名古屋　363393

能楽の友社の郵便振替口座番号

長い間皆様にご迷惑をおかけ致しましたが、能楽の友社の郵便振替口座番号が標題の如く決まりました。今後購読のお申込み、ご送金の節は、おはがきでご連絡頂けば、払込料金加入者負担（能楽の友社負担）払込用紙をご送付致しますのでどうかご利用下さい。

演能案内

大衆能

九月三日（日）午後二時始
於愛知文化講堂

吉田俊彦
戸田秀雄
内藤泰二

能（平住）俊寛　高安滋郎　寛　福井啓次郎　鉱一　鬼頭季信
囃子　佐藤卯三郎

謡物（脇）三井寺　芹川秀子　飯田新一子

囃子（金春）葛城　桜間竜馬　寛　鉱一　田鍋惣太郎　助川竜夫　藤田昭彦

仕舞（脇）松虫　福井道子

囃子（観世）唐船　和島富太郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　大森英三郎

仕舞（脇）遊行柳　柴田初太郎

梅田邦久

能（脇出）杜若　西村欽也　吉田定男　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

恋之舞

仕舞（平）春日龍神　辰巳孝

囃子（脇出）班女　観世武雄　寛　鉱一　青木慎治　藤田昭彦

狂言　三人片輪　和泉保之　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助

囃子（金剛）船弁慶　大塚一二　吉田定男　福井良久　池田茂　大森英三郎

金春欣三
本田光洋

能（金春）小鍛冶　高安滋郎　河村総一郎　田鍋洋一　野崎太郎　寛　三男
高安勝久
佐藤秀雄

（終了午後七時頃）

附祝言

会費　指定席　七〇〇円　普通席　五〇〇円
取扱所　各出演楽師宅　各プレイガイド

主催　能楽協会名古屋支部
後援　愛知県　名古屋市　愛知県教育委員会　名古屋市教育委員会　朝日新聞社　名古屋能楽会

九月十日（日）
於熱田神宮能楽殿
梅田邦謡会ゆたか会
素謡「松風」外十番、仕舞三十数番

わが観能 その三

茂山千作の老熟
―朝日狂言会をみて―

殿島蒼人

朝日狂言会で、「縄絡」がもっとも出色だったのは、作のよさよりも、千五郎改メ茂山千作の、すっかりこの狂言をマスターした演技力によるものである。

ここに出てくる小名は、太郎冠者を召使ってゐるとはいへ、最低度の中産階級である。賭博に負けて金銀ありたけを投げだしたといっても、大した身代ではない。されば使用人の太郎冠者までも金銀の代に放出しなければならない。そんな程度の分限なのである。相手の旦那に引きとられた太郎冠者は、フテくされて、なにを云付けられてもののらりくらりと逃げて仕事をしようとしない。

腹をたてた相手が、太郎冠者をもとの主人に返して、うかがってゐると、先方の旦那、奥方、子供のわるくちをさんざんに主人に告げる。うしろにうかがってゐた旦那が、おのれ憎いやつの、と打擲しかけると、きもをつぶした太郎冠者が、ゆるさせられい〳〵と逃げるを、やるまいぞ〳〵と揚帯へ追って入るのである。

単純なだけに、興味は、太郎冠者が縄を絡いながらの、ささの旦那一家の悪口をのべたてる一点だけに集約される。ひとつに茂山千作の太郎冠者の話術の功がものをいってくる。

千作の話術には、詞章を見物によくわからせやうと意識していることが、観取される。わからせやうとする意識に立って、七擒八縛の技巧を用いている。それが、ひとつも行き過ぎてゐないところに、芸術的安定性があって、さすが老熟である。かなりアクのつよい〃千作ぶし〃ではあるが、「縄絡」の場合、その〃千作ぶし〃が光りかがやくのである。独演であるだけに、周囲との破調を気にすることがなく、われわれはすっかり魅了されっぱなしの充足感を感ずるわけである。

「孫智」では、祖父役の佐藤卯三郎がいい味を出した。ねちねちとして、むやみと出しやばる大おち（祖父）である。わる気があるわけではないが、傍若無人に出しやばって、智のこともしうとのこともおかまひなしに、やいのやいのと自己中心に振舞ふのである。さういふ大おちを、佐藤卯三郎らが、おかしく、いやらしく演じる。

私はこの、はしにも棒にもかからぬ隠居に、肉つきされた人間性を見た。ふと連想されたのは歌舞伎の「夏祭浪花鑑」の義平次である。義平次は始末のわるい悪党であるが、ねちねちとして不退転の、小うるさい人間性がこの狂言の隠居に共通しているのだらう。私は、義平次が出てくると、にくらしいよりもおかしくなってきて、その我執と、自己肯定の人柄を笑ひながら見物するのであるが、この狂言の佐藤卯三郎にも同様のおかしみを感じたのである。私自身にかかわりがないかぎり義平次がおもしろいと同様、この隠居にも親しみを感じ、やれ！やれ！と声援をおくりたくなるのである。

〃智も大おちもうともに、相舞申して帰りけれ……で、しうとと智が幕に入ったあと、のこった隠居がひとりだけで視線を舞ってトメて入る。この結末には、このあとあとがどうなるかと懸念される余韻をもっている。愛すべき大おちである。

まだ「煎物」「朝日奈」「お茶の水」を見たが、すでに与へられた紙数がない。「煎物」は名古屋で初演だときくが、時代相が濃厚なのがたのしめた。そこへゆくと「朝比奈」は軽薄である。閻魔王の着附は、厚板をもっと派手にして、ククリの狂言袴はもっと太く長目にはいた方がいいと思ふ。着ぶくれて、粗大な感じにしないと、ただのスッパや山伏にちかくなってしまふではないか。

8月の催能のしおり

薪能（第二回）

市民納涼の夕

時　八月五日（土）五時開場　五時半開演
所　名古屋総鎮守　若宮八幡社境内

（舞囃子）西王母　長田顕　覚鉱一　青木恒治　助川竜夫　大森英三郎

（狂言）小袖曽我　鬼頭　鈴木松太郎　須賀明　吉田俊彦　戸田秀雄　衣斐正宜　内藤泰二

（仕舞）花筐　有賀滋子　吉田定男　福井啓次郎　藤田昭彦
（仕舞）杜若　加藤良久
（仕舞）玉之段　前田茂砲

能（第三回）

（舞囃子）胡蝶　西村欽也　河村総一郎　野崎太郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛　佐藤秀雄
（仕舞）火入れ式　柴田収武
（仕舞）屋島　佐藤太俊
（仕舞）通小町　杉村竹翠
（仕舞）班女　加藤丈太郎
（仕舞）松虫　河村錠二
（仕舞）鞍馬天狗　久田秀雄

（舞囃子）熊坂　長巳孝　吉田定男　鬼頭喜太郎　田鍋洋一　鬼頭季信
（狂言）雷　井上礼之助　野村又三郎
（一調）小督　豊嶋弥左衛門　田鍋惣太郎

（舞囃子）土蜘蛛　高安滋郎　高安勝久　高安守彦　覚鉱一　後藤孝一郎　鬼頭八郎　三男
（仕舞）千筋之伝　井上祐一　佐藤友彦　井上義次

附祝言

（終了九時頃）

観世会定式能

九月十七日（日）正午始
於熱田神宮能楽殿

（仕舞）養老　加藤良久
（地謡）柏崎　道行　有賀滋子　河村竹翠　杉村錠二　梅田邦久　福井道子　加藤丈太郎
（吟）放下僧　福井道子
（連）六浦　井川秀子　飯田新子
（仕舞）西王母　熊沢恵美子
（地謡）胡蝶　服部紗枝　石谷初蔵　塚本秀雄　柴田収武　久田秀雄　佐藤太俊
（素謡）頼政　林喜右衛門　藤井久雄　丹下三義　増田一雄　真栖米次　林喜右衛門　尾関健太郎　薩井久雄
（地謡）源氏供養　藤井久雄　山本真義　高野瀬透　犬飼来吉　藤井久雄　山本真義　加藤総兵衛　高野瀬透
（仕舞）山姥　柴田初太郎　吉田定男　野崎太郎　田鍋惣一郎　鬼頭季信　稲生芳雄　高野瀬透　後藤契雲　山本真義　竹内六郎　林甲子夫
（囃）正尊　柴田収武　林甲子夫　山本真義
（起請文）観世寿夫　林喜右衛門
（仕舞）江野島　観世寿夫
（仕舞）水無月祓　林喜右衛門
（仕舞）花筐　藤井久雄
（仕舞）殺生石　山本真義

附祝言

重要無形文化財綜合指定
社団法人日本能楽会　名古屋公演

九月十五日（老人の日）午后一時始
於熱田神宮能楽殿

（舞囃子）淡路　金春信高　飯島佐六　住駒陽介　鬼頭八郎　森田光春
（仕舞）仕舞（観世流）　松本恵雄　宝生英雄
（地）松風　岡治郎右ヱ門　鬼井俊雄　田鍋惣太郎　杉市太郎　瀬戸返し　見留
（狂言）子盗人　佐藤卯三郎　三宅藤九郎　和泉保之　井上礼之助
（仕舞）仕舞（喜多流）（宝生流）
（囃子）安宅　金剛巌　野村又三郎　井上松次郎　飯島佐六　大倉長十郎　森田光春
（狂言）文山賊　観世元正
（地）安達原　高安滋郎　西村欽也　谷口喜代三　田鍋惣一郎　金春惣右ヱ門　藤田六郎兵衛

主催　社団法人日本能楽会
後援　文化財保護委員会
〃　能楽協会名古屋支部
〃　名古屋能楽会

婦人師範連合会
風韻会能

九月二十四日（日）
於熱田神宮能楽殿

十月一日（日）
於熱田神宮能楽殿

（素謡）竹生島　高橋香代子　伊藤しゆん　田中敏
〃　蝉丸　鶴用静枝　古井佐季　平田久子
〃　葵上　大井政子　横尾みどり　田中美子
（独吟）駒之段　福生清子　金丸洋子　長谷川鍵子
（連吟）百万　野宮　鹿田豊子　石野ひさ
〃　弱法師　森田啓二　沢村啓　保
（仕舞）屋島　天野登茂子　守部啓子　佐野正三　放下僧　川村鍵雄　笹之段　長谷川実　鶴之段　長屋潤　藤戸　伊勢信雄　鉄輪　日比太吉郎
（独謡）松虫　福井啓次郎
（舞囃子）竜田　福間昌作　殿島博子
〃　二人静　殿島満里子
〃　通小町　高田みね子
〃　菊慈童　奥田薫
〃　砧　佐藤アヤ子
〃　山姥　富士道周明
〃　野守　神戸鍈次　赤間鎮雄
（一調）勧進帳　水野雍子　田鍋惣一郎
（舞）清経　西村欽也　吉田定男　覚三男　中原恵　渡辺節子　山口亮
（能）船弁慶　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦　井上祐一
（狂言）薩摩守　佐藤友彦　佐藤秀雄　井上松次郎
（番外）井筒　殿島修二　西村弘敬　覚鉱一　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
物着
主催　風韻会　殿島修二

鬼頭五朗氏逝去

かねて病気療養中のところ薬石効なく七月九日午前一時永眠された。享年七十三才。告別式は十一日午前十時から十一時まで愛知県中島郡平和町の自宅で営まれ、霊前には能楽界はじめ花輪、供花がおくられ悲しみのうちにも盛儀であった

能楽の友社編集同人、鬼頭五朗師は

歩散楽能

にそって印象を綴るかわりに、思い出すまま、書きすすめたいとおもいます。

はれたくしの好きなことはです

夏を迎えるときは、毎年、一、二冊の本を机において、暑気にまけず、陣をみつけては読み切ろうと決心するが、それも日々のおこたりで、机上を飾り、場をふさぐ

長い間の一喜一憂が、二人きりであることから身近に切々とひびく。そして一つの動作動作に真実をみつけようとする。

能に生きる人が、先生から口写

さりながら思い知らされた。これがせめてもの得物であった。

それでも六月にはメソポタミア文化展にいった。家事に忙殺されながら短時間三回、いつも二つの獅子狩図浮彫をみていた。（この

のを」みたいとおもうことしきりである。

むかしをおもい、今をはなれられないわたくしである。

松風をみて、取材の故事をしるとともに松風そのものをみたい。

金剛厳
金剛永謹
吟風会
伊藤鉄之進
大川嘉奈子

歩散楽能

はそうで印象を綴るかわりに、思い出すまま、書きすすめたいとおもいます。

七月中旬、紅と白のサルスベリが花をひらく。二十一日のこと、日中の暑さに引きかえ、満月に近い月は大層涼し気であった朝の月をみるのもその前後であった。

はじめ雲にかすんでいたが、やがて、庭のさくらの葉越しにみえかくれし、それからそのさくらとサルスベリの大木の間にうつった頃は何ともいえない風情があって暑気も一掃された。

今年は七月はじめに蝉の声をきき、庭にでて、足にガマのでる日があった。大きなガマである。

ゲロッ〜またゲワッ〜と鳴くようで鈍い動きにも愛きようが

夏を迎えるときは、毎年、一、二冊の本を机において、暑気にまけず、隙をみつけては読み切ようと決心するが、それも日々のおこたりで、机上を飾り、場をふさぐといった年々であった。

夏の謡会のように、夏の修練といったものですが、一日一頁はおろか、一言半句を拾う日だけが多い。

夏安居（げあんご）のことばがある。禅家の夏の修業である。

「あら堪えがたや」の能の文句におのれを打克たせるのである。日々のおこたりにまけ、暑さに元気のないうえに、さらに今年は私事ながら、家族の大病があった。

わたくしたち老夫婦二人きりでは、動かせない人を日々夜々看護

身辺片事

野村広二

杞憂に強くひかれながら、なお舞台を緊張裡につとめるといった気持にも、いたく同感できた。行住坐臥の真の意味を少しでも摑んだようだった。日々夜々の充実とはこういったことで、今の今まではどうも付焼刃であったようだ。

万事、さ事にも十分の洞察と配慮、落付きと敏速と割り切りが必要なことは、能や狂言のけい古で

長い間の一喜一憂が、二人きりであることから身近に切々とひびく。そして一つの動作動作に真実をみつけようとする。

能に生きる人が、先生から口写しの一句をおぼえこむまでは、次の一句に進めないつみかさねとおなじであった。また家族や身辺の

がせめてもの得物であった。

それでも六月にはメソポタミア文化展にいった。家事に忙殺されながら短時間三回、いつも二つの獅子狩図浮彫をみていた。（この絵はがきはできなかった由）東西文化の交流、それにつながる竜村平蔵氏作の四天王獅猟文錦を名古屋出張所に拝見にでかけ、同氏著の「ボロと錦」をよみ「万葉異国風物誌」（藤井清）にうつり、「正倉院随筆」（李家正文）をひきよせてみたのは楽しみであった。

この頃、多彩な能や狂言をみてきどころ、みどころに焦点をあわせてみるといった見方よりも、また近頃のように能芸の分析、形成、要素的研究が盛んになって、つくられた時代以前とその前後の慣習を考えに入れ、当時の生活と結びつけて、多様な条件でもってみるといったことが求められるようだが、やはりわたくしには、舞台で演ぜられる「そのもので」

である。

むかしをおもい、今をはなれられないわたくしである。

松風をみて、取材の故事をしるとともに松風そのものをみたい。

杜若のいろいろのいわれをしりながらも、杜若の曲そのものでみたい。

蒲経や葵上や殺生石をいまの気持で味わうことである。これには種々の注釈がいるであろう。

いいかえれば伝統が物をいうであろう。ここにこそ注釈の本当の意味があろう。注釈がさきにでてはいけないとはいうまでもあるまい。

さて、こんなことなどおはなししてしたり顔をするのは、やはり野狐禅のたぐいかもしれません。

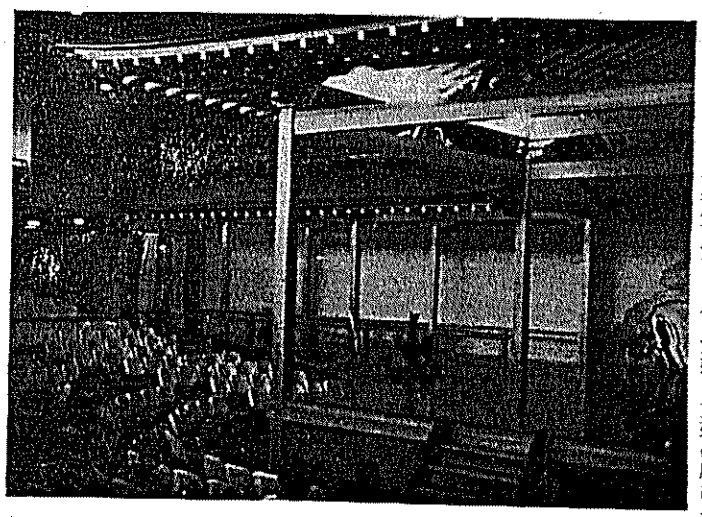
（二四、七、二一）

橋がかりについて

橋がかりの長さは一定していないが、橋がかりには切幕（揚幕）がある。揚幕は普通観客席から見えるが、この幕が揚げられる前に囃子方がまず第一番に笛、小鼓、大鼓、太鼓の順に一定の間隔を保って片幕（幕の端の方を少しあける）で出るのである。シテ、ワキ、狂言、等は本幕といって全部幕を揚げて出るのである。橋がかりには両側に勾欄があり、同じ間隔で柱がある。この柱は通常二本ずつであるが敷舞台の場合には省略されている。橋がかりの外側には白州があり、三本の若松が、植えてあり、舞台の方から一ノ松、二ノ松、三ノ松とよばれている。シテ方の立居振舞になくてはならぬ目標となるのである。又反対側の勾欄の前にも表側と同様に松があるのが本当であるが、今は省略されている。一の松と二の松の後の床下に大きいつぼ（かめ）が置いてあり、足拍子の音響効果をねらったものである。舞台の床の下にも八個の壺（かめ）が入れてある。

橋がかりは能を構成する舞台建築の中で非常な重要味を持っており、歌舞伎のせり上りもこれを真似して作ったことが能舞台の橋がかりと考えられる。

つくりものについて先に書いたことがあるが、能楽殿の作り物の標本ケースの中に喜多流の作り物が入れてないのが今度本紙編集同人の二井栄逸師が喜多流の作り物に関して、太田一三氏に教えられたことを聞いて太田氏もこれを感謝しておられたことは重ね〜熱田神宮能楽殿のため喜ばしいことといわねばならぬ。（写真は熱田神宮能楽殿舞台の橋がかり）H生



観能には観能の心がけを

（声）

石原豊蔵

熱田神宮内、能楽殿を訪れるのを唯一の楽しみにしてるい能楽愛好者の一人です。演能の際、観客の態度について一言申上げます。

第一、気になる婦人のおしゃべり。この間も、私の席の右側へお二人のご婦人が坐られるなり口をひらき舞台そっちのけの大熱弁はじめのうちは周囲を遠慮してかの小声でしたが、果てはわれを忘れて、シテをしのぐばかりの大声。第二、アマチュアカメラマンの態度。気をいれて観ている前で、遠慮会釈もなく立ちはだかりパチリパチリ。気を殺がれることおびたゞしい。第三、子供さんの無邪気なの走り廻り。第四、演能中の出入りや、観客の前の行き来に無神経なこと、観能には観能の心がけがほしいものです。

八月のテレビ ラジオ 案内

NHK全国放送

◎ラジオ（第二）

▽六日（日）午前八時〜九時 謡曲、観世流「融」（坂井音次郎△十三日（日）午前八時〜九時、謡曲喜多流「小袖曽我」（金子五郎）

△二十日（日）午前八時〜九時、謡曲、観世流「江口」（藤井久雄）

△二十七日（日）午前八時〜九時、謡曲、宝生流「実盛」（宝生英雄）△六、十三、二十、二十七日（日）午後十一時〜十二時 日本音楽道しるべ「亡霊を扱った邦楽」（一〜五）横道万里雄ほか

◎テレビ（総合）

△二十七日（日）午後三時〜三時三十分、日本の美（カラー）

△番組の変更することがあります。ご了承ください。

暑中御伺

株式会社 トモエ硝子製造所

附祝言

（終了九時頃）

（能）小袖曽我

仕舞 花筐 内藤泰二

（狂）杜若 有賀滋子

（狂）玉之段 加藤良久

前田茂穂

占田定男 福井啓次郎 藤田昭彦

（狂）土蜘蛛 大川翠奈子

千筋之伝 伊藤鉄之進

間 高安滋郎 高安寿彦

高安勝久 佐藤友彦

井上祐一

覚一 鬼頭八郎

後藤孝一郎 覚三男

附祝言

（能）花筐 藤井久雄

殺生石 山本真義

山姥 柴田初太郎

地謡 吉田定男 田鍋惣一郎 稲生芳雄 後藤契雲 竹内六郎 野崎太郎 鬼頭季信 高野瀬透 山本真義 林甲子夫

鬼頭五朗氏逝去

能楽の友社編集同人、鬼頭五朗師はかねて病気療養中のところ薬石効なく七月九日午前一時永眠された。享年七十三才。告別式は十一日午前十時から十一時まで愛知県中島郡平和町の自宅で営まれ、霊前には能楽界はじめ花輪、供花がおくられ悲しみのうちにも盛儀であった。

暑中御見舞申上げます

幸友会 福井啓次郎 福井良久

喜多流 広田健 山本才

九州高安会 飯富祥雲

やるまい会 野村又三郎

喜栄会 二井栄逸

名古屋 風韻会 殿島修二

たなびき会 田鍋惣一郎

金剛厳 金剛永謹

山本敬一郎 岐阜市岩田坂十二組 TEL (9) 七一四四番

高安滋郎 西村弘敬 西村欽也

吟風会 伊藤鉄之進 大川嘉奈子

雙雲会 内藤泰二

竹韻会 杉村竹翠

演能写真 ウシマド写真工房 京都市上京区北野上七軒 TEL (4) 一三四一番

笛一筋に六十年
「能管」を語る
笛師・菊田東穂氏

能管の歴史は古い。しかも能管は、日本独特の楽器である。この能管の伝統を今日にいかし、日本で稀少的な笛師として、その道一筋に打ちこむ笛つくり菊田東穂氏は、名古屋市の隠れた大きな存在である。本紙では「能管」について特にインタビューし、その一部を皆様におおくり致します。

一本でも名管を

問　先生が笛をつくるということは父祖相伝のものですか、又は先生自身が始められたものでしょうか。

答　父祖伝来のものです。

問　熱田のお宮とは深い因縁があるんですね。

答　勿論深い因縁が有ります。代々神宮の社家ですから、先祖はお宮のご饌米を頂いていたのです。ところが明治維新の時に今まで世襲制であった神主も、（当時約百六十軒ぐらいの社家も）それ〳〵に適当な商売を始めました。

その時丁度私の祖父が笛が好きでしたので、神主で暇が有ったのを利用し物好きに作っていたのを商売に考えたのです。

五才位の時の覚えですが、玄関を臨時に店先に直し、笛屋と云ふ商売屋になりました

問　笛を作る人は数えられる程少なかったのですか。

答　少いですね、祭礼が有ると土地の好きな人が竹に穴をあけて吹く程度で、東京と京都にあっただけで私が学校をおりてから修業の為東京の向田と云う代々楽器屋をされていた店へ預けられこゝで笛作りをけいこをしました。

問　向田の家は今でもありますか

答　今はありません。向田家は絶家となり兄弟子の鈴木氏も一昨年亡くなられました。この方は雅楽器を作られました。

問　能管と篠笛は作り方も違うのですか。通常篠笛は長唄、清元、常盤津などに使われるのでないでしょうか。

答　そうです。歌舞伎連中の人も持って居られますし、踊りにも使います。

問　能管をつくる技術と経済的な問題に相当むつかしい点がある様に感じますが……。

答　こう云う物好きな仕事は、今流に云えば、割が合わぬ仕事ですから計算づくでは駄目なんです。名古屋の薩田流の家元、東西の家元、それに雅楽器、宮内庁の笛等幾十年もの後世に楽しんで愛用して頂けるのを何よりの喜びとして仕事に打込んでいるのです。

問　先生が笛に打ち込む信念についてのお考えを……

答　後世に名管と云われる作品が一本でも出来ればと精進しています

問　今後の後継者の問題が出て来ますね。

答　私自身息子にどうしてもこの仕事は続けさせ度いと思っていますが、何しろ半分物好きの仕事で大学校を出たばかりの者に、割りの合わない仕事を無理じいする事も心なきかず、皆様からは後継者は[illegible]

問　先生が笛に打ち込む信念についてのお考えを……

答　後世に名管と云われる作品が一本でも出来ればと精進していいのかと云われ本人の気持から進んでくれるのを望んでいたところ幸いその気になってくれ目下一生懸命覚えかかっております。製作学一年生です。

問　自分で駄作は判りますか

答　ある程度の感で判ります。

問　吹く方と作る人との問題について

答　吹く方と作る者との話し合いで製作するのが最適と思われます

問　笛一本作るのでも心の籠っているというか大変ですね。この辺で先生の苦労話をどうかお願いします。

答　良質の材料を選択、仕事が気候に適していること、時間を制限されぬこと、以上のほかに気分が良ければ最適。

問　能管の竹はどんな竹を使うんですか。

答　古い女竹……。

問　乾燥度の問題が出て来ますが

答　そうです。竹が乾燥する程良いのです。切りたての竹ですと節を抜いて、風通しよくすると縮んでくる。竹の目が細くなる、細くなれば堅くなったわけです。乾燥した竹は端をたたけばチンチンという音がします。それだけで楽器になっているんですね。それで笛を作ります。

伝統に練りぬかれて完成

問　笛の穴の間隔についておたずねしますが、直径が全部違いますがこれはどういうわけですか。

答　これは昔から決っており、変えれば音色が変わります。何分長い伝統で練りぬかれ完成されたものです。手穴の大きさですが、穴も上下一緒の大きさにしたならば見苦しく、音色だけでなく美術的な面も加味しているのです。

問　笛の中の構造はどうなっておるのですか。

答　吹口の上部を頭といいますが頭の方に蠟をつめ、鉛を入れて或る程度の目方をきめてあります。

問　頭の所に金物の紋を入れるのは邪道でないでしょうか。

答　頭へは名自好んだ金物を入れます。山車に使う笛には魔除けの為に金欄を入れることもあります[illegible]意味でないでしょうか。能管もその点で清浄を意味するものです。

良い笛ほど遠音をさす

問　昔から笛の遠音を非常に良いものといわれますが。

答　能管は遠い所で聞いてはじめて良否が分かります。良い笛は遠音がさします。代表的な青葉の笛は龍笛（おうてき）です。

問　能管は一定の長さがありますか。

答　能管は一尺二寸ですが、私は昔の通り作っております。

問　能管について、「気に入った笛」「気に入らない笛」というものはあるんですか……

答　先生方の好みに依ります。

問　篠笛は一本の竹ですか。

答　勿論一本の竹です。

問　能管はつないであるのですか

答　吹口の上でつなぎます。吹口より下はくだを入れる為に切断します。

日本独自の能管

問　何故能管は管を入れて、龍笛は入れないのですか。

答　調子の関係です。雅楽は中国朝鮮から入って来たものです。しかし能管は能楽の創始者達が雅楽の笛ではうつらないということで考えられたものだと思います。篠が有るためにヒシギが出るので龍笛では出ません。

問　ヒシギとは……

答　ピーッという音色です。

問　神楽笛とは……

答　神楽笛は天の岩戸で始めて神楽を舞った時の笛で六穴です。日本最初の笛です。

問　能管の使用について

答　能管は能楽、長唄、山車のはやしに主として使われます。

問　石で作った笛について

答　私は正倉院で修理のため石の笛に触れましたが、音色は竹笛と大差ありません。ろう石でした。

笛は女性的な丸味

問　笛について各地を学術的に研究されたことがありますか。

答　とにかく今まで多忙のために見ていませんが、見聞を広めたいと思っています。

問　能管の形について

答　龍笛より能管が作られ一見よく似ているように見受けられますが、姿は龍笛の男性的なのに対し能管は女性的に丸味を帯び、巻くもの「樺」或いは藤も太口に対し細いものを巻きます。

問　樺（桜の皮）とかウルシが音色に影響しますか。

答　します。つまりタガがはめてあるのですから……巻いてあるのと巻いてないとでは違います。またうるしが塗ってあれば、音のすべりが良いのです。最近では音色も写真に撮れる時代ですから、調べれば違うと思います。

問　能管の銘は何処に入っているのですか……。

答　頭のせみの所に焼印してあるのもありますが、金泥で書いたのもあります。

問　能管と龍笛と篠笛の見分け方

答　能管は下の方からのぞくと胴の間に管の入っているのが見えます。また手穴及び吹き口に「くまどり」がしてあります。龍笛及び篠笛の胴間はそのまゝです。

問　竹は方円のものですか、丸いものですか。

答　仲々丸いのはありません。少々楕円形です。

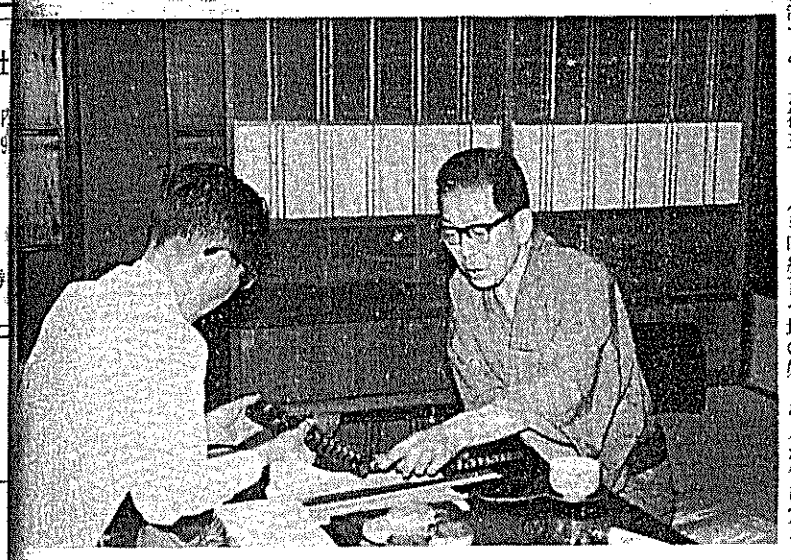
問　笛の急所は何処にあるのでしょう。

答　吹口と胴間に有ります。

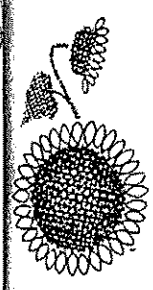
問　現在笛の種類はどれだけあるでしょう。

答　約二百種類有ります。

――どうも色々有難うございました。



写真＝〝能管は日本で完成された独特の楽器です〟と語る菊田東穂氏（右）手前は花木編集同人



菊田東穂氏略歴

明治三十五年二代東穂長男として熱田に出生。大正十四年日本大学専門部政経科卒業。

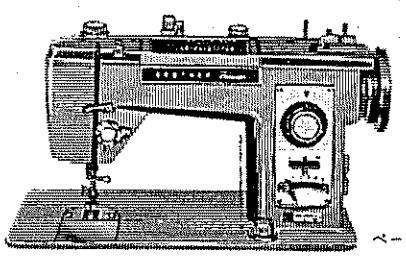
同年向田三籟氏に楽器製作のため師事寄留。以来今日まで製作に従事。

みかど　出張パーティーは是非みかどへ

歓送迎会・新築披露
祝賀会・御宴会

多少に拘らず御申し付け下さい。
係が直ちに御伺致しします。
パーティー専用電話（971）5654

愛知県文化会館　みかど　電話(971)5631



＊ジグザグミシン時代を
代表する
ブラザーペースセッター

ベースセッター685

BROTHER
ブラザー

ブラザー工業株式会社・ブラザーミシン販売株式会社

うなぎ
大友
ナゴヤ納屋橋畔（231）2709・6818
名鉄百貨店七階　のれん茶屋

株式会社
東亜木工所
代表取締役　山田　茂
名古屋市昭和区江越町一ノ三
電話代表（871）0291

編集同人（五十音順）
伊藤鉄之進　柴田初太郎　殿島　修二
井上松次郎　杉村　竹翠　内藤　泰二
梅田　邦久　高安　滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田　秀雄　二井　栄逸

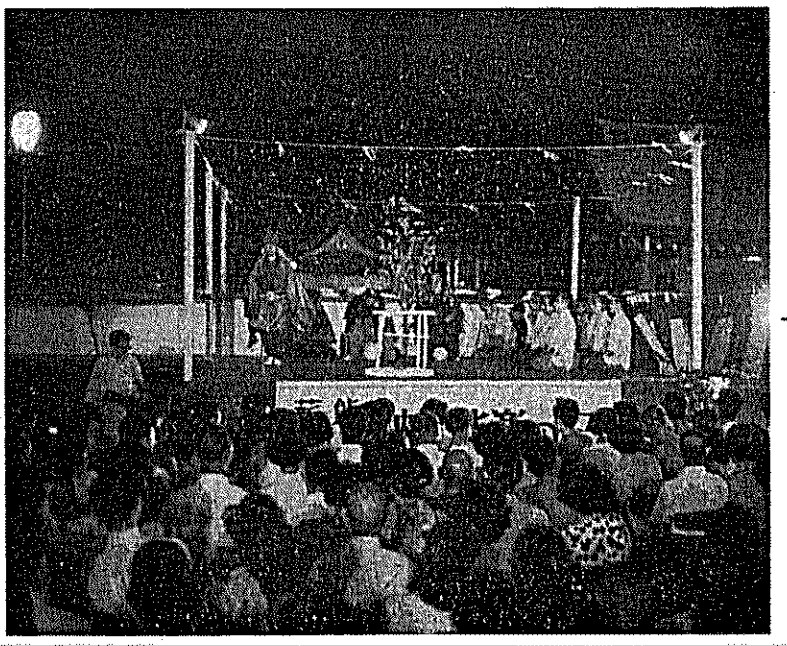
能樂の友

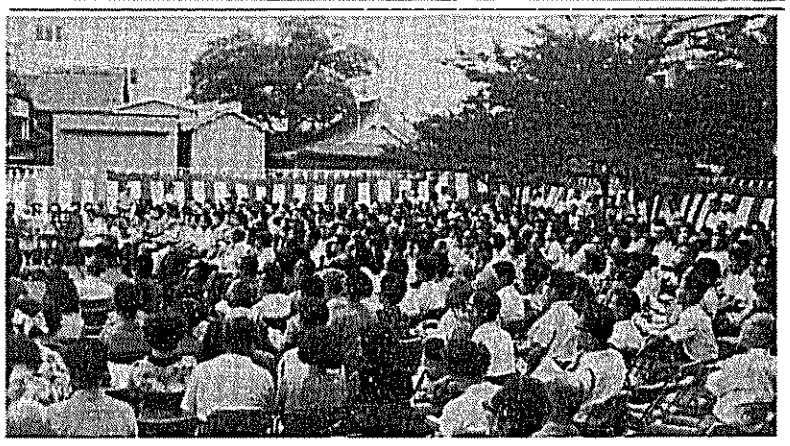
題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビル
電話（211）1019・1974（231）6727・
振替口座　名古屋36393番
購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円
一部　20円
能楽の友紙のご購読　能の有料会員
熱田神宮能楽殿　電話（671）2912番
問合せ願います。

第二回「薪能」盛会

境内に繰り展げる熱演





市民納涼能楽の夕べとして期待をあつめた第二回「薪能」は、好天に恵まれて去る八月五日午後五時から熱田神宮能楽殿で午後九時半で終了した。

シテ方との掛け合いは、中合せをしますからよいですが、しかしものによっては非常に食い違うこともあります。その点は直してやる場合もあります。

に受好者は続続と来会、一番一番に夏の興趣をもりあげた。とくに杉戸名古屋市長が市民文化の発展に大きな意義がある薪能によせて来会者にあいさつ。能「小袖曽我」「胡蝶」仕舞、一調、狂言「雷」についで、切能「土蜘蛛」

松つめていると〝芸は盆栽の松では、いけない。鏡板の松のごとく太く老生せよ〟という名人の言葉にあるとおり、芸への意欲がこの鏡板、側鏡板にしのばれる。

この次は四本柱に[illegible]

名古屋　36393

能楽の友社振替口座番号

能楽の友社の郵便振替口座番号が決まりました。今後購読のお申込み、ご送金の節は、払込料金加入者負担（能楽の友社負担）払込用紙をご送付致しますのでどうかご利用下さい。

うめた来会者〕

景清の「スケッチ」と能の事

京都　仙田雪山子画

平家の武者上総悪七兵衛景清（池の大納言平頼盛の自代）は勇猛を以て知られていたが、壇の浦の戦に破れたる後九州日向の国宮崎の浦に流浪の身となり盲目落魄の惨（みじめ）な境界となっていたところへ、景清が若かりし時尾張の熱田にて遊女と契りて出来た人丸と申す娘が遥々と尋ね来て親子の対面をするという場面を表わしたのが景清の能である。

景清は人の世の無常を悟ってはいたが人の親としてまた人間の弱味として怒り悲しみ誇りなどと様々の心境を叙述のうちに型と心持ちで表現する曲で、自然老巧な演者でなければ出来難い曲である。またこの能に用いられる面は一面物と申してこの能に限って用うる特別の面で観世、金剛では顎の無いものをつけ幾分柔和の感じであり、また宝生、喜多、金春では顎のある面を用いるがこれはその流儀によって景清に対する人格の解釈主張の相違であろうと考える。名古屋で景清の能が演ぜられた古い記録では元禄四年十一月十三日（今より二百七十六年前）シテ田中源之丞、ワキ西村庄兵衛で勤められとある。この田中源之丞という人は達者な人と見えて其日の能九番の内五番を一人で勤められた由で景清の外に乱、放生川、湯谷、唐船を勤めたと記録されている。

この曲の作者は能本作者註文二百十番目録には世阿弥作となっているが異説もあるようである。平家物語に景清が三保谷十郎の鍛（しころ）を掴んで（三面六段目につづく）

風韻会能

とき　十月一日（日曜）午前九時三十分始
ところ　熱田神宮能楽殿

竹生島　素謡　高橋香代子　伊藤しゅん　田中　敏
蟬丸　吟　節田静枝　古井佐季　平田久子
駒之段　独吟　福生清子
百万　連吟　金丸洋子　長谷川雄子
屋島　仕舞　天野登茂子
班女　舞　佐野正三　守部啓子
笹之段　放下僧　川村鉄雄
鵜飼　長屋実
藤戸　長谷川潤
鉄輪　伊勢信雄
野宮　連吟　鹿田豊子　石野ひさ
弱法師　森田保男　沢村啓二
松虫　独謡　日比大吉郎　福井啓次郎
葵上　素謡　大井政子　横尾みどり
二人静　舞　田中美子　林千種
龍田　唯　殿島博子　殿島満里子
清経　能　福間昌作　吉田定男　村瀬恒史　福井啓次郎　河村総一郎　笈川三男　藤田昭彦　助川竜夫
三木美智子　水野雅子　後見　河村鉦二　大槻秀夫
西村欽也　言　佐藤友彦
山口　鉦一亮　笈三男
菊慈童　言　佐藤秀雄　井上松次郎　河村総一郎　笈山口義郎
山姥　言　奥田　薫　高井敏一　笈三男
富士道周明　武田孝子　助川竜夫　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
船弁慶　中原渡辺節子　高安滋郎　高安勝久　井上祐一　後見　殿島修二　泉嘉夫
間　狂言　佐藤友彦
勧進帳　一調　赤間鎮雄　田鍋惣一郎　吉田定男　後藤孝一郎　笈三男　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
通小町　高田みね子　佐藤アヤ子　笈鍋惣一郎　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　山口義郎　鬼頭季信
砧　神戸鉄次
野守　番外能　殿島修二
井筒　物着　西村弘敬　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
後見　田村大槻秀夫　勇

古典尊重の精神

前田満穂

現代はインスタント時代である。何でもてっとり早くできるもの、わかるものでなくては受けつけてくれない。

芸能の世界も、もちろん例外ではない。芝居より映画、映画よりテレビ…要するに、ものぐさがいばって通る世の中である。されば日本演劇の古典歌舞伎ですら、ひたすら大衆のお気に召すよう工夫をこらして、現代的生命をたもとうとする。このために歌舞伎の正統的演技が乱れようが、ゆがもうが「知ったこっちゃあねえ」ということになりかねない有様である。

そうしたヒズミを是正しようと生れたのが国立劇場であるはずだが、商業劇場の舞台でヒズミ慣れた役者達が、国立劇場の舞台だからとて、そう簡単に本格にもどれるはずもなく、乱れ放題の御時世に多少のブレーキがかかれば上々というところであろう。

そこへいくと、能はまことに痛快である。このインスタント時代というに、頭から妥協を拒否しているではないか。わからない人はわからんでようしい。わかる人だけわかってくれればようしいと、素人には退屈きわまる長丁場をエンエンと展開してケロリとしている。まことに立派なご見識と、恐れ入り敬意を表するにやぶさかでない。

もっとも能は古典芸能としては歌舞伎の先輩であり、徳川三百年の間に洗い上げられ雑物をすっかり洗い落し、極上の沢庵のように形も味もコチコチに圧縮されてしまっているから、いまさらどういじりようがないのも事実である。歌舞伎のように融通のきく芸能でないことも確かだし、また謡曲愛好家の厚く広い層をもち、わからない人をわからせてまで、ひっぱって来なければやっていけないものでもない等々…立派な見識をたもち得る条件に恵まれていることも、また争えぬ事実だが…。

いずれにしても能が商業主義にわずらわされること少く（少くとも歌舞伎にくらべ）古典芸能の最長老らしく〝老いの一徹〟をつらぬいているところはまことに頼もしい限りである。それにまた妙なもので、向う（能）から、ここまで高飛車に出られると、こちら（大衆）はついついヘヘッとなり「さぞかしご立派なものでございましょうな」と、本を読んだり研究をしたり、準備をこらしてお能拝見にまかり出る気になるから不思議である。映画やテレビ、歌謡曲のお客から見れば、バカバカしい難行苦行を強いられた上、高い料金？を払って退屈を買わされ、それを有難がっている能ファンの格好なぞ、とんだ気ちがい沙汰に写るかも知れないが、しかし、古典芸能の鑑賞とは、そもそもこういうものなのである。古典とは楽しむものではなく、苦しむものと覚えたり…である。能ファンこそは古典鑑賞の正道を行くチャンピオンである。

しかしそれだけに能楽師の責任は重大である。お客の方は数百年のよわいを重ね、みがきのかかった東洋芸術の真髄を味うつもりでやって来る、古典鑑賞のチャンピオンである。歌舞伎の観客にくらべると、さらに一段水準の高い教養人ぞろいだ。彼らの期待を裏切ることの罪深さを能楽師はキモに銘ずべきだ。期待を裏切るとは何か？。古典尊重の精神を欠くこと、これだ。古典は一字一句、一挙手一投足、正しくおろそかにせずガッチリと演じるところに生命がある。面白さがある。

古法を守って面白くないのは演出演技のつたなきによるもので、演出演技の老朽によるものではない。たとえ演出が老朽していたとしても、それを若がえらせよみがえらせ、新しい生命を与えるのが古典芸能人の使命であろう。それを何ぞや、型が古いからねとか、演出が当世向きでないからねとか…とかく芸のまずい連中に限って、自分の責任を型や演出に押しつけたがる。

能は古典中の古典だ。素人より先きに玄人が、古典尊重の精神をおろそかにするようでどうなるか。わからん人はわからんでようしい…の非妥協的な孤高の美も、古典尊重の裏付けがなくては張子のトラ、たのもしい老いの一徹もガンコ一徹に終ってしまおう。こんなことをいうと、なにを素人が…とバカにされるかも知れないが、素人をバカにする玄人を私は尊敬しない。そんな芸能人は玄人であっても芸術家ではない。本当の意味の職人ですらない。

玄芸とは素人を感動させる芸をいう。素人に「お素人」とおの字をつけて敬遠し、玄人仲間の批評ばかりを気にしている芸能人がいかに多いことか。そんなところに古典尊重の精神などあるはずがない。そこには生命を失った能の形骸があるだけだ。能までインスタントになってしまっては、まじめな教養人の夢は消えてしまう。インスタント時代へのレジスタンス、その頂点に能がある。あだやおろそかに思ってもらっては困ります。

（一面「景清」解説のつづき）引きちぎった武勇の程は知られているが壇の浦の合戦の戦場から如何にして逃れ出たかまた後九州へ下向した事などは長門本平家物語にも「例の生き上手」とのみ記載ある外確たるものはないように思う。鎌倉、熱田、宮崎などの各地に色々の伝説はあるかも知れないが、何分にも土地の改変などにて旧跡古蹟は追々と変貌消滅するのは誠に遺憾の次第である。

なお義朝の研究は詳しくは雑誌十一月号に掲載せられる予定でありますので同誌にて御参照下さい。

九州で朝日五流能

社団法人能楽協会、朝日新聞社主催の第十二回朝日五流能が、去る八月二十日福岡電気ホールで催された。

第一部は能「阿漕」シテ喜多実、ワキ高安滅郎「井筒」シテ金春信高、ワキ宝生弥一、「芦刈」シテ梅若六郎、シテツレ鷹尾唯吉、ワキ高安滋郎ほか狂言「磁石」仕舞数番、第二部では能「鶴亀」（曲入）シテ宝生九郎、宝生弥一「巻絹」シテ金剛巌、ワキ高安滋郎、「鉄輪」（早鼓）シテ観世元正、ワキ宝生弥一ほか狂言「金藤左衛門」仕舞など五流を競う熱演がくりひろげられた。

月の催能のしおり

大衆能

九月三日（日）午後二時始
於　愛知文化講堂

能（宝生）　俊寛　吉田俊彦　戸田秀雄　内藤泰二
問　高安滋郎　笠　鉱一　佐藤卯三郎　福井啓次郎　鬼頭季信

狂言（金春）　葛城　桜間竜馬　笠田鍋惣太郎　鉱一　助川竜夫　藤田昭彦
（和泉）　唐船　和島富太郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　大森英三郎

能（観世）　杜若　西村欽也　吉田定男　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
恋之舞

狂言（和泉）　班女　観世武雄　笠　鉱一　和泉保之　野村又三郎　井上松次郎　青木恒治　藤田昭彦　井上礼之助
狂言　「三人片輪」

狂言（金春）　船弁慶　大塚一二　吉田定男　福井良久　池田茂　大森英三郎

能（金春）　小鍛冶　高安滋郎　河村総一郎　笠　野崎太郎　田鍋洋一　三男
問　高安勝久　佐藤秀雄

重要無形文化財綜合指定
社団法人日本能楽会　名古屋公演

九月十五日（老人の日）午後一時始
於　熱田神宮能楽殿

狂言（和泉）　淡路　金春信高　飯島佐六　住駒陽介　鬼頭八郎　森田光春
能（観世流）　仕舞　松風　松本恵雄　宝生英雄　岡治郎右衛門　亀井俊雄　田鍋惣太郎　杉市太郎
難返し　見留

狂言　子盗人　佐藤卯三郎　三宅藤九郎　和泉保之　井上礼之助
狂言　仕舞　安宅　金剛巌（喜多流）（宝生流）　飯島佐六　大倉長十郎　森田光春
狂言　文山賊　観世元正　野村又三郎　井上松次郎　谷口喜代三　田鍋惣一郎　金春惣右衛門　藤田六郎兵衛
能　安達原　高安滋郎　西村欽也　佐藤秀雄
問　主催　後援　社団法人日本能楽会　文化財保護委員会　名古屋支部

観世会定式能

九月十七日（日）正午始
於　熱田神宮能楽殿

能　養老　仕舞　加藤良久
放生川　僧侶　崎道行　有賀滋子
六浦　連吟　芥川秀子　福井道子
西王母　仕舞　飯田新子
胡蝶　素謡　熊沢恵美子　服部紗枝
頼政　謡　林喜右衛門　藤井久雄
源氏供養　藤井久雄　山本真義　高野瀬透

狂言　正尊　柴田収武　林甲子夫　山本真義
起請文　観世寿夫　林喜右衛門
仕舞　江野島　観世寿夫
水無月祓　林喜右衛門
花筐　藤井久雄
殺生石　山本真義
謡　子

能　姥　柴田初太郎　吉田定男　田鍋惣一郎　野崎太郎　鬼頭季信

九月の ラジオ テレビ 案内　NHK全国放送

◎ラジオ（第二）
▽三日（日）午前八時～九時（以下おなじ）謡曲観世流「俊寛」（山階信弘）
▽十日（日）謡曲　観世流「安達原・松虫」（福岡梅若会）
▽十七日（日）謡曲　金剛流「夕顔」（金剛巌）

九月二十四日（日）午前十時半始　於熱田神宮能楽殿

十月八日（日）
本田秀男師追善能

海人　本田光洋　高安滋郎　西村欽也　吉田定男　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　笠　三男
狂言　悪太郎　佐藤卯三郎　河村丘造　井上松次郎
石橋　金春欣三　金春信高　西村弘敬　笠　鉱一　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
連吟　謡子　古式

十月十日（祭）
中部金剛会

第一部（午前九時半始）
舞囃子　第二番
第二部（午後二時半始）
金剛永謹　金剛巌
松風　見留　高安滋郎　笠　鉱一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
狂言　萩大名　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄　豊島
黒塚　自演　西村欽也　高安勝久　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　笠　三男

昭和四十二年十月十五日（日）午前十時半始
山本博之来名三十年記念
別会能番組

於　熱田神宮能楽殿

神歌　素謡　波多野敬　千寿　加藤総兵衛
前後　観世武雄　観世元正　山本真義
賀茂　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣太郎　観世元信　野口伝之輔
狂言　仕舞　佐藤卯三郎　佐藤秀雄
三笑　連吟　竜田　塚本秀雄　丹下三義　殿島修二　久田秀雄　松柳　春日竜神　虫丸
千手　仕舞　竜虎　大江山　小玉鍛冶屋　佐藤太俊　河村鉦二　加藤大太郎　杉村竹翠　柴田収武
三輪　山本博之　高安滋郎　山本孝　福井啓次郎　観世元信　野口伝之輔
白式神神楽　狂言　佐藤卯三郎
鳴子　舞　井上松次郎　井上礼之助　井上拍一

正尊　山本勝一　山本章博　木康夫　春日照喜　西村欽也　山本孝　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
起請文　山本順之　河村和重　千崎隆一

能楽散歩

一つの幻想を書いてみたいと思います。秋の三番目物には、井筒、野宮、定家、松風などいずれも深味のある秀作ばかりだが、やはりまずこの井筒が、なぜかしら秋を偲ぶに一番相応しい。それにはまづ最初、作り物に本物のススキが出されることによるからではあるが。

アシライ笛、ワキ僧が奈良から初瀬に向う、在原寺につく。いし石上なるべし。風ふけば神つ白浪立つた山」云々と舞台中央にでて、下居して合掌。まづこの合掌姿が佳い。ここで井筒のふん囲気がでる。西村弘敬氏の姿は絶品である。シテの面も小面・若女・増・深井などいろいろである。十寸髪も使われる由。「さなきだく「頼むほとけの御手の糸」「松の声のみ聞ゆれど」と進んで場内をしんとさせる。問答。このときのシテの姿はまことに美しい。てんめんとして清純な余韻をひびかせる。「草茫々として露深々と古塚の。真なるかな古の。あとなつかしき景色かな〜」の風景描写となる。これは野宮にも定家の曲にも同巧異曲で用いられ、効果をあげている。心理の陰影よりも抒情性を味わせる。これが幽玄というものであろう。

後シテ。「恥かしや。昔男に移り舞」「花の袖」で序の舞。杜若は太鼓序の舞だがこれには太鼓はない。「月ぞさやけき。〜。月やあらぬ。筒井筒。つついづつ、井筒にかけし」とこのあたり業平菱の長絹姿は、なか〜に艶麗な姿である。

「井筒」の舞台

井筒

野村広二

名古屋市民能楽の夕べ「第二回薪能」私考

昨年名古屋総鎮守・若宮八幡社の五月の大祭が終った時に能楽協会名古屋支部長の田鍋惣太郎師と杉戸清名古屋市長が何かの機会に名古屋で薪能を催したらどうかとお話があったということを田鍋惣一郎師が私に話された時に能楽普及のために非常によいことだと判っているもののまず場所の選定に悩まされた。少くとも神事能だけに地の利の良い若宮八幡社と心できめたが、演者の立場また観能する人を如何に楽しく満足させることができると内心不安な日が続いた。

予定地はテレビ塔の下名、古屋城、白川公園、鶴舞公園、護国神社などが挙げられたが、順調に進まない。また演目も決定しない。ともかく神事奉納の行事であるから、名古屋総鎮守である若宮八幡社なら敷地約一万平方メートル（三千坪）あるので思考の上田鍋惣一郎師に相談して関係者にご説明してご承認を得たものの、名古屋市並に出演者では、よく集って四、五百人位と思われていた。雨天順延で八月の第一土曜日と決定し入場料も三百円均一ということになった。仮設舞台を東向きにしたが、シネラマのネオンが何んとなく気にかかる。しかし、初めての薪能である。きっと千人以上は入れて見せる。寄席でも四、五百円する時代だ。約百人の楽師がこれで集らなかったら不思議だと腹の中で思っても、そうそう強気ばかり言えない。薪能（タキギノウ）といっても一般大衆に解らない。シンノウと呼ぶかも知れないから「たきぎのう」と振仮名を入れねばならぬ。照明、音響装置も考えねばならない。火入れ式も細心の注意を払わねばならない。四本柱をなくするわけにはいかない。私も奈良の興福寺の薪能を見に行ったが電気であかあかとともしている。新聞記者は真正面で写しているのを見た時、こういう方法もあるなと私は感じたが、第一回だけは本当の薪（松の皮）でやって見るべきである。四本柱の下っている紙で風の方向を見るのであるが仮設舞台だけに釘は出ていないか、板は大丈夫かと足拍子を舞台のすみずみまで踏んで見たことであった。

派出所のお巡りさんが〝能を見る方はこんなおとなしい人ですか〟と言われた。ともかく第一回は成功だった。

また今年は第二回目。能三番、一調、狂言一番の盛り沢山、また杉戸市長の挨拶と予定時刻通りに行くだろうか、養老院の老人の慰安もあるなど神経をつかった。

昨年は南から吹く風に悩まされ、今年は北から来る風に悩まされ音響がさっぱり聞えないが、入場人員は昨年の約二割増である。

金剛流の豊島弥左衛門師が、昼頃来られ、「薪能は一年毎に研究されて進歩するものである」と言われた。伝説とか、神話といえども何処かに根拠がある筈である。根拠のない上調子のものはいつか消えていくであろう。

ともかく古典芸術とはいわれるが、そこの中から一歩でも健全なる芸術として生きていく事が大切である。六百年の伝統に生きている芸であり、大衆能の中には難解でなく、安易なものから大衆を動員することが、能を発展させるのであると思っております。

（H生）

恋之舞
班女　観世武雄　筧鉱一　青木恒治　藤田昭彦
三人片輪　和泉保之　野村又三郎　井上松次郎　井上礼之助
船弁慶　大塚一二　吉田定男　福井良久　池田茂　大森英三郎

文山賊　野村又三郎　井上松次郎　大倉長十郎
観世元正
安達原　高安滋郎　西村欽也　佐藤秀雄　谷口喜代三　田鍋惣一郎　金春惣右衛門　藤田六郎兵衛
間　主催 社団法人日本能楽会　後援 文化財保護委員会　能楽愛好会連合会　日本放送協会

江野島
水無月祓　観世寿夫　林喜右衛門
花筐　藤井久雄
殺生石　山本冥義
子　吉田定男　田鍋惣一郎　野崎太郎　鬼頭季信
山姥　柴田初太郎

九月二十四日（日）の能楽殿テレビ案内　NHK全国放送

◎ラジオ（第二）
▽三日（日）午前八時〜九時（以下おなじ）謡曲観世流「俊寛」（山階信弘）
▽十日（日）謡曲　観世流「安達原・松虫」（福岡梅若会）
▽十七日（日）謡曲　金剛流「夕顔」（金剛巌）
▽二十四日（日）謡曲　宝生流「通小町」（近藤礼）喜多流「半蔀」（粟谷新太郎）
▽三・十・十七・二十四日（日）午後十一時〜十二時
日本音楽道しるべ「源氏物語の女性」（一〜四）（田辺秀雄・横道万里雄ほか）
◎テレビ（教育）
▽二十六日（火）午後八時〜九時　教養特集「時代と思想—世阿弥周辺」（林屋辰三郎・金剛巌・（司）山崎正和
▽番組の変更することがあります。ご了承ください。

十月二十九日（日）十一時始
於熱田神宮能楽殿
青陽会能組

囃子　竹内六郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭季信
経正　仕舞　生駒美代子　服部千代
子方　中原揚夫　笠田宜　下川長穂　山田義一　高橋瞭　加賀敏彦　福田幸市　祖父江修一　久田徹二　藤谷政二
総宅　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　筧三男　久田秀雄
結道具
仕舞　石河谷村　佐藤太　柴塚秀　田本雄　収武　河村鉦二　初蔵
狂言　蛸　井上祐一　佐藤友彦　大野弘之
仕舞　柴田初太郎
総半蔀　西村弘敬　加藤丈太郎　筧田鍋惣一郎　鉦一郎　鬼頭季信
狂言　阿漕　上田照也　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　助川龍夫　藤田六郎兵衛

狂言に関する古書・古画等々
お譲り願いたし　御連絡を乞う
名古屋市外豊明町桜ケ丘
井上礼之助
電話〇五六二—七—一七八七

三輪　高安滋郎　山本孝　福井啓次郎　観世元信　野口伝之輔
白式神楽　間　佐藤卯三郎
狂言　鳴子　井上松次郎　井上礼之助　井上祐一
仕舞

正尊　西村欽也　山本孝　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
起請文　山本順之
立ッ　河村和重　千崎陸一
附祝言　間　佐藤友彦
主催　名古屋観衛会　名古屋観世会　朝日新聞社
後援

会員券
指定席　二、〇〇〇円
自由席　一、五〇〇円

名古屋観衛会事務所
名古屋市千種区青柳町五ノ一六
加藤総兵衛
電話名古屋七四一—四六七五番
会員券申込先
出演楽師・能楽殿及び当会事務所

三十年の追想

先代左近先生のお供をして、名古屋へ始めて伺ったのは大正十年頃かと思います。その頃能楽堂は呉服町にありました。

ある日宗家の通小町のツレを勤めたとき幕を上げる人がなく、先代喜之、橋岡久太郎の両名人に幕を上げて頂きました。こんな立派な幕上げで舞台に出たことは始めてのしまいでそれほど楽屋に人が少なかったのです。

その頃能の装束は素封家関戸家で拝借するので装束附けに、佐々木万吉という人があり、総べてこの人に依頼していたのですが、私の熊坂の能に長箙頭巾を忘れ、苦肉の策に万吉が風呂敷を集めて、それらしきものを作ってくれました。これで舞ったわけですが思えば冷汗三斗です。

その後布池に完備した舞台が新築されこの舞台で稽古が始ったわけです。

この度宗家に舞って頂く賀茂の『素働』は常より位が重くそれだけ神威が強くなります。

舞働は囃子にむつかしい習事がありこれが素働といわれる所謂です。

三輪の『白式神々楽』というのは昔御所から片山家に三輪の『誓約』を舞うよう御所望がありましたが、宗家しか舞えぬ重い習だったのでこれに似せて作られた小書です。常はない立廻りがはいり、神楽のカカリがこの小書のみの特殊なものです。面白く楽しんで見て頂けるかと思います。

正尊『起請文』勝一の披きで苦心懸命に勤める事と存じ御期待願います。

何卒御知己御同好お誘い下され御後援御観能を偏えにお願い申し上げます。

山本博之

十月二十二日（日）

名匠鑑賞能

花月　金春信高　福王茂十郎　中村享道　後藤孝一郎　藤田昭彦
班女　梅若六郎　和泉保之　井上松次郎
八句連歌　高安滋郎　中村享道　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
一調　女郎花　観世武雄　観世喜之　大江三郎　田鍋惣太郎
望月　福王茂十郎　中村喜彦　藤田善一　鬼頭喜太郎　筧三男

郷土が生んだ能狂言画の逸材
思い出の門水翁

語る人　伊勢関水氏
聞く人　花木同人

問　門水翁の先祖はいつ頃から末広町にお住いでしたが。

答　伊勢門水の初代は、尾張中島郡の生まれで、元禄十六年に当時松原町といった後の末広町に住みつきまして、朝熊山のモグサを生業としました。

この頃隣家に目薬をひさぐ伊勢屋という店がありましたが、にわかに生国の伊勢へ帰国するとてのれんをそのまま譲り受けまして、以後は伊勢屋と名乗り、代々水野宇右衛門を襲名して今日に及んでおります。

父、門水は安政六年未年の二月二十五日夜五ツ半刻に六代目の長男としてこの世に生をうけ、幼名を代治郎と申しましたが、羊年の天神様の日に生まれて生涯紙と筆でくらしたのも因縁とも申しましょう。

問　狂言はいつ頃に始められましたか。

答　明治元年に十才で日の出町に住む狂言の名手四代目早川幸八師に入門して、まわらぬ舌で習い始めました。当時一介の小商人の小伜が狂言を習うなどは沙汰の限りでしたが、これは祖母の意見で強引に押し付けられたそうで、これが後年、狂言画で世に立つようになった動機になろうなどとは当人も夢さらさら知らぬことでした。

問　門水翁の初舞台はいつでしたか。

答　初舞台の年代などはっきりわかりませんが、明治十四年上園町の〝古春舞台〟に「鏡男」をつとめた記録を見たことがありますが、この時は幼名の代治郎の名を使っておりますが、初舞台ではありません。

門水は二十一才で結婚、母は十六才、翌年に早くも父親に死別して、ここに七代目水野宇右衛門を襲名しました。この長い名を酒落れて、水の上の門なら「門水」と略し、屋号を冠して伊勢としたのが後年はからずも、本名より世間には広く通用したのもおかしい話ですが、私は門水の晩年の子として生まれましたので、門水の狂言三味の明治から大正にかけての盛期のことは私が物心もつかず、まして生来無口の門水から聞くはずもなく、古い番組や文献も戦災で灰となりました今日、思い出すよすがもなく残念に思っております。

なお明治三十五年、自宅の裏庭に定寸法の破風造りの能舞台を新築、鳳友舞台と名づけ望まるるまま良家の子弟などに狂言を教えました。鏡板には、当時第一画人木村金秋、織田杏斉両画伯の合作でしたが、この舞台は大正の始めに取りこわしています。

明治四十四年京都本願寺宗祖六百五十年遠忌にはるばる出向いて末広加利を演じ、翌年には東京九段の行啓能にも狂言を一番つとめています。昭和三年御大礼の節、徳川邸に御仮泊の秩父宮両殿下に唐人角力を御覧にいれている。

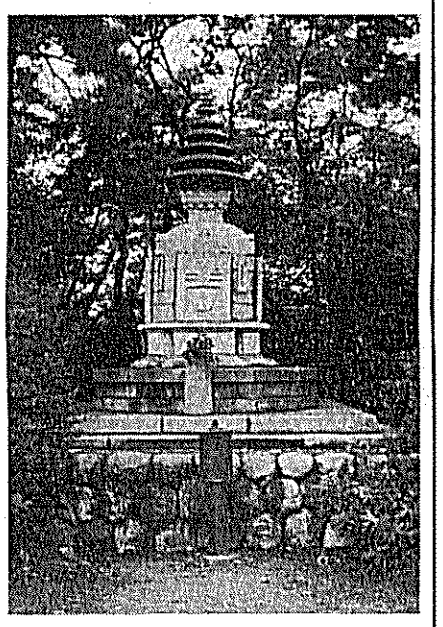
問　門水翁の本領能狂言画について聞かせて下さい。

答　画は師匠も流儀もありません。我流ですが随分若いころからひまをぬすんで模写に明け暮れて自然に筆法をあみ出したものらしく、その天分は十九才の作と銘のある極彩色の有機模様の唐紙を残していますのをみても、すでにこの頃から芽を出しかけております。はじめて世に公開したのはずっと後の明治四十年鳳友画会を催して能狂言画を尺二絹本にしたため、西別院を会場として大画会を催したのが始まりです。この時の会員は七百余名をこえて、誰よりも門水本人が目を丸くして驚いたと聞いております。

以後破竹の勢いで画境も円熟して地方に行脚、画会を催しその足跡は近県はもちろん東西各地にも及びました。

自ら演じ、自ら画くこと故、装束、装情に狂いなく、狂言画をもっぱらにしたのです。

大正八年には当名古屋市で遠忌記念画会を催し、紅白と華づくしで徹底をしました。また昭和四年には、金婚記念高砂画会を催し、金尽しで奇抜な趣向をとらしましたが、今後こんな風流男が世に出るであろうかと人々をあきれさせたものです。



問　お酒落会はいつの頃のことですか。

答　明治二十年同気の奇人大口六兵衛とはかり、お酒落会を創設して同志の変りものをあつめて阿房の限りをつくし、花に紅葉にうかれた風流話しは、先年遺稿と記録をまとめて「お酒落伝」としてまとめておきました故、ご覧の方も多いと存じます。

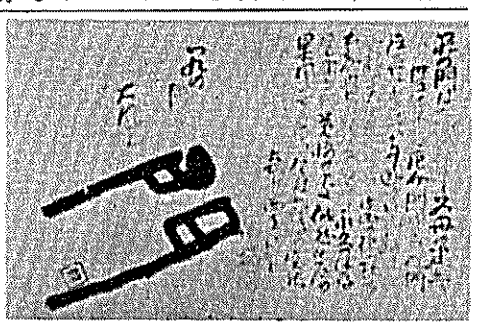
門水はまた文才にも長じ、ものした狂歌も多く、面白い紀行文や新作狂言に舞踊の作詞などもやってのけました。

問　お祭り狂としての門水翁は。

答　門水の祭り好きは、町有の黒舟車に初乗り以来のしみつきで、明治四十二年には、とぼしい資料をたどって末広町話を発行しています。

また明治四十三年名古屋開府三百年祭には、この時とばかりに散在する山車をもれなく調査して「名古屋まつり」を発行して三版まで重ねましたが、計らず今日貴重な文献として残しました地下の門水の得意や計り知れません。

この年名古屋に共進会開催の折、場内に三角亭を好みました。



根も窓も畳も柱も壁草盆から茶道具一切三角で、新調した御手前の娘さんも三角顔を集め、遣い棚に三略巻という長い三尽しの戯文をしたためました。

昭和七年一月始めかりそめの病がもとで床に臥し、同月十五日夜半七十四才を一期としてこの世を去りました。

戒名を沢道庵伊勢門水居士といい、病中に朱達磨をかいたのが絶筆となりました。

辞世に

「門水の門に非常の大風に
たをれて息の出入ゆるさず」

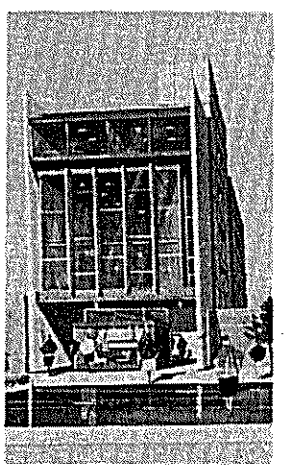
（写真）（上）昭和四年八事興正寺に筆塔を建立、除幕式当日の伊勢門水翁夫妻
（下右）門水翁をしのぶ現在の筆塔
（下左）門水翁覚悟の絵はがき

放送

▽九月十日NHK教育テレビ午後4・30
▽九月十五日NHK教育テレビ10:00～10:45記録映画「能」

宝生流宗家本
わんや書店
東京都千代田区神田神保町3－9
電話（263）6771代表
小売部　東京都中央区銀座8－4（金春ビル）
電話（571）0514
振替東京41663

観世流・金剛流
宗家本発行元
合資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1　電話(291)2488－9　振替東京3552
京都市中京区二条通麩屋町東入　電話(23)1990　振替京都113

あなたに心をこめておおくりする……
冨士道の婚礼道具

III 家具のふじみち
本社　名古屋市中区栄3丁目34番40号　（新館完成・11月オープン）
ショールーム　TEL(241)3367・1453
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL(05613)2－1178

日本通運株式會社

京風料理
晴美
名古屋市千種区内山町（ふみたかビル）
電話741－0064

毎月一回発行）
楽の友社
目16－10（花木ビル内
1974（231）6727・289
36393番
1年　200円
1年　380円
20円
売、催能の有料会員券
話（671）2912番へ

当地
日本能楽会能

秋の催能シーズン近づく

=朝日新聞社提供

演能案内
大衆能
九月三日（日）午後二時始

編集同人（五十音順）
伊藤鉄之進　柴田初太郎　殿島　修二
井上松次郎　杉村　竹翠　内藤　泰二
梅田　邦久　高安　滋郎　野村又三郎
加野昭二郎　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田　秀雄　二井　栄逸

能楽の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄二丁目16—10（花木ビル
電話（211）1019・1974（231）6727・2
振替口座　名古屋36393番
購読料　1年　200円
郵送の場合　1年　380円
一部　20円
能楽の友紙のご購読及催能の有料会員
熱田神宮能楽殿　電話（671）2912番へ
合せ願います。

昭和42年9月15日 日本能楽会名古屋公演（第一回）

盛会の名古屋初公演

重要無形文化財 能楽総合指定 日本能楽会催能

日本能楽会の催能は、毎年秋、東京で一回、地方で一回だけ行なわれ、地方では一昨年大阪、昨年京都の公演につづいて、ことし名古屋で開かれたもので、次回の名古屋開催は三年後、能楽を正しく保存し、その振興を図るうえで大きな役割をもつものであったと同時に、名古屋の能楽界にとってきわめて意義ある催能であった。

名古屋公演にあたって沼呼雨氏は「能の歴史」の中に、重要無形文化財「能」公演という一つの形態が生まれたのは一昨年のことである。一昨年は東京、それから大阪、京都につづいてことしは名古屋公演がもたれた。昔から芸所と公認されるほど、東、西の名匠が最も恐れをなす、厳しい鑑賞眼をもつ中京だけに、そこで演じられる能は「中京の能」としての誇りをもっていることは間違いない。しかし余りに東西の名匠の交流が激しいために、名古屋の自主性をとなえることは、幾分なおざりになっていたかの感があった。それが今回の日本能楽会名古屋公演によって、初めて東京、大阪、京都とともに名古屋というものが大きくクローズアップされ、自主性を主張する立場におかれたことは歴視にたえない。

これだけの楽師をもつ上に、なおつづく若手がいるということは名古屋能楽界の喜びばかりでなく中京能楽会というものを、一つの固有名詞にすることができる可能性をみる。いわば今回の公演は、中京の能に新しい生命が宿ったといえる」と激励の辞を寄せていたが、初の開催だけに役員の苦労も一入ではなかったとはいえ、さらに名古屋の能楽界の発展の節としたいものである、

◉お知らせ◉

本紙の発行がおくれ、読者の方々に大変ご迷惑をおかけしております。催能番組案内の都合等から本号より十日発行と致します。どうか御了解下さい。

三井寺　京都・仙田雪山子画

三井寺雑感

中村保雄

三井寺の鐘のひびきは、この頃特有の西風にのって湖面をわたってゆく。折しも中秋の名月、時にはげしく、時に弱く、また訴えるが如く、百八煩悩の迷いよさめよさめよとつきまくる。鐘の音は子の行方を探す狂乱の声であろうか。綱をとり拍子を踏む、その足拍子は鐘をつぐ狂女の心の表現であろう。三井晩鐘の名利と、子を探してさまよう狂女とを組合せ、品格高い曲となっている。

子故に迷う母親とか、人生経験をへた女の役柄には、曲見とか深井がうってつけの面である。額やや顎がややつき出て中びくの顔は、たるみ加減の頬の肉付にエクボ状を示し、中年の深味を感じさせている。

一般的には曲見の方が深井よりやや老けた感じがするが、実際は曲見にも深井にも老けめのものもあれば若いものもあり、そのどれをかけるかによって、シテの演じ方に多少の差があるものである。

最近、余情のある面の心を感じとって、そこまで演じわけているシテがどれだけいるだろうか。少々淋しい気がしないでもない。

禅鳳は「月も望間になきはいやにて候」と珠光にいわれて「どれ面白く候」と答えている。能の幽玄の余情も、ここにあるわけであるが……。（筆者は能面研究家）

名古屋 36393

能楽の友社振替口座番号

能楽の友社の郵便振替口座番号が決まりました。今後購読のお申込み、ご送金の節は、払込料金加入者負担（能楽の友社負担）払込用紙をご送付致しますのでどうかご利用下さい。

【編集記】

予告号、第一、二号を昨年出版し、創刊号より十号を迎え、内容の充実したものを六ケ月で大体見通しをとあらゆる文献を探し、又色々の人の意見を聞き、編集同人を増やしてみたり、又減らして内容の再検討と毎月多忙な人々を集合していますが、口で言うことは案外楽であるが、たった四頁の紙面にて「能とは何ぞや」に取り組んでる編集同人の苦労は並大ていのものでない。協力していただいている各界のご好意に感謝しております。

演能案内

松謡会

十一月三日（祭）正午始
於　熱田神宮能楽殿

九皐会能

十一月五日（日）九時半始
於　熱田神宮能楽殿

能　百万　田中きん子　西村弘敬　植村真太郎
能　花筐　高安滋郎　中尾寿満
能　鉄輪　西村欽也
狂言　唯子十一番　藤戸

十一月十一日（土）
於　熱田神宮能楽殿

和泉狂言会

十一月十二日（日）
於　熱田神宮能楽殿

かすみ会

十一月十九日（第三日曜日）正午始
於　熱田神宮能楽殿

観世会定式能

葛城　業謡　高野瀬透　真柄米次
仕舞　河村鉦二　佐藤太俊　丹下三義　加藤丈太郎
野守　章守
知班　女タセ
車　僧
鉢木　高安滋郎　山本敬一郎　佐藤卯三郎　田鍋惣一郎　筧三男　梅田邦久　柴田初太郎
柴田収武　武田太加志
間　後見
鐘　狂言　和泉保之　井上松次郎　井上祐一

（2面下段へ）

わが観能　その五

能のよいところ
——日本能楽会の初公演——

殿島　蒼人

観世元正の「安達原」をみた。日本能楽会の名古屋初公演においてである。作り物の引廻しがとられて、荻屋の中に前シテの里の女がうづくまってゐる。痩女の面がばかによくできてゐて、早くも鬼気漂ふといった感じ。顎をひいて立膝で静止したまま、サシの謡にかかる。山伏たちに一夜の宿を乞はれて戸ぼそをひらいて立ち出でそこに糸を紡ぐ道具があって、山伏の乞ひにまかせ、女は紡ぎ輪を廻すのであるが、これが、なかなか廻さないのである。「かかる憂き世に明け暮らし、身を苦しむる悲しさよ」と眼を両手で押へたりするが、輪を廻すのはほんのすこし。ロンギで糸づくしのやりとりがあって、このロンギ中に「明石の浦千鳥」のところで、ゆるゆると二つ三つ輪を廻す。前半のうごきといったら、ただこれだけである。「音をのみ独り鳴きあかす」のロンギの終りで、両手で眼を覆って泣く。

これからすぐ、焚火の薪をとりに上山へゆく。これで中入となる。しかしこの前半には充分に詩情があって、あまりにすくないうごきも退屈しない。観世元正の謡が陰々滅々として重厚である。

後シテの鬼形になってからは、「葵上」「道成寺」など同じようなものだが、ワキが珠数をもって祈るとき、鬼形が「なにしてンの」といった恰好で、ぼかんと祈りをみてゐるすがたが、なにさま畜生らしくておもしろい。能芸術のいいところである。シテの声音も力づよくてよかった。私はこの黒頭がおかしいと思った。もっと鬼女らしく、毛が多くて長い方が、凄みがあるのではないか。この黒頭は貧弱で、「弱法師」か「武悪」のと同じようで、超現実の怪物たる権威がなさすぎる。もっともこれが、歌舞伎舞踊の大頭のごとく立派なものだったら、「なにしてンの」と珠数もみを見物してゐる畜生の低知性度が、表現できないかもしれぬが。

「安達原」は、去年西川流が同題で舞踊にこしらへてゐる。ほとんど本行通りである。ちがふところは前シテを若い賤の女としたこと、これはノチの鬼女とあざやかな対照の効果を考へたものだ。また、閨をのぞくところは、女がすすめた猿酒に酔って山伏（ワキ）と強力（狂言）が金剛杖を小道具に連れ舞を踊り、調子にのった拍子に杖が閨の戸をまくり、そこでゆくりなくも、果々たる死骸を発見することになってゐる。見るなといはれて、余計に見たくなった強力が、女との約束を破って閨をのぞき見する本行の方は、これもひとつの人間の情のあらはれではあるが、西川舞踊のゆき方の方が、普意があってあと味がよいと思ふ。

花柳寿輔のこさえた「黒塚」の方は、張之助が得意としてゐるがこれ見よがしの踊りを挿入したりして、ケレンくさい。

西川流は前半、きれいごとで娯ませ、中入りのとき、花道で一跨ぎしたあと、大して凄みもせずにスタスタと揚幕に入る、このときはじめてドロドロを入れて暗示を与へるわけである。観世元正は、一の松までしづしづといってそこでキッとなって早足で入ったが、私にはいやな思はせぶりに感じられた。

宝生の「松風」は、不思議なくらい、なんらの感動もなかった。たおやめが、これは、脇正面から見たせいでもあろうか。こんなうごきのすくない能は、とくに正面から、いるたならば、かかる大幻滅の憂き目にあはなくてすんだであらうのに。

それでも橋懸りに現れたシテ（宝生英雄）ツレ（松本忠宏）が舞台に入ってサシを謡ふあたりの風情は好ましい。

桶に汐を汲む型や、行平の長絹に顔を埋めて泣くところ、作り物の松をかい抱くところ、さうした見どころといはれる箇所に、なんの反応も湧かないのは、脇正面からみたせいにしてよいであらうか。でなければ、私は、やはり能音痴といふことになるであらうか。

「あの松こそは業平よ」と、シテが立ちあがるとき、私は、見るべからざるものをみた。たおやめ松風の腥のストッキングが、膝のあたりまで丸見えに露出したのである。これがもし、正面席でみてゐたならば、かかる大幻滅の憂き目にあはなくてすんだであらうのに。

× × ×

10月の催能のしおり

風韻会能
十月一日（日曜）午前九時三十分始
熱田神宮能楽殿

葵上　大井政子　横尾みどり　田中美子　林千賀子
二人静　殿島博子　殿島満里子　福間昌作　吉田定男　村瀬恒史　福井啓次郎　藤田昭彦　助川竜夫　笠三男
龍田　三木美智子　水野雍子　西村欽也　山口亮一　笠三男
清経　後見　河村鉦二　大槻秀夫　狂言　佐藤秀雄　井上松次郎　河村総一郎　高井敏一　武田孝子　山口義三男　助川竜夫　鬼頭季信
薩摩守　佐藤友彦　奥田薫　冨士道隆明　中原渡辺節子
菊慈童　山姥　高安滋郎　高安勝久　井上祐一　後見　殿島修二　泉嘉夫　福井啓次郎　藤田昭彦
船弁慶　間　一調　赤間鎮雄　吉田定男　後藤孝一郎　笠三男　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛
勧進帳　高田みね子　佐藤アヤ子　生駒美代子　服部千代子　笠田揚夫　中原義宣　高長稔夫　山下田川義宣　高山一彦　加賀美幸雄　福田市修一　後見　田鍋惣一郎　笠三男　藤田六郎兵衛　山口義郎
通小町　砧

能楽会
十一月二十三日（祭）
於熱田神宮能楽殿

井筒　殿島修二　物着　西村弘敬　後見　田村勇　大槻秀夫　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛
海人　本田光洋　高安滋郎　西村欽也　吉田定男　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　笠三男　河村鉦一　丘造
石橋　金春欣三　金春信高　西村弘敬　笠一　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛

十月十日（祭）
中部金剛会
第一部（午前九時半始）
舞囃子　五番
第二部（午後二時半始）
金剛水謹厳
松風　高安滋郎　笠一　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
萩大名　佐藤卯三郎　井上松次郎　佐藤秀雄
黒塚　西村欽也　河村総一郎　鬼頭八郎　笠三男

十月十五日（日）午前十時半始
山本博之来名三十年記念
別会能番組
於熱田神宮能楽殿

神歌　波多野敬　加藤総兵衛
三輪　山本真義　観世元正　高安滋郎　佐藤秀雄　山本博之　観世元信　福井啓次郎　野口伝之輔
茂　高安滋郎　佐藤秀雄　河村総一郎　田鍋惣太郎　観世元信　野口伝之輔
千手　竜虎　大江山　玉鬘　小鍛冶　佐藤太俊　河村鉦二　加藤丈太郎　杉村竹翠　柴田収武
安達原　梅若猶英　梅若六郎　松風　西村弘敬　山本敬一郎　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　佐藤秀雄　後見　河村鉦二　山本勝一　放下僧　山本勝一　柴田初太郎　藤井久雄　波多野敬　歌野実　盛宮占　山本博之　西村欽也　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦　白頭　立石澄雄　井上礼之助　後見　佐藤太俊　波多野敬
羽衣　甲斐喜美子　和合ノ舞
掬水会　十一月二十八日（日）於熱田神宮能楽殿

◎ラジオ（第一）
▼一日（日）午前八時～九時（以下おなじ）謡曲金春流「小督」狂言和泉流「宮運」（三宅流「熊坂」（松本謙三）
▼一・八・十五・二十二・二十九日（日）午後十一時～十二時日本音楽道しるべ「山姥を扱った

十月二十二日（日）

名匠鑑賞能

金春信高

花月　福王茂十郎　中村亨道　後藤孝一郎　藤田昭彦

狂言　**八句連歌**　和泉保之　井上松次郎

梅若六郎

班女　高安滋郎　中村亨道　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛

女郎花　大江三郎　田鍋惣太郎

一調　観世武雄　観世喜之

望月　福王茂十郎　中村喜彦　藤田善一　鬼頭喜太郎　筧三男

古式

十月二十九日（日）十一時始

於熱田神宮能楽殿

青陽会能組

経正　雌子　竹内六郎　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭季信

正尊　西村欽也　山本孝　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛

起頃文　山本順之　千河村和重　立ノ　崎隆一

附祝言　佐藤友彦

主催　山本博之　名古屋観衛会

安宅　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　筧三男

勧進組　仕舞　石谷初二　河村鉦二　佐藤政一　柴塚秀雄　田本収　武雄　久田俊

于方　中原揚夫　笠田稔　山下宜　田川義高　高橋長一　加賀瞭一　福田敏市　祖父江修一　久田徹二　藤谷政一

半蔀　西村弘敬　筧鉦一　田鍋惣一郎　鬼頭季信

加藤丈太郎

蛸　井上祐一　佐藤友彦　大野弘之

仕舞　柴田初太郎

阿漕　高安滋郎　河村総一郎　助川龍夫　高安勝久　福井啓次郎　藤田六郎兵衛

上田照也

能楽十五徳について

能楽十五徳とか、謡曲十五徳とか、いろいろいわれております

が、細川幽斎、小堀宗甫撰としてよく一般に伝えられているものを読み方と一緒に披露します。

不行知名所

「行かずして名所を知る」

十月は短かい文章で松風余文といったことを申し上げたい。この間、デパート（丸栄）の道年・竹友斎二人展で道年氏作「黒の楽茶碗」をみた。それが吉田堯文氏銘「松風」でありました。

またさき頃、漫画に、作者は忘れましたが、バケツにうつる月をみながら、もったるいれ物にも影やどす月を、そのバケツにうつして、二つになった月を実にあどけない顔でながめる構図があり、心洗われました。この松風の名は、金春横丁ともども、能・狂言から世間に流布したことばの番付では、たしかに上位の方におかれるでしょう。

喜之・喜多実・嵯、故華雪・弓川・兼資諸氏のすばらしい舞台の思い出をもっておりますが、みなさんも失礼ながら一つ二つ位はお持ちでしょう。二十二年に名宝文化関場の仮設舞台で当時の梅若六郎氏が舞ったのが、名古屋では戦後はじめてでした。「ふけゆく月こそ冴やかなれ」のあたりの解説を田鍋老先生がされた記憶です。

松風

野村広二

古書はおくとして、「名人のおもかげ」（沼明雨）の先代万三郎のことは、「能のたのしみ」（解説北岸祐吉）、「兼資芸談」、「桜間芸話」など座右のものです。

故三宅襲氏の「能」掲載の解説は、この松風ばかりが二回連載でした。また金剛の「一式之習」はなかなかみばえがあります。このときの真ノ一声はたまらなくよいものです。江戸邦楽になって「松風物」と呼ばれる系列ができ上りました。箏曲・長唄・清元に富本です。

このうち能は、松風・村雨と行平の仲が、清純に、清潔に扱われているようです。そして永遠の追慕だけを追えば、一見矛盾した構想もはるか彼方へおしやられてしまいます。「松風」は何度きいてもみても佳品です。省略されないままかみしめることを要求する名品です。物語のあと「三瀬川」で心持をあらためてみるのがとてもたまりません。あとはまたの機会にいたします。

× × ×

⊙お断り・九月の「井筒の幻想」は文章の中途で数ヵ所省かれ、そのうえ筆者の知らない文章が二か所加筆されました。「作り物に本物のススキ」のあたりが一つです。幻想の夢は破れ、筆者は迷惑をいたしました。ちょっとお断りします。

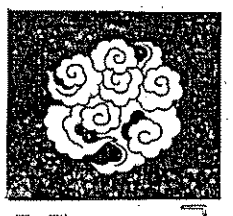
―― ◇ ――

ススキ並に字句の訂正については、十一月号でこの問題をとりあげ、現実と幻想をとりあげます。

（編集子）

『能楽の友』第十号を迎えて

編集同人　S生



本紙も創刊後茲に十号を迎えることが出来た。何といっても本職でない仕事で、物好きだとか、何号迄続くだらうという見方もあったようだが、もとより営利を目当てに始めたわけではなく、容易な仕事ではないことは初めから判ってはいるが、とにかく能楽界の為に少しでも貢献することが出来ればと、唯それのみを念じてやっている次第。

よちよち歩きであるが、東京、大阪、京都、九州と寧ろ遠地の諸先生方の御購読申込みが意外に多く、紙面にも好意を寄せて頂いて居ることはまことに嬉しいことで大いに意をつよくする。

要するに、もっともっと内容の充実したよりよき「能楽の友」をつくらねばと、それのみを念願に同人各自頑張っている次第である。

どなたに限らず、思ったままの能評、催能に関する希望、能楽一切に関する質問等々何にても投稿をドシドシお寄せ下さることを切望します。またたとえ一部でも購読者のふえますよう、御知友、同好の士にせいぜい御吹聴のうえ購読をお奨め下さるを得れば、これに過ぐる喜びはありません。

各位のご理解あるご支援をこの上ともお願いする次第です。

埋もれた史蹟

高安滋郎

過日CBCクラブ通信に、ちょっと紹介したことであるが、京都、奈良などに比して、名古屋は残念ながら能の遺跡史跡には乏しい。そのうち六月号に少し紹介された絃上（玄象）の師長の史蹟が、私の住居の近くにあるので、この紙上を通じて皆様にお知らせ致しましょう。

瑞穂区に師長町の町名があるので、少し聞き合わせたところ、史蹟の有ることが判った。師長町とは隣り合せのところでそこには貴族院議員阪本彰之助題額として「菊芳松茂」の題字もとに、井戸田郷士横江氏のもとへ、治承三年（一一八〇年）太政大臣藤原師長以下廷臣三十九名が流配せられたこと、翌年赦免になり京へ帰遷にあたって当時お世話申上げた横江氏の一女槐に対し、阿弥陀仏像と法然上人の筆になる六字名号と、名器白菊の琵琶を残し置かれた。白菊の琵琶は名器の為後日、熱田神宮の宝蔵に納められた。また槐女は父にねがい修仏殿を建立し、阿弥陀仏像を安置したことなどが、細かく書かれた石碑が建てられて居ることを、この目でハッキリ確認した。この碑石の少し（五、六十米）西に、修仏殿と思われる一宇の御堂がある。然しこのお堂は実にひどく荒れて居り、軒も朽ち落ち前面は古板で覆ってある。板の隙間から堂の中をのぞきみると、丈余の立派な仏像が拝まれ、台座の極彩色も色めせては居れど、当時のおもかげが偲ばれる。

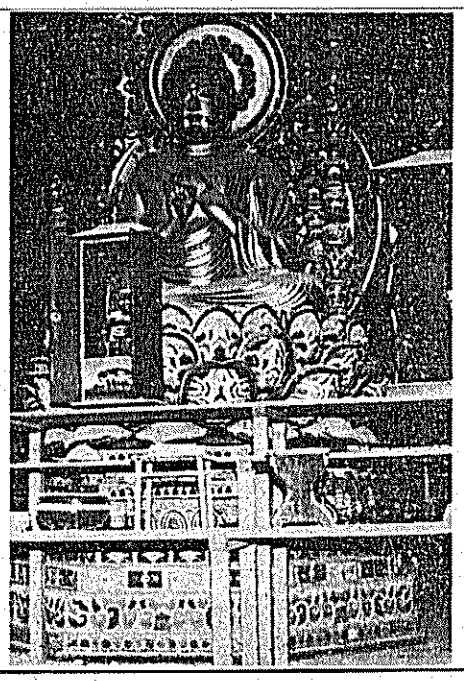
以前は誰か留守番の人も居たらしいが、現在は誰の留守居もなく荒れるままになって居り、誠に惜しい事と思います。

なお現在の師長町の町名の有るところに、以前琵琶峯なる碑の立って居たことも聞きましたが、今は住宅公団の建物が建つ時に取り除かれたそうで、史蹟保存の為の関係方面の御尽力が戴ければ、得難い史蹟として残すことが出来るのでないかと考えて居ります。

（追記）

藤原の師長は左大臣藤原頼長の子で、保元の乱に連坐して土佐に流されたが、のち召し還されて、治承元年、太政大臣に任ぜられた。同三年また平清盛のため尾張に流配された（この時のことが記事の内容）翌年赦されて帰洛、建久三年薨ず（帰洛後入唐渡天を志した事を謡曲絃上（玄象）に作られて居る）音妙院と称し琵琶の名手であった。

（筆者は高安流）



〔藤原師長の遺蹟を物語る石碑〕

十月のテレビ・ラジオ

◎ラジオ（第二）

▼一日（日）午前八時～九時（以下おなじ）謡曲金春流「小督」狂言和泉流「呂蓮」（三宅藤九郎）

▼八日（日）謡曲観世流「敦盛」（梅若猶義）

▼十五日（日）謡曲喜多流「玉葛」（喜多実）

▼二十二日（日）謡曲宝生流「砧」（大坪十喜男）

▼二十九日（日）謡曲下懸リ宝生流「熊坂」（松本謙三）

▼一・八・十五・二十二・二十九日（日）午後十一時～十二時日本音楽道しるべ「山姥を扱った邦楽」（横道万里雄ほか）

◎テレビ（教育）

▼十日（火祭）午後二時三十分～四時喜多流能「三輪」（後藤得三ほか）

▼番組の変更することがあります。ご了承下さい。

ワキ方流派の歴史

高安流 西村弘敬師に聞く

能楽の流派のなかで、ワキ方は現在高安、福王流、脇宝生流の三流があるが、ワキ役として専門の立場を形づくったのはいつごろか、またその歴史などについて、高安流西村弘敬師に語って頂いた。

歴史を語る西村弘敬氏（右）

問　ワキの流派の歴史について

答　ワキの各流派について語るには、能楽そのものの形成と当然関係があるわけです。大体能というものをアイデァとして生み出したのが観阿弥で、それを大成したのが世阿弥といえましょう。その当時には立方と囃子方と謡方の三者が役者として、たとえば父子兄弟で互いにシテになったり、ワキに廻ったりしていたようである。そのうち立方がシテとワキに分かれ、囃子方には笛、小鼓、大鼓、太鼓と生まれ、謡い方は地謡専門で、それぞれシテの専門、ワキの専門、笛の専門というようになってきた。

ワキの始まりというものは、音阿弥元重の兄弟に当たる観世小次郎が「ワキの元祖なり」と系図に記されている。

謡そのものの元祖は秦河勝（はたのかわかつ）で、この人が謡い物のはじまりでそれから時代を経て、（金春流の系図にある）氏清としてあるのが、世阿弥元清なのです。このことで先だって金春欣三師と話合ったことです。この氏清が観世家の世阿弥元清で、それから元清の長男の十郎大夫元雅、元清の甥に当たる音阿弥元重ですが、その兄弟が小次郎元頼です。

この時分に脇というものが初めて分かれたものと思われる。はっきりしたことはわかりませんが。

それまでは、専門というものはやかましくなく、いよいよこの時代にワキはワキの家ができ、シテはシテの家、地謡は地謡の家ができました。

いまでは地謡専門家というものが殆んどなくなってしまったのですが、実際にはある。たとえば観世でいうならば故武田宗治郎さん宝生流には故桐谷さんがあり、喜多流には福岡さんがあり、金春流には高瀬さんとか、そういった地謡専門の人があった。昔は地謡といって一役になっていた。地を謡うだけでお抱えになり禄をもらっていたのです。それは謡ばかりでなく、拍子のことからシテの型までチャンと心得て、シテの舞えるようにきちんと謡ったものです。

ワキの場合でも同じで、ワキ専門として一役をになってきたのです。ワキの専門家が出来たのはハッキリしたことはわかりませんがまず先程申したとおり、音阿弥の時代といえましょう。

問　〝小次郎がワキの元祖なり〟とありますが、それは観世流の座付きとしてでしょうか

答　観世流ということでなく、その時代にワキの専門が生まれたとみるべきでしょう。徳川初期の記録によれば観世流のワキとして進藤、福王、宝生流のワキとして春藤（後、下懸宝生となる）金春流も春藤、金剛流が高安となっています。小次郎の時代から分立の兆しがあったと思われます。果たして専門家されたかどうかは明らかではないですが。

問　当時のワキの流派について

答　ワキとして記録にみえるのは福王、高安、春藤、進藤の名があります。

福王流については、福王大夫のなかに「福王神右衛門盛忠は観世小次郎弟子なり、信長公に召され入道して従五位但馬守を下され、道庫入道」とあります。福王家の祖先は播洲とあります。

高安流は、金剛六代目の金剛三郎（大和金剛山の稚児または比叡山金剛院の稚児ともいうと記されている。法名清覚）から金剛五郎となり、この人は観世につく。下って三郎宗説が鼻金剛といわれ、その子の孫太郎が早世のため×兵衛（金剛九代目）で家を譲った。この又兵衛がはじめワキの家であったのですが金剛大夫九代を継ぐため伊右衛門にワキの家を譲ったのです。

金剛伊右衛門は、河内国高安郡高安大明神社仕とあります。この伊右衛門という人は、三好のため京六条にて討死し、この人の息子が高安大夫横田長助といい（天正十三年長久手合戦尾州小牧に於て討死）、この人の息子が高安大夫横田長助といい（天正十三年長久手合戦尾州小牧に於て討死）、この人の息子が高安大夫横田長助といい（天正代です。流儀として高安流を名乗り、のち太郎左衛門と改むとあります。

春藤流は金春からわかれています。金春四十四代金春大夫八郎（氏照宗瑞）の弟金春源七がワキの元祖としてその三代あとの六右衛門が当代より春藤を名乗ったとあります。

進藤流はもともと観世についていたワキ方で系図の記録では近衛家司進藤氏同家、進藤久右衛門が初代で観世小次郎弟子堀池より伝来、秀吉公に召出され、従五位下を下さる。とあります。徳川時代には名をみせており、小次郎の時代ですから相当古いわけです。代からいけば八代位続いているようです。進藤家のことは片山家に記録があるとも聞いています。

下懸り宝生は春藤から出ています。春藤権七という人が宝生にいて、そのあと宝生新之丞と改め御旗本被仰付とあります。

前に述べたように徳川になる前は座付といって観世座付は進藤と福王、金春座付が春藤、金剛座付が高安というように決まっていた。座付以外にはワキをつとめなかったのですが、徳川時代になって相手をするのが自由になりました。

問　なぜ徳川時代に自由になったのでしょうか

答　それまでは囃子方でも座付が決まっていた。それが何流でもやれるようになった。結局分業になって役付をハッキリ分けたためにそういう風になってきたと思われます。座を形成しているときは座付で限定されていたのですが、こんどは各家として、家柄として分かれていったので、何流にでも出いいということになったと思われます。

記録をみると喜多流では座付はなかった。ワキ方流派は豊臣時代に出、家柄が確立されて分業化されていった。

現在のワキ三流について武鑑で調べると古い順でいくと高安、福王、春藤、進藤の順になります。

これがワキというものが能のなかで完全に一役として独立していった歴史です。

花伝書について

花伝書の編さんについては、普通世阿弥の作といわれますが、記録によれば、観世音阿弥、金春禅竹、宝生連阿弥、金剛宗説の四人の合作と記されています。「後代の掟に花伝書をえらむ、是私の事に非ず、上意を以て後代の規矩に記す。板本に花伝書在、落書誤等のみ多く用い難し」とある。

ワキの各流の違い

謡いの文句の違いもありますが所作も違うし、表現自体も、装束の用い方が違います。たとえば高安流では着流しでやるところを、他流では別装束でやるとか。たとえば俊寛の場合、私ども高安流では素袍上下でやります。福王流では侍烏帽子、掛直垂でやります。

装束のつけ方も、昔はどうであったか正確なことは判らないが、だんだん形よくつけるとか、みた目にきれいにつけようとすればよその流のものをまねて形よくつけていくとも考えられます。

それから達拝（たっぱい）が違います。達拝というのは〝存じ候〟というところですが、これが三流とも違います。高安流では〝存じ候〟と謡い一杯にやります。福王流は〝存じ候〟というときに早く手をおろし、宝生流ではその逆で〝存じ候〟と謡ってから所作をします。こういう風にそれぞれの流の作法上の違いがあります。それぞれ根拠があってそういった形がはじめられたと考えられます。

問　文句はどうですか

隅田川の語りなどの場合、高安流と下懸り宝生流は似ています。俊寛の場合も一セイの文句が同じです。福王流は観世と同じです。

シテ方との掛け合いは、申合せをしますからよいですが、しかしものによっては非常に食い違うこともあります。その点は直してやる場合もあります。

昔は津軽にもあり、盛岡付近にもありました。いまでは、名古屋、東京、京都、九州などにあります。

福王流の家元は大阪にあり、脇宝生は東京にあります。

江戸時代には、家元は幕府にかかえられ、各地方の藩にそれぞれかかえられていた。尾州藩には家元としては笛の藤田流、狂言の和泉流がありました。そのほかシテ方、囃子方などは弟子家がかかえられていました。

ワキについては「開口の式」がありますがまた別の機会にお話ししてみたいと思います。

（注……開口の式というのは脇大夫に限って行なうことができるもので天皇陛下の御即位の節とか徳川将軍の御代替り、将軍宣下、ご婚儀などの目出たいときに行なわれたものである。最近では高安滋郎師が親鸞上人七百回忌で開口の式を行なっている。）

――長時間有難うございました。

◉能舞台について

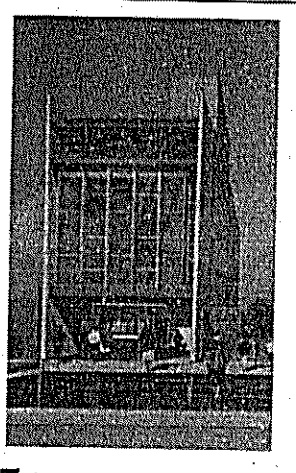
揚幕（切幕）、橋がかりについてはすでに記したが、第一に目につくのが鏡板である。これには老松の絵がかかれている。これは通常羽目板といわれ、その横に若竹の絵が画かれており、その絵は何を意味するかといえば、松の勢いを示し、常に観者の力強さを象徴しており、それが橋がかりの三本の若松とまことに対照的である。

鏡板の横の側鏡板（ワキカガミイタ）には竹の絵が描かれている。昔は橋がかりのこうらんは竹であった。（現在は桧である。）どこまでも若松に対し鏡板のどっしりした絵の構図と側鏡板の竹の画を松つめていると〝芸は盆栽の松ではいけない。鏡板の松のごとく太く老生せよ〟という名人の言葉にあるとおり、芸への意欲がこの鏡板、側鏡板にしのばれる。

この次は四本柱にふれてみたいと思います。

流元
剛行
金発
流本
世家
観宗
合資会社 檜書店
東京都千代田区神田小川町2—1　電話(291)2488—9　振替東京3552
京都市中京区二条通麸屋町東入　電話(23)1990　振替京都113

蔵元直営
酒蔵 白龍
社長 大西三郎
金山・富士銀行西50米（金山ビル一階）電(61)6702

あなたに心をこめておおくりする……
冨士道の婚礼道具

家具のふじみち
本社　名古屋市中区栄3丁目34番40号
ショールーム　TEL (241) 3367・1453（新館完成・11月オープン）
工場　愛知県西加茂郡三好町　TEL (05613) 2—1178

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田宮司筆

発行所　能楽の友
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビ
電話（211）1019・1974（231）6727・
振替口座　名古屋　36393番

購読料	1	年	200円
郵送の場合	1	年	380円
一部			20円

能楽の友紙のご購読、催能の有料会員
熱田神宮能楽殿　電話（671）2912
お問合せ願います。

編集同人（五十音順）

伊藤鉄平進　柴田初太郎　殿島修二
梅田邦久　杉村竹翠　内藤泰二
加野昭二郎　高安滋郎　野村又三郎
後藤正男　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田秀雄　二井栄逸

文化の向上図る。

熱田神宮文化殿

桧垣旧跡

緑をたたえた熱田の森を、東門から入ってしばらく行くと、右手に端正なたたずまいを見せて一つの建物がある。

これが「熱田神宮文化殿」である。

構造は鉄筋コンクリート造だが正倉院を模した、床の高い校倉風の外観が周囲の林苑によく調和している。やや反り気味に勁く張り出した軒と、壁面の凹凸が醸し出す陰翳がこの建物に、しっとりした潤いと落着きを与えているのかも知れない。

文化殿は、昭和三十九年冬着工四十一年五月十一日に竣工した。

一階二八六・五坪（九四七㎡）、二階一〇五坪（三四八㎡）、地階六一坪（二〇二㎡）、計四五三坪（一、四九八㎡）。

一階に宝物館、講堂。二階に熱田文庫、会議室、応接室。地階に楽屋、機械室、倉庫等を含む。

この建物は、全施設を通じて、大神の広大な御神徳の下に、文化の向上を図ることを目的とする。そのための施設、内容は概略次の通りである。

〔宝物館〕

国宝、重要文化財を含む二千点近い宝物は、祖先が残してくれた貴重なる文化財である。ところが残念ながら展示の施設がなかったため、各方面から拝観の願出を受けても、お断りしていた状態であった。今後はこの宝物館に、順次主要な宝物が展示されて、数々の宝物を通じて、祖先の心やその芸術に触れることが出来ることになった訳である。通常の展示のほかに、年に約二回特別展も催され、今年十二月末からは明治維新百年記念展が予定されている。

また宝物館には、防火、防湿等最新の防災設備を持った収蔵庫が併置され、宝物の保管に万全を期している。

〔熱田文庫〕

古く熱田神宮には、神道や国学の勉学研究の施設として「熱田文庫」があった。その復興をめざして、書庫と閲覧室をもつ熱田文庫が、文化殿二階に設けられた。閲覧室は約五十席で一般の使用に供し、書庫には約二万冊の図書を蔵する。蔵書はまだ不充分であるが年々充実を図り、将来は神道、宗教を主とした特色のある文庫をめざしている。

〔講堂〕

収容人員五〇〇名。舞台（一九坪）、照明、映写、冷暖房、楽屋（一〇坪）放送等の設備がある。毎月一回神宮主催の定例文化講座を始め神宮の各種文化事業の会場として利用されるほか、崇敬者各位の申し込みによる文化的な催しにも利用されている。

〔会議室〕

各種の会議、小集会に使用される。定員五十名。

開館以来約一年半、文化殿はこのような全機能をあげて、神徳の宣揚と文化の向上に着々と成果を見せつつある。

考えてみると我々の祖先は悠久の昔から、熱田の宮を中心に、すぐれた文化をこの土地に築き上げて来た。神宮の境域には、既に早く、能楽殿が出来て、古典芸能の精粋である能の興隆に貢献している。今度更に文化殿を加えて、この地方の文化をより正しく、広く深く進展せしめる一助になることが出来れば、と念願すること切である。（筆者は熱田神宮文化部長・禰宜・岡本健治氏）

船弁慶　後

船弁慶のスケッチ（解説）

船弁慶は観世小次郎信光の作でこの人は観世三代音阿弥の第七子ですが、能の最も特質とする幽玄味から更に劇的演出に工夫された曲です。脇方にも、狂言方にも、充分働いてもらい、装束も華々しく効果をあげて、自然大衆に人気があり上演回数が最も多く切能ものとしています。

物語の前段は義経が大物の浦から都落ちする船出に際して、静御前との別離の様をシテの静がかづらものとして、情の趣き充分に太鼓なしの中之舞を舞い、後段は平家一門の幽霊が荒海から現われ、知盛の幽霊が長刀にて打って奥いかかり、脇の弁慶の念力によって退散するという「吾妻鏡」や「平家物語」「源平盛衰記」から取材されたものであります。

スケッチは知盛のシテ幽霊で、面は怪士「あやかし」という面をつけますが、ときには三日月の面も出演者の工夫で変えて用います。

絵と文　仙田雪山子

さらに、カラーグラビアなどによる豊富な写真により、伝統の世界の全貌を余すところなく伝えている。

判型　A五判（二一〇×一四八㎜）

造本　表紙原色版／豪華貼函

カラー写真二四頁

素、どれ一つを欠いても、能の十分な理解は得られないのではないかと考えます。

また、能に関連する工芸的な展開も無視出来ません。

衣裳や面は、日本の工芸の粋が結晶して生み出されたものと言わねばなりません。

○…来年は明治百年の諸行事が各界で催されようが、能楽の再興とその発展の礎となった〝明治〟をかえりみることは斯界にも大きな意義があろう。本紙もさらに紙面内容の充実をはかって読者のご期

演能案内

十二月三日（日）正午始　熱田神宮能楽殿

楽師会乱能

能　田村　後　河村総一郎　前　覚鉦一
間　後藤孝一郎　覚三男　河村鉦二　柴田初太郎　久田秀雄

舞囃子　屋島　野村又三郎　前田広茂　池田茂　福井道子　田鍋洋一　田鍋惣太郎　青木恒治　田鍋惣一郎　地謡

狂言　重喜　加藤良久　服部紗枝　福井道子　有賀滋子　熊沢恵美子　地謡

舞囃子　熊坂　鬼頭喜太郎　加藤丈太郎　助川竜夫　芹川秀子　野崎太郎　大森英三郎　覚鉦一郎　後藤孝一郎　覚三男　地謡

能　猩々乱　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛　後見　田鍋惣一郎　田鍋洋一　地謡　佐藤友彦　井上祐一　井上礼之助　佐藤秀雄　高安滋郎　長田巽　辰巳孝　西村欽也　西村弘敬　井上松次郎　高安滋郎　地謡

舞囃子　班女　鬼頭季信　衣斐吉田　正宣　定男　地謡　塚本秀雄　助川竜夫　鬼頭喜太郎　河村総一郎　八郎

狂言　寝音曲　福井啓次郎　西村欽也

舞囃子　小督　田鍋洋一　有賀滋子　戸田秀雄　竹内六郎　青木恒治　地謡　田鍋惣太郎　福井啓次郎

能　船弁慶　子方　佐藤卯三郎　後　田鍋惣一郎　前　鬼頭八郎　井上松次郎　井上祐一　山口義郎　間　内藤泰二　井上栄逸　殿島修二　井上礼之助　後見　後藤孝一郎　野崎太郎　地謡　大森英三郎　池田茂　覚鉦一　助川竜夫　吉田定男　鬼頭喜太郎　覚三男　河村総一郎

宝生会定式能　十二月十日（日）正午始　熱田神宮能楽殿

俊寛　野口祿久　高安滋郎

富士太鼓　倉木雅　西村欽也

十二月十五日（金）　熱田神宮能楽殿（九時・十二時半・二時の三部）

総　船弁慶　金春欣三　高安滋郎

狂言　縄ない　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

主催　名古屋学生能楽連盟

学生能　昭和四十三年一月六日（土）　熱田神宮能楽殿

総　小袖曽我　女郎花　葛城

観世会定式能　四十三年度初会　一月十四日（日）　熱田神宮能楽殿

高砂　観世元昭

熊野　観世元正

国栖　観世喜之

昭和四十三年一月十五日（祭）午前十時半始　熱田神宮能楽殿　大槻十三・七回忌追善

能組

独吟　反魂香　岡田光弘

仕舞　清経　佐藤太俊

仕舞　笹之段　久田秀雄

舞囃子　女郎花　梅田邦久

唐船　殿島修二　覚鉦一　後藤孝一郎　鬼頭八郎　覚三男

仕舞　江口　加藤良久

通小町　杉村竹翠

山姥　田村勇

子方　中原素　林恵　加藤総一郎　水田芳雄　稲生兵衛　河村鉦二　柴田博　若田修一　梅田収武

安宅　勧進帳　梅若万三郎　梅若猶義

（二面へつづく）

シ・傘洋

明治百年について

花木徳三郎

前文

明年、昭和四十三年は「明治百年」の記念すべき年である。この年を記念して、各界でそれぞれの行事が企されよう。

ただ一口に百年といっても、この一世紀は、日本にとっても、また世界にとっても大きな変動の世紀であった。このことは能楽界をはじめとする芸能界においても同じである。

この百年には盛衰のさまざまの歴史が秘められている。私はこの百年の歴史の歩みをみつめてみたいと思う。

明治の改元

明治百年は現在、あらゆる各層でとりあげられている。明治百年祭も早や企図され、前夜祭も行なわれているが、さて明治百年の記念すべき日は来年の十月二十三日と決定されたことは、一部の報道関係で発表されております。

明治改元は、九月と記したものもあれば、十月と記したものもある。これは太陽暦と太陰暦の関係に当然ふれなければならない。

明治元年の暦について、熱田神宮の神宮庁で万年暦を調べて見ると、慶応四年九月八日（旧暦）に明治に改元する。その日は新暦で十月二十三日とある。

旧暦九月八日はみづのえ、ね、九紫、先負、平、箕（き）新暦十月二十三日とある。

次に明治五年と明治六年のところを調べているうちに「明治五年十一月九日、みづのえ、申、大政官布告（達第三百三十七号）がある。同布告には「今般太陰暦を廃し、太陽暦、御頒布相成候に付き来る十二月三日を以て明治六年一月一日被定候事とある」それによって太陽暦が採用されることになる。

万年暦の明治五年十二月三日までは旧暦が上にあり、明治六年から新暦が上になって、新旧暦がその日から上下逆になっている。

すなわち色々の文献を明治百年の歴史を分析するのに、新旧暦を頭の中に入れておかないと、歴史の月日に違いが生じてくるわけである。

また来年三月十四日にも祭典が行なわれる由、熱田神宮權宮司長谷晴男氏が語られた。

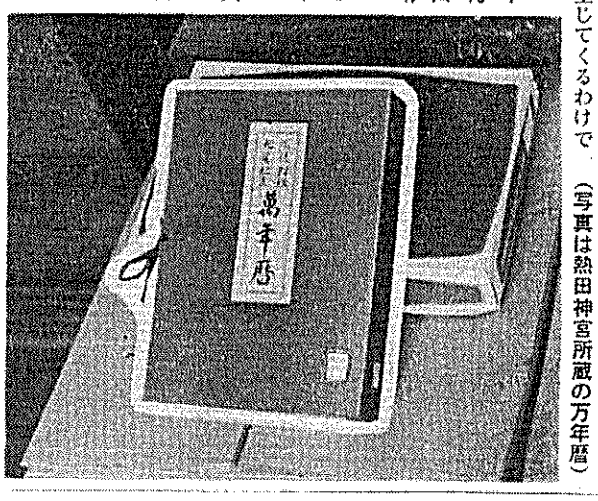
京都の紫宸殿で五ケ条のご誓文即ち

一、広く会議を興し、万機公論に決すべし。（以下略す）

があります。

その以前に坂本龍馬（土佐藩）の大政奉還の骨子「舟中八策」がある。現在テレビの「三姉妹」の次は「坂本龍馬」と決定されているが、明治維新は「廃刀」によって行なわれた。

土佐（現在の高知県）の桂浜に坂本龍馬の銅像があるが、廃刀の姿であり、右手を前の懐に入れているが彼は常に短銃を持っていたのがうかがえる。（つづく）



（写真は熱田神宮所蔵の万年暦）

謡曲入門の頃

戸田秀雄

「金沢は謡曲町である」近頃は金沢市はマスコミにこういう風に紹介宣伝されているが、これは私が金沢に住んでいた三十年前も全く同様であった。

旧制第四高等学校といえば明治中期の代表的赤レンガの建物で、その一部は現在明治村にも保存されているが、私が四高の学生だった頃もやはり金沢は謡曲の町であった。幸い戦災を受けなかったので昔の古い町並が現在も尚師分保存されているが、そのころでも夕食後などに町に散歩に出ると、静かな家続きのどこからともなく聞こえてくるのは、加賀宝生の謡であった。

ただ当時の私は謡曲などというものは老人の寝言ぐらいにしか考なかったので、当時四高の有名な国文学者であった鴻巣教授の謡曲についての特別講義に出席したりまた学校から五百米も離れていないところにある佐野舞台（現在の金沢能楽堂）にけい古に通っていた友人に誘われて行って、宝生流の家元という人の色の白い顔を記憶しているくらいであった。

そのような私にようやく謡曲に対して縁が出来たのは、昭和十二年私が医科大学を卒業して外科のK教授の医局に入って以来のことである。

当時の医局長N君は何を思い立ったのか、一つ医局の連中で謡をやろうと言い出して同志を集めた熱を上げるのが楽しみとなった。こういうけい古は約一年続き、確か「井筒」位までは進んだように記憶している。N君は仲々熱心で宝生流「羽衣」のLPレコードを買ってきて、皆に聞かせ「これを聞いて謡っているから俺は宝生重英の直弟子だ」（当時現在の家元といった）などといって威張っていた。

医局の忘年会の余興では一同K教授の前で無本で鞍馬天狗の一節を謡って披露したり、夏には氷室会といって金沢では「氷室」を謡うのが藩政時代からの習慣というが、我々は到底「氷室」には歯が立たないので、兼六公園の涼しい料亭で一夕、「氷室」抜きの氷室会をやったこともあった。

そのうち世間は次第に戦時体制に入っていつの間にかこういう楽しい集会も消滅してしまったが、それでも私は何か謡曲に心引かれるものが残り、いつかはもっと深く研究したいという執念が残っていた。

昭和十八年私にも召集令状が来て軍医としてサイパン島に出発したときも、私の行李の中には宝生流「清経」の一冊が秘められていた。なぜこの曲を特に選んだ年も長命され、先年老妻で物故さ術の予定だ。君すぐに主治医になってくれ給え」というのである。

手術はK教授の執刀で行なわれたが仲々の重症で、一先づ救急的に大腸に人工肛門を造設した。何しろ戦争末期の手術なので物資も薬物も欠乏しており、非常に苦労したが、それでも経過は順調で、三ヵ月ほどで退院されるまでに恢復した。吉之助師はその後二十余

実は佐野舞台の佐野吉之助師が腸捻転で入院しており、これから手術の予定だ。君すぐに主治医になってくれ給え」というのである。

手術はK教授の執刀で行なわれたが仲々の重症で、一先づ救急的に大腸に人工肛門を造設した。何しろ戦争末期の手術なので物資も薬物も欠乏しており、非常に苦労したが、それでも経過は順調で、三ヵ月ほどで退院されるまでに恢復した。吉之助師はその後二十余年も長命され、先年老妻で物故さ

のクセのロマンチックなメロディーの中に、これから故国を遠く離れて南海におもむく私の心と何か一抹共感するものがあったに違いない。ないしは九州柳ケ浦で自らを亡くしたこの曲のシテの心に南海の戦争の悲劇を連想したためかも知れない。

私は幸か不幸かサイパン島で戦傷を受け、最後の病院船で内地へ送還されたので、この「清経」もそのまま故国へ持ち帰ったが、その後半年間は戦傷患者として入院の止むなきに至った次第である。

ところが負傷もようやく癒え、退院を許可されたので、昭和十九年の夏の暑い頃、久し振りで大学病院のK教授の許へ顔を出した。ところがK教授は私を見るや否や「君の帰るのを待っていた。実は佐野舞台の佐野吉之助師が腸捻転で入院しており、これから手術の予定だ。君すぐに主治医になってくれ給え」というのである。

手術はK教授の執刀で行なわれたが仲々の重症で、一先づ救急的に大腸に人工肛門を造設した。何しろ戦争末期の手術なので物資も薬物も欠乏しており、非常に苦労したが、それでも経過は順調で、三ヵ月ほどで退院されるまでに恢復した。吉之助師はその後二十余年も長命され、先年老妻で物故さ

二十年八月長い戦争が終り、その年の十一月焦土と化していた名古屋に赴任することになった私が出来るだけ早く謡曲のけい古を始めようと思ったとき、一も二もなく宝生流を選んだのは、やはり謡曲の町金沢に住んで、いつとはなしに宝生流の「とりこ」になっていたためであったのである。（42

数々の華麗な舞台を展開されたことは周知の通りであるが、氏の晩年の健康にはK教授によって作られた人工肛門が大いに役立ったことを知る人は少ないであろう。

吉之助師の主治医になったお蔭で、私は戦時中の金沢能楽堂には随分通った。楽屋に備えて暗幕を張った見所には、僅か十数人位の見物しかいないことも度々であった。出征、応召が相次いだためか、地謡なども非常に少くて困っていたようであった。あるときまだうくに謡えもしない私にも是非地謡に出てくれと頼まれたが、私はこればかりは遠慮させて戴いた次第である。

しかし、これほど困窮した状態でも、なお演能を続けておられた当時の楽師諸氏の、能に対する熱意と意慾には全く敬服すると共にこれほどの熱心があったればこそ戦後の能楽界の隆盛が来たものと私は確信している。

11月のラジオ テレビ案内　NHK全国放送

▽五日（日）
観世流「船弁慶」　観世銕之亟ほか

▽十二日（日）
金春流「定家」　金春信高
大蔵流「萩大名」　善竹忠一郎
狂言

▽十九日（日）
宝生流「篭太鼓」　野村蘭作
大蔵流「宗論」　山本則寿ほか
狂言

▽二十六日（日）
宝生流「小鍛冶」　佐野安彦ほか

梅若修一 修謡会定期大会

十一月二十五日（土）午前九時半始　於 河村舞台

素謡
仕舞
舞囃子
数番

河村舞台（名古屋市昭和区前山町一ノ三三 電話七六一―四八八二）

梅若六郎 日本芸術院会員就任・還暦祝い 祝賀記念 能組

昭和四十三年一月二十八日（日）十二時半始 於 熱田神宮能楽殿

連吟　賀茂　林増田　甲子夫　一雄
仕舞　高砂　加藤綾兵衛
屋島　塚本秀雄
野宮　殿島修二
坂　河村鉦二
熊　梅若景英　雅俊

能　猩々乱　和合三段之舞　西村欽也　寛一郎　田辺惣一郎　鬼頭清太郎　藤田昭彦

狂言　大原御幸　梅若六郎　山本博之　山崎英太郎　山本勝一郎　宝生弥一　宝生閑　瀬尾乃武　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛

間　腰祈　井上松次郎　宝生閑　井上礼之助　佐藤友彦

狂言　野村又三郎

仕舞　東北　柴田初太郎　観世喜之
笠之段　梅若泰之
野守

ワキ　葵上　松山長昭　梅若六郎
梓之巫　高安滋郎　高安勝久
空之祈

間　祝言　佐藤秀雄

終了五時二十分予定

（二面より）

木賊　竹内義和　山中滋　泉康雄　梅若猛　大槻文蔵　高安和泉太郎　立石澄雄　亀井俊雄　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛

貫之　狂言　野村又三郎　井上松次郎　井上祐一

仕舞　道明寺　柴田初太郎
誓願寺　片山環次郎
藤戸　山本勝一
玉之段　上田照也
熊坂　梅若盛義

一調　笠之段　泉嘉夫　福井啓次郎

道成寺　大槻文蔵　和泉太郎　西村欽也　高安勝久　佐藤卯三郎　佐藤秀雄　河村綜一郎　大倉長十郎　鬼頭清太郎　藤田昭彦

間

第七回 和泉会
十一月十一日（土）午後五時
熱田神宮 能楽殿

墨塗　大名　佐藤卯三郎　太郎冠者　佐藤友彦
女　井上祐一
佐渡狐　佐渡百姓　盛安百姓　野村又三郎　左藤弥作　奏者　井上松次郎

観世会定式能
於 熱田神宮 能楽殿
十一月十九日（日）正午始

素謡　高城　高野瀬透
真柄米次

熊野　馬場町子　森徳子
能　森野まさみ　河竹光子
羽衣　早川喜美子　高安滋郎
和合之舞

仕舞　河村綜一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦　松田千年　下田雄三

店
1-9203
5593

11月の催能のしおり

第七回和泉会

十一月十一日(土)午後五時
熱田神宮能楽殿

墨塗　大名　佐藤卯三郎　太郎冠者　佐藤友彦　女　井上祐一
佐渡狐　佐渡百姓　越後百姓　野村又三郎　佐藤秀雄　奏者　井上松次郎
小舞　海人　イロハ掛り　素囃子　中之舞　大鼓　小鼓　笛　吉田定男　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛
宗論　浄土僧　法華僧　野村万蔵　和泉保之　富士　河村丘造
弓矢太郎　太郎当屋　井上松次郎　井上礼之助　立頭　立衆　大野弘之　佐藤秀雄　佐藤友彦　井上祐一　佐藤卯三郎　井上義次　太郎冠者
観世会定式能
素謡　高野瀬透　真栖米次
仕舞　河村鉦二　佐藤太俊　丹下三義　加藤丈太郎
高安滋郎　田鍋惣一郎　由本敬一郎　寛三男
後見　梅田邦久　柴田初太郎
井上松次郎　井上祐一
和泉保之
狂言　腹帯　梅若景英　梅若六郎　西村弘敬　佐藤秀雄　田鍋惣太郎　由本敬一郎　藤田六郎兵衛
後見　河村鉦二　由本勝一
仕舞　敦盛　下僧　柴田初太郎　藤井久雄　波多野敬
由本博之　西村立石　鈴也澄雄　井上礼之助　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
後見　佐藤太俊　波多野敬
高野実　歌占　宮盛
鉢木　柴田収　武田武志　加藤太郎　高安滋郎　田鍋惣一郎　寛三男
後見　梅田邦久　柴田初太郎
狂言　和泉保之　井上松次郎　井上祐一
葛城　素謡　高野瀬透　真栖米次
仕舞　守章　女クセ　僧　河村鉦二　佐藤太俊　丹下三義　加藤丈太郎
後見　奥橋　久典　善助　地謡　松田千年　文堂恒一郎　霜山昌二　伊藤長八　下田雄三　高橋静夫　清水要之助　尼関健太郎　藤田昭彦　鬼頭八郎
知盛　車　班女　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
羽衣　和合之舞　早川喜美子　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
熊野　能　馬場森　町子　徳子　森野まさみ　河竹光子
葵上　梓之出　空之祈　松山長昭　岩長六郎　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　寛三男
附祝言　佐藤秀雄
終了五時二十分予定

『狂言』百号を祝して

「狂言」表紙

名古屋の狂言共同社が、「狂言」を創刊されてから十年余、このたび遂に百号を発行されたことは、まことにお目出度くお祝いを申し上げます。

一口に百号といいますが、何事によらず百回を数えるのはなかなか至難なことで、よくも続行されたと、そのたゆまざる努力と、忍耐に敬服する次第です。

故歌村彦四郎師が印刷に対する種々な経験から「狂言」の発刊を思いつかれ、共同社同人の人々の後援と、努力が歌村師亡き今日に百号記念特集号の発行となったことを嬉ばしく思います。

特集号には各方面より、視辞讃辞が掲載され、また、故人の追憶談、年譜、想い出のアルバム等、この編集にも、多大の経費と努力が払われており、共同社の諸賢の苦労がしのばれます。

号中の「名古屋狂言の伝統」は随分古実も調べて編集されており筆者のご努力に溯腔の敬意を表すると共に、共同社の同人の座談会「明日の名古屋狂言」に有るように今後のご発展を切に祈り、お祝いの辞とします。

能楽の友編集同人

第三百七十回記念

田鍋社中　かすみ会
十一月十二日(日)午前十時始
熱田神宮能楽殿

舞囃子　三十番
番外一調　難波　福岡周斉　田鍋惣太郎

竹韻会忘年素謡会

十一月二十六日(午前九時始)
於　東照宮
(名古屋市中区丸ノ内二ノ三)

素謡　十八番、仕舞　五番

淡交会秋季大会能組

十一月二十三日(祭)午前十時始
熱田神宮能楽殿

小謡　督天　馬狗　鞍島　竹生筒　小井
仕舞　野輪　三狩　熊紅　葉盛　敦鼓　籠段　鵜之太
舞囃子　河竹光子　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　菊慈童
鬼頭千枝　吉田後藤孝一郎　藤田昭彦　松風
矢留文雄　河村総一郎　田鍋惣一郎　藤田六郎兵衛　実盛

熱田神宮能楽殿

素謡　高野瀬透　真栖米次
仕舞　河村鉦二　佐藤太俊　丹下三義　加藤丈太郎
高安滋郎　田鍋惣一郎　由本敬一郎　寛三男
後見　梅田邦久　柴田初太郎
井上松次郎　井上祐一
和泉保之
狂言　腹帯　梅若景英　梅若六郎　西村弘敬　佐藤秀雄　田鍋惣太郎　由本敬一郎　藤田六郎兵衛
後見　河村鉦二　由本勝一
仕舞　敦盛　下僧　柴田初太郎　藤井久雄　波多野敬
由本博之　西村立石　鈴也澄雄　井上礼之助　河村総一郎　後藤孝一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
後見　佐藤太俊　波多野敬
高野実　歌占　宮盛
鉢木　柴田収　武田武志　加藤太郎　高安滋郎　田鍋惣一郎　由本敬一郎　寛三男
後見　梅田邦久　柴田初太郎
狂言　和泉保之　井上松次郎　井上祐一
葛城　素謡　高野瀬透　真栖米次
仕舞　守章　女クセ　僧　河村鉦二　佐藤太俊　丹下三義　加藤丈太郎
後見　奥橋　久典　善助　地謡　松田千年　文堂恒一郎　霜山昌二　伊藤長八　下田雄三　高橋静夫　清水要之助　尼関健太郎　藤田昭彦　鬼頭八郎
知盛　車　班女　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
羽衣　和合之舞　早川喜美子　高安滋郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭八郎　藤田昭彦
熊野　能　馬場森　町子　徳子　森野まさみ　河竹光子
葵上　梓之出　空之祈　松山長昭　岩長六郎　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　寛三男
附祝言　佐藤秀雄
終了五時二十分予定

掬水会能組

十一月二十六日(日)午前九時始
熱田神宮能楽殿

独吟　屋島　勧進帳　善知鳥　沢田康　文覚恒一郎　松浦喜代一
仕舞　放下僧　小歌　加藤錠一
大山　江山　姥　笠之段　班女　雲林院　船橋　伊藤健　霜山昌二　沢田東　北村利弥　丹阿弥元　松井千年
舞囃子　当麻　岡田頼允　河村総一郎　田鍋惣太郎　鬼頭八郎　藤田六郎兵衛
熊坂　素謡　雲雀　黒水　吉田定男　田鍋惣太郎　鬼頭喜太郎　鬼頭季信
正尊　起請文　舞囃子　静和　義経　飯田足関　健太郎　新子　賢　佐野正俊　清水要之助
伊藤長八　福井啓次郎　寛一　鬼頭八郎　鬼頭季信
砧　仕舞　野宮　森寿々子
紅葉狩　急之舞　手塚基子　福井啓次郎　寛一　藤田六郎兵衛
猩々　橋本翠渓　福井啓次郎　寛一　鬼頭喜太郎　鬼頭季信
素謡　土蜘蛛　安藤三谷　岩本平位　加藤木　水野邦継　宮吉昭　竹内　元雄　正一
独吟　杜若　糸岡忠弥　紅葉狩　松岡田鶴子　俊寛　後藤寿子　安達原　玉田愛子
素謡　玄象　鮎長ッレ　沢井優子　棚橋くに　加藤ちゑ子　秋元操

（四面へつづく）

宝生流宗家本
わんや書店
東京都千代田区神田神保町3－9
電話（263）6771代表
小売部　東京都中央区銀座8－4（金春ビル）
電話（571）0514
振替東京4163

観世流宗家本・金剛流発行元
合資会社　檜書店
東京都千代田区神田小川町2－1
京都市中京区二条通鉄屋町東入
電話(291)2488－9
振替東京3552
電話(23)1990
振替京都113

謡の総心得

大正十五年発刊「清韻」より

会社には社報、グループには会報と、それぞれ法人、団体がPR誌をもっているが、能楽界の各流各会の会報の歴史も古い。本紙では、これらの会誌、社中誌から抜萃し読者の便に供することにした。今回は清韻会の創刊号（大正十五年三月一日号）から「謡の総心得」と題する一文を紹介する。

一、姿　勢

謡を謡うのに、立形の場合はそれぞれその形を崩さぬように謡う必要のある事は無論ですが、地謡なり素謡の役謡なり、総べて座して謡う場合にも、その姿勢の整うと否とは、外見上のみならず、実際謡の効果の上にも大関係を来すものであります。

即ち謡として充分の音声と調子を出すについてはそれだけの構えが必要なので、始めから謹直に正確な構えをしなかったら、それが習慣になって、いつまでも姿勢が醜く、随って声も調子も充分に出るものでありません。

この構え方は、先ず膝頭を少し開いて両膝をやゝ扇形にひらげ、足は拇指を重ね合わせて二つの足の裏の窩に腰をしっかりすえ込み胴を真直ぐに伸ばし、腹を出して尻を後へ引くようにし、頸は真直ぐであるが顎を出さぬように引きつけるだけ僅か俯し心地になります。目は凡そ一間ばかり先を見る程の見当に静かに瞳を据え、気を臍下丹田に落ちつけるのであります。

宝生九郎翁がかつて芸話としていわれた中にも、「地を謡うのに無暗に体を動かしたり、首を振ったりしないで充分力を入れて謡うことができる。この体を動かしたり姿を崩したりするのは、つまり未熟だからだ」といわれています。まったくそれに相違はありますまい。

また故観世清廉氏がよく話されたことですが「謡いの時の目の保ち工合は半眼といって上目も使わず、下目も使わず、閉じもせず、開きもせずという伏目半開のところを適度とする。眼を閉じると頭は固くなって動かぬものであるがこれは自分の謡の疑わしい、つまり不確かなところへくるとよく目を瞑るものであるから、眼目は謡の不確かな場合の表象のようで、随分見苦しく感ぜられるものだ」ということ、これらも大いに味わうべきことでしょう。

その他姿勢としては、扇で拍子をとるとか、手を膝で動かして間を当るとかというのも、謡う本人には余儀ない必要を感じる時代もありましょうが、結局それは未熟だからで、早くそういう癖を抜いて立派な謡にならないと、初め一時の便宜にやったことも、終には習慣性となってどうにもならなくなってしまうものであります。

要するに姿勢は「初めが大事」であるということを最も注意し、少し謡が進むと、その難かしい謡いどころとか拍手の面倒な当りとかで苦しむ結果、とかく備えを崩し易いものであるからこれを注意して、この未熟のために起る姿勢の破壊を来たさないようにしなければならぬことは、くれぐれも平素によく心掛けねばならないのであります。

二、声　音

「なんといっても、謡は声が元でありますから、声の充分で、かつ華麗な人には得が多いのであります。

たゞそれが鍛錬を経ずして、却って悪い方へ導かれてしまうと、人の邪魔をする程度が一層はなはだしくなり――或は一個人としてもとんだ迷惑な謡い声を出すというようなことになります。

昔からも「一声二声」といって声の天性のあるものの得は申すまでもありませんが、この運用を誤らぬことをよく注意せねばならないのであります。

ところでこの声というのも、天然ありのままでは、それが如何に名音をもっていても、直ちにそれが謡の声になるというわけのものではありませんから、必ずその鍛錬を要しますが、昔の鍛錬法はノドから血が出るという位まで声をしぼりにしぼり抜く、その上に出てくる音声を本当の音声として貴びました。義太夫などでもそうだそうで、いわゆる「笛を吹き切る」といって、一度は声をめちゃめちゃにするのでなければならぬとしてあります。これを今日の生理学からみて果たして有効なことであろうか、他にもっと旨い、そして楽な工風があるかもしれません。或はまた、こういう古風な鍛錬は或る人には一生声を潰し切りにしてしまうものであるかもしれません。しかし宝生九郎翁の如きは、断固として昔風の鍛錬法を主張せられているようで、すでに長い間の謡曲教育の古来の歴史が証明している実地の効果がある以上、やはりこの鍛錬法がよいと思われます。

それでは一体どういう発声がよいかと申しますと、まず声の出し方は、腹に力を入れて、ノド元を苦しめず、息に力をこめて声を振りしぼらず、フウと吐く陰の息で声の元とし、細く尖らぬよう、太く丸く筒太にずしずしと声を運ぶのを古来よしとしています。

また、声の鼻や唇や舌にかからぬよう、すべて異様な訛の音の交らぬように、口中のさばきを素直にすることを必要とします。

声の練習法としては、諸家に種々の方法もありますが、最も適当と思う一例を挙げてみますと「曲を三つ四つを極めて囲の地声で（つまり息ばかりで謡うようなもの）謡い、それから諸種の謡いを普通の調子で、ただ充分の張りを保って謡い、終りに小謡三つ五つを調子高に張り上げて謡う」という方法であります。（以下略）

「清韻」創刊号表紙

新刊書籍案内

「沼艸雨能評集」

関西における能楽評論家として、知名の沼艸雨氏の能評集が檜書店から発行された。この書は昭和六年より昭和四十年までの三十五年間にわたる氏の能評を全べて網羅してあり、永い年月の間のいろいろの能をふりかえることが出来る。

氏は故華雪師及び鉄之亟師について能の勉強をしておられ、狂言、囃子についても師家について研鑽を積んで居られるだけに、能評にも柔かみのある人間的な温さを感ずる文章に特色を感ずる。

序のなかで観世元正氏は「沼さんの能評は、人を近づけない辛辣さをおし出すのでなく、愛情をもって、その人を育てあげようとする慈しみがあふれている。永い観能歴からにじみ出たものが、おだやかなうちにも格調の高さと正しい態度で十分に本筋を見きわめた厳しさを秘めた独特の評言が演者への教訓とともに、観客の観能眼をより正しい方向に導くのにあづかって力がある」と述べ、武智鉄二氏は「豊富な知識と体験と実践との三つの累積をもつ沼さんの能評三十五年の成果である」、丸岡明氏「沼さんの能評は、半世紀の能の歴史を語り、必ず能の将来を物語ろう」と推ばんのことばを寄せている。

とくに巻末には曲名別（小書別）と演者別の索引が付されて居り、読者の便利に供し、充実した内容である。

大きさ　A5判
クロス刷り装幀
定価　二、三〇〇円

【編集記】

師走もあと二旬、発行が予定日よりおくれ、誠に申訳なく思っております。

しかし何とか能楽界に新風を吹き込み、健全なる芸術として、観能される方々ならびに演能者の立場に立って編集しております。

創刊以来、県知事、市長、商工会議所会頭初め熱田神宮権宮司の長谷氏、宮司篠田氏、スケッチは京都の仙田雪山子氏はじめ能楽会の植村真太郎氏、若宮八幡社川瀬進氏らのご支援を感謝しつつさらに新しい年への構想を練っております。ご期待下さい。

クラブ
華厳
TEL 241―3821

（三面より）＝掬水会能組つゞき

仕舞
鶴亀　柴田芳江
半蔀　加藤美恵子
花月　田所明子
笠之段　上仲祥敬

独吟
女郎花　犬塚孝信
鳥追舟　長谷川武寿
山姥　国府貫英以知
鉄輪　長谷川幸寿

仕舞
小歌　宮本まさ
天鼓　箕田康子
花筐　寺田鈴子
殺生石　塚本紫雄

素謡
半蔀　古川洋充良　伊藤幸三

蟬丸　岩井冨美　杉山鈴子　西村友木子

仕舞
兼平　森幸子
藤戸　畔柳久子

能
芝村　栄枝
井筒　西村欽也　吉田定男　後藤孝一郎　藤田六郎兵衛

後見　竹内六郎　柴田初太郎　地謡　内藤義男　小川貞三　福田幸市　塚本秀雄　祖父江修一　柴田収武　加藤丈太郎

舞囃子
班女　秋元操　吉田美津子

仕舞
砧　箕田鍋惣一郎　藤田昭彦

番囃子
求塚　渡部知江子　熊羽早苗　加賀敏彦　吉田定男　福井啓次郎　鬼頭喜太郎　佐藤季信

地謡　柴田収武　田中義滋　久田秀雄　佐藤太俊

仕舞
巻絹　林銀一
雲林院　久納志げ
三輪　植村真太郎

狂言
盆山　井上義次　大野弘之

子方　深見真澄　後藤和子　谷野博

能
望月　高安滋郎　佐藤卯三郎　箕田鍋惣一郎　藤助川　田昭竜　彦夫

後見　高橋暁一　柴田初太郎　地謡　松崎成　田外　竹内　石谷　初蔵　伊藤立　善三　幸雄　忠雄　蔵孝　河村　中田　柴田　竹内　収武　六郎　鉦二　滋武

舞囃子
小督　佐藤銀子
唐船　宇佐美みゆき
融　玉田望東子
善知鳥　植村稔

箕田鍋惣一郎　後藤孝一郎　福井啓次郎　箕田鉦一郎　藤助川　田昭竜　彦夫　吉田定男　後藤孝一郎　鬼頭喜太郎　藤田六郎兵衛　箕田鍋惣一郎　鬼頭季信

熱田神宮御用達
中日タウン　惣菜部
御料理・仕出し
鮮魚・粕漬
合資会社　玉傳本店
名古屋市中区池田町二九・電（241）3845 9945

名古屋繊維取引所仲買店
名古屋穀物取引所仲買店
株式会社　清水源商店
社長　清水克朗
名古屋市中区錦一丁目二〇番二七号
電話代表（201）6781番

能樂の友

題字は熱田神宮　篠田富司筆

発行所　能楽の友社
名古屋市中区栄2丁目16—10（花木ビル）
電話（211）1019・1974（231）6727・2
振替口座　名古屋　36393番

購読料	1	年	200円
郵送の場合	1	年	380円
一部			20円

能楽の友紙のご購読、催能の有料会員
熱田神宮能楽殿　電話（671）2912番
お問合せ願います。

編集同人（五十音順）

伊藤鉄之進　柴田初太郎　殿島修二
梅田邦久　杉村竹翠　内藤泰二
加野昭二郎　高安滋郎　野村又三郎
後藤正男　田鍋惣一郎　花木徳三郎
佐藤卯三郎　戸田秀雄　二井栄逸

深い　こころの催能

若い世代に高まる関心

ことしもあとわずかにして新しい昭和四十三年を迎える。

熱田神宮能楽殿を中心としたことしの名古屋能楽界の催能には意義深いものが多かった。観世、宝生各流の定式能、中部金剛会能、名古屋金春会をはじめ、名匠鑑賞能、記会能、追善能、各会の多彩な演能行事は、名古屋能楽界のスケールをそのまま表現するものである。とくにことし秋、名古屋においてはじめて日本能楽会の公演が行なわれたことは記念すべきことである。

この公演は、重要無形文化財能楽保持者社団法人日本能楽会会員の出演によるもので、能楽の歴史にとっても特記されよう。能楽会公演は、昭和四十年からはじまり、第一回は東京、それから大阪、京都で公演され、ことしはじめて名古屋で開催されたものである。

公演には地元重要無形文化財総合指定保持者八人、さらに東西ならびに北陸から俊秀が出演、観世、宝生、金春、金剛、喜多の五流が勢ぞろいし、狂言和泉流を加えきわめて盛大であったことは名古屋能楽界の発展にとって十分その真価を東西に示したものといえよう。

また恒例の大衆能は愛知文化講堂で各流の競演で能楽ファンを魅了し、ことし第二回を迎えた市民納涼能楽の夕「薪能」も八月第一土曜日、好天に恵まれ、杉戸名古屋市長もとくに臨席して薪能によせてあいさつを述べ、名古屋市民文化の発展のうえで能楽のもつ重要性を強調されたこともことしの薪能を飾る一コマであった。

新春は、三日の能楽協会名古屋支部謡初会で幕をあけ、学生能、観世会定式能につづいて成人の日には大槻十三追善能、梅若六郎日本芸術院会員就任・還暦祝賀記念能が華々しく催される。

能楽を理解し、その芸にはげむ層も年々厚くなってきた。各社中の大会においても観客はふえ、若い世代の人たちが成長している。とくに婦人の方が多くなっており東西でもこの傾向が強い。能楽が新しい社会性をもってきた表われともいえる。

能楽に関する新刊書の発行も盛んであるが、地元では田鍋惣太郎師の芸談が来年再刊される予定で大いに期待したい。

本紙も創刊満一年を迎える。読者のご理解とご支援を得て紙号を重ねてきた。各界の貴重な資料、原稿のご提稿を感謝しつつ、同人一同一層の精進を期している次第である。「能楽の友」に江湖のご批判とご叱正を賜るよう衷心よりお願いしたい。

観世会定式能は一月に開催

名古屋観世会主催による定式能初回催能は、例年二月に開催されてきたが、四十三年度はとくに一月十四日（日）と決定した。

番組は、能「高砂」「熊野」「国栖」、囃子「田村」「船弁慶」、狂言「餅酒」、仕舞「老松」「東北」「小鍛冶」。

なお第二回は四月二十一日、第三回は六月十六日、第四回九月十五日、第五回十一月十七日が予定されている。

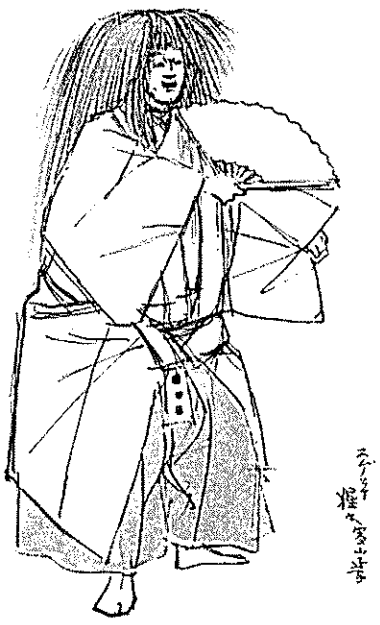
猩々　文　小寺金七

目出度い能である。能を知らないでも猩々はご存知である。それ程人口に膾炙しているのは平易で庶民生活に融けこんでいる珍しい能だからだ。親孝行で財宝が出来それにお酒、結構づくめである。

能には龍、虎、獅子と獣が出るが、頭上に毛をかぶり、面にそれらしい個性が出ているだけで、四本足でなく二本足で舞う。一見異様に思われる筈だが、それで獣に見えるから不思議だ。どこ迄も人体を本として卑近を避け高度の様式化である。狂言では縫いグルミを付け四ツバイである。能との差のあることが判る。猩々とはヨヘンだから動物だろうが本体が不明である。恐らく中共の妖怪譚あたりではないだろうか。小書に乱という秘曲がある。猩々の酔態の巧みな写生で、美しいリズムとメロディに乗り舞う美事な曲である。

（筆者は観世流太鼓方）

◉観世流太鼓方小寺金七師は能楽青年育成に尽した功績によって本年度京都新聞社文化大賞を授与されました。（編集部）



猩々

謹賀新年

名古屋邦楽協会
高橋木
名古屋市北区坂島町三郎
電話（91）

いきたいと思います。
——私も同じです。

ございました。（熱田神宮能楽殿楽屋にて）

古井吾
東京都世田谷区世田谷四丁目三番五号

野崎太郎
池田
鬼頭喜太郎

昭和四十三年一月三日　午後二時始
於　熱田神宮能楽殿
能楽協会名古屋支部初謡会

第十二回　学生能と狂言の会
一月六日（土）　午前九時半始
熱田神宮　能楽殿

（剛）能　小袖曽我（岐阜女子短大）
間　乳母春日局　小野好子
後見　豊鶴三千春　重本昌三
和泉流　狂言　武悪　主　吉田耕造　武太郎冠者　舟橋允就（名古屋大学）　伊奈俊美
和泉流　狂言　骨皮　新発意　日下部康生　庵の住持　平松昌彦　（客僧）岩崎章（南山大学）　（〃二）岩森正夫　（〃三）渡辺郁夫

（春）能　葛城（前シテ小宝敏子　後シテ北村成子）　高安滋郎　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭喜太郎
（愛知大学）　高崎美穂子　清水京子　後見　鬼頭三男

（宝）能　女郎花（前シテ頼風の妻　黒田展子　後シテ小野頼風　伊藤紀美代　小梁川信子）　西村欽也　鼓一鉱　田鍋惣一郎　戸田和子　鬼頭八郎
（愛知県立大学）　後見　辰巳孝　衣奨正宣

名古屋学生能楽連盟加盟サークル
愛知教育大学謡曲部　愛知学院短期大学謡曲部　愛知県立大学謡曲部　金城学院短期大学謡曲部　岐阜女子短期大学謡曲部　椙山女子学園大学能楽部　名古屋市立女子短期大学謡曲部　名古屋大学能楽研究会　観世会　名古屋大学能楽研究会定式能　岐阜大学能楽研究会　南山大学能楽研究会

観世会定式能
四十三年度初会
一月十四日（日）　正午始
熱田神宮　能楽殿

高砂　梅田邦久　観世元昭　高安立石　和泉滋郎　昭太朗　澄雄　佐藤秀雄　福井啓次郎　亀井俊雄　藤田昭彦　鬼頭喜太郎
間　後見　柴田大槻　収武秀夫　地謡　増田丹下　十章三義　加藤丈太郎　藤井久雄　高野瀬徳三　杉村竹翠　武田志房

餅酒　狂言　佐藤卯三郎　井上礼之助　河村丘造
囃子　柴田初太郎　吉田洋一　定男　地謡　石谷竹内　初蔵六郎　飯田五木田　武計賢　鬼頭季信　加藤丈太郎

田村　囃子　柴田初太郎　田鍋洋一　地謡　石谷竹内　初蔵六郎　飯田五木田　武計賢　鬼頭季信　加藤丈太郎

東北　囃子　河村大槻　収武秀夫　長山観世　昭喜之
国栖　間　西村高安　和泉昭太朗　欽也　勝久　井上松次郎　河村総一郎　田鍋惣一郎　鬼頭三男　八郎
後見　柴田初太郎　山本博之　地謡　稲生芳雄　佐藤太俊　加藤総兵衛　久田秀雄　佐藤友彦　増田一雄　南条秀雄　藤井久雄　木田武計

閑祝言

一月十五日（祭）　午前十半時始
熱田神宮　能楽殿

大槻十三・七回忌追善
能組

反魂香　独吟　岡田光祐
清経　仕舞　佐藤太俊
笹之段　久田秀雄
女郎花　梅田邦久
舞囃子
船弁慶　殿島修二　鼓一鉱　後藤孝一郎　鬼頭三男

江口　仕舞　加藤良久
通小町　杉村竹翠
山姥　田村勇
素謡

安宅　勧進帳　梅若万三郎　梅若猶義
高砂　高安滋郎　和泉昭太朗　立石澄雄　亀井俊雄　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
（三面へつづく）

あなたに心をこ
富士道
家具の
本ショールーム
工場
社名
TE
愛知

わが観能 その六

万蔵・保之、火花を散らす
―第七回和泉会狂言―

殿島蒼人

「宗論」といふ狂言を、私は好きである。一ト通りにやったのではつまらないが、これを上手が演じると、大真面目のなかにたいへんな皮肉を発散するのである。

法華僧が「五十展転大随喜の功徳」を説いて、随喜を、里芋の葉のズイキと強弁し、ズイキを食べてそのうまさに涙がこぼれるなどと述べたてる。すると浄土僧が、「一念弥陀仏即滅無量罪」の罪をサイ（菜）と強弁し、この法文を唱へると目前の塩一菜がたちまちたくさんの諸菜に変ずる、だから有難い法文だと述べたてる。

喰意地のはった坊主同志のやりとりで、文意的におもしろい。しかしこの問答にたどりつくまでの両僧の敵対意識が、丁々発止と火花をちらす過程に、ほんとうのおもしろさがある。

第七回和泉会での「宗論」は野村万蔵の浄土僧、和泉保之の法華僧だったが、まづこの組合せがよかった。万蔵には、年功の禅僧の安定してゐるといふものの、私は保之の法華僧に、多くの美点を発見した。剛気なところ、短見者流のところ、一途なところ、観念的ではあるが、法華の狂信者はかくのごときものかとうなづかれるのだ。はしなくも私は、竹本津太夫（現）の語り口を、保之のアド役に感じたのであった。

さて次に、「墨塗」であるが、底の浅い狂言を、工風もなく浅いままに演じただけのものだった。考へることは、かうした狂言の上演に熱田神宮能楽殿の照明がいささか暗いといふことだ。女が驚愕して水をぬって涙にみせるを、墨と取替へられ、目のふちをまっ黒にするといふギャグが主題なのに、見所の中央から奥ではそれがよく見えない。

「墨塗」は舞踊化もされてゐるが、綺麗につくった女が顔を墨でべたべたにするのが、客を笑はせる。化粧しないビチン豊の狂言役者が、はじめから黒い顔に墨を塗って、それがはっきり見えないでは、なんともしようがない。

「佐渡狐」は、野村又三郎が出てくるので舞台が明るくなる。又三郎といふ役者は、花のある役者で舞台を明るくする。透った声で抑揚が明々としてゐる。越後百姓の佐藤秀雄は、とぼけた風采で、いかさま佐渡百姓にしてやられさうな愚直な感じがよかった。しかし調がくしゃくしゃとして、メリハリがていねいでない。ひとつの「なかなか」を発声するのにも、べらべらとしゃべる言ひ方をして締まりがない。奏者は、賄賂をくれた佐渡百姓に味方しておいて、涼しい顔して消えてしまふ。その奏者に対して、争った二人の百姓はていねいに別れの挨拶をしてゐる。いかにも長閑な光景である。

「弓矢太郎」は、案外ともりあがりをみせなかったが、これはアドの太郎冠者も数人の立衆も、おのれを端役あつかひして役を軽んじたせいではないか。とにかく私には、気の入った演技とは見えず折角の井上松次郎（太郎）井上礼之助（当屋）に気の毒に思はれたのである。

おこなひすましたやうな野狐禅の落ちついたずるさがある。保之には、血気にはやる法華僧の狂信ぶりがみえる。かういふ性格表現はかくべつ作に指定があるわけでない。演技者がその性格なり風貌、姿勢を創作するのである。

作中の人物を創作して、その性格なり、さらにその生活までを彷彿させるのでなければ、狂言を見る意味はない。狂言本を読んでるればいいのである。ところが、狂言本を読んだ方がマシみたいな、くだらぬ狂言演技が多いのでこまる。

教誤を異にする宗教の宗派の間で、論争が起る、いはゆる宗論は言にあっては、さすがトゲトゲしさやあさましさがなく、あくまで真面目で、玲瓏たるトボケぶりである。宗派の他宗排撃主義が現代に通じやうと通じまいと、そんなことはどうでもよく、あくまで大真面目の大熱心で、相手をへこまさうと肝腿をくだく二人の僧のわたり合ひが、漸層的に高揚するおもしろさである。

万蔵の結れた芸が、この狂言を安定してゐるといふものの、私は保之の法華僧に、多くの美点を発見した。剛気なところ、短見者流のところ、一途なところ、観念的ではあるが、法華の狂信者はかくのごときものかとうなづかれるのだ。はしなくも私は、竹本津太夫（現）の語り口を、保之のアド役に感じたのであった。

さて次に、「墨塗」であるが、底の浅い狂言を、工風もなく浅いままに演じただけのものだった。考へることは、かうした狂言の上演に熱田神宮能楽殿の照明がいささか暗いといふことだ。女が驚愕して水をぬって涙にみせるを、墨と取替へられ、目のふちをまっ黒にするといふギャグが主題なのに、見所の中央から奥ではそれがよく見えない。

「墨塗」は舞踊化もされてゐるが、綺麗につくった女が顔を墨でべたべたにするのが、客を笑はせる。化粧しないビチン豊の狂言役者が、はじめから黒い顔に墨を塗って、それがはっきり見えないでは、なんともしようがない。

「佐渡狐」は、野村又三郎が出てくるので舞台が明るくなる。又三郎といふ役者は、花のある役者で舞台を明るくする。透った声で抑揚が明々としてゐる。越後百姓の佐藤秀雄は、とぼけた風采で、いかさま佐渡百姓にしてやられさうな愚直な感じがよかった。しかし調がくしゃくしゃとして、メリハリがていねいでない。ひとつの「なかなか」を発声するのにも、べらべらとしゃべる言ひ方をして締まりがない。奏者は、賄賂をくれた佐渡百姓に味方しておいて、涼しい顔して消えてしまふ。その奏者に対して、争った二人の百姓はていねいに別れの挨拶をしてゐる。いかにも長閑な光景である。

「弓矢太郎」は、案外ともりあがりをみせなかったが、これはアドの太郎冠者も数人の立衆も、おのれを端役あつかひして役を軽んじたせいではないか。とにかく私には、気の入った演技とは見えず折角の井上松次郎（太郎）井上礼之助（当屋）に気の毒に思はれたのである。

12月の催能のしおり

名古屋宝生会定式能
十二月十日（日）午後一時始
於熱田神宮能楽殿

能　素謡　辰巳孝
盛久　組
地謡　馬場富四夫　戸田秀雄　加藤周三　須賀明　小沢富　竹腰勝一　馬場辰巳　戸田秀雄　衣斐正宜　竹内澄子　内藤泰二　衣斐正宜
仕舞　巻絹キリ　梅枝クセ　鵜飼
能　稲川寿一　吉田俊彦　野口禄久　高安滋郎　吉田定男　田村三郎　上藤田六郎兵衛

富士太鼓
足立尚子　倉本雅
間　西村欽也　井上祐一
狂言　佐藤卯三郎
附　後見　竹内澄子　内藤泰二　地謡　松井清久　高田真六　堀江辰巳　近藤孝　源十郎　馬場富四夫　鬼頭喜男　衣斐正宜
能　河村総一郎　後藤孝一郎　藤田昭彦
祝言　後見　衣斐正宜　辰巳孝　地謡　桐山勝利　加藤博　溝口平野口禄久　好忠内藤泰二　戸田秀雄　井上礼之助　佐藤卯三郎

高等学校生徒　能楽鑑賞会
十二月十五日（金）
熱田神宮　能楽殿
（九時・十二時半・二時の三部）

紀　船弁慶　金春欣三　高安滋郎
縄ない　井上松次郎　井上礼之助　佐藤卯三郎

ご愛読の皆様へ
＝43年度購読のお願い＝
能楽の友社より

能楽の友もおかげをもちましていよいよ第二年目を迎えることができました。来年こそ一大飛躍を期し、読者各位のご要望におこたえしていきたいと種々構想を練っております。また積極的な皆様のようおねがい致します。

本紙では、四十三年度の購読につきまして現在申込みを受けつけております。発行日が遅れ、読者にご迷惑をおかけ致しておりますが、発行の円滑とご購読郵送事務の敏速を期しております。

ご購読は一カ年三百円、送料とも三百八十円。

お申込み方法は、能楽の友社、または社中にておとりまとめがえれば幸甚と存じます。精々ご吹聴下さいましてご支援賜りますよう同人一同お願い申し上げます。

振替用紙ご入用の節はおはがきにてお申し込み頂ければ、払込料金を能楽の友社負担の用紙をご送付致しますからご利用下さい。

昭和四十二年十二月
能楽の友社

能楽の友社主催
一月二日　一時　於大久手田鍋宅
打ち初め

一月七日　於泰雲寺
二井会初謡会

一月八日　正午
たなびき会　打ち初め

金沢能楽会研究発表能

金沢能楽会では、定例研究発表会をさる十二月三日午後一時から金沢能楽堂で開催した。

番組は、素謡「通小町」シテ高田茂雄、ツレ加納雅、ワキ早崎鉅造　▽能「鉄輪」シテ山田太佐久、ワキ泉喜八、ワキツレ北村善三、大鼓辰巳才一郎、小鼓森靖久佐、太鼓石黒俊二、笛林豊芳　▽狂言「宝の槌」殿村与作、能村英丘、増田秋男　▽能「鉢木」シテ佐野正治、ツレ宮野五朗、ワキ殿田保輔、大鼓飯島佐六、小鼓住駒陽介、笛片岡吉雄の諸氏。

なお次回は一月七日、予定番組「雛子」「翁」能「高砂」「羽衣」狂言「張蛸」

（二面より清韻会能）

狂言　野村又三郎　井上松次郎　井上祐一
賈鍾　仕舞　柴田初太郎　片山慶次郎　山本勝一　上田照也　梅若盛義
誓願寺　藤戸　玉之段　熊坂
一調　泉嘉夫　福井啓次郎
笠之段　大棚文蔵　和泉太郎　河村総一郎　大倉長十郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
道成寺　間　西村欽也　高安勝久　佐藤卯三郎　佐藤秀雄

一月二十八日（日）十二時半始
於熱田神宮能楽殿

梅若六郎
日本芸術院会員就任・還暦祝い　祝賀記念

能組
連吟　賀茂　林甲子夫　増田一雄
仕舞　高砂　加藤総兵衛
屋島　塚本秀雄
野宮　殿島修二
熊坂　河村紅二

狂言　梅若景英　梅若雅俊　西村欽也　覚鍋一　田鍋惣一郎　鬼頭喜太郎　藤田昭彦
狸々乱　和合三段之舞
能　法印　梅若博之　山崎英太郎　山本勝一郎　由本勝一郎
大原御幸　間　宝生弥一　宝生閑　瀬尾乃武　田鍋惣太郎　藤田六郎兵衛
腰祈　狂言　野村又三郎　井上礼之助　佐藤友彦
仕舞　東北　柴田初太郎
笠之段　観世喜之
野守　梅若泰之
ツレ　松山長昭　梅若六郎
葵上　高安滋郎　高安勝久　河村総一郎　福井啓次郎　鬼頭八郎　覚三男
梓之出　空之祈　間　佐藤秀雄
附祝言　終了五時二十分予定

主催　名古屋梅若会

謡曲随談
K生

能楽十五徳とか、謡曲十五徳については、すでに本紙（第十号）でふれたが、まさしく不朽得神徳であり、不触知仏道と会得する点は多い。明春一月六日には第十二回学生能が催されるが、このなかでも「能を追求する過程で真の人間の〝心〟を求め、現代では得ら

能「東北」　狂言「三本柱」

新春のNHKテレビ

テレビ

（教育テレビ）

1月1日（月）午前9.00
新春　能「東　北」　宝生　九郎　宝生　英雄　近藤　乾三ほか

1月2日（火）午前9.00
新春狂言「三本柱」　野村　万蔵　野村万之亟　野村　万作
「船渡聟」　茂山千五郎　茂山　千作　茂山千之亟

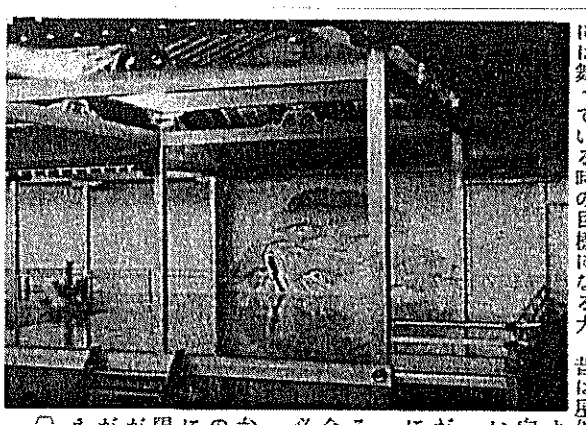
ラジオ

（第二放送）

1月1日（月）午前8.00～9.15　午後5.00～6.15（再）
寿五流謡曲（1）

1月2日（火）午前8.00～9.15　午後5.00～6.15（再）
寿五流謡曲（2）

1月3日（水）午前8.00～9.15　午後5.00～6.15
東西狂言くらべ



（写真）熱田神宮能楽殿の能舞台

本柱について

能舞台の広さは、京間で三間四方、舞台の四隅に柱がある。その四本を「シテ柱」「目付柱」「ワキ柱」「笛柱」といわれている。

「シテ柱」は、正面から見ると「橋がかり」に接している所にあり、「名のり座」又は「常座」の近くにある。「目付柱」は演能者には舞っている時の目標になる大キ着座するので「ワキ柱」と称せられるが、儀礼的なる意味を持つ場合は「大臣柱」ともいっている。また、側鏡板のすぐ傍に「笛柱」があり、笛方が着座する所の近い所にある。能「道成寺」の場合に作り物の鐘を吊す綱をかける大きな鍵がついている。

現在の能舞台は、舞台、見所を屋内に設ける形式をとっている。昔は屋外で観能し、三方からみるようになっていたが、今は向かって右手の見所はない。

最近大阪で柱のない舞台ができているが、その場合にはその四隅に赤ランプ（電気）の照明で行なわれるが、面が上面と下面の場合には、上に電気をつける必要が起こる。

先般の中日五流能の能舞台を拝見したときに、演者の動きがにぶくなり、如何に名人でも舞台が生命なる限り一考を要すると感じたが然しこれによって能芸術が一歩進めば誠に同慶に堪えません。（H生）

装束談義（一）

ゑとふみ　二井栄逸

能ではコスチュームのことを、衣裳といわずに装束と呼ぶ。能衣裳という人があるが、正しくは、能装束と呼ぶべきであろう。能では、着るものばかりでなく、髪（かつら）、頭（かしら）、烏帽子（えぼし）、のような冠り物、髪帯や鉢巻、頭にいただく天冠や龍頭等の類から、色々の中啓（扇、曲によって種々の定り模様のものを使う）、も装束の中に入る。

× × ×

一つの民族が独自の民族衣裳をつくりあげるまでには、長い歴史の積みかさねがなければならない。日本の着物が、東洋の諸国や西洋の諸国からも文化的影響を受けながら、それにもかかわらず特異の衣裳を発達させてきたのは素晴らしいことである。もっとも、広い袖、開いた裾など、温暖で湿度の多い風土には適していたであろうし、また、木造建築に、座る快さを感じたり、多分に風土の働きかけもあったと思う。奈良朝時代は唐の文化の影響もあったが、いつまでも大陸的な服制に踏襲することなく、文化的な価値をまもりつづけてきたのは、大したことである。一般庶民たちまでが、日本的衣裳を用い、その衣裳美を味うようになったのは、十三世紀前後であって、そこに、きものの母胎ともいうべき、能装束や、小袖という日本的衣裳が美しく開花したのであった。それは、能装束が、きものの母胎であるばかりでなく、それ自体がきものとしての完成美を誇っていることは、室町文化のたしかさであったろうか。

× × ×

そこで、装束談義であるが、装束を大まかに分類すると、冠り物、頭髪、着附、上衣、袴、上下附属物の七つに分けることができる。まず、上衣から順次書いてゆきたいと思う。上衣の中には、水衣（みずごろも）、狩衣（かりぎぬ）、長絹（ちょうけん）、舞衣（まいぎぬ）、法被（はっぴ）、側次（そばつき）、唐織（からおり）がある。まず、よく用いられる水衣から説明すると、水衣という装束は、大袖の衣で、ワキが着る時は僧衣の意味をなし、男のシテが着る時は漁夫、樵夫などの粗衣となり、女のシテが水衣を羽織ると、隅田川、三井寺、桜川のような旅装となる。このように水衣は男女共通のもので、生糸で織った極く薄い単衣で、茶、黒、浅黄、萌黄、鼠、白のほかに縞物もあり装束としての用途は非常に広いものである。水衣をつけた、舞姿のスケッチを二、三かかげてみる。シテの動作により、水衣は簡素な中にキリッとした美しさを舞台上に発散させ、裾のいぶし銀のような縫箔とよく調和して、得もいわれぬ高雅な風韻をただよわせてくれるのである。（筆者は喜多流）

新刊紹介

能面工芸（創刊号）

能面工芸会発行

雑誌「能面工芸」の創刊号が能面工芸会から発刊された。

全アート紙、四十頁の内容は能面読本の名に恥じない充実した評論と資料が載せられている。

能面に関する研究著作はこれまでも多くの労作があるが、これが専門的なジャーナルとして紹介されていくことは能面研究、能面工芸の発展にとってきわめて意義あるものである。

創刊号の内容を紹介すると、

能面の工芸…林屋辰三郎
能面の演出効果…沼　龍雨
観世流曲毎使用面一覧表…観世編集部
現代作家①　北沢如意…渡会恵介
座談会　能面四方山ばなし…
櫨藤芳一　渡会恵介　中村保雄　仙田雪山子　前西芳雄　宮本陽子
グループ紹介①　面秀会…渡会恵介
会員随想
能面伝書の翻刻にあたって…中村保雄
資料翻刻　仮面譜…中村保雄
古能面を訪ねて①　政所若宮八幡社

そのほか面秀会能、面展ならびに同会会員紹介など。

雑誌とはいえ、能面の温故知新の交流にこよなき糧となろう。

定期刊でないが、今後の成長と発展が期待される雑誌である。

なお、次号には「作家座談会」「能面の工作」などが予定されている。

定価　二五〇円
発行所　能面工芸会
編集兼発行者　前西芳雄氏　京都市中京区二条通麩屋町東入
前金予約　三冊分　送料共八〇〇円
販売店　檜書店・わんや書店　および各謡本販売店

12月のラジオ案内

ラジオ第2放送

10日（日）前8.00
宝生流「放下僧」前田　忠茂ほか
和泉流「附　子」野村万之亟ほか

17日（日）前8.00
観世流「葵の上」福岡　久馬ほか
喜多流「松　風」友村喜久夫ほか

24日（日）前8.00
金剛流「朝　長」樋田　治郎ほか

31日（日）
宝生流「蟬　丸」近藤　礼　札幌宝生会

能楽の友もおかげをもちまして、いよいよ第二年目を迎えることができました。来年こそ一大飛躍を期し、読者各位のご要望におこたえしていきたいと種々構想を練っております。ご協賛の積極的な御様の金を能楽の友社負担の用紙をご送付致しますからご利用下さい。

昭和四十二年十二月

能楽の友社

謡曲随談

K生

能楽十五徳とか、謡曲十五徳については、すでに本紙（第十号）でふれたが、まさしく不拘得神徳であり、不触知仏道と会得する点は多い。明春一月六日には第十二回学生能が催されるが、このなかでも「能を追求する過程で真の人間の〝心〟を求め、現代では得られ難い人間性の回復を追求し、生活に潤いを与えていきたいと学生の真摯な姿勢が表現されている。

最近ちょっとした機縁で読んだ「丁稚物語」（著者近藤長一氏）の中で、「心の糧」と題する一文を紹介したい。（「丁稚物語」は十年ほど前の発刊、著者近藤長一氏は伊藤萬株式会社・雅号一哲）

今は亡くなられた師匠から、よくいわれた次の言葉を思い出してみる。

「彼は自分と同じ位だなあ、と思うときは、相手は相当自分よりは上手ですよ。彼は少し自分よりうまいなあ、と思うときは、相手は余程自分よりは上手なのですよ。また彼が自分より下手だなあと思うときが、丁度同じ位なのです。

人間って誠にたわいのないものである。昔からよくいわれているとおり「うぬぼれと、かさ気のないものはない」という言葉の通り、素人には、俺こそは、という、うぬぼれがあるから、自分ほど上手なものはないと、きめ込んでいる。だから他人の謡曲を聞くと、自分の方が上手に聞こえる。しかし第三者が冷静公平に、批判したら全く所を異にすることとなる。

己れの芸が拙ないと、常に反省し反省し、正しい芸道に精進することが肝要であって、一人天狗になってしまえば、正に芸の行詰まりである。自分で一人、いい気になってうたっていると、ほんとに俺より上手な奴はないだろう、位のうぬぼれは出てくる。俺こそ天下一だ位の、一人よがりにもなる。いい気になって舞っていると、まことに申分ない型で舞っているように、一人合点してしまうものである。ここらが人間の浅はかなところであろう。

芸は一生が修業である。これでよいという、一線がない。やってもやっても、これでよいと言うところまでは、なかなかゆきつかない、やればやるほど奥の深いものである。

「習うより馴れるのだ」と昔からいわれている。芸事は、総てそのようである。一べんより、二へん、二へんより三べん、三べんより四へん、四へんより五へん、と繰返し繰返し辛抱強くやることが、上手になる一筋道である。

昔は道成寺の乱拍手を舞うのに、舞台へ立つのには、百べんも稽古をしてからでないと、舞台に立てなかったそうである。以て、如何に修業が厳しかったかわかるだろう。

観世の家元の或る人の如きは、いつ如何なるときでも、どこでも、少しの暇さえあれば、運歩の稽古をして居られたとのことである。ちょっとどこかへ行って、待っている暇にでも、板間のところがあれば、型の基本である歩くことの、稽古をやられたとのことである。歩くこと位なんだ、と言われるでしょうが、仕舞では、この歩くことがなかなか出来ないので、この基本を完成せずして、仕舞を舞うことは出来ない。あるくことが出来てはじめて次の色々な型に移れるのであるから、大変なのである。

何事も基礎がしっかりしていなくては駄目である。基礎がしっかりしていないのは、恰も砂上に楼閣を築くようなもので、安定感がないし、大風でも吹けば、たちどころに吹き飛ばされてしまう。基礎訓練を、充分やったものは、なんといっても安定感がある。基本的な修業を積まないと、本当の芸にならないと言われる通りである。

私はむしゃくしゃしたときとか、憂鬱になったときとか腹立たしくて仕様のないときとかには出来るだけ大声を張り上げて、謡曲をうたうことにしている。暫く、うたっているうちに、むしゃくしゃした気分も、晴れ晴れとしてくるし、憂鬱もいつしかけし飛んでしまうし、腹立たしさも、いつか霧消してしまう。気分の転換には非常によい。無心に、謡曲三昧になりきる境地、何事も打忘れて、無心に舞う、舞三昧の境地、これは体験者のみが知る、楽土でなければならない。

〔第12号〕昭
梅枝　内藤泰二
鵜飼　衣斐正宣
能
稲川寿一　吉田俊彦　禄久
野口寛　安藤滋郎
吉田定男　田崎敏郎　藤田郎兵衛
能
船弁慶　金春欣三　高安滋郎
縄ない　井上松次郎　井上祐孝
十二月十五日（金）
熱田神宮能楽殿
（九時・十二時半・二時の三部）
葵上　高安滋郎　高安勝久
梓之出　河村総一郎
空之新　福井磐次郎
間　鬼頭寛八郎
佐藤秀雄
附祝言
終了五時二十分予定
主催　名古屋梅若会

「檜垣」の旧跡
岩戸観音

高安流　西村弘敬

檜垣の能は姨捨などと共に老女物の最奥の重習物で、能として上演せられることも至って少なく、また、素謡の稽古をする方も割合に少ないと思われ、従ってこの曲の曲柄内容などをご存知の方々も少ないことと存じますが、最近偶然の機会に檜垣の旧跡を訪ねることが出来ましたので、そのあらましを記してご参考に供します。

檜垣のシテの老女は大和物語に出ているところによれば、元は筑前太宰府の白拍子（しらびょうし）で檜垣の御（ひがきのご）といわれた女で和歌のたしなみも深く優美な人であった由で、或時好事家達が歌の難題を出して試してみんとて

わだつみの中にぞ立てる
さをしかは

と上の句を与え下の句をつけさせたところ

秋の山辺を底に見るらん

と苦もなくつけて人々を驚かせたとのことである。

その後純友の乱の際に、家を焼出され追々倫落して遂に肥後熊本の白川のほとりに来て住んでいたとのことで、その場所は熊本の町はずれより南へ一キロほどの所で蓮台寺という部落があって、今でもそこに檜垣老女の墓と木像とがある。

謡本によれば岩戸という山の中に観世音を祀ってあるところにいた僧のもとへ、毎日仏前へ供える水を持ちくる老女があるので名を尋ねたるに、昔藤原の興範（おきのり）卿が通りあわせ水を所望せられたので水を汲んで差しあげ

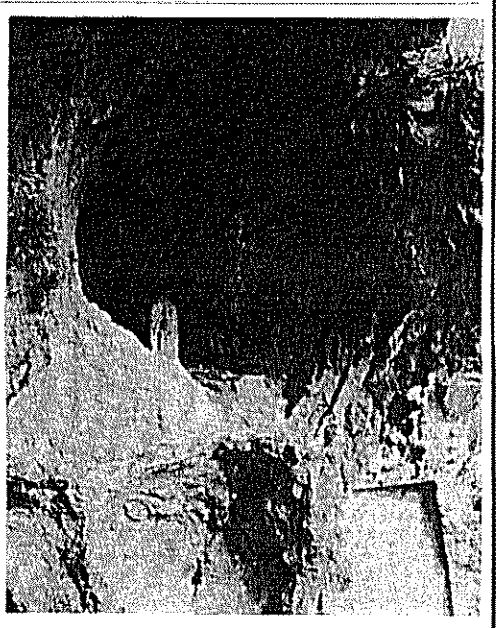
年ふれば我黒髪も白川の
みつわぐむ迄老にけるかな

という歌を詠んだ女で跡弔いてくれといいすてて、かきけすように消え失せた。僧は白川のほとりへ行き老女の跡を弔っていると昔の老女の霊が表われて、昔を偲んで物語りして舞を舞ったことが能に作られている。その白川というのは阿蘇の山から流れ出て熊本の市内を北から南へ貫流している川である。次に僧の住んでいた岩戸というのは、熊本の西方約十キロ程もある山で巌殿山（いわどやま）という山の中腹に高さ約二〇米位の岩の洞穴があって、その中に観世音菩薩が祀られてある。そこに僧が住んでいたらしく今は近くに巌殿山雲巌寺という寺があるが、先頃火災により本堂が焼失して今は仮堂である。そこに写真のような木額が掲げてあった。

私の流儀の習い物で檜垣の能の中人に語る檜垣巌殿の語（ひがさいわどのかたり）というのがある、それによれば「昔唐土の桃源の北に当たって霊巌洞という六つの岩窟がありその中には、いずれの洞口にも通じて縦横無礙となっており、中に小河の龍潭ありてその水は厳冬にも枯るることなく、その水を飲めば直ちに輪回の妄執を去り観世音菩薩忽然と出現して普く施無畏を示し給う仏法東漸の時節此岩洞に来現し給ふにより彼唐土に倣ひ霊巌洞と名付けたり」とあってこの洞に関し以上の謂れが残されている。

檜垣の能はことという華々しい見所もなく極めて物静かな曲で、私も只一度京都で先代金剛氏のお相手を致したのみであります。金剛流に限って終りの部分に「ロンギ」がありこのロンギを脇が地とは調子を変えて同吟するという特別な演出がありまして、丁度洋楽の二部合唱のような趣きであります。

桧垣旧跡　巌殿山雲巌寺の木額



桧垣旧跡　岩戸観音

新刊書籍案内
日本の伝統シリーズ「能」

淡交新社から「日本の伝統」のシリーズ企画として全八巻が刊行されることになり、去る十月に第一回「いけばな」つづいてこのほど十一月に「能」が出版された。

このシリーズは伝統芸能のもつ美の世界を、世界的な視圏で体系化した全集として注目され、上述の「いけばな」「能」につづいて「文楽」「茶の湯」「歌舞伎」「舞踊」「雅楽」「民俗芸能」が相ついで出版されることになっている。

「能」はリチャード・マッキンノン（ワシントン大学教授）、中村保雄氏（能面研究家）が執筆。

現代「能」の第一線で活躍されている先生方には最適の著書として、また、この世界にはいろうとされます方々にとっては格好の必読概説書である。

〔内容〕
第一章　舞台芸能としての「能」について
第二章　「能」の発生から今日までの歩み
第三章　「能」の現代の現状と将来について

さらに、カラーグラビアなどによる豊富な写真により、伝統の世界の全貌を余すところなく伝えている。

判型　A五判（二一〇×一四八粍）
本文　一〇〇頁
装幀　表紙原色版／蒙華貼函
カラー写真　左四頁
定価　各巻九八〇円
刊行順序　第一巻より逐次刊行
配本　毎月／十日発売
○十二月三十一日迄に全巻前払いされます場合は特価七、〇〇〇円

淡交社
本社＝京都市上京区堀川寺ノ内上ル
振替京都四五七八
支社＝東京都千代田区麹町四ノ五第七麹町ビル

なおこの日本の伝統シリーズ第二巻「能」について観世元正氏はつぎのように推奨のことばをよせている。

日本の伝統のなかで、能がしめる位置は、非常に高いものがありますが、これが理解は、なかなかむづかしいものであります。

まず、その発生から今日までの歴史的な歩み、能がもっている精神的な内容、さらには、能がもっている演劇としての芸術的な要素、どれ一つを欠いても、能の十分な理解は得られないのではないかと考えます。

また、能に関連する工芸的な展開も無視出来ません。

衣装や面は、日本の工芸の粋が結晶して生み出されたものと言わねばなりません。

社中短信

去る十月九日竹韻会杉村竹翠先生の発案にてお弟子仲間のゴルフの好きな連中をもって愛知カントリー倶楽部東山コースにて第一回竹韻会懇親ゴルフ会を挙行致しました。

当日は御陰様と雲一つない澄み渡りたる蒼空のもと、のびのびと愉快にプレーを楽しみました。この道も謡のほうと同様タイミングとリズムに乗らないとよいショットが出来ない、それにまた大いに練習が必要であることを知らされます。優勝は戸松氏、準優勝は鷲坂さんに決定致しました。

（戸松記）

編集後記

○…能楽の友紙も各界のご指導、ご支援を頂いてことしの最終号をお送りする。すでに本紙事務局には年賀広告も多数寄せられ新年号の準備にとりかかっています。

○…来年は明治百年の諸行事が各界で催されようが、能楽の再興とその発展の礎となった〝明治〟をかえりみることは斯界にも大きな意義があろう。本紙もさらに紙面内容の充実をはかって読者のご期待に応えたい。（編集部）

文化の向上図る
熱田神宮文化殿
緑をたたえた熱田の森を、東門　残念ながら展示の施設がなかった
〔講堂〕

楽の友社
丁目16—10（花木ビル内
・1974（231）6727・28
屋　3 6 3 9 3 番
1　年　2 0 0 円
1　年　3 8 0 円
2 0 円
読、催能の有料会員券
電話（671）2 9 1 2 番

演能案内
十二月三日（日）正午始
熱田神宮　能楽殿
楽師会　乱能

十二月十五日（金）
熱田神宮　能楽殿
（九時・十二時半・二時の三部）
総　船弁慶　金春　欣三
高安　滋郎
舞　鬼ヶ島　井上松次郎　井上礼之助

洋傘・ショール・レインコート
宮部商事株式会社
名古屋市中区錦三ノ一
電話（231）1005・5524・5525番

由美飯店
名古屋市昭和区阿由知通り1の26
TEL（731）3 6 0 1 番

うなぎ　大友
ナゴヤ納屋橋畔（231）2709・6818
名鉄百貨店七階　のれん茶屋

能楽殿御用達
割烹料理仕出し
西みやか
名古屋市西区浅間町
電話（531）5507・6666